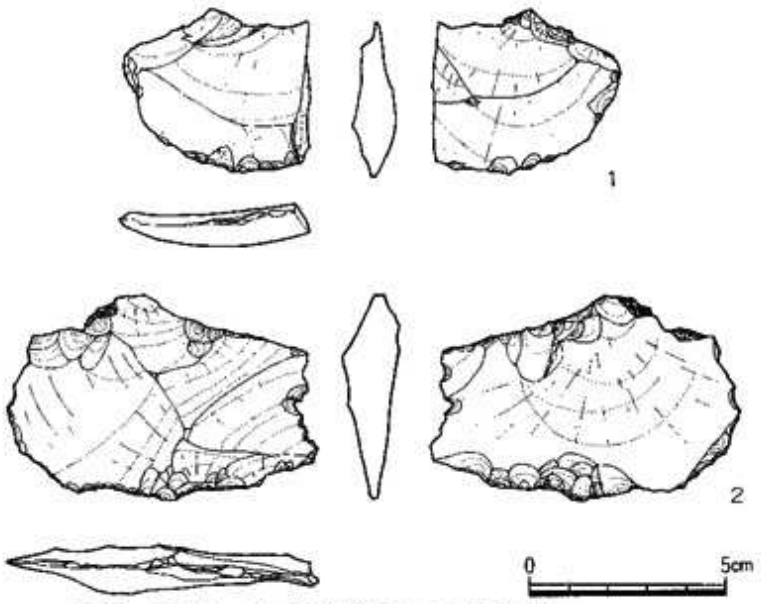


図3　Cグリッド下層遺構面出土石器実測図

粗材面が大きく残る。打点側より複数の二次剥離を行ない、粗材の縁端部は使用痕による細かい剥離が背腹両面にみられ、刃部として利用されていたことがわかる。その後、腹面からの加撃により、一部を欠損する。

（2）は全長7.8cm・幅5.2cm・厚さ1.2cmを測り、横長剥片を利用した楔形石器で、背面には上端よりの剥離痕が観察され、腹面はポジティブな粗材面をそのまま残す。打点近くには部分的に自然面を残し、対向する両縁辺部には、連続する細かい剥離がみられる。

Ⅵ　まとめ

調査によって得られた諸点について簡単にまとめると次の通りである。

i）遺構と時期について：遺構は層位の違いによって、2時期のものが確認された。時期については、遺構内および遺構上下の土層より出土する遺物によって、以下の時期に比定できる。

a．古墳時代前期のもの（上層遺構）

b．弥生時代前期～中期のもの（下層遺構）

ii）遺構の性格について：上層遺構面では方形周溝墓状遺構を、下層遺構面では溝を中心とする遺構を検出した。このことから、古墳時代前期にはこの地域が墓域とし利用されていたものと考えられ、弥生時代前期～中期には直接的な生活拠点を肯定する遺構は検

出できなかったものの、調査地近隣にその存在の可能性が窺える。

iii) 出土遺物について：出土した土器については、古墳時代前期の包含層である灰色粘土Ⅰ出土のものを除き、ほとんどが小破片であった。下層遺構内より出土した遺物は小破片ながら遺構の時期を決定し得る資料となったが、上層遺構からは直接的な時期決定の資料は得られなかった。

以上のように、今回の調査では当調査地に2時期の遺構が存在することが確認された。しかし、遺跡全体の詳細については、いまだ充分に把握し得ていない。当遺跡の調査は緒についたばかりであり、今後の調査資料の集積を待って明らかにしたい。

〔注　記〕

1　(財)大阪文化財センター『亀井・城山』1981年

2　(財)大阪文化財センター『近畿自動車道吹田～天理線建設予定地内瓜生堂遺跡他5遺跡第1次発掘調査報告書』1975年

3　本誌所収第3章

4　八尾市役所『八尾市史』1958年

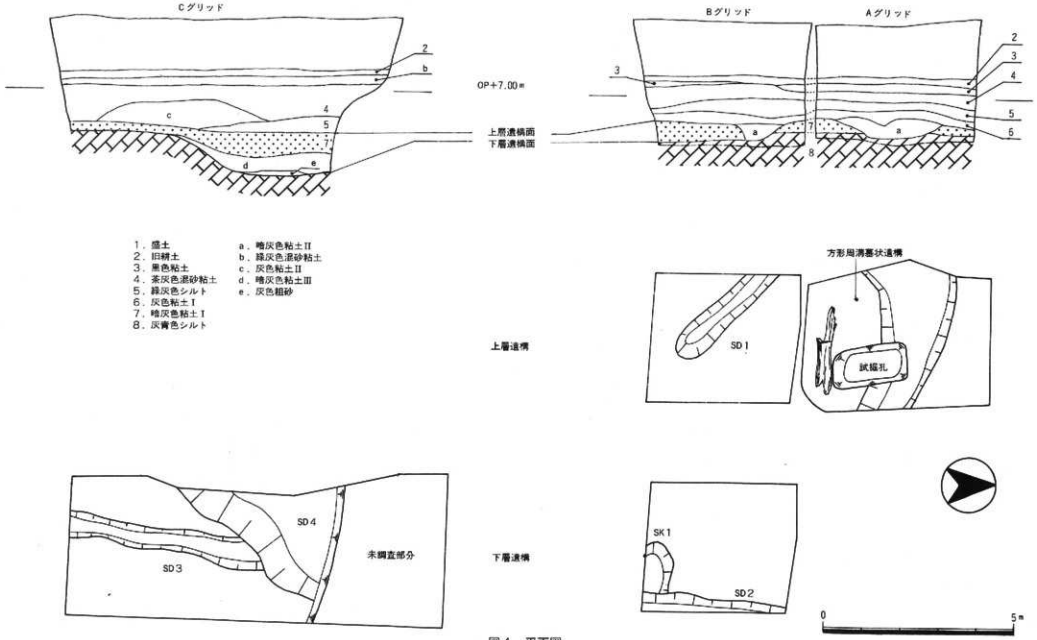

Cグリッド
Bグリッド
Aグリッド
OP+7.00m
上層遺構面
下層遺構面
1．盛土
2．旧耕土
3．黒色粘土
4．茶灰色混砂粘土
5．緑灰色シルト
6．灰色粘土Ⅰ
7．暗灰色粘土Ⅰ
8．灰青色シルト
a．暗灰色粘土Ⅱ
b．緑灰色混砂粘土
c．灰色粘土Ⅱ
d．暗灰色粘土Ⅲ
e．灰色粗砂
上層遺構
方形周溝墓状遺構
SD1
試掘孔
SD4
SD3
未調査部分
下層遺構
SK1
SD2
0
5m

図4　平面図

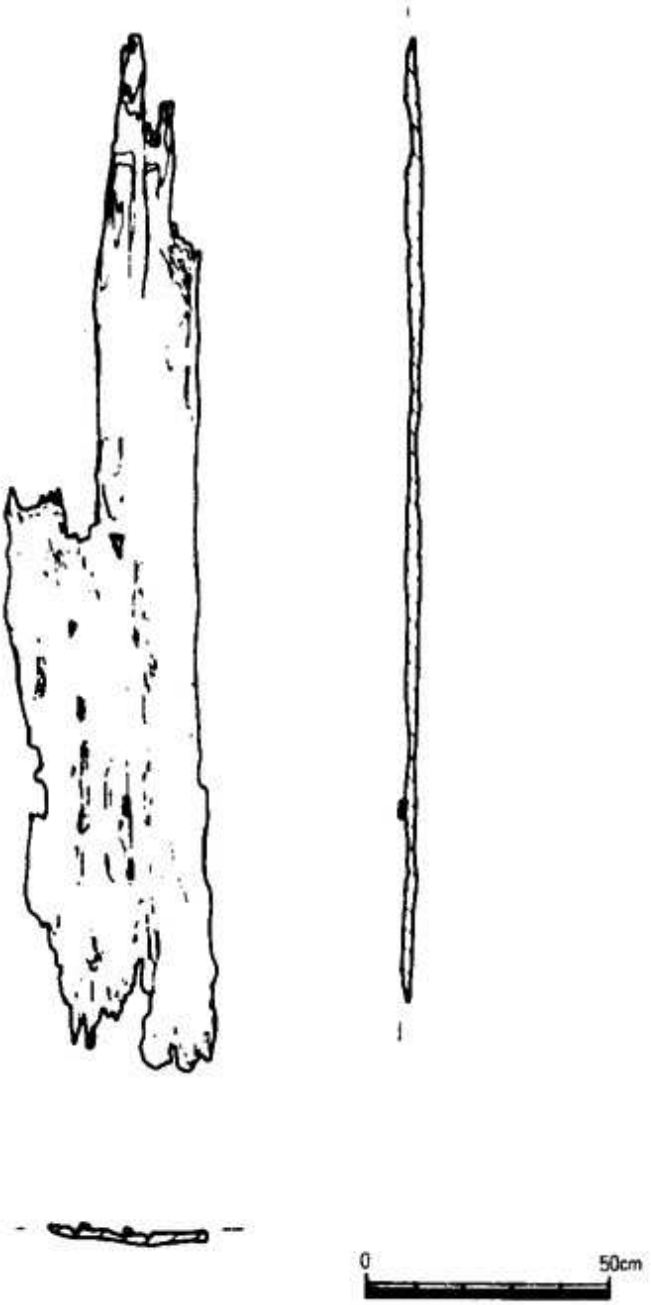


図5　木棺・人骨実測図

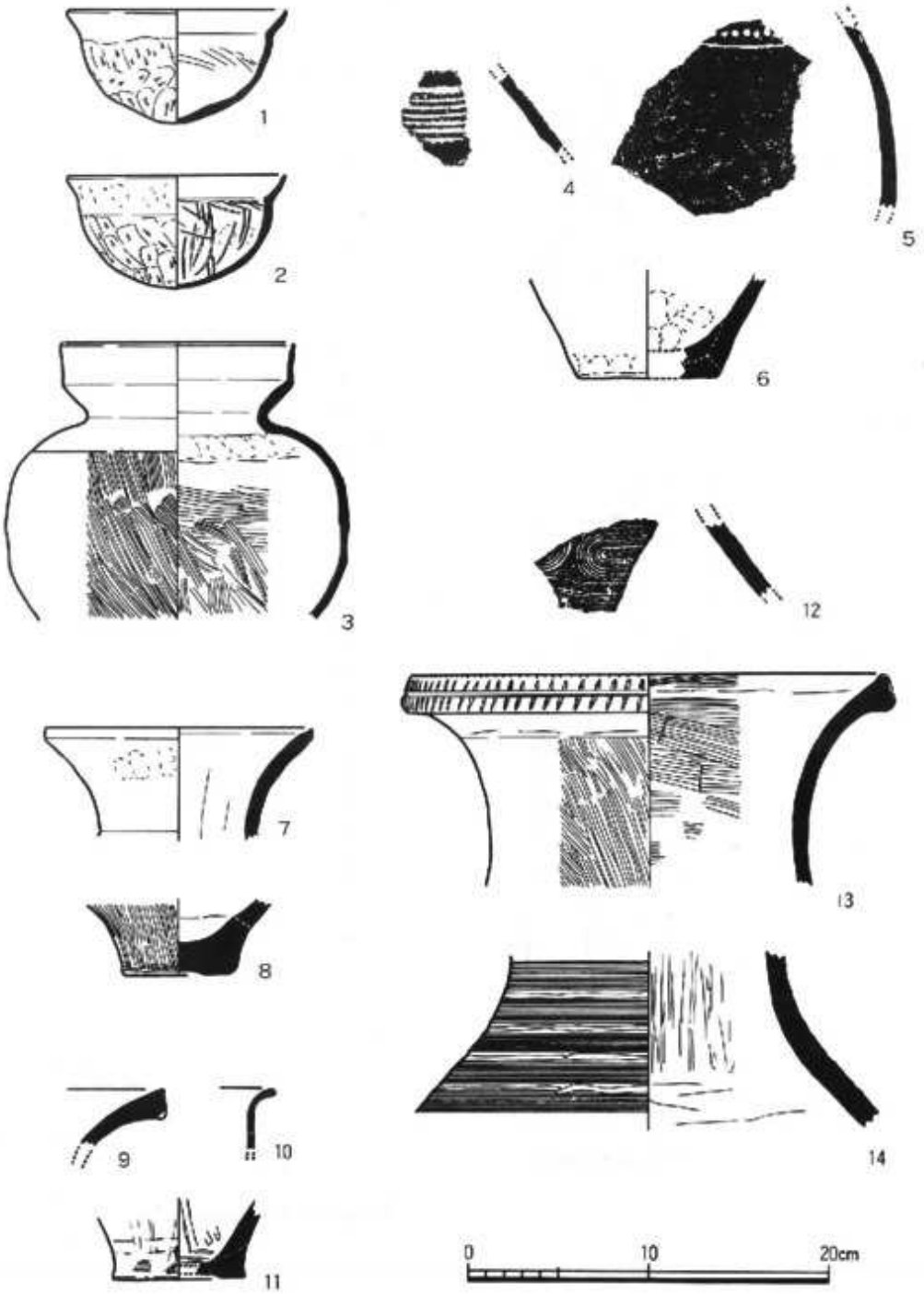


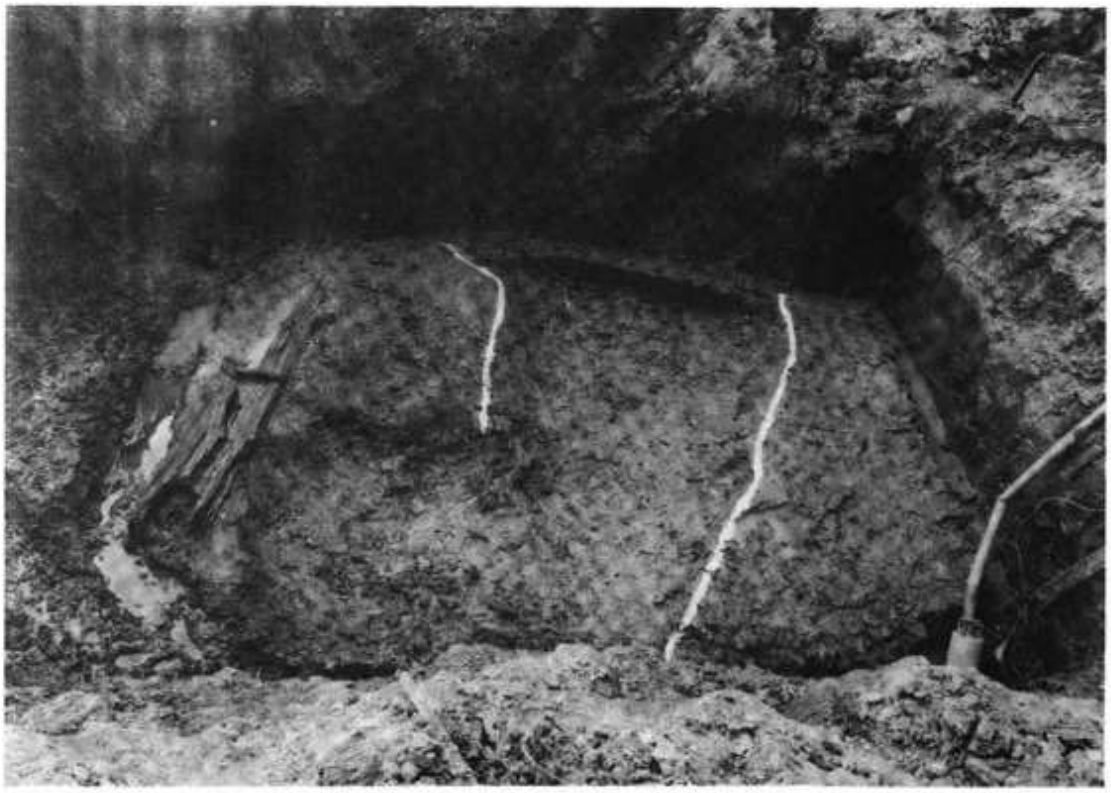
図6　出土遺物実測図

Ⅶ　出土遺物観察表

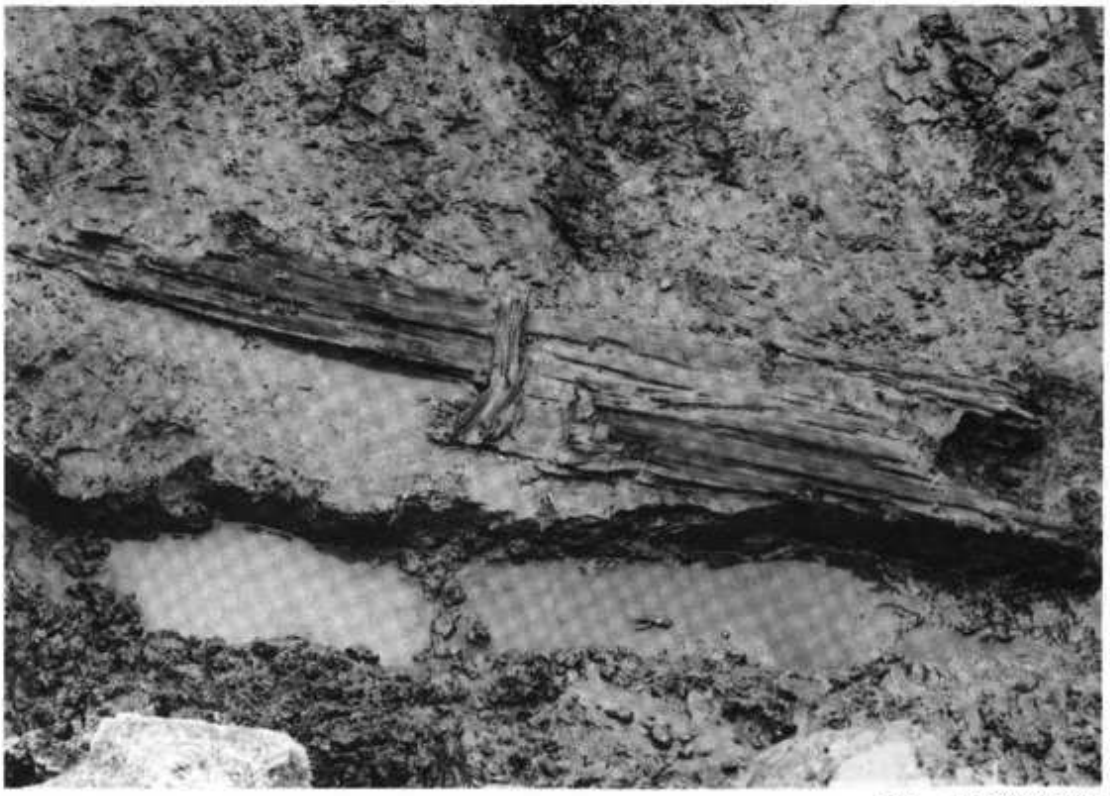
番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
1	小型鉢 Bグリッド 灰色粘土Ⅰ	口径 12.0 器高 6.3	半球形の体部から内湾ぎみに外折する口縁部である。 底部は尖りぎみとなる。	外面　口縁部はヨコナデし、体部は全体にヘラケズリを施す。 内面　口縁部をヨコナデし、体部内面は丁寧にナデを行なう。	色調　淡赤褐色 胎土　石英・長石を含む。 焼成　良好
2	小型鉢 Bグリッド 灰色粘土Ⅰ	口径 12.0 器高 6.3	1と同様の器形であるが、底部は丸みをおびる。	外面　口縁部はヨコナデし、体部は全体にヘラケズリを施す。 内面　口縁部をヨコナデし、体部内面はナデのあと細かいヘラミガキを施す。	色調　淡赤褐色 胎土　石英・長石を含む。 焼成　良好
3	壺 Bグリッド 灰色粘土Ⅰ	口径 12.9	「く」の字形に丸く屈曲した後、垂立する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 体部は胴の張る形態であると思われる。	外面　口縁部および胴部をヨコナデし、それ以下は8条/10.0cmのハケを施す。 内面　口縁部をヨコナデし、胴部は5～6条/10.0cmのハケのあと、胴部上方にナデを行なう。	色調　淡茶灰色 胎土　石英を多く含む。 焼成　良好
4	壺 遺溝		胴部の破片と思われる。 幅25.0mmの凸帯をつくりその上に5条のヘラ描沈線文を施す。	外面　沈線文帯の上下方にナデあるいはヘラミガキを施す。 内面　指頭圧痕がみられる。	色調　灰黒色～黒灰色 胎土　チャート・石英を多く含む。 焼成　良好
5	壺 遺溝		胴部の破片と思われる。 ヘラ描沈線文間に刺突文を施す。	外面　磨耗を受け不明。 内面　上部に横方向のナデ、下部はヘラミガキを施すと思われる。	色調　茶褐色(外面) 黒色(内面) 胎土　チャート・石英を含む。 焼成　良好
6	壺 包含	底径 7.5	平底を有する。	外面　ナデと思われる。 内面　指頭圧痕が顕著である。	色調　暗赤黄色(外面) 黒色(内面) 胎土　チャート・石英を含む。 焼成　良好
7	壺 Aグリッド 暗灰色粘土	口径 14.7	外反する口縁部で端部はわずかに上方へ立ち、外側に面をもつ。	外面　指圧痕がわずかに残る。 内面　ヘラ原体と思われる圧痕がわずかに残る。	色調　暗灰色 胎土　石英を多く含む。 焼成　やや不良
8	壺 Aグリッド 暗灰色粘土	底径 8.4	中央がわずかに凹む突出平底である。	外面　5条/10.0cmのハケを施す。 内面　表面が剥離を受け不明。	色調　暗赤褐色(外面) 茶灰色(内面) 胎土　チャート・石英・長石を含む。 焼成　良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
9	壺 Cグリッド 下層遺構面		大きく外反する壺の口縁部である。 端部は下方に肥厚し、広い面となる。 口縁下端部にヘラによる刻み目がみられる。	外面　端部の平坦面はナデ、それ以下はヘラミガキ。 内面　ヘラミガキを施す。	色調　淡茶褐色 胎土　石英・角閃石を含む。 焼成　良好
10	甕 SD2		丸く屈曲する口縁部で、端部は外傾する面となる。 器肉は薄めである。	外面　口縁部と肩部の接合部に指頭圧痕がみられる。 内面　磨耗を受け不明。	色調　暗赤褐色 胎土　石英・長石・角閃石を含む。 焼成　良好
11	壺 SD2	底径　7.4	中央部がわずかに凹む上げ底状の底部である。	外面　ヘラナデ。 内面　一部にヘラ痕がのこり、全体にナデ。	色調　黒灰色(外面) 茶灰色(内面) 胎土　石英を多く含む。 焼成　良好
12	壺 SD4		肩部の破片と思われる。 8条/14.5mmを単位とする羽状流水文を施す。	外面　文様間をヘラミガキする。 内面　ユビナデ。	色調　茶褐色 胎土　長石・石英・角閃石を含む。 焼成　良好
13	壺 SD4	口径　26.6	胴形の頸部から外反する口縁部に続く。端部は下方に肥厚し、広い面をつくる。 口縁上端部にヘラによる刻み目、端面に竹管の刻み目のあと、中央部に1条のヘラ描き沈線文を巡らせる。	外面　端部の平坦面はナデ、それ以下はハケを施す。 内面　ハケを施す。	色調　淡茶灰色(外面) 赤褐色(内面) 胎土　石英、チャートを含む。 焼成　良好
14	壺 SD4		肩部の破片と思われる。 10条/17.0mmを単位とする櫛描直線文を施す。	外面　直線文間にヘラミガキを施す。 内面　上部はヘラミガキ。 下部にナデを行なう。	色調　黒褐色 胎土　石英・長石・角閃石を含む。 焼成　良好

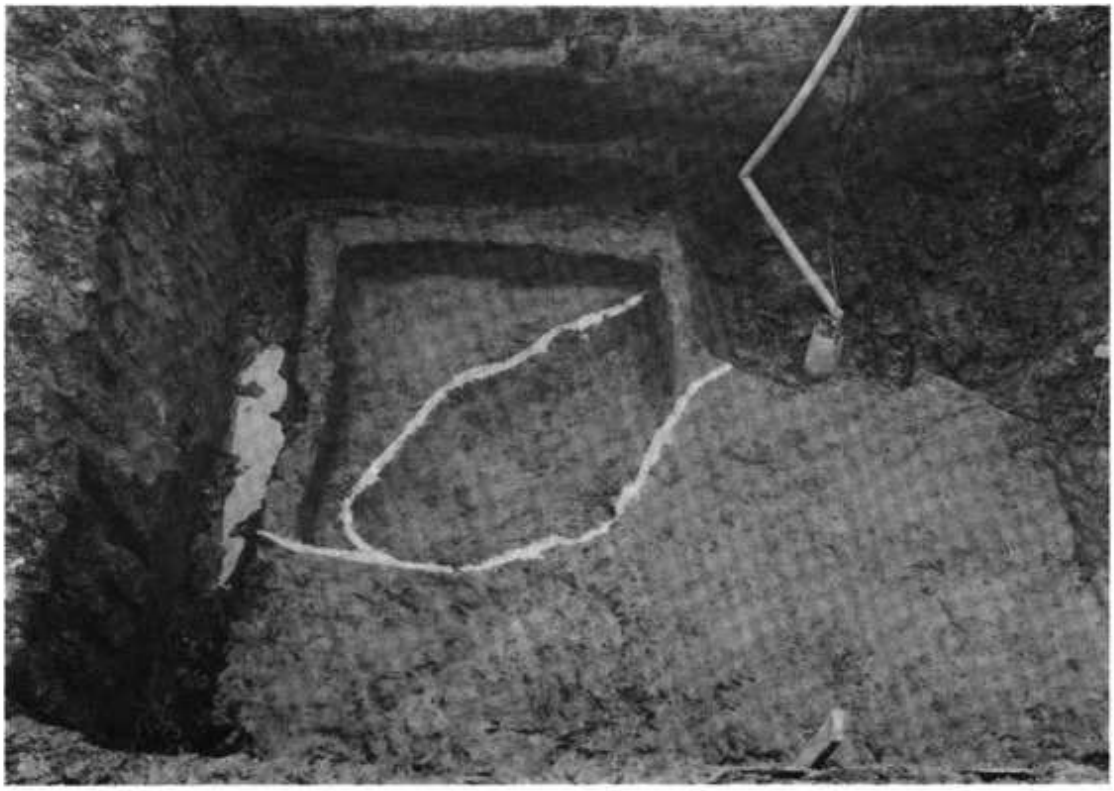
図版1



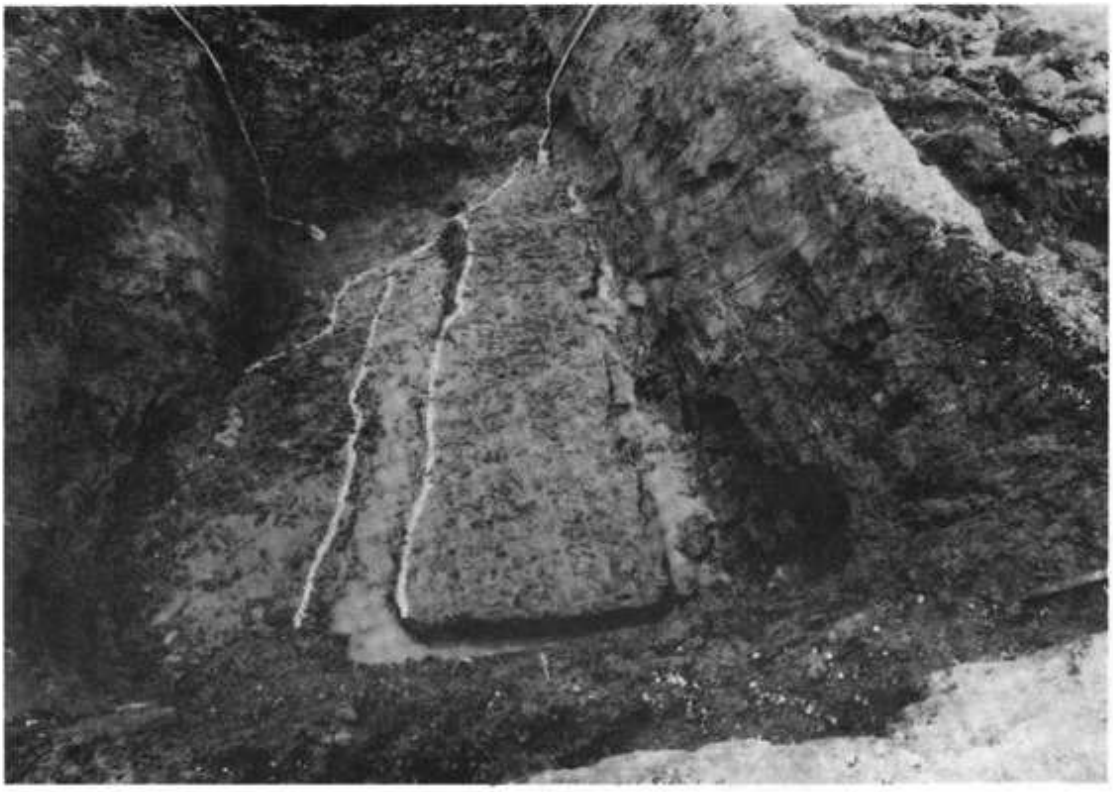
Aグリッド 上層遺構検出状況



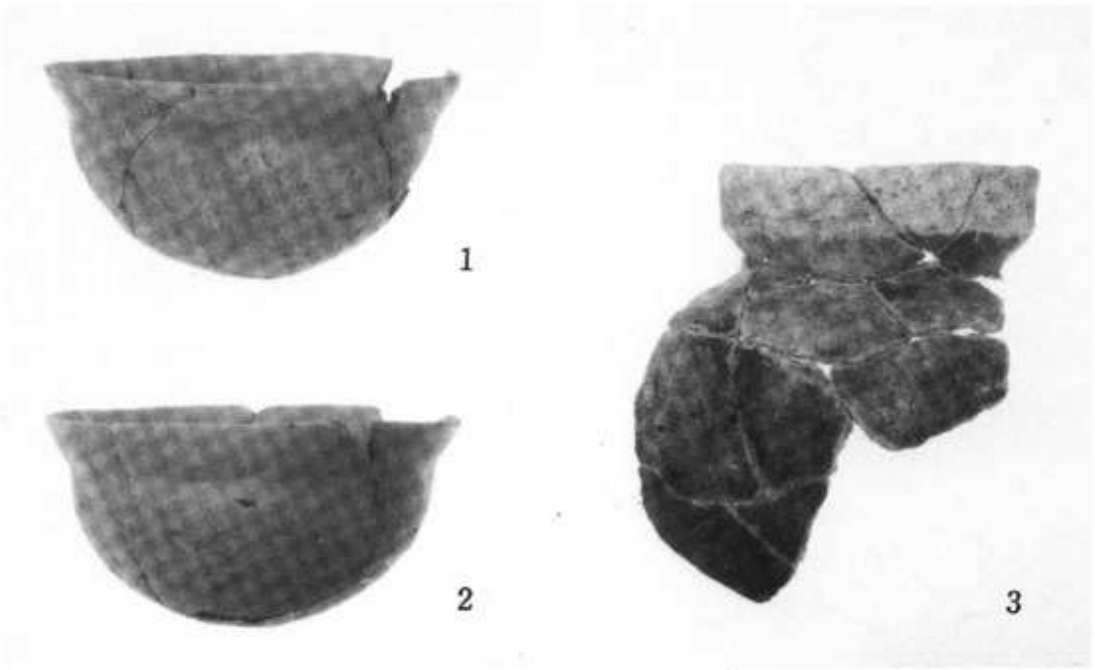
同上　木棺検出状況



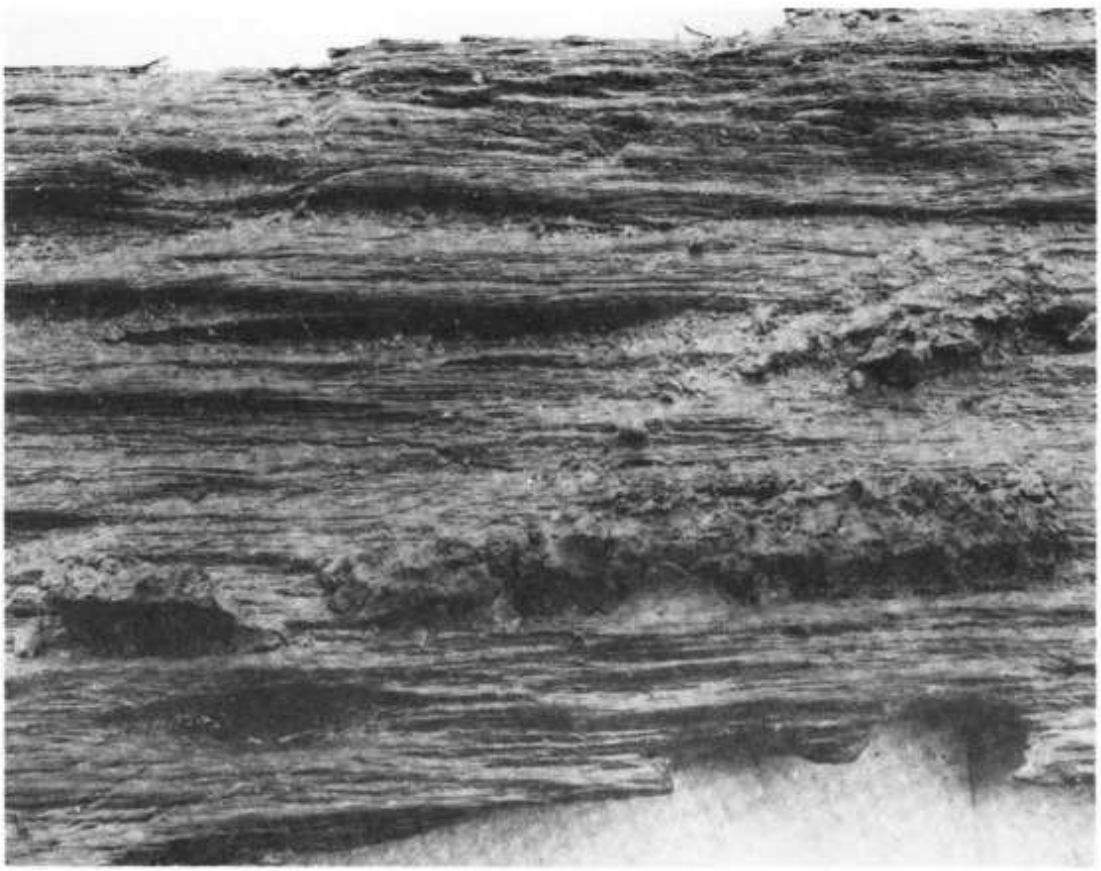
Bグリッド　上層遺構検出状況



Cグリッド　下層遺構検出状況



Bグリッド　灰色粘土Ⅰ層出土遺物



人骨遺存状況

第7章　老原遺跡発掘調査概要報告

例　　言

1．本書は、八尾市老原1丁目42番地において実施した、　　社宅建設工事に伴なう発掘調査の概要報告である。

1．発掘調査は、昭和56年4月20日から5月13日にかけて実施した。

1．発掘調査は、八尾市教育委員会文化財室が行ない、高萩千秋・高木真光が現地を担当した。なお、調査にあたっては西村公助・野田雅彦・㈱花田建設の協力があった。

1．本書作成にあたっては、上記担当者のほか米田敏幸(遺物実測)・成海佳子(遺物実測・トレース)が行ない、執筆は高萩千秋・米田敏幸(ＳＥ２出土遺物)が分担した。

本　文　目　次

Ⅰ　遺跡の概要 …… 159

Ⅱ　調査の概要 …… 159

Ⅲ　検出遺構 …… 160

Ⅳ　出土遺物 …… 162

Ⅴ　まとめ …… 165

挿 図 目 次

図1　調査区設定図…… 159
図2　Aグリッド上層平面図…… 160
図3　Aグリッド下層平面図…… 161
図4　Bグリッド平面図…… 162
図5　Cグリッド平面図…… 162
図6　古墳時代後期の遺物実測図…… 163
図7　鎌倉時代の遺物実測図…… 166

図 版 目 次

図版1　Aグリッド　遺構検出状況
同上　SE2遺物出土状況
図版2　出土遺物

第７章　老原遺跡発掘調査概要報告

Ⅰ　遺跡の概要

当遺跡は長瀬川左岸に拡がる沖積地の東端部に位置し、古墳時代から鎌倉時代に続く集落遺跡である。遺跡の周辺には長瀬川に沿って、南から東弓削遺跡①・田井中遺跡②・植松南遺跡③・跡部遺跡④・久宝寺遺跡⑤などが所在している。

当遺跡は昭和52年に老原２丁目で関西鉄力株式会社が実施した送電鉄塔建設工事中、古墳時代～鎌倉時代の遺物が出土した記録があるが、その規模や実態は明らかではなかった。今回の調査地は、この地点より約300ｍ東方に位置している。規模を確認する上で、重要な地点であった。

Ⅱ　調査の概要

調査地に３ケ所の調査区を設定し、中央部をＡグリッド、東側をＢグリッド、西側をＣグリッドとし、調査を行なった。

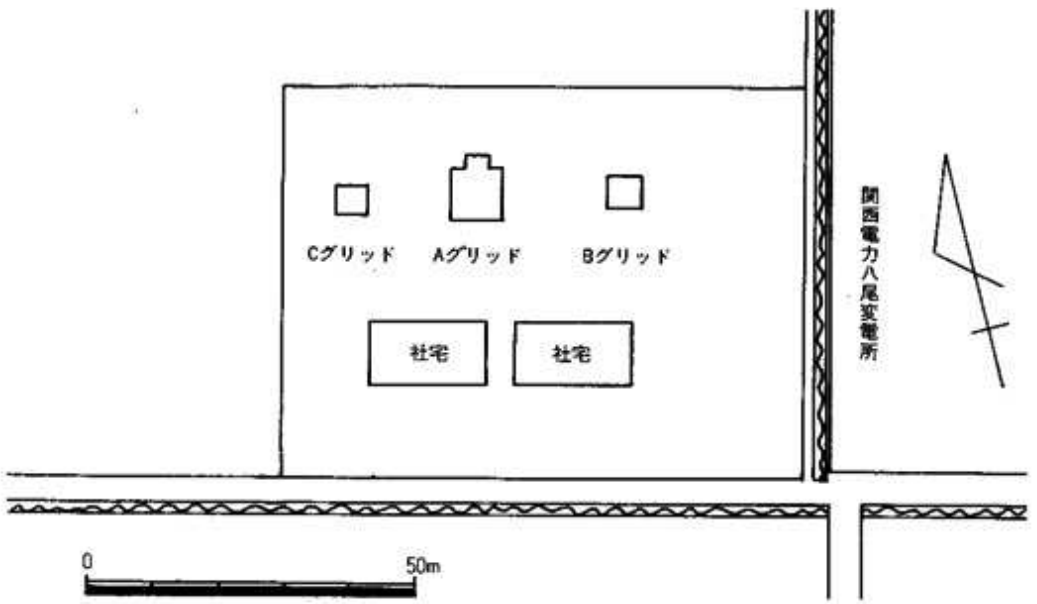


図１　調査地設定図

調査は現地表から盛土、旧耕土、床土までの約80cmを機械掘削し、以下の約30cmを手掘り調査とした。

層序は盛土約60cmの下に第1層旧耕土、第2層床土、第3層灰褐色シルト、第4層茶灰褐色砂粘土、第5層灰色砂礫土(A・Cグリッド)、灰青色シルト(Bグリッド)である。

このうち第3層は中世以降の水田址、第4層は鎌倉時代の整地層となっている。この層の上面から井戸・土器溜・柱穴を検出している。第5層はBグリッドでは古墳時代の生活面となっているが、A・Cグリッドでは古墳時代以前の河川跡と思われ、部厚い粗砂の堆積で多量の湧水がみられる。

III　検出遺構

1)　Aグリッド

調査地の中央部で8×8m、拡張部2×2mのグリッドを設定した。上層から鎌倉時代の井戸2基・柱穴3個・土器溜・溝2条が、下層からは古墳時代後期の土壙が検出された。

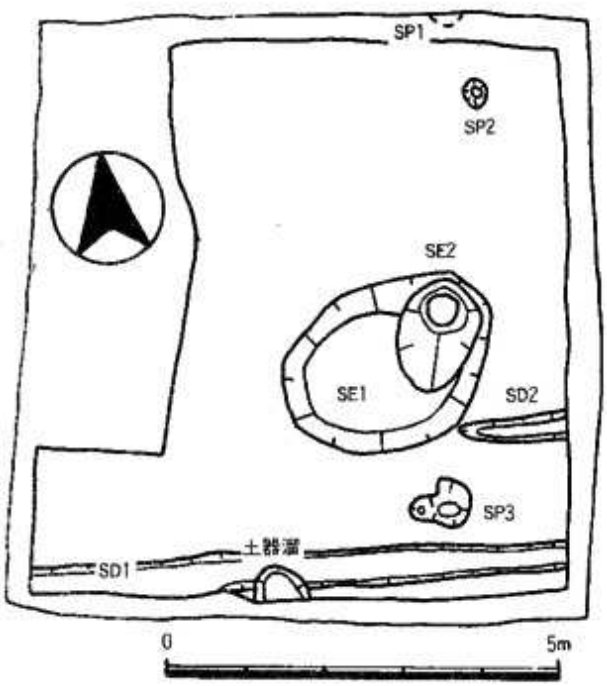


図2　Aグリッド上層平面図

上層

SE1

グリッド中央部で検出した。長径約160cm・短径120cm・深さ60cmを測り、平面は楕円形を呈する浅い素掘りの井戸である。この井戸は古墳時代以前の砂礫堆積層(河川跡)に掘り込まれており、深さに比して湧水量は豊富である。

井戸内から、鎌倉時代の瓦器椀・古付小皿・瓦片等が出土している。

SE2

SE1が埋められた後、新たに掘られたものである。この井戸は長径156cm・短径96cm・深さ86cmの穴を掘り、内部に井筒を納めるものである。

井筒の構造は、最下段に羽釜を据え、上段に曲物2個を積み上げたものである。曲物は径46cm・高さ18cm・厚さ0.8cmを測る。井筒内から鎌倉時代の白磁碗、瓦器椀、瓦器小皿、土師質小皿、平瓦、須恵質のすり鉢などが出土している。

ピット

3個の柱穴(ＳＰ１～ＳＰ３)を検出した。これらは径20～60cmと不揃いで、規則的な配列は認められなかった。

土器溜

グリッド南隅で検出した。径約60cm・深さ約15cmを測り、円形を呈する土器溜である。遺物は、上部から均整唐草文軒平瓦1点、瓦器小皿(20)、土師質小皿(11～19)等が出土している。

溝

東西方向の2条の溝(SD1・SD2)を検出した。ＳＤ１は幅40cm前後・深さ8cmを測り、ＳＤ２は幅25cm前後深さ7cmを測る。

これらは、中世以降の水田耕作に伴なうものと考えられる。

下層

ＳＫ１

下層の北東隅で検出したが、北東部は調査区外へ至り不明である。現存の最大幅350cm・最小幅280cm・深さ20～30cmを測る。

土坑内西側には径140cm・深さ30cmの落ち込みがあり、その底部には約2cmの厚さで炭化物が堆積する。

遺物としては、古墳時代後期の土師器杯・高杯・甕・甑、須恵器蓋杯・高杯などが多数出土しているが、この土坑の性格は不明である。

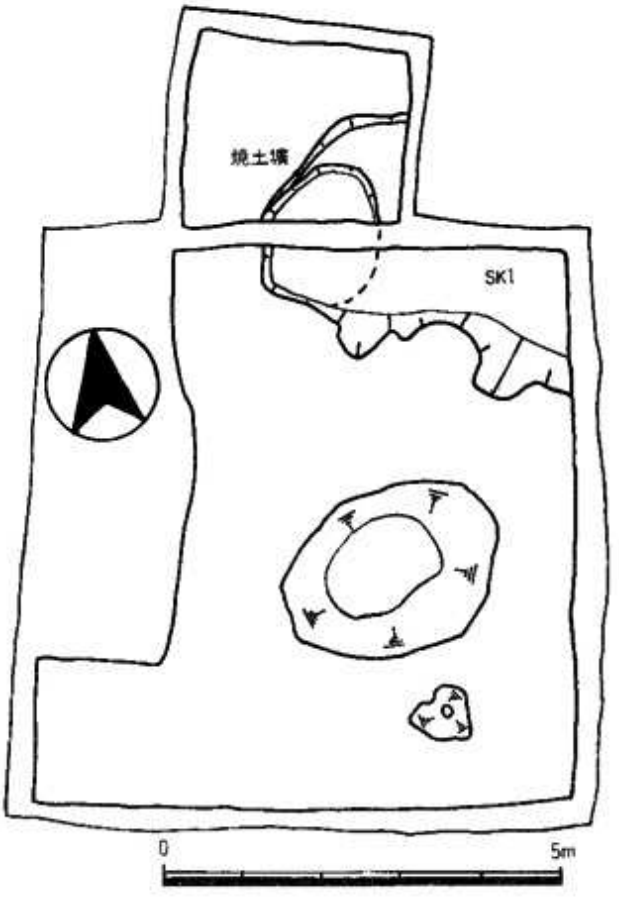


図３　Aグリッド下層平面図

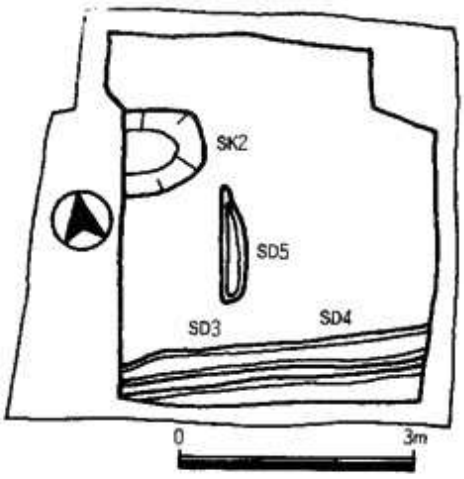


図4　Bグリッド平面図

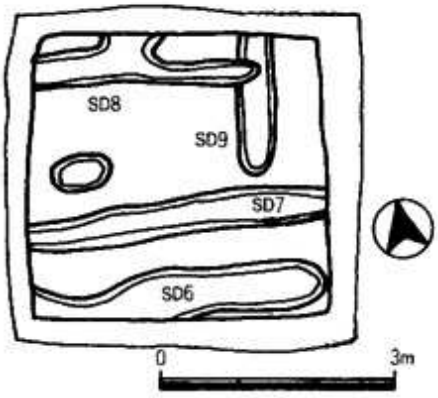


図5　Cグリッド平面図

2)　Bグリッド

Aグリッドから東へ20mの地点に5×5mのグリッドを設定した。グリッド内では土壙・溝を検出した。

SK2

径約100cm・深さ約40cmを測る。遺物は出土しなかった。層位からみて所属時期は鎌倉時代と推定されるが、性格は不明である。

溝

3条の溝(SD3～SD5)を検出した。これらはAグリッドで検出された溝と同じく、中世以降の耕作に伴なうもののようである。

3)　Cグリッド

Aグリッドから西15mの地点に、4.5×4.5mのグリッドを設定した。遺構として4条の溝を検出した。

溝

東西方向のもの3条(SD6～SD8)、南北方向のもの1条(SD9)である。いずれも幅40cm前後，深さ7cmほどの規模で、A・Bグリッドの溝と同じく、中世以降のものであろう。

Ⅳ　出土遺物

出土遺物については、Aグリッドのものが多数を占め、B・Cグリッドでは細片が若干出土したのみである。遺物は古墳時代後期のものと、鎌倉時代のものに大別される。

1)　古墳時代後期

この時期の遺物として、AグリッドSK1から出土した土師器・須恵器、包含層から出土した土錘などがある。

土師器

杯(1～3)：口縁部が2段に屈曲する(1・2)と直口の(3)が出土した。(1)は口径13.6cmを測る。口縁部は直立した後外反し、端部は上方へ尖りぎみに終わる。(2)は口径16cmを測る。

口縁部はやや内弯ぎみに直立した後外反し、端部は丸く終わる。ともに内外面をヨコナデ調整する。(3)は口径13.8cm・器高6.6cmを測る。口縁端部はやや内傾する面をもつ。底部は丸味をおびた平底である。体部は指圧ナデ、口縁部はヨコナデ調整を行なう。

高杯(4):口径16.4cm・杯部高5cmを測り、脚部を欠損する。杯底部より内弯ぎみに立ち上がる口縁部で、端部は丸く終わる。外面杯底部と口縁部の境には、丸みのある段をなす。内外面をヨコナデ調整する。

甕(5):口径8.6cmを測る。肩部から急に締まり、斜めに拡がる長い口頸部をもつ。口縁端部は丸く終わる。外面には縦方向のヘラミガキ、内面には指圧ナデを施し、口縁端部にはヨコナデを行なう。

甕(6):口径14.6cmを測る。口縁部は「く」の字形にゆるく外反し、端部はつまみ上げている。体部はゆるやかに内弯する。調整は接合部を指圧ナデの後、体部外面に縦方向のハケ、口縁部内外面にはヨコナデを施す。

須恵器

蓋杯(7・8):いずれも蓋である。(7)は口径13cm・器高7.8cmを測る。口縁部は垂直に下りながらわずかに外反ぎみとなり、丸く終わる端部に至る。天井部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを行なう。(8)は口径13.8cm、器高5cmを測る。口縁部はやや内弯しながら垂直に下

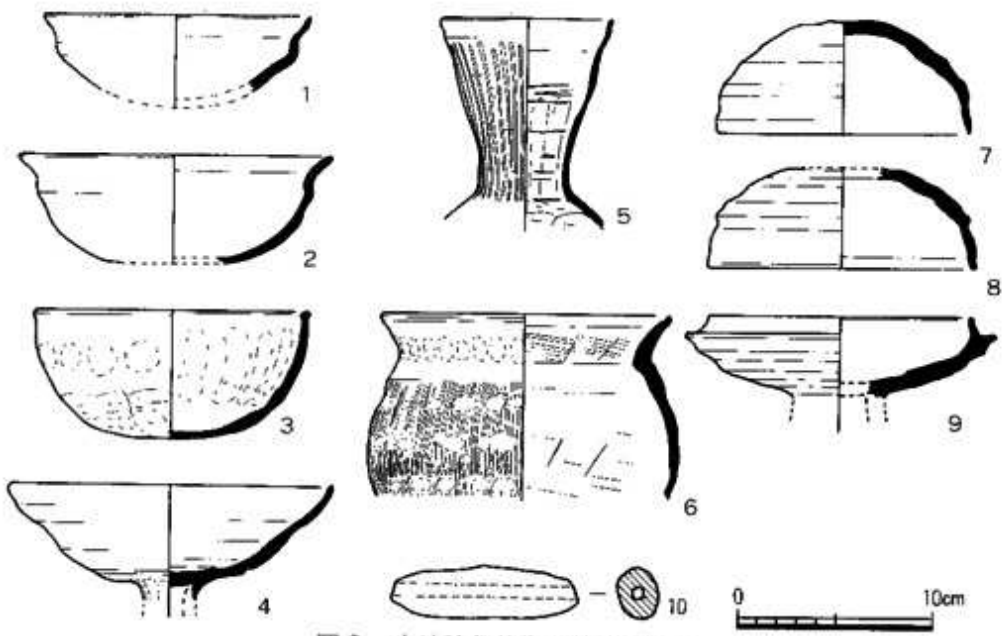


図6　古墳時代後期の遺物実測図

り、わずかに外反して丸く終わる端部に至る。退化した稜をもつ。天井部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを行なう。

有蓋高杯(9):口径13.6cm・杯部高4cmを測る。口縁部は短かく内傾し、端部は内傾する凹面となる。受部はほぼ水平にのび、底部は浅く平らである。杯部外面下半は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを行なう。

その他

土錘(10):径2.6cm・長さ9.6cmを測る。径0.6cmの孔を穿っている。

2) 鎌倉時代

この時期の遺物としては、土器溜・井戸から大半が出土している。その種別は瓦器椀、瓦器小皿、羽釜、土師質小皿、白磁碗、瓦、瓦質土器、木製品などである。

土器溜出土遺物

遺物は多数が土師質小皿で、他に瓦器小皿(20)、均整唐草文軒平瓦などが出土している。

土師質小皿(11～19):口縁部の形態により、3形態に分類できる。Aタイプ(15・16)は口縁部と体部の境に稜をもつ。Bタイプ(11)は口縁部が外上方に直線的に立ち上がる。Cタイプ(12～14・17～19)は平坦な底部からゆるやかなカーブを描き、外上方に内湾しながら立ち上がるものである。さらに底部の形態や口径から、A・Cタイプは2種に細分することができる。

SE2出土遺物

遺物は、井筒外と井筒内で2時期に分けることができる。

瓦器椀(21～27):井筒外出土のもの(21・22)は、断面三角形の高台より上方へ内湾し、口縁部へ至る。口縁端部は丸く終わる。外面は口縁部ヨコナデ、以下に指頭ナデを行なった後、粗めのヘラミガキを上半部に施す。内面は見込みに平行暗文、他はやや密なヘラミガキを施す。これらの瓦器椀は、高台の形状やヘラミガキの相様から、「挟山編年」のⅥ期に位置づけることができる。⑥

井筒内出土のもの(23～27)は、断面方形ないし三角形の低い高台より内湾し、口縁部へ続く。口縁端部はやや外反ぎみに終わる。外面は口縁部を強くヨコナデし、下方に指頭ナデを行なう。外面のヘラミガキは、口縁部付近にわずかに施される程度である。内面は見込みに平行ないし格子状の暗文を施し、他はやや粗いヘラミガキを施す。暗文やヘラミガキは(21・22)に比べやや粗雑で、器形も浅めのものが目立つ。これらはその特徴から、「挟山編年」のⅤ期に位置づけられるものである。

瓦器小皿(28・29)：ともに井筒内出土である。外面は口縁部付近をヨコナデ、底部は指頭ナデで調整する。内面は見込みに平行・不定方向の暗文を施すが、どちらも粗雑である。

ここにみられる瓦器類は、その出土位置によって若干の型式差がみられ、それがこの井戸の掘削時と廃絶時との時間差を示している。しかし、同一井戸内の資料であり、両者にさほど大きな時間差が存在するとは考え難い。

白磁碗(30)：井筒内出土のもので、前述の「挟山編年」V期の瓦器椀に共伴する資料である。口径18.0cm・高台径6cm・器高6.8cmを測る。高台は高く鋭く直立し、碗底部に回転ヘラ切り痕がみられる。体部は内弯ぎみに上外方へのび、口縁部へ続く。口縁端部はわずかに外反し、平らな面で終わる。外面は口縁部付近まで回転ヘラケズリを行ない、内面は見込み部に沈線状の浅い段をもつ。釉は内面および外面の高台のやや上方まで施され、高台付近は露胎となっている。釉層は全体に薄く、釉調は黄色味をおびた乳白色を呈する。

この白磁碗の形態的特徴は「大宰府分類」⑦の白磁碗V類に属し、11世紀以後に出現する器形であるとされている。

V　まとめ

今回の調査では、古墳時代後期の土壙、鎌倉時代の井戸・柱穴・土器溜、鎌倉時代以降の溝が検出された。遺跡の規模や実態については充分に把握できるものではなく、井戸・柱穴などの遺構によって、住居址および集落の一画に触れたに過ぎない。しかし、周辺に古墳時代と鎌倉時代の集落跡の存在することが確められたわけで、今回の調査の意義は大きい。

〔注　記〕

1　八尾市教育委員会「東弓削遺跡」『八尾市文化財調査報告3』1976年

2　大阪府『大阪府史』1978年

3　本誌所収第2章

4　本誌所収第6章

5　八尾市教育委員会「久宝寺遺跡」『昭和51・52年度埋蔵文化財発掘調査年報　八尾市文化財調査報告4』1979年

6　大阪府教育委員会『挟山遺跡・軽里遺跡発掘調査概要』1978年

7　横田賢二郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978年

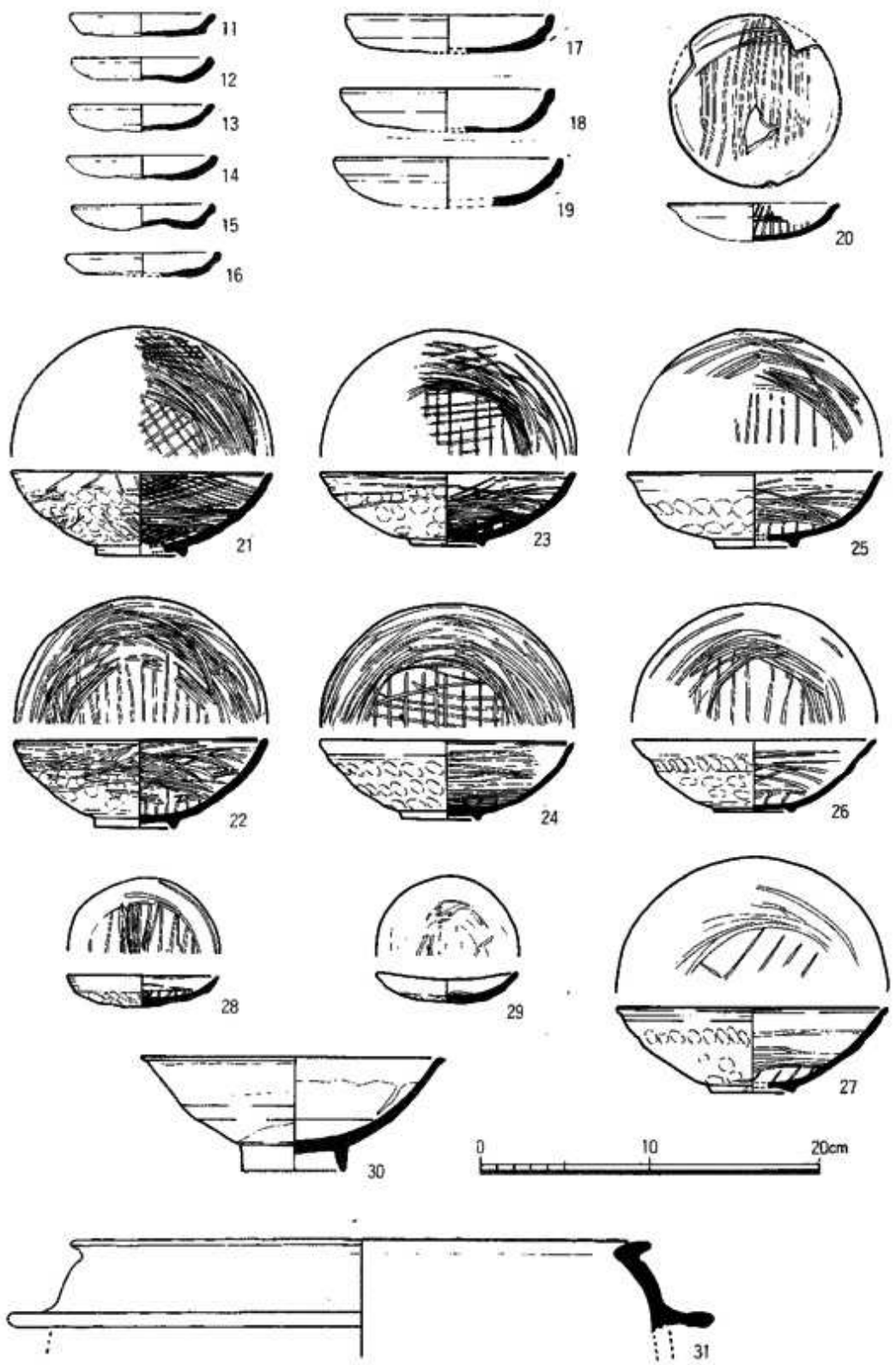
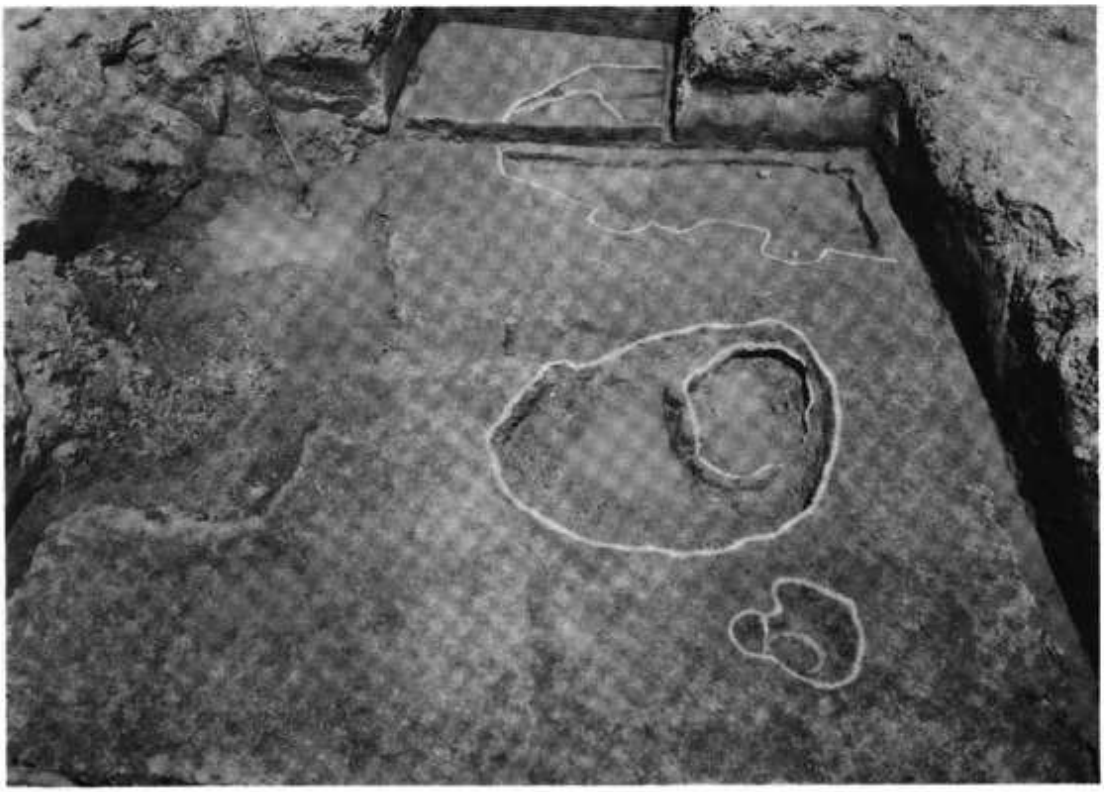
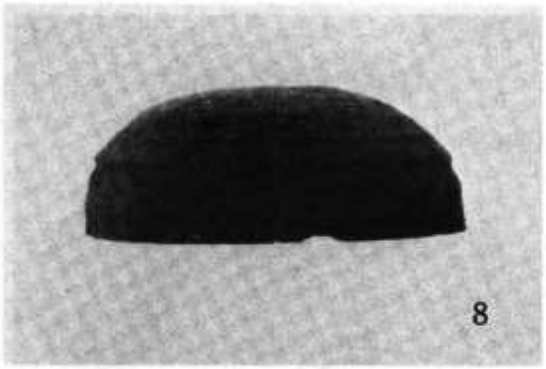


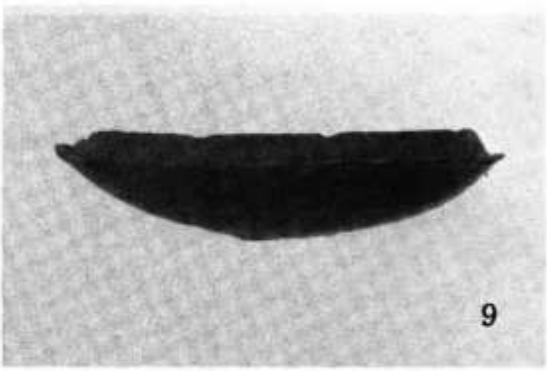
図７　鎌倉時代の遺物実測図

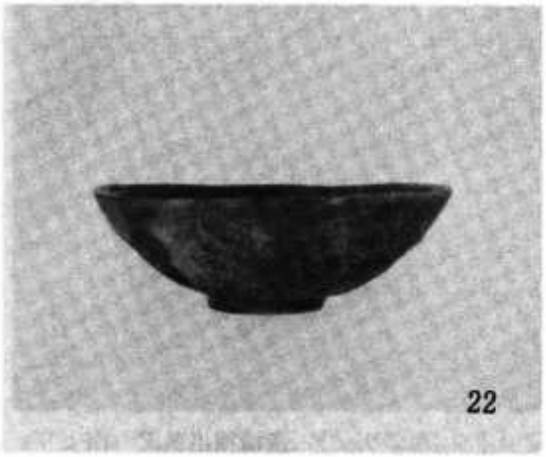


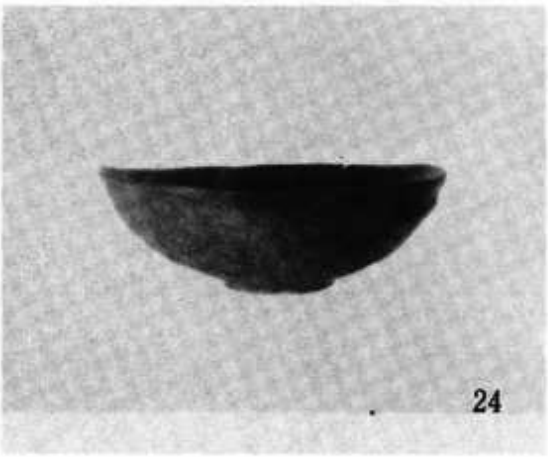
Aグリッド　遺構検出状況（南より）

同上　ＳＥ２遺物出土状況（東より）

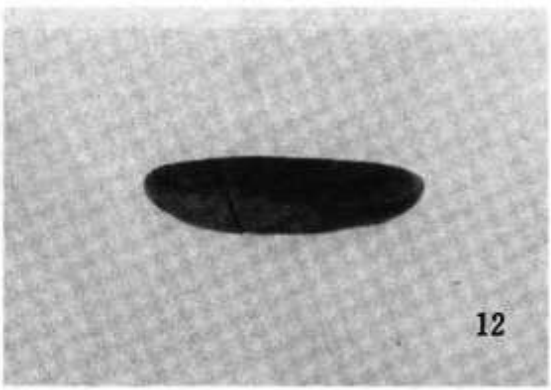

8


9

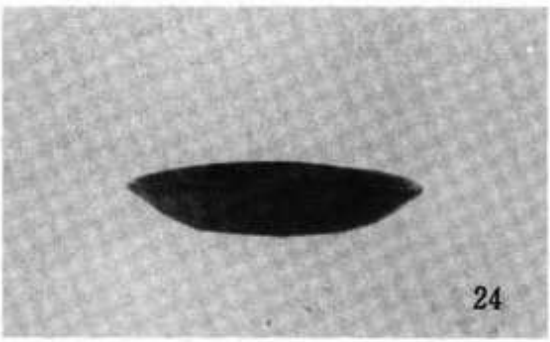

22


24

16


12

28


24

出土遺物

第８章　東郷遺跡発掘調査概要報告

例　言

1．本書は、八尾市桜ヶ丘・北本町・光町において昭和56年度に実施した東郷遺跡の概要報告である。東郷遺跡は昭和55年度に桜ヶ丘3丁目8－1・8－9で実施した発掘調査を第1次調査とし、以後調査順に第2次・第3次‥と付称している。なお調査地の詳細は文中の一覧表で明示する。

1．発掘調査は八尾市教育委員会文財室が行ない、第2次(米田敏幸・原田昌則)、第3次～第5次(高萩千秋・高木真光)、第6次(白神典之・森田実)、第8次～第10次(高萩千秋)が現地を担当した。

なお、調査にあたっては、西村公助・駒沢敦・中野慶太・西辻正信・田中義紀・浅井賢一・北尾耕三・山西嘉彦・㈱大林組・㈱奥村組・㈱大永土木・㈱辻本工務店・㈲花田建設・㈱美濃部建設の協力があった。

1．本書作成にあたっては、上記担当者のほか、西村公助・野田雅彦・中野慶太・西辻正信・田中義紀・中野健太郎・山上弘・張本洋一(遺物実測)、成海佳子・酒井雅代・中谷聖子(トレース)が行ない、執筆は第2節米田敏幸、第3節～第5節高萩千秋(遺構)・高木真光(遺物)、第6節白神典之・森田実、第7節～第10節高萩千秋(遺構)・高木真光(遺物)が分担した。

本　文　目　次

第1節　遺跡の概要 …… 179

第2節　第2次調査 …… 183

I　調査の概要 …… 183

II　検出遺構 …… 183

Ⅲ　遺物観察表…… 185

第3節　第3次調査…… 186

Ⅰ　調査の概要…… 186

Ⅱ　層序…… 187

Ⅲ　遺構・遺物…… 187

Ⅳ　遺物観察表 …… 190

第4節　第4次調査 …… 193

Ⅰ　調査の概要 …… 193

Ⅱ　層序 …… 193

Ⅲ　遺構・遺物…… 194

Ⅳ　遺物観察表 …… 203

第5節　第5次調査 …… 206

Ⅰ　調査の概要 …… 206

Ⅱ　層序 …… 206

Ⅲ　遺構・遺物…… 207

Ⅳ　遺物観察表 …… 227

第6節　第6次調査 …… 241

I　調査の概要 …… 241

II　層序 …… 241

III　検出遺構 …… 242

IV　出土遺物 …… 244

V　まとめ …… 245

VI　遺物観察表 …… 252

第7節　第8次調査 …… 261

I　調査の概要 …… 261

II　層序 …… 261

III　遺構・遺物 …… 262

IV　遺物観察表 …… 280

第8節　第9次調査 …… 284

I　調査の概要 …… 284

II　層序 …… 285

III　遺構・遺物 …… 285

IV　遺物観察表 …… 299

第9節　第10次調査 …… 309

I　調査の概要 …… 309

II　層序 …… 310

III　自然河川および出土遺物 …… 310

IV　古墳時代前期の遺構・遺物 …… 312

V　中世の遺構・遺物 …… 312

VI　遺物観察表 …… 314

第10節　まとめ …… 315

I　検出遺構について …… 315

II　出土遺物について …… 317

挿　図　目　次

〈第1節〉

図1　調査地概要図 …… 181～182

〈第2節〉

図2　平面図 …… 183

図3　出土遺物実測図 …… 183

〈第3節〉

図4　調査地設定図 …… 186

図5　水田出土遺物 …… 187

図6　平断面図 …… 188

図7　出土遺物実測図 …… 189

〈第4節〉

図8　調査地設定図…… 193
図9　水田遺構平断面図…… 194
図10　ＳＥ１平断面図…… 195
図11　ＳＥ２平断面図…… 195
図12　ＳＥ３上層平面図…… 196
図13　ＳＥ３下層平断面図…… 197
図14　砥石実測図…… 197
図15　第２・第３遺構面平面図…… 199
図16　断面図…… 200
図17　出土遺物実測図…… 201
図18　ＳＥ３出土遺物実測図…… 202

〈第5節〉

図19　調査地設定図…… 206
図20　ＳＩ１平断面図…… 207
図21　ＳＢ１平断面図…… 207
図22　ＳＥ２平断面図…… 208
図23　ＳＥ１平断面図…… 211
図24　ＳＥ２平断面図…… 211
図25　ＳＥ４平断面図…… 212
図26　ＳＥ５平断面図…… 212
図27　ＳＤ６平断面図…… 214
図28　ＳＤ９平断面図…… 214
図29　平面図…… 217
図30　断面図…… 218
図31　出土遺物実測図１…… 219
図32　出土遺物実測図２…… 220
図33　出土遺物実測図３…… 221
図34　出土遺物実測図４…… 222
図35　出土遺物実測図５…… 223
図36　出土遺物実測図６…… 224

図37　出土遺物実測図7 …… 225
図38　出土遺物実測図8 …… 226
〈第6節〉
図39　調査地設定図 …… 241
図40　ＳＥ1出土木製品 …… 242
図41　平断面図 …… 247
図42　Aトレンチ出土遺物実測図 …… 248
図43　Bトレンチ出土遺物実測図1 …… 249
図44　Bトレンチ出土遺物実測図2 …… 250
図45　Bトレンチ出土遺物実測図3 …… 251
〈第7節〉
図46　調査地設定図 …… 261
図47　ＳＩ1平断面図 …… 262
図48　ＳＩ2平断面図 …… 263
図49　ＳＢ1平断面図 …… 264
図50　ＳＢ2平断面図 …… 264
図51　ＳＢ3平断面図 …… 265
図52　ＳＢ4平断面図 …… 265
図53　ＳＢ5平断面図 …… 266
図54　ＳＢ6平断面図 …… 266
図55　ＳＢ7平断面図 …… 266
図56　ＳＢ9平断面図 …… 267
図57　ＳＫ2・ＳＫ3平断面図 …… 268
図58　ＳＫ10　平断面図 …… 270
図59　ＳＤ1平面図 …… 271
図60　ＳＰ1平断面図 …… 274
図61　柵列平断面図 …… 275
図62　平面図 …… 276
図63　断面図 …… 277
図64　出土遺物実測図1 …… 278
図65　出土遺物実測図2 …… 279

〈第8節〉

図66　調査地設定図…… 284
図67　ＳＫ２平面図…… 285
図68　ＳＫ３平面図…… 286
図69　ＳＥ１平断面図…… 288
図70　ＳＥ２平断面図…… 289
図71　平面図…… 292
図72　断面図…… 298
図73　出土遺物実測図１…… 294
図74　出土遺物実測図２…… 295
図75　出土遺物実測図３…… 296
図76　出土遺物実測図４…… 297
図77　出土遺物実測図５…… 298

〈第9節〉

図78　調査地設定図…… 309
図79　自然河川出土木製品…… 310
図80　平面図…… 311
図81　自然河川断面図…… 311
図82　出土遺物実測図…… 313

挿　表　目　次

表１　東郷遺跡発掘調査一覧表…… 188
表２　井戸内遺物出土状況一覧表…… 317
表３　タタキの幅について…… 319

図 版 目 次

図版１　東郷遺跡周辺航空写真

〈第３次調査〉

図版２　第１トレンチ　沼沢地検出状況
　　第２トレンチ　水田址検出状況
図版３　第３トレンチ　水田址検出状況
　　同上　水田畦畔断面
図版４　沼沢地出土遺物

〈第４次調査〉

図版５　第１調査区　第３遺構面検出状況
　　同上　ＳＥ２
図版６　第２調査区　第３遺構面検出状況
　　同上　ＳＥ３
図版７　第２調査区　第２遺構面検出状況
　　同上　ＳＥ３上層
図版８　第３調査区　沼沢地検出状況
　　第１調査区　水田址検出状況
図版９　第２調査区　水田址検出状況
　　第３調査区　水田址検出状況
図版10　ＳＥ２・ＳＥ３出土遺物
図版11　ＳＥ３出土砥石・木製品

〈第５次調査〉

図版12　第１調査区　遺構検出状況
　　同上　ＳＥ１遺物出土状況
図版13　第２調査区　遺構検出状況
　　同上　ＳＫ５
図版14　第２調査区　ＳＥ２
　　第３調査区　遺構検出状況
図版15　第３調査区　ＳＩ１
　　同上　ＳＥ３
図版16　第３調査区　ＳＥ４上層遺物出土状況
　　同上　ＳＥ４完掘
図版17　第４調査区　遺構検出状況
　　同上　ＳＤ９遺物出土状況
図版18　ＳＥ１・ＳＥ２・ＳＥ４・ＳＥ５
　　出土遺物
図版19　ＳＥ５・ＳＤ９出土遺物
図版20　ＳＤ９出土遺物
図版21　ＳＤ９・ＳＤ10・ＳＫ10出土遺物

〈第６次調査〉

図版22　Ａトレンチ
　　Ｂトレンチ
図版23　Ｂトレンチ　ＳＫ１完掘
　　Ｂトレンチ　包含層遺物出土状況
図版24　Ｂトレンチ　出土遺物

〈第8次調査〉

図版25　第1調査区　遺構検出状況
　　第2調査区　遺構検出状況
図版26　第1調査区　ＳＩ1
　　同上　ＳＩ2検出状況
図版27　第1調査区　ＳＢ2
　　第1調査区　ＳＢ8
図版28　第1調査区　ＳＢ3・ＳＢ4
　　第1調査区　ＳＢ3柱根検出状況
図版29　第1調査区　ＳＢ5
　　第1調査区　ＳＢ6
図版30　第2調査区　ＳＢ9
　　第1調査区　ＳＫ10
図版31　第1調査区　柱穴列
　　同上　ＳＤ1検出状況
図版32　ＳＰ1・ＳＢ7・ＳＫ9・包含層出土遺物

〈第9次調査〉

図版33　遺構検出状況
　　ＳＫ2
図版34　ＳＫ2遺物出土状況
　　ＳＫ3遺物出土状況
図版35　ＳＥ1遺物出土状況
　　ＳＥ1完掘
図版36　ＳＥ1下層遺物出土状況
　　ＳＥ2完掘
図版37　ＳＫ2・ＳＥ1・ＳＥ2出土遺物
図版38　ＳＥ1出土遺物

〈第10次調査〉

図版39　調査地全景
　　遺構検出状況
図版40　自然河川上層遺物出土状況
　　同上　下層遺物出土状況
図版41　自然河川出土遺物

第8章　東郷遺跡

第1節　遺跡の概要

東郷遺跡は、八尾市東本町・北本町・光町・桜ヶ丘一帯に所在する弥生時代から中世に至る複合遺跡である。当遺跡は現在八尾市の中枢部に位置し、古くは河内国若江郡に属し、地形的には楠根川と長瀬川に挟まれた沖積地に立地している。

楠根川や長瀬川等の河川は、大和川や石川の豊かな水をこの地域に送り、幾多の氾濫をくり返しながら肥沃な土壌を形成してきた。このように、河内低平地における集落遺跡は、豊かな土壌を経済基盤の背景として、発展し続けた跡をとどめている。

同じ沖積地上には、多くの遺跡が分布している。東方に小阪合遺跡、西方には古墳や住居址等が検出されている佐堂遺跡があり、また南方には古墳時代前期の土器や埴輪等が多量に出土する中田遺跡[①]および東弓削遺跡[②]、北方には弥生時代前期から続く山賀遺跡や、弥生時代中期の方形周溝墓群[③]で知られる瓜生堂遺跡[④]があり、この沖積地が河内地方の中でも[⑤]、比較的早くから開けた地域であることが理解できよう[⑥]。

当遺跡の発見は昭和46年4月、八尾市東本町2丁目(東郷光明寺裏付近)で水道管敷設工事中、地表下約1.5mで墨書人面土器等が出土したことに端を発するが、それ以後近鉄線高架工事や下水道工事等で若干の遺物包含層[⑦]の存在が確認された以外、実態は明らかではなかった。しかし、昭和55年1月、桜ヶ丘3丁目でマンション建設に伴なう事前調査において、古墳時代から中世に至る土壙・井戸・柱穴等の遺構や、それらに伴なう遺物を検出[⑧]したことから、当遺跡が広範囲に拡がることが確認できた。

当遺跡は古代から河内と大和を結ぶ交通の要所であったが、前述のように現在も八尾市における行政や経済、交通機関等の中枢部である。近年の急激な開発に伴ない、市域の多くの遺跡は破壊、または消滅の危機に瀕し、特に当遺跡の位置する近鉄八尾駅前の開発は急激に進んでいる。この貴重な遺跡の歴史的価値を多くの人々に知らしめるため、当市教育委会では遺跡指指定区域内の開発事業に対し、申請者と協議を重ね、多くの人々の努力によって、試掘調査や発掘調査を実施している。

なお、当遺跡における昭和56年度事業の発掘調査は9件であり、調査面積は延べ2030㎡におよぶ。調査区の地番・申請者・申請面積・申請目的等については、次ページの一覧表の通りである。

表1　東郷遺跡発掘調査一覧表

付称	調査地	調査面積		調査期間	目的	備考
第2次	桜ヶ丘3丁目7-8-1	9㎡		4月15日	店舗付住宅	第2節
第3次	光町1丁目69-2	64		4月13日～4月15日	貸ビル	第3節
第4次	北本町2丁目145-12	125		5月13日～5月26日	〃	第4節
第5次	光町1丁目88	196		6月8日～7月7日	〃	第5節
第6次	桜ヶ丘2丁目9他	40		7月25日～8月8日	社会保険事務所庁舎	第6節
第7次	桜ヶ丘3丁目	200		9月21日～10月31日	社屋	整理中
第8次	光町2丁目156	565		10月15日～12月4日	貸ビル	第7節
第9次	光町1丁目47	210		12月4日～12月23日	〃	第8節
第10次	光町2丁目17	621		昭和37年 2月1日～3月12日	〃	第9節

〔注　記〕

1　八尾市役所『八尾市史』1958年

2　八尾市教育委員会『昭和51・52年度埋蔵文化財発掘調査年報』1977年

3　中田遺跡調査会『中田遺跡調査概要』1973年

4　八尾市教育委員会「東弓削遺跡」『八尾市文化財調査報告3』1975年

5　大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター『山賀遺跡現地説明会資料1』1981年

6　中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡』1971年

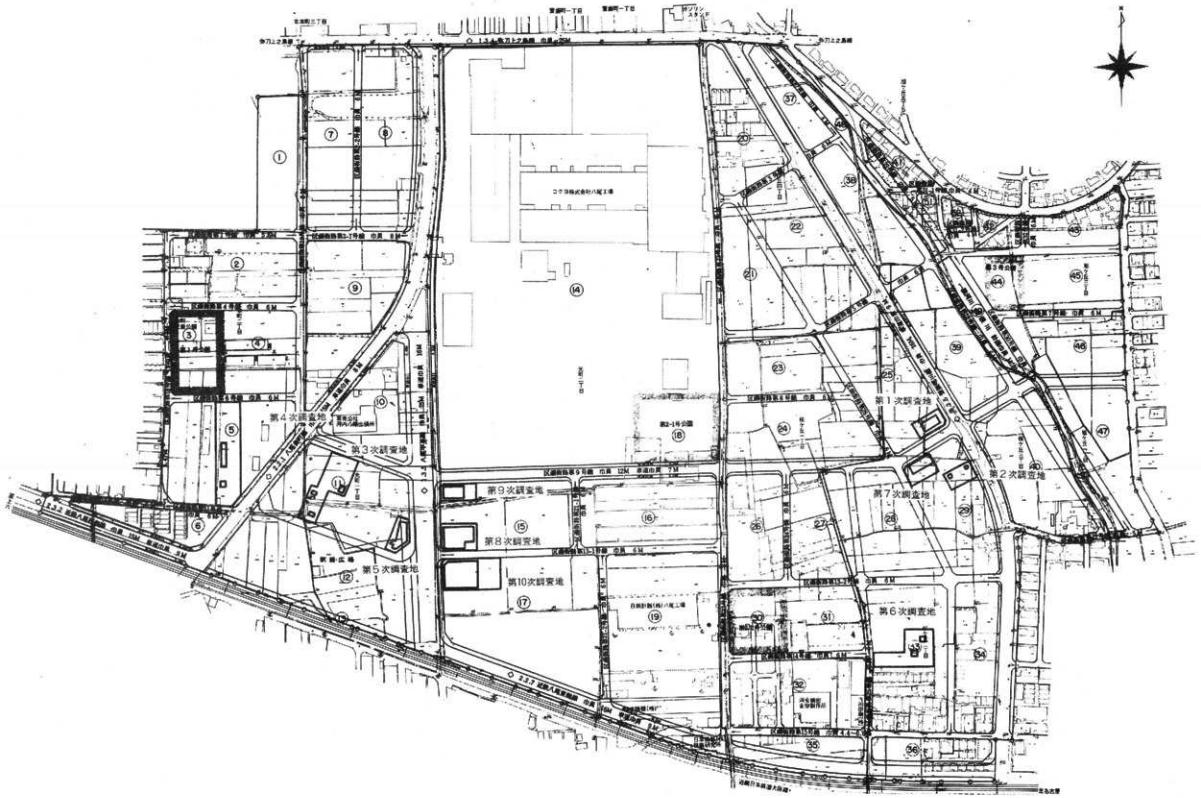

第4次調査地
第3次調査地
第9次調査地
第8次調査地
第10次調査地
第5次調査地
第1次調査地
第7次調査地
第2次調査地
第6次調査地

図1　調査地概要図

第２節　第２次調査

Ⅰ　調査の概要

調査地は八尾市桜ヶ丘3丁目に所在し、第１次調査地の南方50ｍに位置する。調査は個人住宅の建築工事に伴なって実施したもので、350㎡の敷地に3×3ｍの調査区を２ヶ所設定した。調査の結果、西側の調査区から古墳時代と平安時代の遺構を検出したが、東側の調査区では後世の撹乱が著しく、遺構の検出はできなかった。ここでは西側調査区の概要を記す。

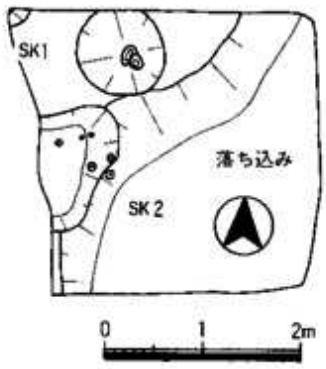


図２　平面図

Ⅱ　検出遺構

検出した遺構は古墳時代の土坑、平安時代の落ち込みである。これらは、旧耕土下50cmの黄褐色シルト粘土をベースにしており、上面に被る約40cmの包含層を取り除いたところで検出した。

ＳＫ１

径90cm・深さ30cmの円形の平面を呈する土坑で、断面はすり鉢状である。埋土内より若干の須恵器片と土師器片が出土している。

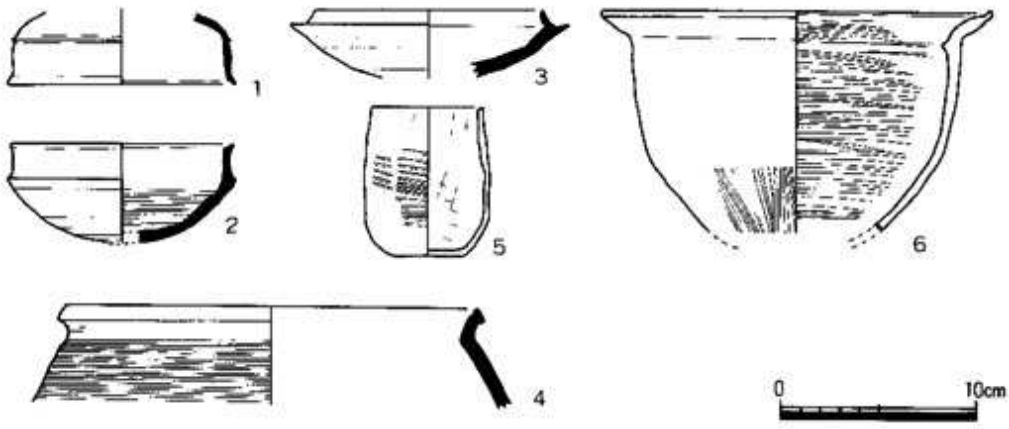


図３　出土遺物実測図

ＳＫ２

幅120cm・深さ34cmを測る土坑であるが、一部を検出しただけである。埋土には木炭が多くみられ、須恵器片や土師器片の他、製塩土器が出土している。

落ち込み

調査区東半は西側より30cmほど落ち込んでおり、ここから瓦や宋銭等が出土している。

〔注　記〕

1　八尾市教育委員会『八尾南遺跡・東郷遺跡発掘調査概要』1981年

Ⅲ　出土遺物観察表

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
1	蓋杯(蓋) SK 2	口径 11.6	丸味を持った天井部より稜をなし、垂直におりる口縁部に至る。口縁端部は外折し、内側に段を有する。	天井部欠損。天井部より口縁部までは内外面とも回転ナデ	色調　暗灰色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　良好 天井部に灰付着。 須恵器
2	蓋杯(身) SK 2	口径 11.5	丸味を持つ深い杯底部より鋭い稜をなして垂直に立ち上り口縁部に至る。口縁端部は内傾する。	外面　杯底部は回転ヘラケズリ、口縁部までは回転ナデ 内面　杯底部は回転ナデ	色調　濃灰色 胎土　緻密 焼成　良好 口縁部外面に灰付着。 須恵器
3	壺杯(身) SK 2	口径 11.6	低平な杯底部より上外方へのびる受部を有し、内傾して立ち上る短かい口縁部を持つ。	外面　杯底部は全面回転ヘラケズリ。他は回転ナデ 内面　回転ナデ	色調　淡灰色 胎土　微砂粒を多く含む。 焼成　良好 杯底部外面に灰付着。 須恵器
4	壺 SK 2	口径 21.0	ふくらんだ胴部より屈曲して外反する短かい口縁を持つ。口縁端部は内傾する平坦面を有する。	外面　胴部は回転カキ目調整、口縁部は回転ナデ 内面　回転ナデ	色調　乳灰色 胎土　緻密 焼成　やや不良 須恵器
5	製塩土器 SK 2	口径 5.6	平たい底部より丸みを持って立ち上がり内湾ぎみに口縁部に至る。	外面　横方向の平行叩き目がわずかに認められる。 内面　底部付近横方向のナデ、他は縦方向ナデで口縁付近に絞り目が認められる。	色調　淡灰褐色 胎土　石英・長石・花崗岩の砂礫を多く含む。 焼成　やや良
6	製塩土器 SK 2	口径 19.9	丸く深い体部より屈曲して外反する口縁部を有する。口縁端部はわずかに上に肥厚する。	外面　体部下半縦方向ハケ、他はナデ 内面　横方向ハケナデ	色調　淡褐色 胎土　長石・石英・雲母の他チャートを含む。雲母は多い。 焼成　良好

第3節　第3次調査

I　調査の概要

調査地は八尾市光町1丁目に所在し、当遺跡推定範囲の中央部に位置する。調査地に3ヶ所のトレンチを設定し、調査を実施した。各トレンチは南側より第1トレンチ(4×5m)、第2トレンチ(4×5m)、第3トレンチ(4×6m)と付称し、順次調査を行なった。調査面積は延べ64㎡、調査期間は昭和56年4月13日から4月15日までである。

調査方法は現地表(OP+9.20m)から盛土・旧耕土・床土までを機械掘削し、以下は人力掘削によった。最終的に層序を確認するために、幅および深さ1mの小トレンチを機械掘削し、調査を終了した。

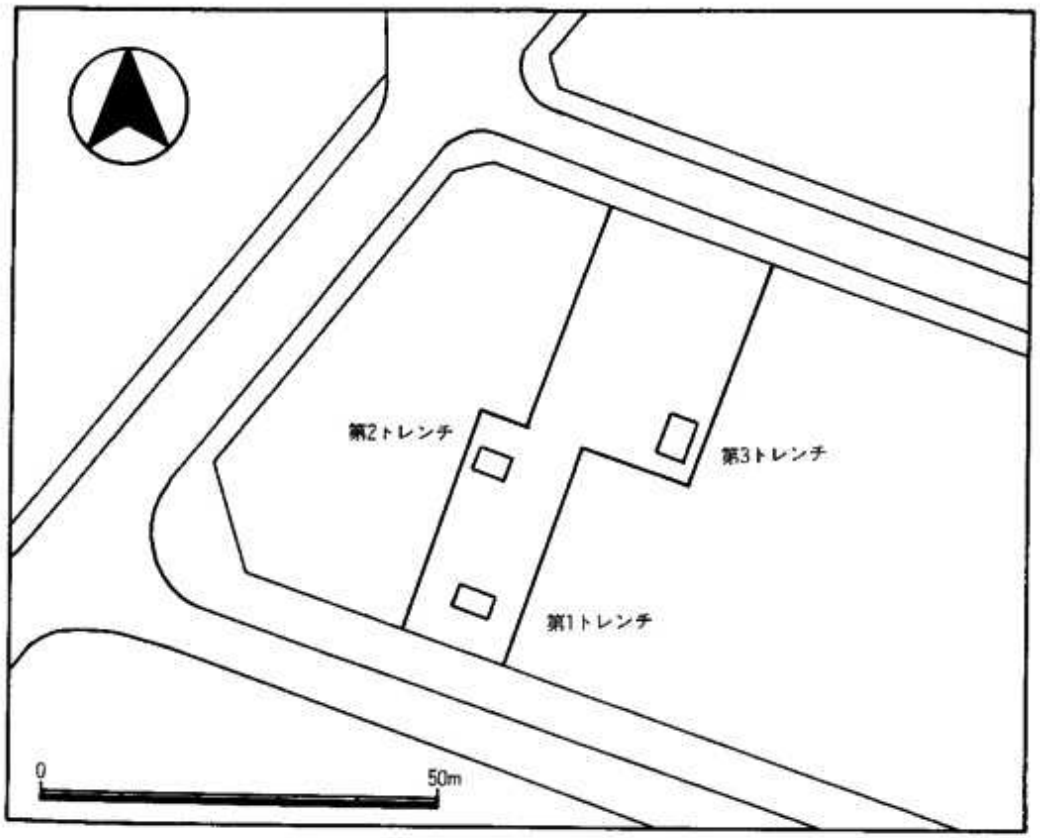


図4　調査地設定図

II 層序

盛土を除去すると第1層旧耕土、第2層青灰色粗砂土(床土)、第3層暗茶灰褐色粗砂土、第5層灰青色微砂土、第6層暗茶灰色粘土、第7層暗灰色粘土、第8層青灰色粘土、第9層灰色粘土、第10層淡灰青色粘土の基本層序である。

このうち第3層～第5層は中世以降に堆積した土層で、第6層上面が水田面である。その下の第7層～第10層が古墳時代前期頃までの沼沢地と思われる。

III 遺構・遺物

1) 中世の水田

全トレンチにわたって検出した第6層暗茶灰色粘土の上面は、畦畔や足跡を伴なう中世の水田遺構である。

畦畔は東西方向のもの2本を検出した。第2トレンチ南西隅のものは幅30cm以上・高さ10cmで、第3トレンチ南側のものは幅60cm・高さ10cmを測る。畦畔は暗灰褐色粘土で、水田の土層とほぼ同質である。

水田面や畦畔に、灰青色シルトを堆積する径5～30cmの円形・楕円形等の凹みを検出したが、これは足跡と思われる。

水田を被覆する茶褐色砂土層より、中世遺物を含む小片がわずかに出土した(図5)。

図5 水田出土遺物

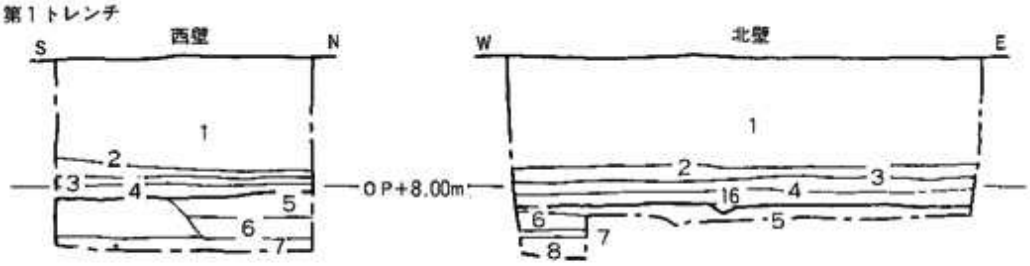
2) 沼沢地

水田址の下層は、堆積状況から沼沢地であると推定される。堆積土は第7層暗灰色粘土・第8層青灰色粘土・第9層灰黒色粘土・第10層淡灰青色粘土等からなり、非常に粘性の高いものである。このうち、第3トレンチの第7層からは、弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物が多量に出土した。

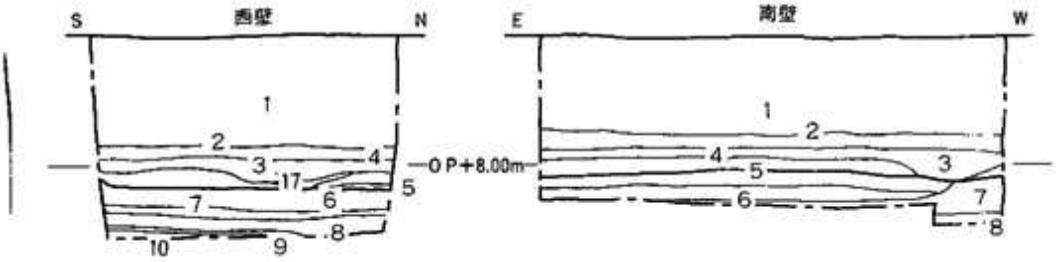
出土遺物の器種には、壺(1～3)・甕(4～17)・小型鉢(19～21)・小型丸底壺(22)・小型器台(23)・器台(24)・高杯(25)がある。甕にはV様式タイプのもの、庄内式のもの、布留式のもの等が混在しており、搬入品である山陰系の器台(24)も含まれている。

これらは小片で出土したものが多く、周辺より流れ込んだものと思われ、遺物全体を通じて時期差を認めるものである。

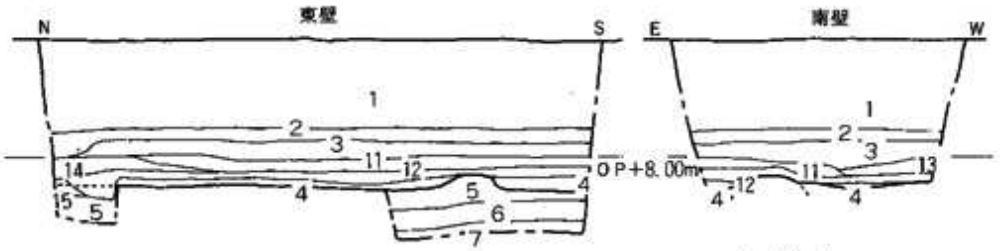
第1トレンチ



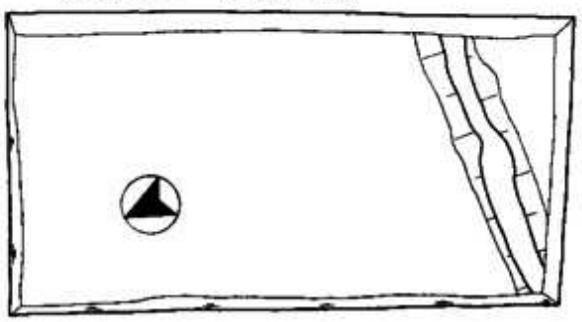
第2トレンチ



第3トレンチ



第3トレンチ　水田畦畔平面図



1．盛　土
2．旧耕土
3．青灰色砂混じり粘土
4．淡青灰色細砂土
5．茶灰褐色粘土
6．灰茶褐色粘土
7．灰黒色粘土
8．青灰色粘土
9．灰黒色粘土
10．淡灰青色粘土
11．暗茶灰褐色粗砂土
12．黄茶褐色細砂土
13．淡灰青色細砂土
14．灰緑色シルト
15．灰緑色砂粘土
16．淡灰色細砂土
17．淡灰色粗砂土

図6平断面図

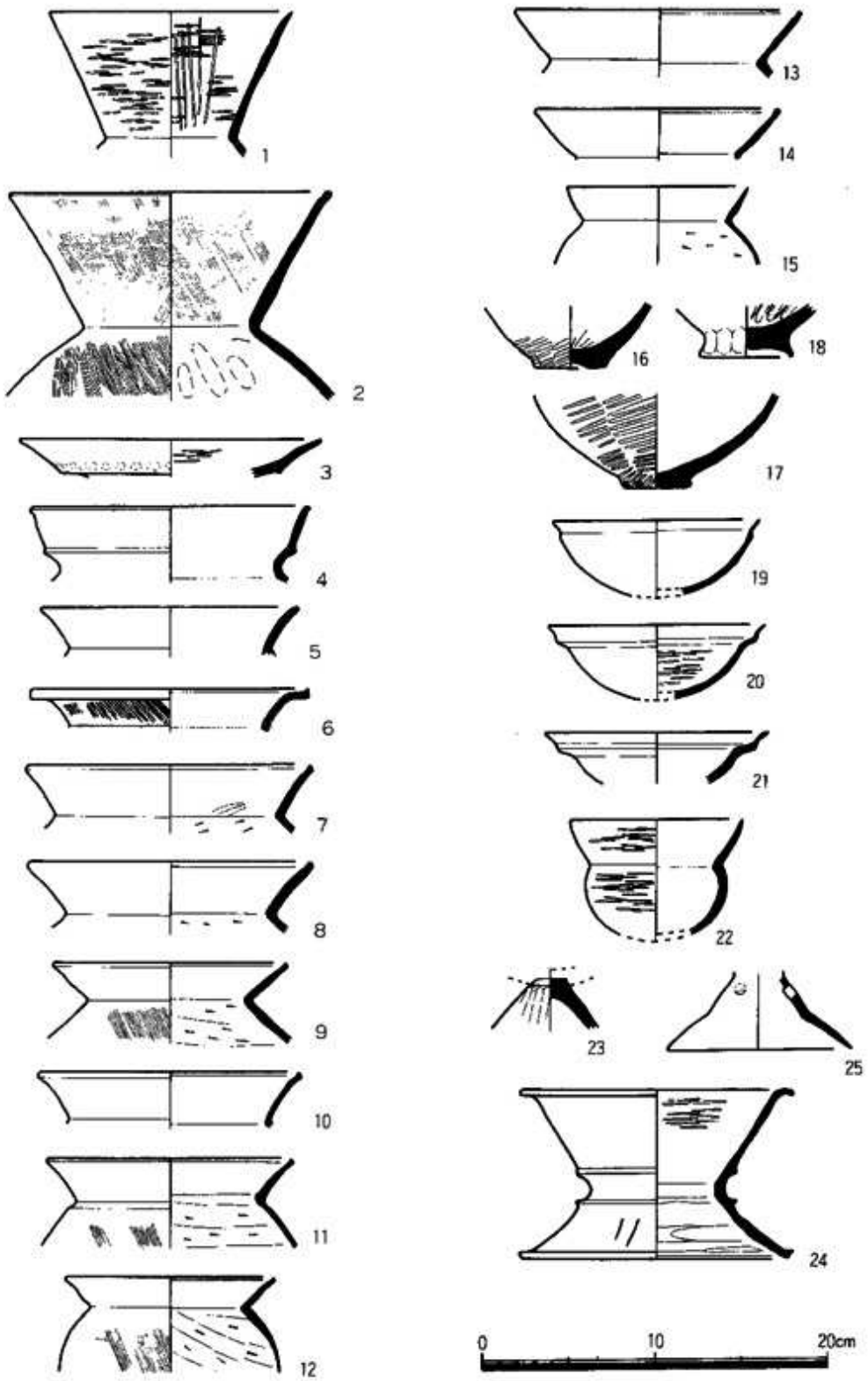


図7　出土遺物実測図

Ⅳ　出土遺物観察表

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
1	壺 沼沢地	口径 14.0	「く」の字形に屈折し、直線的に長くのびる口縁部のみ遺存。端部は薄く尖る。	外面　ヘラミガキを施す。 内面　ヘラミガキのあと縦方向に暗文を施す。	色調　淡黄褐色 胎土　1.0mm程度の長石・石英を含む。 焼成　良好
2	壺 沼沢地	口径 18.3	「く」の字形に屈曲し、直線的に長くのびる口縁部である。端部は丸く終わる。	外面　7条/10.0mのハケのあと口縁端部をヨコナデする。 内面　口縁部は外面と同じ。 口縁部と胴部の接合部にナデ。	色調　淡茶褐色 胎土　1.0mm～2.0mm程度の石英・長石を含む。 焼成　良好
3	壺 沼沢地	口径 17.3	複合口縁の壺であろう。屈折部外面には鋭い稜をつくり、端部は尖りぎみに終わる。 複合口縁部下方に円形浮文を貼付した痕跡がみられる。	外面　摩耗を受け不明。 内面　ヘラミガキを施す。	色調　淡灰褐色 胎土　微粒のくさり礫を含む。 焼成　良好
4	壺 沼沢地	口径 15.8	複合口縁の壺であろう。体部より丸く屈曲した後、外面に丸みのある稜をつくって外傾する複合口縁部に至る。端部は丸く終わる。	外面 内面　摩耗を受け不明	色調　淡灰褐色 胎土　1.0mm程度の石英・長石を含む。 焼成　良好
5	壺 沼沢地	口径 14.9	体部より屈曲して外反する口縁部のみ遺存。端部は丸く終わる。	外面 内面　ヨコナデ	色調　茶褐色 胎土　2.0mm程度の石英を含む。 焼成　良好
6	壺 沼沢地	口径 16.0	体部より「く」の字形に屈曲し、外反する口縁部のみ遺存。端部はつまみ上げ、わずかに外傾する平坦面となる。	外面　4条/10.0mmのタタキと思われる。 内面　ヨコナデを行う。	色調　茶褐色 胎土　微粒の角閃石を多く含む。 焼成　良好
7	壺 沼沢地	口径 16.3	体部より「く」の字形に屈折し、外傾する口縁部のみ遺存。端部は上方へ丸くつまみ、外傾する平坦面となる。	外面　口縁部をヨコナデする。 内面　口縁部はハケのあとヨコナデする。ハケは3条/3.5mmを測る。胴部にヘラケズリがみられる。	色調　茶褐色 胎土　微粒の角閃石を多く含む。 焼成　良好
8	壺 沼沢地	口径 16.2	7と同様であるが、端部は丸く終わる。	外面　口縁部をヨコナデする。 内面　口縁部をヨコナデし、胴部にヘラケズリがみられる。	色調　茶褐色 胎土　微粒の角閃石を多く含む。 焼成　良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
9	甕 沼沢地	口径 13.4	体部より屈曲し、外反する口縁部のみ遺存。上位でさらに外反ぎみとなり、端部は鋭くつまみ上げ、外傾する平坦面となる。	外面 口縁部をヨコナデし、接合部に8条/10.0mmのハケを施す。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部にヘラケズリがみられる。	色調 茶褐色 胎土 角閃石を多く含む。 焼成 良好
10	甕 沼沢地	口径 15.0	「く」の字形に屈曲し外反する口縁部で、先細となる。端部はつまみ上げ、外傾する平坦面となる。	外面 内面 } 磨耗を受け不明	色調 淡茶灰色 胎土 微粒の長石を多く含む。 焼成 良好
11	甕 沼沢地	口径 14.0	「く」の字形に丸く屈曲し、外反する口縁部に至る。端部はわずかにつまみ上げる。 体部の張りは弱いようである。	外面 口縁部をヨコナデし、接合部は強いヨコナデする。胴部に8条/7.0mmのハケを施す。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部にヘラケズリがみられる。	色調 淡茶灰色 胎土 長石・石英を多く含む。 焼成 良好
12	甕 沼沢地	口径 12.0	「く」の字形に屈曲し外傾する口縁部で、先細となる。端部は上方へつまみ、丸く終わる。	外面 胴部に12条/9.0mmのハケを施す。 内面 ヘラケズリがみられる。	色調 淡茶灰色 胎土 2.0mm程度の石英・微粒の長石を含む。 焼成 良好
13	甕 沼沢地	口径 16.4	「く」の字形に鋭く屈折し、わずかに内湾ぎみにのびる口縁部のみ遺存。端部は内に丸く肥厚し、外傾する平坦面となる。	外面 内面 } 磨耗をうけ不明	色調 淡灰色 胎土 微粒の雲母を多く含む。 焼成 良好
14	甕 沼沢地	口径 14.0	13と同様の甕の口縁部である。	外面 内面 } ヨコナデ	色調 淡茶褐色 胎土 微粒の長石・雲母を含む。 焼成 良好
15	甕 沼沢地	口径 10.5	「く」の字形近くに屈曲し、直線的にのびる口縁部で、端部は尖がりぎみに終わる。	外面 内面 } 胴部内面にヘラケズリがみられるが、磨耗を受け不明瞭	色調 淡茶褐色 胎土 0.5mm程度の石英を含む。 焼成 良好
16	甕 沼沢地	底径 4.2	ドーナツ状の底部である。	外面 4条/17.0mmのタタキを施す。 内面 ヘラ状体による押圧がみられる。	色調 淡茶灰色 胎土 2.0~4.0mm程度の石英・チャートを含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
17	壺 沼沢地	底径 3.9	突出する平底で、中央がわずかに凹む。	外面 7条/19.0mmのタタキを施す。 内面 ヘラナデを行なう。	色調 淡茶灰色 胎土 0.5~2.0mm程度の石英・長石を含む。 焼成 良好
18	鉢？ 沼沢地	底径 5.5	高台状に突出する鉢の底部であろう。胴端部は薄く、尖りぎみに終わる。	外面 接合部に指圧痕がみられる。 内面 ヘラミがキを施し底部はナデ。	色調 淡茶灰色 胎土 4.0mm程度のチャート・石英を含む。 焼成 良好
19	小型鉢 沼沢地	口径 12.0	半球形の体部から屈曲した後、内弯ぎみにのびる口縁部に至る。縁部は尖りぎみに終わる。	外面 内面 } 磨耗を受け不明	色調 淡茶灰色 胎土 くさり礫を多く含む。 焼成 良好
20	小型鉢 沼沢地	口径 12.7	半球形の体部から2段に屈曲する。口縁部は外反し、端部は尖りぎみに終わる。	外面 内面 } 磨耗を受け不明	色調 淡茶褐色 胎土 くさり礫を多く含む。 焼成 良好
21	小型鉢 沼沢地	口径 13.0	20と同様の鉢であるが、器肉は厚く、体部は浅い。	外面 内面 } 磨耗を受け不明	色調 淡灰茶色 胎土 微粒の砂石を含む。 焼成 良好
22	小型丸底壺 沼沢地	口径 9.9 最大径 8.3	体部から屈曲し、内弯ぎみにのびる口縁部に至る。端部は薄くなり、尖って終わる。	外面 口縁部・体部ともにヘラミがキを施す。 内面 磨耗を受け不明。	色調 淡茶灰色 胎土 くさり礫を多く含む。 焼成 良好
23	小型器台 沼沢地		偏平状に開く脚部上方のみ遺存。	外面 ヘラケズリがみられる。 内面 ナデを行なう。	色調 淡灰褐色 胎土 わずかに0.5mm程度の石英、長石を含む。 焼成 良好
24	器台 沼沢地	口径 15.4 底径 15.4 器高 9.8	基部から上下に外反する整形器台である。口縁部は丸く外反し、端部は丸く終わる。脚端部はつまみ上げ、内側する平坦面をつくる。 基部の上下には凸帯が1条ずつ巡る。脚部外面にはヘラ描きの記号文が認められる。	外面 磨耗を受け不明。 内面 受部をヘラミがキし、脚部はヘラケズリである。	色調 淡赤灰色 胎土 微粒の角閃石・くさり礫を含む。 焼成 良好
25	器台 沼沢地	底径 10.6	内弯ぎみに2段に開く脚部のみ遺存	外面 内面 } 磨耗を受け不明	色調 淡茶褐色 胎土 微粒のくさり礫を含む。 焼成 良好

第4節　第4次調査

I　調査の概要

調査地は八尾市北本町2丁目に所在し、第3次調査地の西方約150mの地点である。調査地の中央に5×20mのトレンチを設定し、南側に5×5mのグリッドを設定した。トレンチの南半分を第1調査区、北半分を第2調査区、グリットを第3調査区と付称し、順次調査を進めた。調査面積は延べ125㎡、調査期間は昭和56年5月13日～5月26日である。

調査方法は、現地表(ＯＰ＋9.9m)から盛土・旧耕土・床土までを機械掘削し、以下については手掘りによって調査を実施した。

II　層序

盛土1.6mを除去すると第1層旧耕土、第2層床土、第3層灰褐色粘土、第4層灰色微砂土、第5層赤褐色粘土、第6層暗灰色粘土、第7層黄褐色粘土～灰褐色粘土、第8層淡黄灰色粘土、

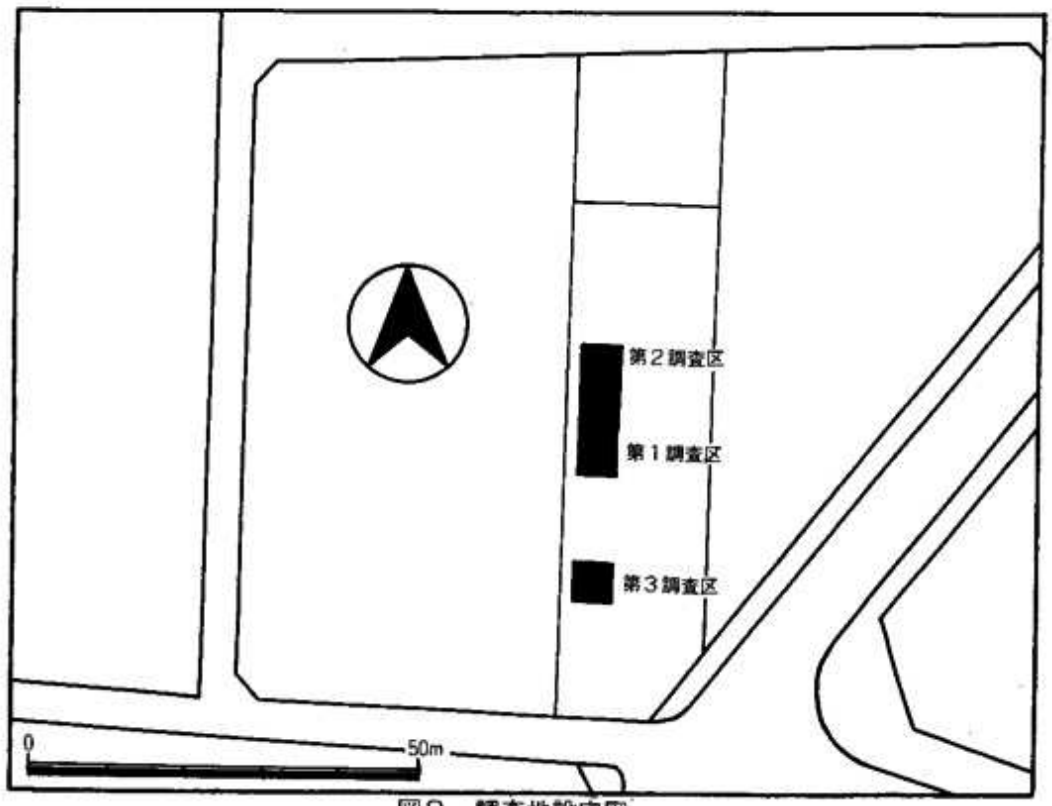


図8　調査地設定図

第9層淡灰色粘土、第10層灰色シルト、第11層灰色細砂土の基本層である。

このうち第5層上面は、第3次調査地と同じく中世の時期の水田面と思われ、第1遺構面とした。第6層は遺物包含層、第7層・第8層が古墳時代前期(庄内式の時期)の遺構面と考えられ、それぞれ第2遺構面・第3遺構面とした。

第1遺構面である水田址は全調査区で認めることができた。第2・第3遺構面については第1・第2調査区で井戸や土坑等を検出したが、第3調査区では第2遺構面とほぼ同レベルで、第3次調査地で検出した沼沢地と同じ土層を検出したため、沼沢地の西への拡がりが確認できた。

以下は堆積状況から、自然河川の堆積土層と考えられる。

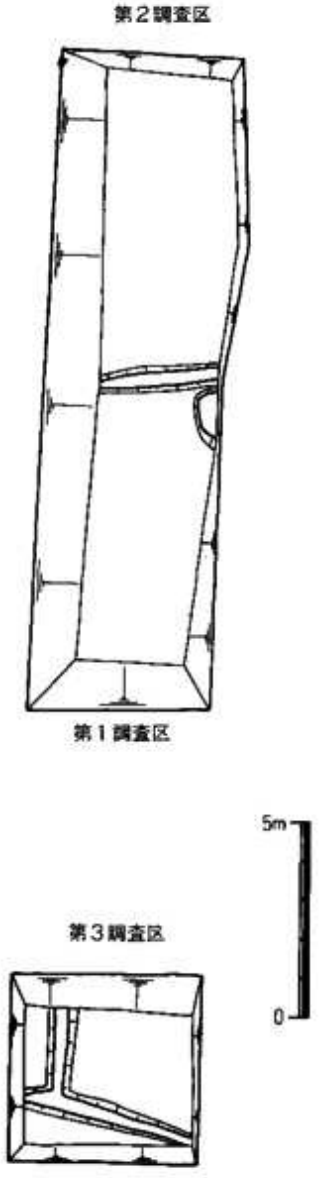


図9　水田遺構平面図

III　遺構・遺物

1）第1遺構面(水田)

水田面はOP+7.6mを測り、現地表下約2mである。水田や畦畔の上面には、足跡状の凹みが認められる。

第1調査区の北壁近くでは東西に延びる畦畔と、この畦畔の東側から南へ延びる畦畔を検出した。ともに幅60cm以上・高さ15cmを測り、上面には足跡状の窪みがみられる。これらの接合部には幅40cm・深さ15cmの溝状の切り込みがあり、水口ではないかと考えられる。また、第3調査区では東西方向の畦畔と、この畦畔の西側から北へ延びる畦畔を検出した。ともに幅40～70cm・高さは15cmを測る。

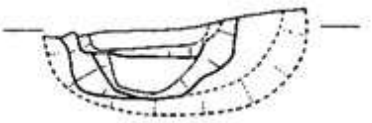
水田面上の第4層灰色微砂土は、河川の氾濫などによって運ばれた土であると考えられ、層内には土師質土器の細片をわずかに含んでいる。また、第3次調査地で検出した水田址にも近接することから、水田の時期は中世に比定できる。

2）第2遺構面

SK1

第2調査地の南東部で検出し、東側は調査区外へ至る。検

出部の平面は長辺2.2m・短辺1.1mの隅丸方形を呈する。埋土は暗茶褐色砂混じり粘土1層である。

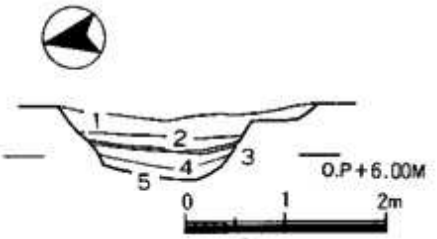


SE1

第1・第2調査区間の西壁で検出し、西側は調査区外に至る。径1.6m・深さ0.9mを測る素掘りの井戸で、断面は上部から約30cmの所に段を持つ。

埋土は上方から暗灰茶色砂粘土、暗灰色粘土、淡灰色粘土、暗灰色粘土、黒灰色粘土がほぼ水平に堆積し、最下層は黒灰色粘土と灰色粘土のブロック層である。

遺物は壺(1)、小型器台(2)等が出土したが、いずれも磨耗をうけた細片である。



1.暗灰茶色砂粘土層
2.暗灰色粘土層
3.淡灰色粘土層
4.暗灰色粘土層
5.暗灰色粘土と灰色粘土のブロック層

図10　SE1平断面図

SD1

第1・第2調査区間西側で検出した。幅40～70cm・深さ10cmを測り、北へ延びる溝である。埋土は暗灰色粘土1層である。遺物は出土しなかった。

3）第3遺構面

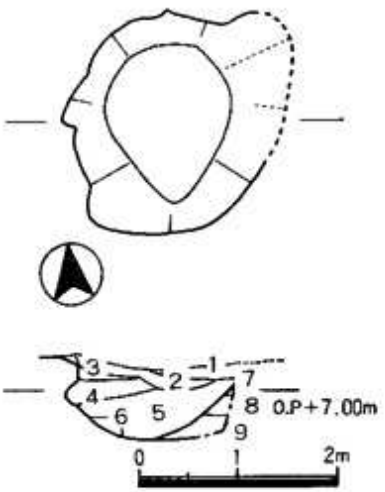
SE2

第1・第2調査区間の東壁近くで検出した素掘りの井戸である。径約1.2m・深さ0.9mを測り、平面は楕円形に近い。断面はU字形を呈するが、中央部はわずかに抉れており、滞水面を示すものと考えられる。

また、北西側の肩には幅約30cm・深さ約10cmを測り、北西へ延びる小溝を有している。

埋土は上方から灰色細砂土、灰色粘土、淡灰色細砂土、淡灰色粘土と暗灰色粘土のブロック層、灰青色シルト粘土が堆積している。

遺物は壺(3・11)、甕(4～10・12)、高杯(13)等が



1.灰褐色粘土層
2.灰色細砂土層
3.灰色粘土層
4.淡灰色細砂層
5.淡灰色粘土と暗灰色粘土のブロック層
6.灰緑色粘土層
7.灰色微砂土層
8.灰青色シルト層
9.灰色粗砂土層

図11　SE2平断面図

出土した。

(3)は口縁部内外面に鋸歯文を施す複合口縁甕で、西部瀬戸内地方の影響をうけるものかと思われる。奈良県纒向遺跡①から、同様のものが出土している。

甕は8点が出土したが、このうち(4)の口縁部は直立するもので、船橋遺跡や纒向遺跡出土の甕に類例がみられる。他の甕が暗茶褐色～茶褐色の色調であるのに対し、(5)②は淡褐白色③を呈する。また、胎土についても、他の遺物に普遍的にみられる角閃石は、肉眼では観察できない。(6)の口縁部は、外傾した後、端部近くで内弯している。タタキは河内地方に多い右上がりではなく、左上がりである。(7～10・12)は河内地方に一般的な庄内甕である。底部についてみると、(7・12)のどちらもわずかに平底を残している。

(13)は杯部が2段に屈曲する高杯である。

SE3

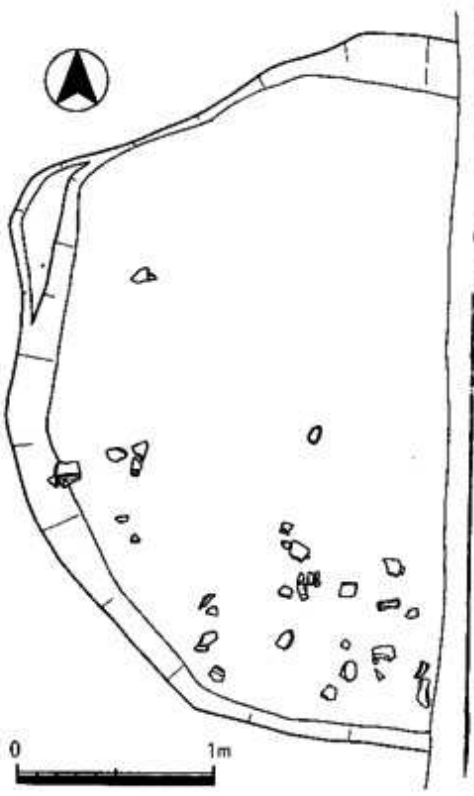


図12　SE3 上層平面図

第2調査区の北東部で検出し、東側の一部は調査区外に至る。上面径3mと大型であるがそれに対し深さ0.9mと浅いため、井戸とは考えにくいが、底部が砂礫層に達し多量の湧水がみられたことから、井戸遺構とした。

埋土は上方から第1層暗茶褐色粘土、第2層黒茶褐色粘土(炭・灰を含む)、第3層黒褐色土(炭化層)、第4層暗灰色粘土と黄灰色粘土のブロック層、第5層暗灰色粘土、第6層暗灰色粘土と灰青色粘土のブロック層が堆積している。第4層から第6層までは、人為的に埋められたと思われる土層である。

第4層の上面には、幅20～35cm・深さ15cmの南北に延びる溝が認められたが、人為的に構築されたものか、自然の流れ込みであるかは不明である。さらに、この溝状遺構が埋まった後に、灰や炭等を含む土層が堆積しており、遺物もここから多量に出土した。

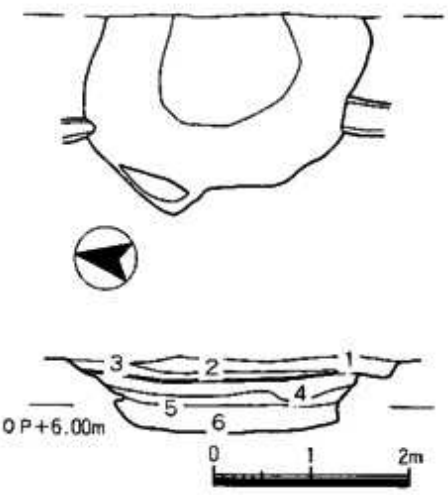
時期的には、上層(第1層～第3層)は第2遺構面ＳＫ1・ＳＥ1と同時期と思われ、中層(第4層)・下層(第5層・第6層)は第3遺構面ＳＫ2と同時期どあると思われる。

遺物は上層から木製品(図18－1～4)、第4層中から壺(14)および甕、第4層を薄く被覆する炭化層(第3層)から砥石(図14)の他多量の土器が出土した。

上層から出土した土器の器種には壺(16・17)、甕(18～21)、鉢(22)高杯(23)等がある。このうち高杯の内面には、赤色顔料が塗布されている。

木製品は杭の子(図18－1～3)と、用途不明の板材(図18－4)が出土した。

(1)は直径9cm・長さ約10cmの円柱形である。円柱の両端には粗い面取りが行なわれ、中央部にはV字形の浅い溝が掘り込まれており、部分的に炭化している。



1.暗茶褐色粘土層
2.黒茶褐色粘土層
3.黒灰色土層
4.暗灰色粘土と黄灰色粘のブロック層
5.暗灰色粘土層
6.暗灰色粘土と灰青色粘土のブロック層

図13　SE3下層平断面図

(2)の直径は約7cmで、形状は(1)とほぼ同様であるが、中央部の溝はやや深めである。

(3)は径7～9cmを測り、扁平な円柱形を呈する。円柱の内部は空洞であるが、人為的に刳り抜かれたものかは明確ではない。端部は前述の(1・2)同様粗い面取りが行なわれているが、中央部に溝はなく、工具痕が一周するのみである。これも(1)同様、火を受けて炭化する部分がある。

(4)は幅6～11cm・長さ48cm以上を測る板材である。径 0.5～10cm程度の小孔が10ヶ所に穿たれ、そのうちの1つには目釘状のものが遺存している。またこれらの小孔の他にも径約 1.8cmの円形の孔があり、この周囲約 0.5cmの範囲をわずかに削り出している。

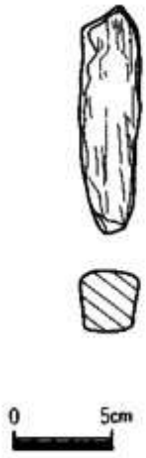


図14　砥石実測図

ピット

第1調査区の西隅でＳＰ1・ＳＰ2・ＳＰ3を、第2調査区の東壁近くではＳＰ4を検出した。

ＳＰ１～ＳＰ３は径30cm前後・深さ20cm前後を測り、ほぼ１列に並ぶが、調査区内だけでは掘立柱建物の柱穴とは確認できなかった。出土物はＳＰ３から庄内甕の細片が出土した程度である。

ＳＰ４は約半分を検出しただけで詳細は不明であるが、検出径50cm・深さ40cmを測る。

〔注　記〕

1　橿原考古学研究所『纒向』1976年

2　大阪府教育委員会『船橋遺跡発掘調査概要』1980年

3　①前掲書

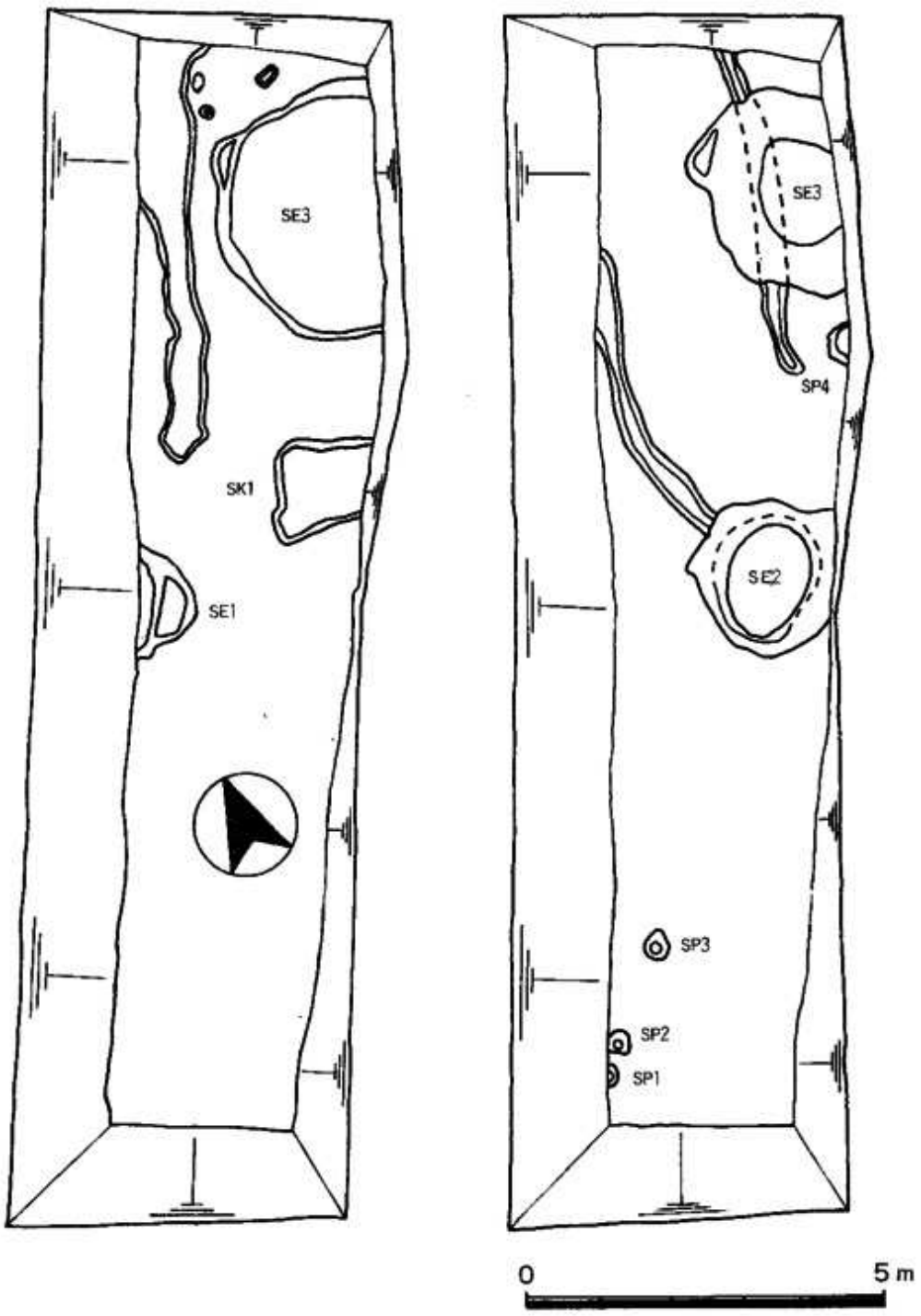
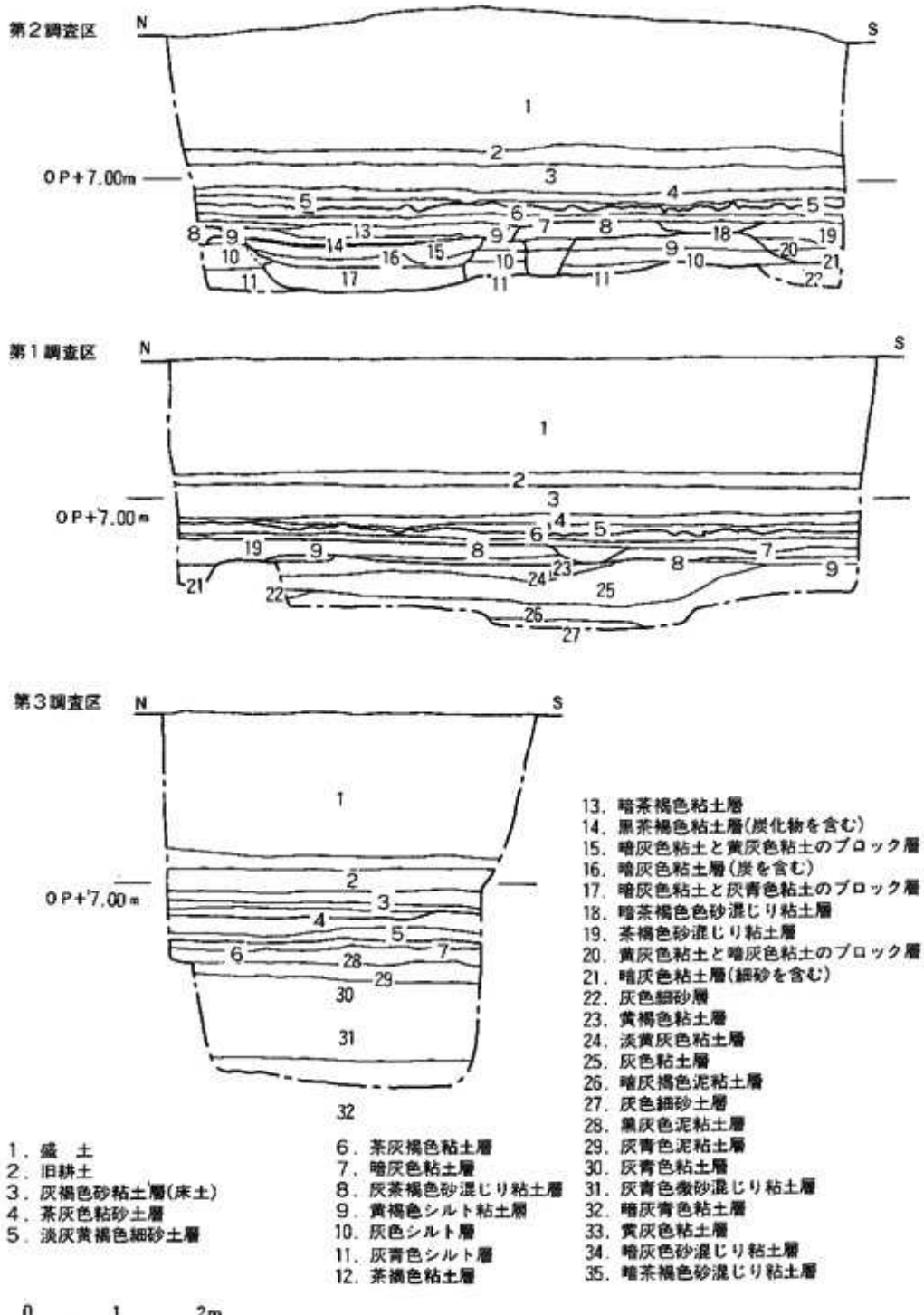


図15　第2・第3遺構面平面図



1．盛　土
2．旧耕土
3．灰褐色砂粘土層(床土)
4．茶灰色粘砂土層
5．淡灰黄褐色細砂土層
6．茶灰褐色粘土層
7．暗灰色粘土層
8．灰茶褐色砂混じり粘土層
9．黄褐色シルト粘土層
10．灰色シルト層
11．灰青色シルト層
12．茶褐色粘土層
13．暗茶褐色粘土層
14．黒茶褐色粘土層(炭化物を含む)
15．暗灰色粘土と黄灰色粘土のブロック層
16．暗灰色粘土層(炭を含む)
17．暗灰色粘土と灰青色粘土のブロック層
18．暗茶褐色色砂混じり粘土層
19．茶褐色砂混じり粘土層
20．黄灰色粘土と暗灰色粘土のブロック層
21．暗灰色粘土層(細砂を含む)
22．灰色細砂層
23．黄褐色粘土層
24．淡黄灰色粘土層
25．灰色粘土層
26．暗灰褐色泥粘土層
27．灰色細砂土層
28．黒灰色泥粘土層
29．灰青色泥粘土層
30．灰青色粘土層
31．灰青色微砂混じり粘土層
32．暗灰青色粘土層
33．黄灰色粘土層
34．暗灰色砂混じり粘土層
35．暗茶褐色砂混じり粘土層

図16　断面図

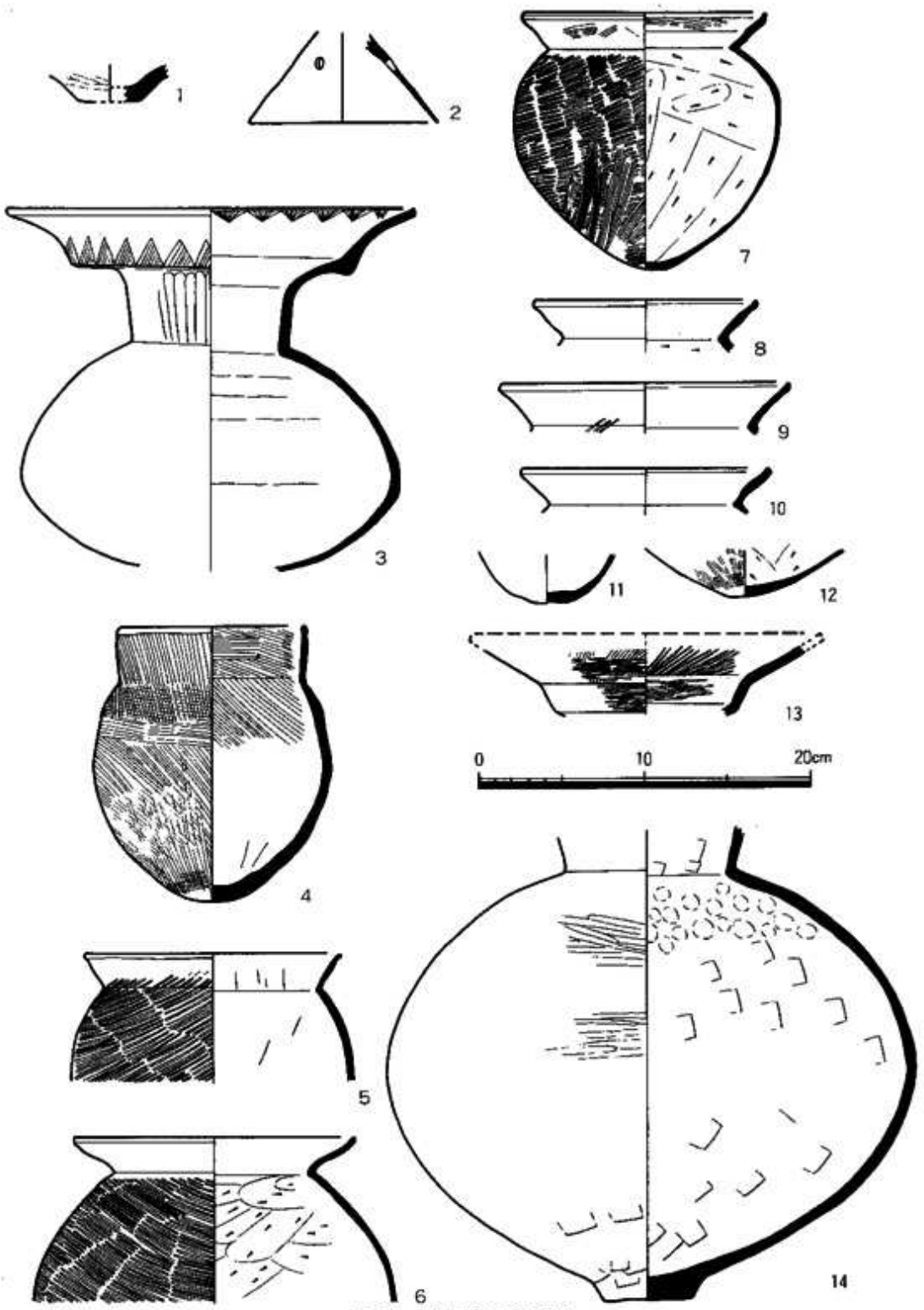


図17　出土遺物実測図

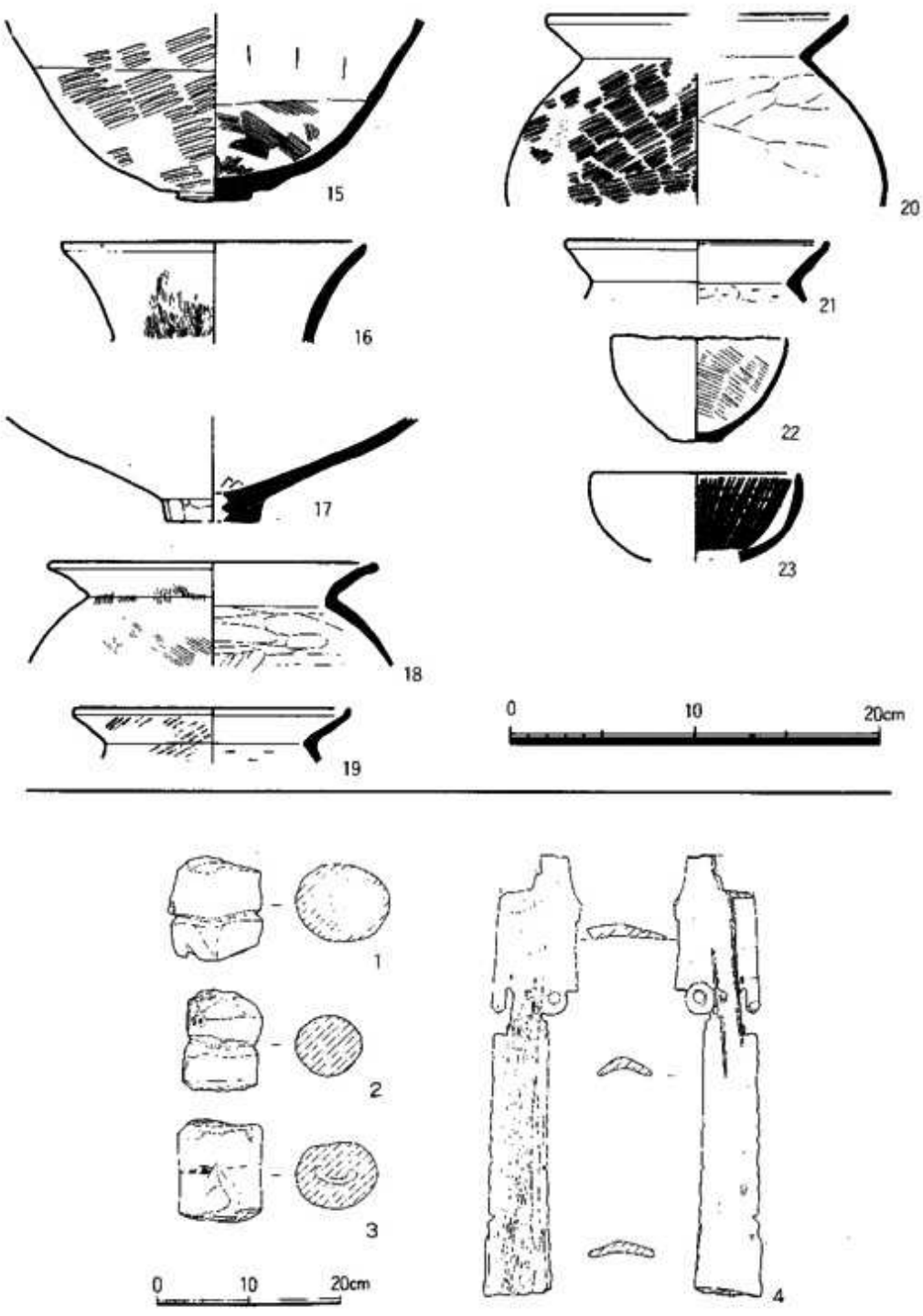


図18　SE3出土遺物実測図

Ⅳ　遺物観察表

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
1	壺 SE1	底径 11.2	わずかに平坦面を残す底部のみ遺存。	外面　ヘラミガキを施す。 内面　磨耗を受け不明。	色調　灰黒色 胎土　1.0~3.0mm程度の石英を多く含む。 焼成　良好
2	小型鉢か SE1	底径 11.3	湾外状に開く脚部である。 中位3方に円孔を穿つ。	外面 ：磨耗を受け不明 内面	色調　淡赤褐色 胎土　微粒の長石を多く含む。 焼成　良好
3	壺 SE2	口径 24.3 最大径 22.7	直立する頸部から外反し、屈曲して外反する複合口縁に至る。端部は上方へわずかにつまむ。体部は中位に最大径をもち、扁平な球形を呈する。 口縁部内外面に刺突文を巡らす。	外面　頸部にわずかにヘラミガキがみられる。 内面　磨耗を受け不明。	色調　淡赤褐色 胎土　微粒～3.0mm程度の石英を多く含む。 焼成　良好
4	壺 SE2	口径 11.2 最大径 器高 16.7	倒卵形の体部から屈曲し、直立する口縁部に至る。端部は外へ丸くつまむ。底部は若干の平坦面を残す。	外面　口縁部に5条/12.5mmのハケを施し、胴部は5条/17.0mmのハケを施す。 内面　口縁部に5条/12.5mmのハケを施す。胴部上方を5条/12.5mmのハケ、下方はナデをおこなう。	色調　茶褐色 胎土　微粒の角閃石・長石を含む。 焼成　良好
5	壺 SE2	口径 15.4	「く」の字形に屈曲し、面線的にのびる口縁部に至る。端部は丸くつまむ。体部の張りは弱い。	外面　口縁部をヨコナデし、胴部は6条/16.0mmのタタキを施す。口縁部下方にもタタキが残る。 内面　口縁部をヘラナデのあとヨコナデし、胴部はヘラナデをおこなう。	色調　淡褐色 胎土　チャート・石英・長を含む。 焼成　良好
6	壺 SE2	口径 16.9	「く」の字形に屈曲し、内湾ぎみにのびる口縁部に至る。端部は丸く終わる。体部の張りは強い。	外面　口縁部をヨコナデし、胴部は左上がりの5条/11.0mmを測るタタキを施す。 内面　口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリである。	色調　淡茶褐色 胎土　微粒の角閃石を多く含む。 焼成　良好
7	壺 SE2	口径 14.6 最大径 16.2 底径 1.6 器高 15.6	「く」の字形に鋭く屈折し、直線的にのびる口縁部に至る。端部は上方へつまみ、直立する平坦面をつくる。体部は上位に最大径がある倒卵形で、底部はわずかに平坦面を残す。	外面　口縁部を5条/7.5mmのハケのあとヨコナデし、胴部は7条/14.5mmのタタキのあと下方を散状に7条/8.5mmのハケを施す。 内面　4条/4.5mmのハケのあとヨコナデし、胴部をヘラケズりする。	色調　茶褐色 胎土　微粒の角閃石を多く含む。 焼成　良好
8	壺 SE2	口径 13.4	「く」の字形に鋭く屈折し、外反ぎみにのびる口縁部。端部は丸くつまみ上げ、直立する平坦面をつくる。	外面　ヨコナデする。 内面　口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズりする。	色調　暗茶褐色 胎土　微粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成　良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
9	甕 SE2	口径 17.3	「く」の字形に屈折し、外反してのびる口縁部に至る。端部は上方へ丸くつまみ、直立する平坦面となる。	外面 口縁部をヨコナデする。接合部にタタキがみられる。 内面 口縁部をヨコナデする。	色調 茶褐色 胎土 微粒の長石・角閃石を多く含む。 焼成 良好
10	甕 SE2	口径 14.7	「く」の字形に屈曲し、若干内弯ぎみにのびる口縁部に至る。端部は上方へ丸くつまむ。	内外面ともにヨコナデをおこなう。	色調 淡茶褐色 胎土 微粒～1.0㎜程度の角閃石を多く含む。
11	壺 SE2		中央がわずかに凹む底部のみ遺存。	全体に磨耗を受け不明。	色調 淡赤褐色 胎土 多量のくさり礫と微粒の長石を含む。 焼成 良好
12	甕 SE2		わずかに平坦面を残す底部のみ遺存。	外面 タタキのあとハケを施す。 内面 ヘラケズり。	色調 茶褐色 胎土 角閃石 2.0㎜程度の石英を含む。 焼成 良好
13	高杯 SE2		杯部が2段に屈折する高杯と思われる。	外面 9条/12.5㎜のハケを施す。 内面 ヘラミガキを施す。	色調 淡赤褐色 胎土 微粒の長石を含む。 焼成 良好
14	壺 SE3中層	最大径 31.6 底径 5.5	体部より屈曲し、直立する頸部を有するが、端部を欠損する。体部は中位に最大径がある球形で、突出する平底を有する。	外面 上部にヘラミガキ、下部にヘラナデがみられる。 内面 接合部近くを粗ハケし、以下はヘラナデする。	色調 茶褐色 胎土 角閃石・石英・長石を含む。 焼成 良好
15	甕 SE3中層	底径 4.1	おしつぶしたような平底を有する。	外面 5条/21.0㎜のタタキを施す。 内面 底部近くは9条/11.0㎜のハケ。接合部より上方はハケのあとナデ。	色調 茶褐色 胎土 微粒～1.0㎜程度の角閃石、雲母を多く含む。 焼成 良好
16	甕 SE3上層	口径 16.3	体部から屈曲し、外反してのびる口縁部のみ遺存。端部は真立する平坦面をもつ。	外面 12条/13.5㎜のハケを施し、端部はヨコナデする。 内面 磨耗を受け不明。	色調 茶褐色 胎土 微粒～1.0㎜程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
17	甕 SE3上層	底径 5.0	突出した平底をもち、大きく開く体部下半が遺存する。	外面 底部にヘラによる整形をおこなう。 内面 ヘラ状体による押圧がみられる。	色調 淡褐色 胎土 角閃石、石英を含む。 焼成 良好
18	甕 SE3上層	口径 17.4	「く」の字形に丸みをもって屈曲し、外反する口縁部に至る。端部は丸くつまみ上げ、下方へも若干肥厚する。	外面 口縁部をハケのあとヨコナデし、胴部は8条/11.0mmのハケを施す。 内面 胴部をヘラケズりする。	色調 茶褐色 胎土 角閃石・長石を含む。 焼成 良好
19	甕 SE3上層	口径 14.8	「く」の字形に屈曲し、若干内寄ぎみにのびる口縁部に至る。端部はつまみ上げる。	外面 3条/7mmのタタキのあとヨコナデ。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部内面はヘラケズり。	色調 茶褐色 胎土 微粒～1.0 mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
20	甕 SE3上層	口径 16.2 最大径 20.6	「く」の字形に屈折し、直線的にのびる口縁部に至る。端部は上方へつまみ、直立する平坦面になる。体部中位に最大径をもつと考えられる。	外面 胴部に7条/13.5mmのタタキを施す。 内面 ヘラケズりである。	色調 茶褐色 胎土 微粒～1.0 mm程度の角閃石を含む。 焼成 良好
21	甕 SE3上層	口径 14.2	20と同様の口縁部である。	外面 磨耗を受け不明。 内面 胴部にヘラケズりを施す。	色調 茶褐色 胎土 微粒～1.0 mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
22	鉢 SE3上層	口径 9.5 底径 2.9 器高 5.8	深い椀形を呈する直口の鉢で、端部は不揃いに終わる。おしつぶしたような平底を有する。	外面 磨耗を受け不明 内面 9条/19.0mmのハケを施す。	色調 淡白褐色 胎土 微粒～1.5 mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
23	高杯 SE3上層	口径 11.1	椀形の杯部をもつ小型高杯と思われる。	外面 磨耗を受け不明。 内面 ヘラミガキのあと放射状に暗文状のヘラミガキを施す。	色調 赤褐色 胎土 微粒の長石・くさり礫を含む。 焼成 良好 杯部内面に赤色顔料を吸着する。

第5節　第5次調査

I　調査の概要

調査地は八尾市光町1丁目に所在し、第3次調査地の東方約60mに位置する。当初、全面発掘調査を行なうことを前提としたが、敷地面積が狭く機械掘削および人力掘削による土の搬出が困難なため、全体を4区画に分割して発掘調査を実施するに至った。調査は北より第1調査区(44㎡)、第2調査区(44㎡)、第3調査区(68㎡)、第4調査区(40㎡)とし、面積は延べ196㎡である。調査期間は昭和56年6月8日から7月7日までである。調査方法は、現地表(OP+8.9m)から盛土、旧耕土、床土までを機械掘削し、以下を人力掘削を行なった。

II　層序

盛土1mを除去すると第1層旧耕土、第2層床土、第3層灰茶褐色粘土、第4層暗茶灰色粘土、第5層黄灰褐色シルト、第6層淡灰色粘土が全調査区の基本層序である。

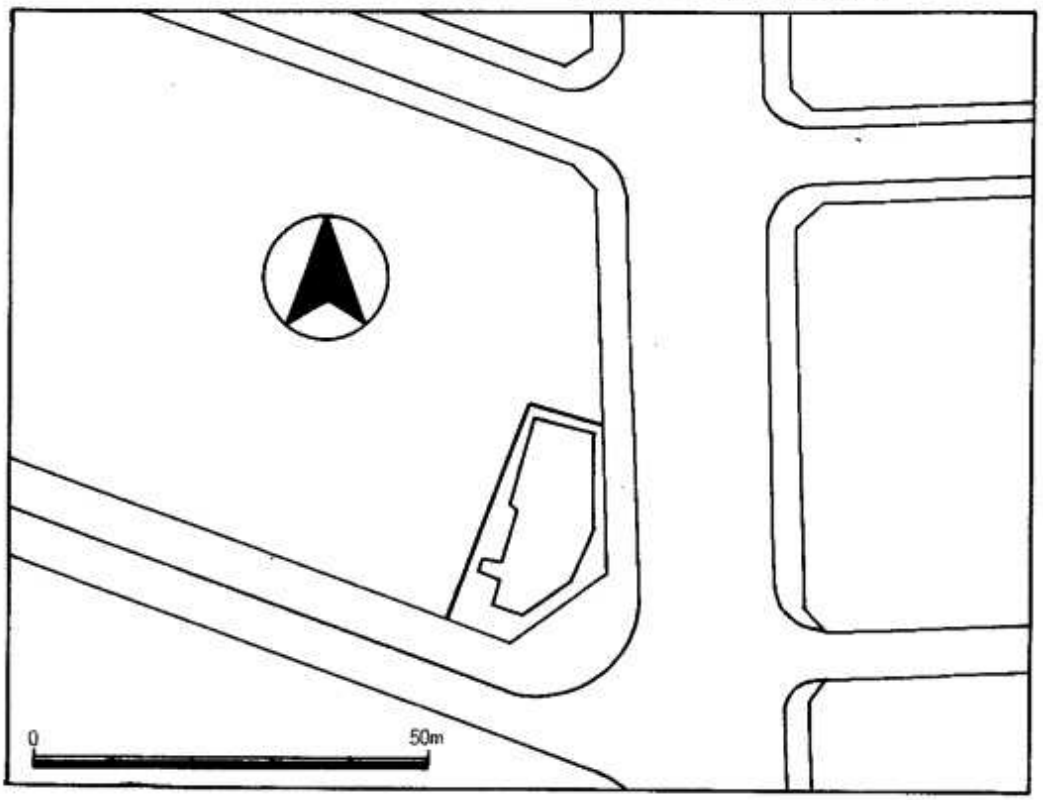


図19　調査地設定図

このうち、第3層上面が中世の水田址で、第4層は遺物包含層、その下の第5層上面が古墳時代前期(庄内式の時期～布留式の時期)の生活面である。検出した古墳時代前期の遺構は竪穴式住居・掘立柱建物・土壙・井戸・溝・ピット等で、遺物は特に井戸(ＳＥ５)・溝(ＳＤ９)から多量に出土した。なお中世の水田址は断面観察のみにとどめた。

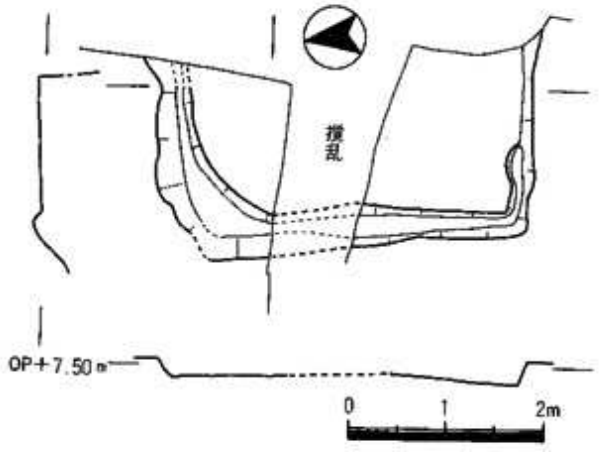


図20　SI1平断面図

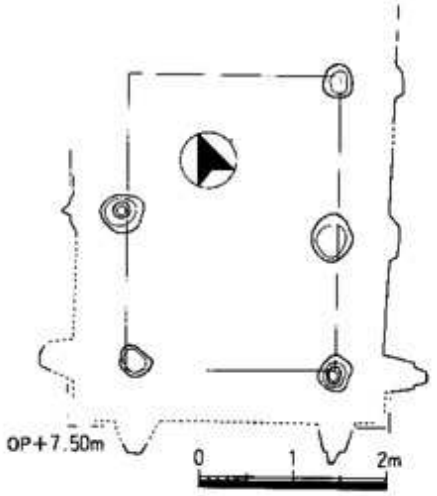


図21　SB1実測図

Ⅲ　遺構・遺物

1）住居址

ＳＩ１

第１・第２調査区間の東側で検出したが、東部は調査区外へ至るため、未確認である。

南北辺3.8m を測り、方形を呈する竪穴式住居と思われる。竪穴の肩から床面までの深さ約15cmを測り、床面は平坦である。周囲には幅20～60cm・深さ約８cmを測る溝が残存している。以上のように、周溝を検出したことから竪穴式住居としたが、柱穴や炉址が確認されなかったことにやや疑問を残す。

床面より壺(１)、甕(2・3)、小型鉢(４)等が小片で出土しており、遺構の時期は古墳時代前期に比定できる。

ＳＢ１

第１調査区の北東隅で検出した掘立柱建物である。東西１間×南北２間、主軸方向はＮ－24°－Ｗを指す。桁行3.2m ・梁行2.2m を測り、復元床面積は約７㎡である。

柱穴は径30～50cm・深さ約50cmで、暗茶灰色シルト粘土が堆積する。

柱穴の埋土内より庄内式甕の小片が若干出土しており、遺構の時期は古墳時代前期に比定できる。

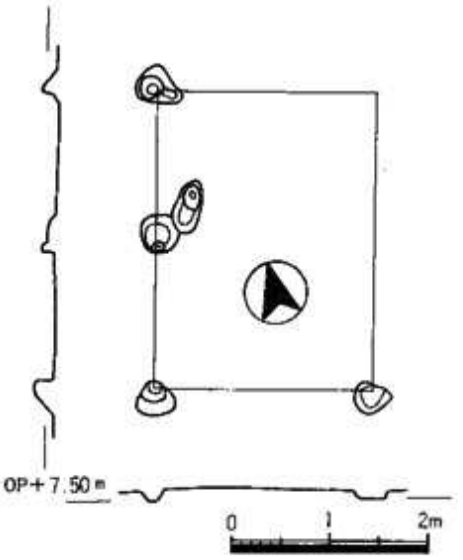


図22　SB2　平断面図

SB2

第3・第4調査区間の西側で検出した掘立柱建物である。規模はSB1同様、東西1間×南北2間を有する。主軸方向はN－16°－W、桁行3.1m・梁行2.2mを測る。復元床面積は約6.8m²である。

柱穴は径30～50cm・深さ8～20cmを測り、内部には暗茶灰色シルト粘土が堆積する。

遺物は柱穴の埋土内より庄内甕の細片が出土した程度で、時期的にはSB1と同時期と考えてよいだろう。

2）土坑

SK1

第1調査区中央付近で検出した。最大幅3m以上・最小幅1.1mを測り、平面は不定形を呈する。底部の西側には、長径2m・短径0.6m・深さ0.45mの落ち込みがある。埋土は上方から暗茶灰色シルト粘土、暗灰色砂まじり粘土(炭・灰を含む)が堆積する。

遺物は埋土内より、甕(6～10)・高杯(11・12)等が出土したが、いずれも小片である。

SK2

第1調査区の南西隅で検出した。最大幅2.5m以上・最小幅1.2m・深さ0.2mを測り、平面は不定形を呈する。底部からはSE1が検出された。北側の肩はSD4と切り合う。埋土は暗茶灰色シルト粘土1層である。埋土内より、V様式タイプの甕(13・14)の少片が出土した。

SK3

SK2の南側で検出した。検出部の最大幅は70cm・深さ15cmを測るが、南西は調査区外へ拡

がっている。

ＳＫ４

第２調査区の北東で検出した。最大幅3.8m・最小1.3ｍ・深さ0.1mを測り、平面は不定形を呈する。底部からＳＥ２が検出された。西側の肩はＳＫ５と接しているが切り合い関係は確認できず、東側は調査区外へ至るために不明である。埋土は暗茶灰色シルト粘土１層である。遺物は製塩土器の脚台(15)が小片で出土した。

ＳＫ５

ＳＫ４に隣接する土坑である。最大幅約２ｍ・最小幅1.5m・深さ0.25mで、平面は不定形、断面は浅い皿状を呈する。埋土は上方から暗茶灰色シルト・暗灰黒褐色シルト粘土・黒褐色土(炭・灰を含む)である。底部に接する面には、厚さ２cmを測る炭層が堆積している。

遺物は庄内甕(16)の小片が出土した。

ＳＫ６

第２・第３調査区の西隅で検出したが、床土から切り込んでいるため、中世の遺構と考えられる。埋土は暗茶褐色粘土と灰黄色粗砂土のブロック層１層である。

遺物はＶ様式タイプの甕(17)が小片で出土したが、この土坑の埋め立てに際し、他から流入したものであろう。

ＳＫ７

第３調査区の北壁近くで検出した。東西1.3m・南北0.9m以上を測る。深さは10cmと浅く、断面は逆台形を呈する。

埋土は暗茶灰褐色シルト粘土１層である。埋土内より土器の細片が出土したのみで、遺構の時期は明確でない。

ＳＫ８

第３調査区の東側で検出したが、東側の一部は調査区外へ至る。最大幅３m以上・最小幅1.6m・深さ0.2mを測る不定形の土坑で、断面は皿状である。南西隅をＳＥ３に切られ、ＳＤ11・ＳＤ12を切って構築されている。

底部からＳＥ４と、径15～30cm・深さ6～17cmを測る３個のピットを検出した。土坑内の埋土は暗灰褐色シルト１層である。

遺物はＶ様式タイプの甕(18・19・21)および庄内式甕(20)等が破片で出土した。

ＳＫ９

第３調査区の西側で検出した。最大幅1.3m・最小幅１mを測り、深さは９cmと浅い。平面は菱形に近く、断面は逆台形である。ＳＥ５の西側の層を切る関係にある。埋土は淡灰褐色砂混じり粘土層である。

遺物は杯(23)が出土した。これは、他の遺構より出土する遺物と比較すれば、新しい時期のものと思われる。

ＳＫ10

第３調査区の北壁沿いで検出した。長辺1.6m・短辺1.5m・深さ29cmを測る。平面は隅丸方形を呈し、断面は皿状である。ＳＫ11を切り込んでいる。埋土は暗茶灰色シルト１層が堆積する。

埋土上面に伏せた状態で高杯(37)を検出したが、他の遺物は埋土内のやや上部から出土した。器種には甕(24～28・31)・小型甕(29)・小型鉢(35)・高杯(36)等がある。

遺物を概観すれば、甕のうちではＶ様式タイプのものが、量的に多くを占める。しかし、小型鉢・高杯等は庄内式の時期のものと考えられることから、これらの遺物群はほぼ庄内式の古相のものと考えられる。

ＳＫ11

第３調査区北西隅で検出した。径1.2m・深さ12cmを測る。ＳＫ６とＳＫ10に切られる関係にある。埋土は暗灰褐色粘土１層である。

３）井戸

ＳＥ１

第１調査区の西側に位置するＳＫ２の底部で検出した。径1.2m・深さ78cmを測る素掘りの井戸である。平面は円形を呈し、断面は上部から約30cmのところに段を持ち、以下底部までは逆台形を呈する。調査中に多量の湧水が認められた。

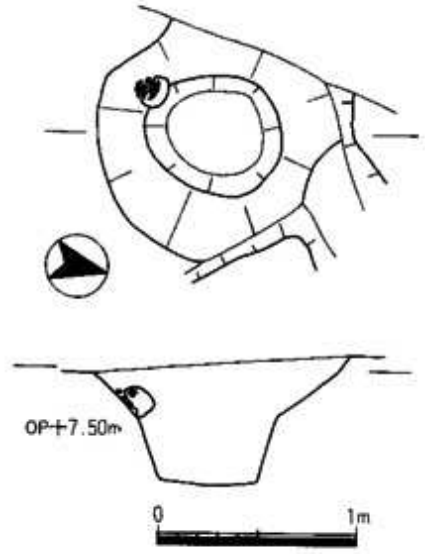


図23　SE1平断面図

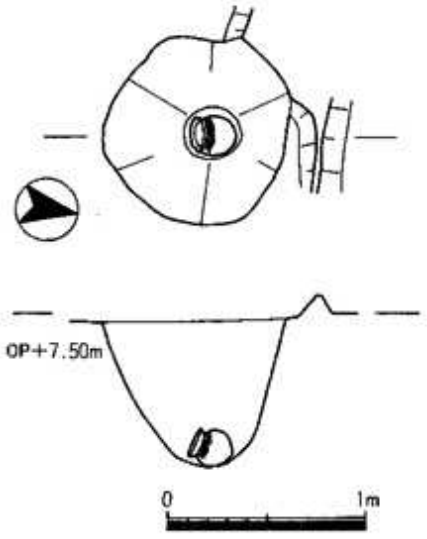


図24　SE2平断面図

堆土は上方から暗茶褐色シルト粘土、暗灰青色粘土の2層に大別できる。

遺物は井戸掘形の肩の部分から、口縁部が欠損した庄内式甕(38)が出土した。

SE2

第2調査区北東側に位置するSK4の底部で検出した。径・深さともに1mを測る素掘りの井戸で、平面は円形、断面はU字形を呈する。

埋土は第1層暗茶灰色粘土、第2層暗灰色粘土(炭化物を含む)、第3層黒褐色土(炭化物を含む)の3層が堆積する。第3層は植物遺体の炭化物を含み、井戸底や壁面に貼り付いた状態であった。

遺物はV様式タイプの甕(39・40)・庄内式甕(41・42)が出土した。このうち(42)は、井戸の底部に接して横向きの状態で検出したもので後述する祭祀に関するものと思われる。

SE3

第3調査区の中央部で検出した。層位的には第3層上面(中世の水田面)から掘り込まれているため、中世の水田耕作に関係する井戸であったと推定される。規模は径1.5m・深さ1m以上を測り、平面はほぼ円形、断面はU字形を呈する。

井戸内部には、暗茶灰色シルト粘土と灰色粘土がブロック状に堆積するため、人為的に一挙に埋めたてられたものと推定できる。

埋土内からは、庄内式甕(43)等が細片で出土した。しかし、これらの遺物は井戸の埋め立てに際して他から混入したものであろう。

SE4

第3調査区西側、SK8の底部南東側で検出した。長径1.2m・短径0.9m・深さ1mを測る。平面は楕円形、断面はU字形を呈する素掘りの井戸である。

埋土は上方から、暗茶灰色シルト粘土と暗灰青色粘土の2層に大別でき、下層はヘドロ状で炭化物を含んでいる。

遺物はV様式タイプの甕(44)および庄内式甕(45・46)が出土した。このうち(46)は井戸の底部に接して伏せられた状態で出土している。また、この甕はSE2出土の甕(42)と形態的に近似する資料であり、遺構の時期はSE2とほぼ同時期であると考えられる。

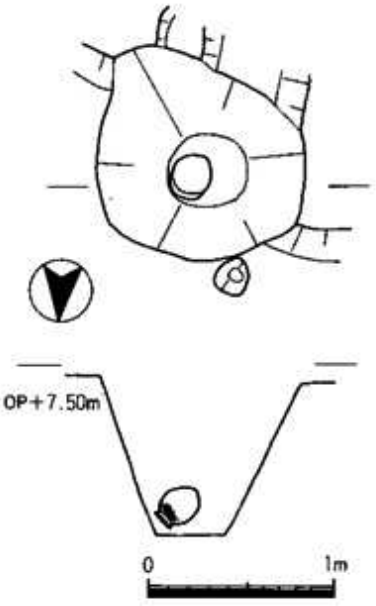


図25　SE4平断面図

SE5

第3調査区の西側で検出した。長径1.9m・短径1.6m・深さ1.5mを測る。平面は楕円形を呈し、断面は上部から40cmまではすり鉢形、以下底部までは垂直に落ちる素掘りの井戸である。

埋土は第1層暗茶灰褐色シルト粘土、第2層暗灰色粘土、第3層暗灰青色粘土、第4層暗灰色シルト粘土と暗灰色粘土および灰緑色シルトの混合層である。

遺物はその出土した層位によって、下層のものと上層のものに分けることができる。

下層出土のもの(47)は井戸の底部に接する状態で検出し、山陰または北陸系のものと考えられる。これは胴部中位に穿孔されている。

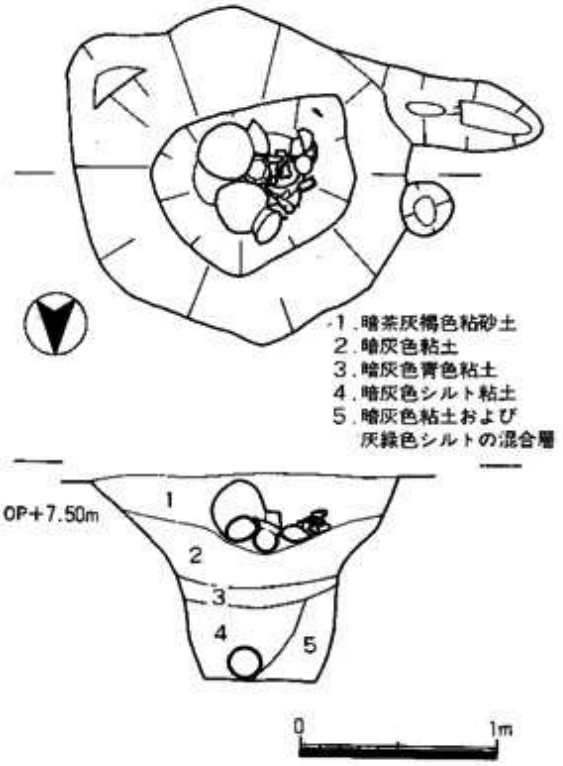


図26　SE5平断面図

上層出土のものは第1層暗茶灰褐色シルト粘土上面に集積する状態で検出され、器種には壺(48・49)・甕(50・51)・鉢(52)・小型鉢(53)・小型器台(54)の他合計8点あり、うち7点を図示した。このうち甕は、庄内式のものと布留式のものが共伴している。

4）溝

溝は合計18条を検出したが、これらは方向が一定でなく、幅や深さについても規則性がみられないことから、性格は不明である。中には住居に伴なう排水溝等も含んでいるものと推定される。

SD1

第1調査区を斜め方向に走る溝である。幅25～40cm・深さ約10cmを測る。SD3・SD13と交差している。

SD2

第1調査区北部で検出した。幅20～30cmを測る。SD3と直交しており、SD13・SD14・SD15がこの溝から派生している。

遺物はV様式タイプの甕(57)の小破片が出土した程度である。

SD3

第1調査区を縦断する溝である。幅30～60cm・深さ20cmを測る。SD1・SD2と交差している。

SD4

第1調査区西側で検出した。幅30～60cm、深さ10～25cmを測る。SE1・SD13と切り合っている。

甕(58)の口縁部の小破片が出土した。

SD5

第2調査区・第3調査区間にわたり、縦断する構である。幅30～60cm・深さ15cmを測る。SK5に切られている。

遺物は、V様式タイプの甕の小片がわずかに出土した程度である。

SD6

第3・第4調査区の南側で検出した。幅30～50cm・深さ約20cmを測る。平面はほぼ円を描くが、南部はSD9に切られ、東側ではSD12を、西側ではSD8を切る。

埋土は暗灰褐色砂粘土1層で、埋土内から土師器の細片がわずかに出土した程度である。

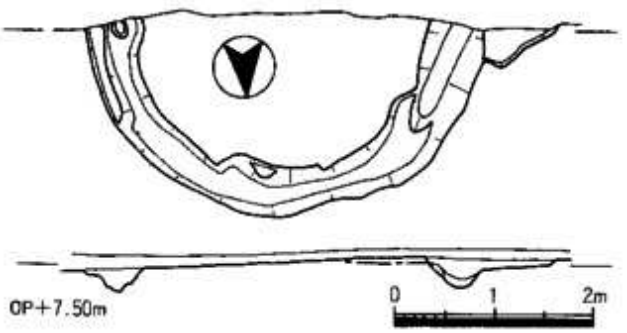


図27　SD6平断面図

SD7

第2調査区東側で検出した。幅10～30cm・深さ15cmを測る。

SD8

第3調査区SE3に切られ、南北に延びる溝である。幅20～30cm・深さ10cmを測る。SD6・SD9に切られている。

埋土は暗茶灰色シルト粘土1層である。

SD9

第4調査区で検出し、東西方向に延び、東壁付近でラッパ状に拡がる溝である。幅1～1.8m・深さ27cmを測り、断面はすり鉢形を

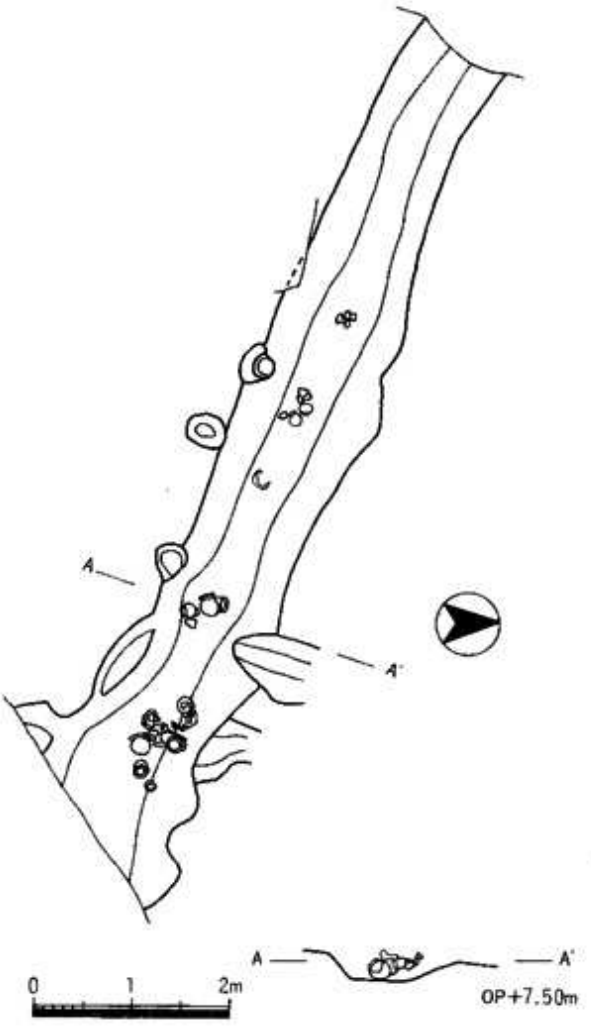


図28　SD9平断面図

呈する。

埋土は上方から第1層暗灰茶褐色シルト粘土、第2層暗灰茶褐色シルト粘土と灰青色シルト粘土の混合層が堆積している。下層は溝の肩より崩れ落ちた土層と思われ、ほとんどの遺物がこの上面から一括出土に近い状態で出土した。

出土遺物のうち、実測可能なものは44点を数える。器種には壺(61～64)・甕(65～93・100)・鉢(94・95)・小型鉢(96～99)・小型器台(100～102)・高杯(103・104)があり、甕には吉備系のもの(88)も含んでいる。出土状況については、各遺物が数個体ずつ集積し、3～5群に分かれており、完形品近くにまで復元できたものが多くを占める。これらの土器は出土状況からみて、溝の埋没後に放置されたものではないかと考えられるが明確ではない。

SD10

第4調査区の南壁に沿って、北側の肩だけを検出したが、自然河道と考えられる。検出部での最大幅約1m・深さは0.7mを測る。断面の形状は、肩から約45°の角度で傾斜して落ち込んでいる。

埋土は上方から第1層黄褐色微砂土、第2層淡灰色粘土、第3層暗灰色粘土、第4層暗灰色シルト粘土、第5層暗灰色シルトが堆積している。

遺物は第2層より甕(105)・小型器台(106)・高杯(107・108)の合わせて4点が出土した。このうち高杯(108)は完形に復元でき、他の遺物についても比較的大きな破片である。

SD11

第2調査区SD7の南側で検出した。幅20cm・深さ10cmを測る。弓状に曲がる溝で、SI1を切っている。

SD12

第3調査区東側で検出した。幅30～80cm・深さ5cmを測る。南側はSD6に、北側はSK8に切られている。

SD13

第1調査区西側で検出した。幅20～30cm・深さ10cmを測る。SD4に切られ、SD2とは直交している。

SD14

第1調査区北西隅で検出した溝で、ＳＤ２から派生する。幅20cm・深さ10cmを測る。溝底部では、径10cm前後・深さ15cmを測る楕円形のピットを認めた。

SD15

ＳＤ14の西側で、ＳＤ14と同じくＳＤ２から派生する溝である。幅20cm・深さ10cmを測る。溝底部で、長径30cm・深さ20cmの楕円形のピットを認めた。

SD16

第3調査区東側、ＳＥ４から南へ延びる溝である。幅40cm～60cm・深さ25cmを測る。

SD17

第2調査区西側で検出した。幅30cm・深さ15cmを測り、西へ延びる。

SD18

第3調査区東側をＳＫ８に切られ、南北に延びる溝である。幅20～30cm・深さ10cmを測る。

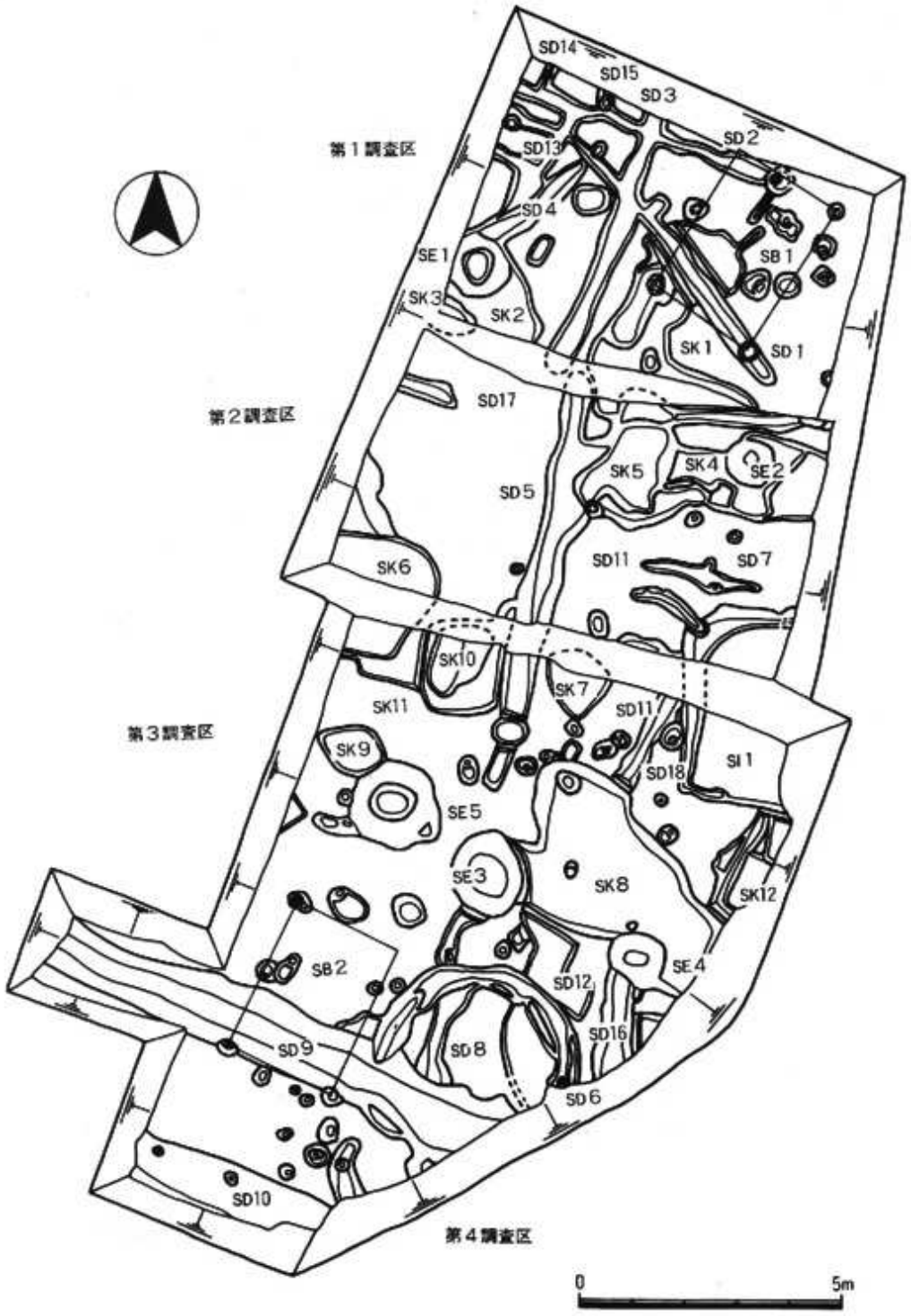
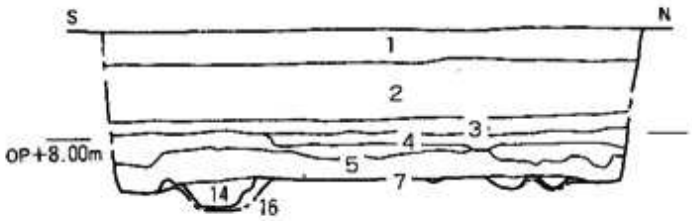
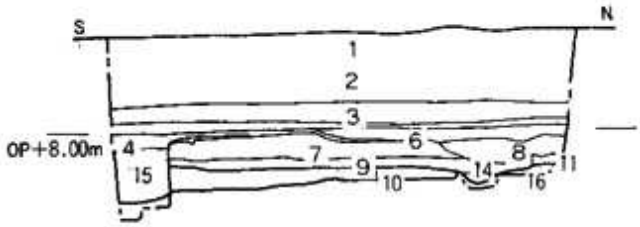

第1調査区
第2調査区
第3調査区
第4調査区
SD14
SD15
SD3
SD2
SD13
SD4
SE1
SB1
SK3
SK2
SK1
SD1
SD17
SK5
SK4
SE2
SD5
SK6
SD11
SD7
SK10
SK7
SK11
SD11
SK9
SI1
SD18
SE5
SE3
SK8
SK12
SB2
SD12
SE4
SD16
SD9
SD8
SD6
SD10
0
5m

図29　平面図

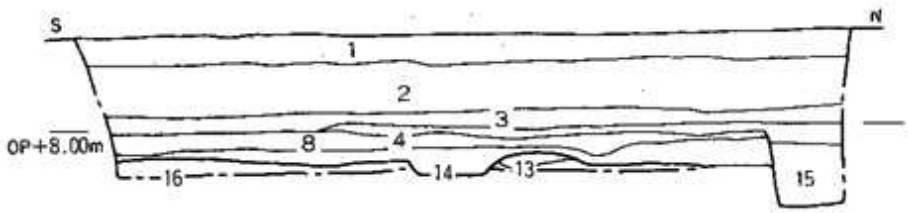
第1調査区



第2調査区



第3調査区



1．耕土
2．盛土
3．旧耕土
4．灰青色粘砂土
5．灰茶褐色砂土
6・灰青褐色粘砂土
7・暗茶灰色粘土
8．暗茶褐色砂粘土
9．暗黄灰褐色粘土
10．灰褐色粘土
11．灰色粘土
12．灰色微砂土
13．茶灰褐色粘土
14．暗茶灰色シルト粘土
15．暗茶褐色粘土と灰黄色粗砂土のブロック(SK6)
16．黄灰褐色シルト

図30　断面図

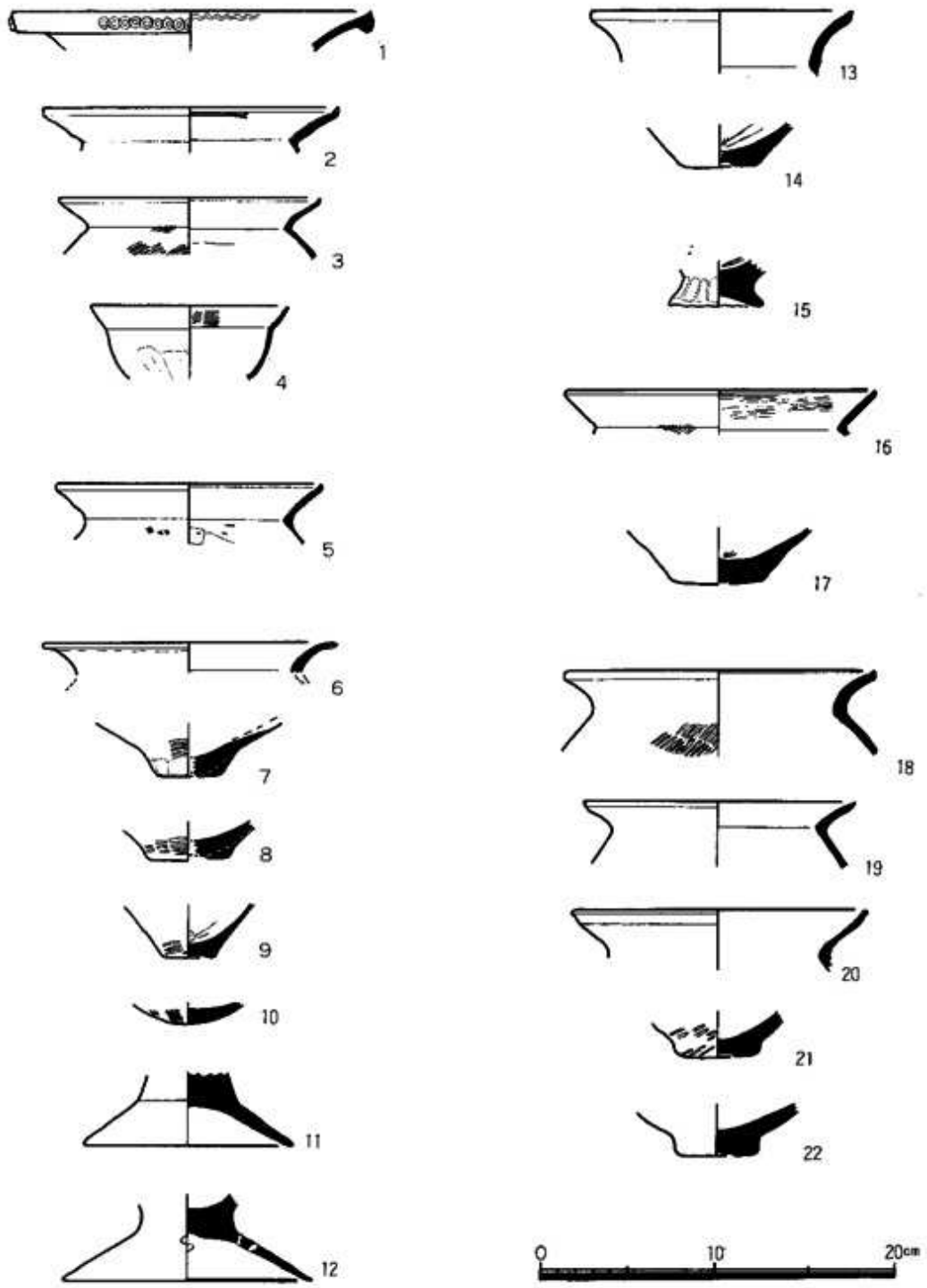


図31　出土遺物実測図1

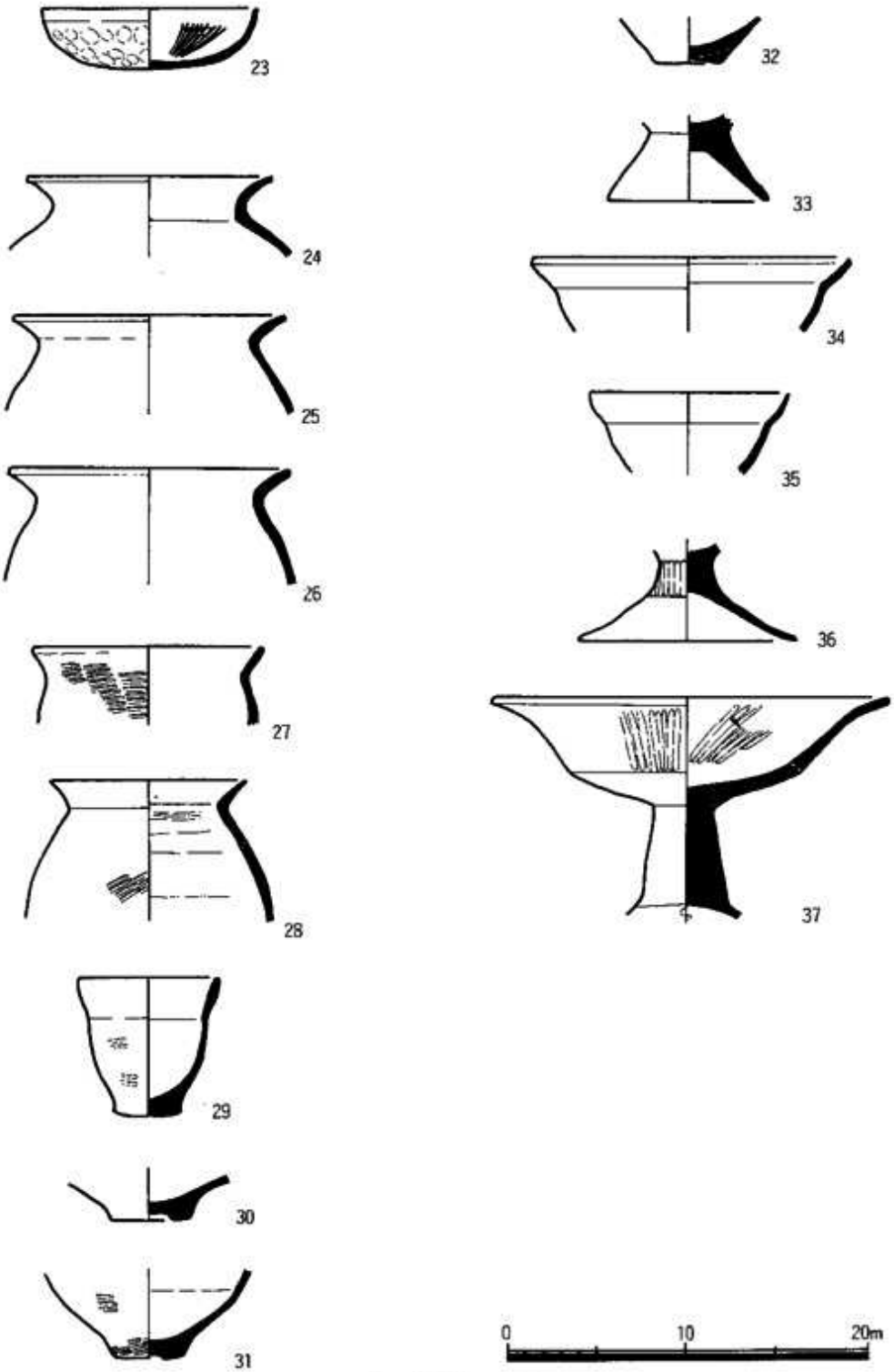


図32　出土遺物実測図2

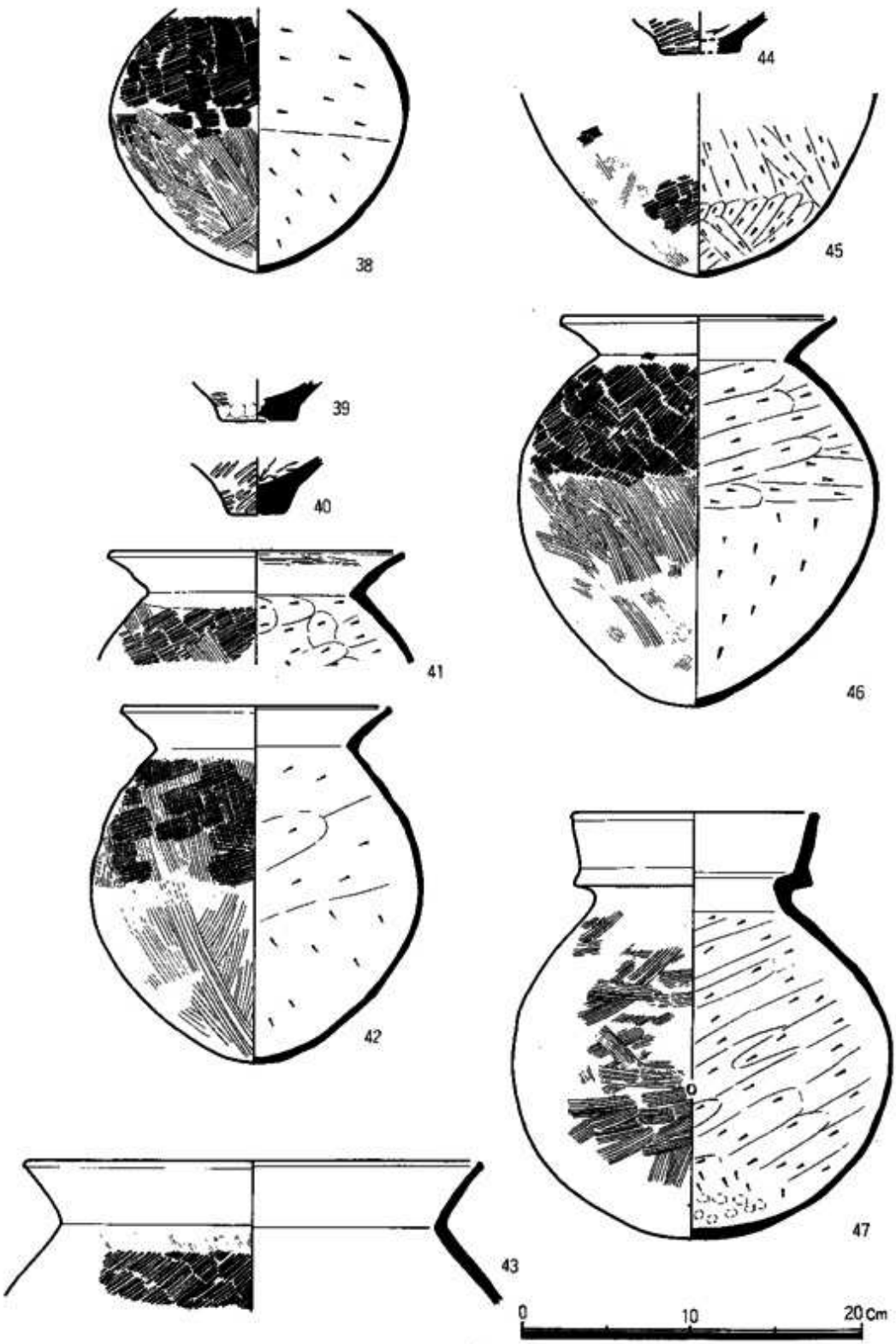


図33　出土遺物実測図3

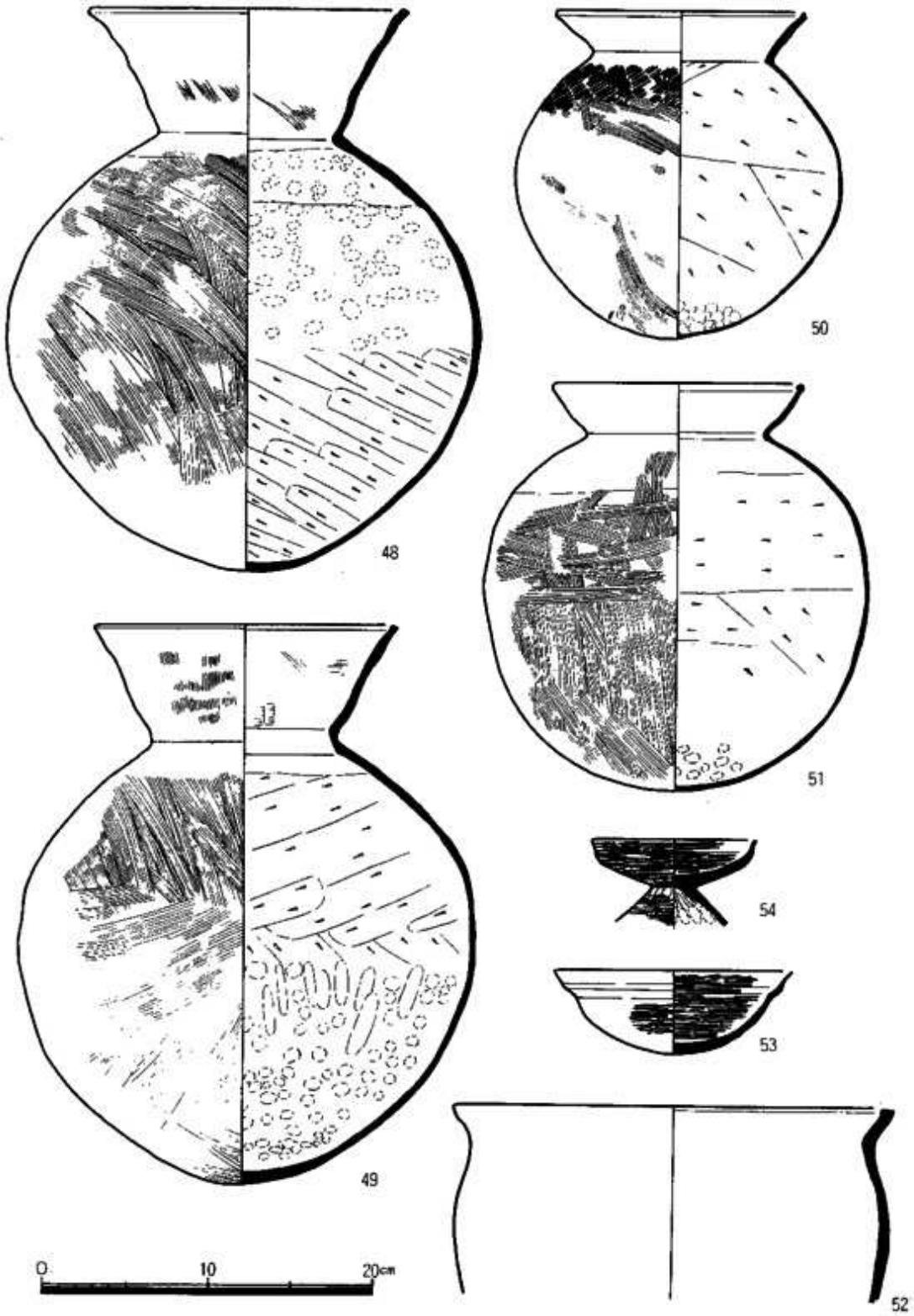


図34　出土遺物実測図4

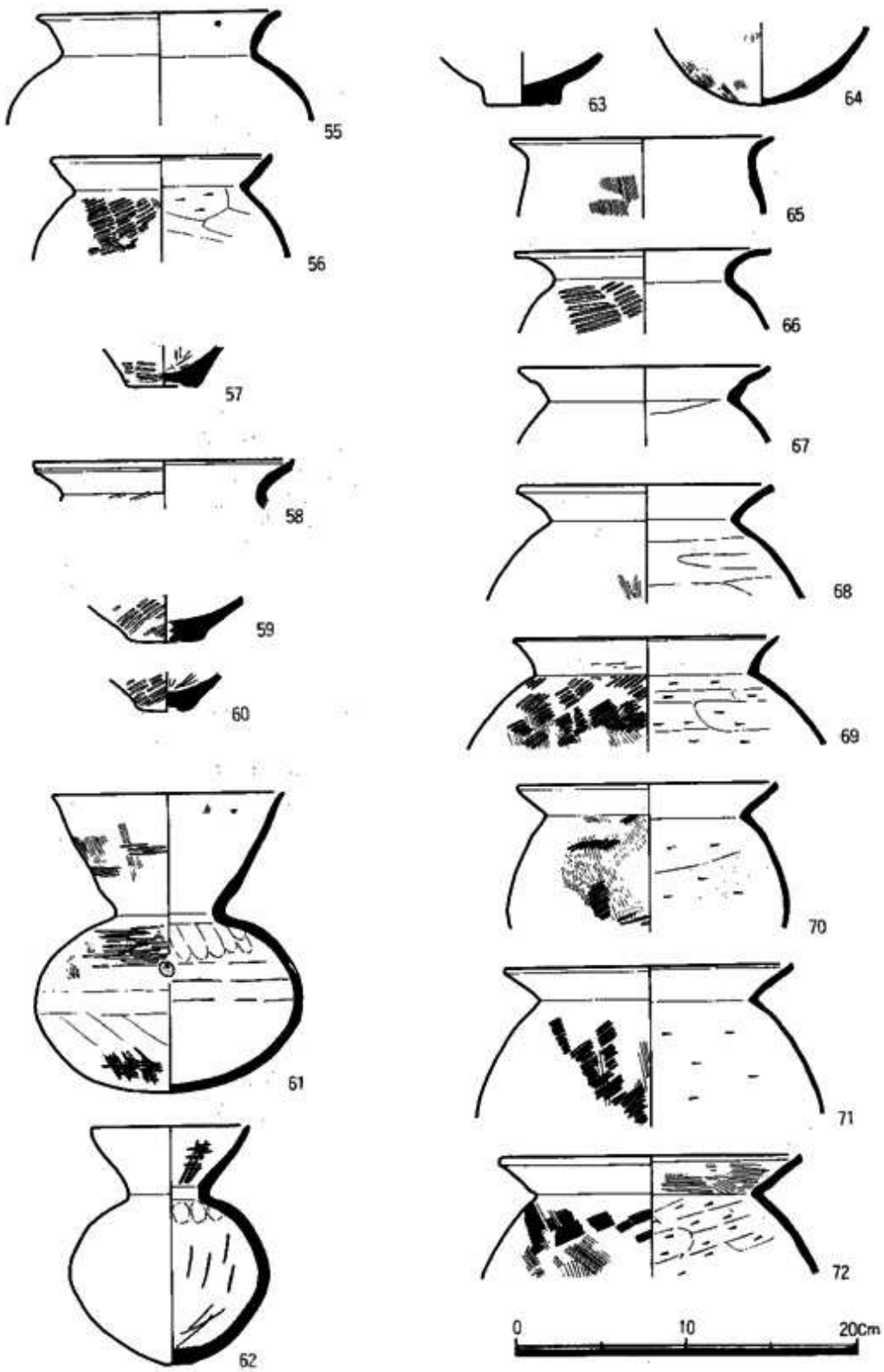


図35　出土遺物実測図5

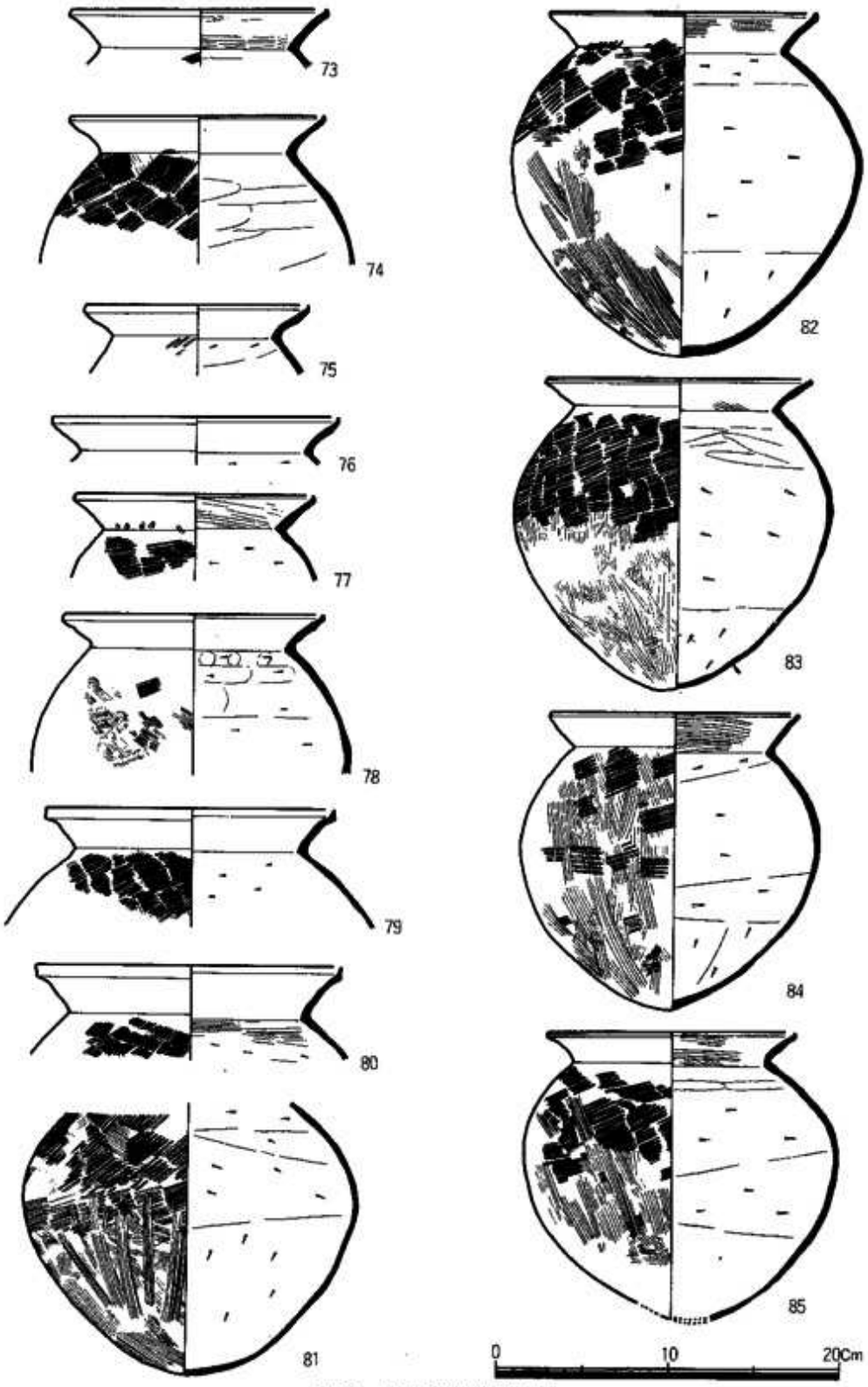


図36　出土遺物実測図6

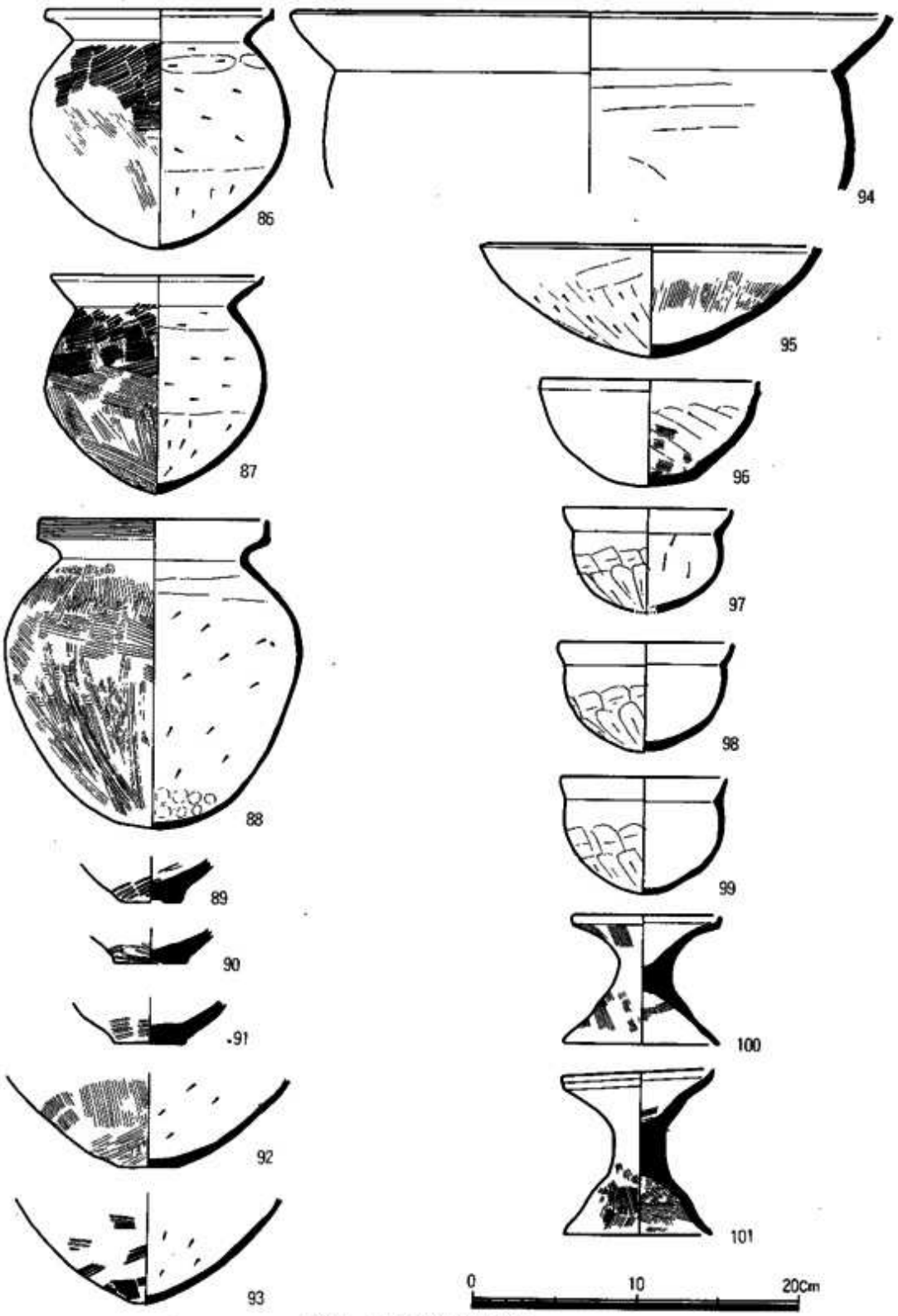


図37　出土遺物実測図7

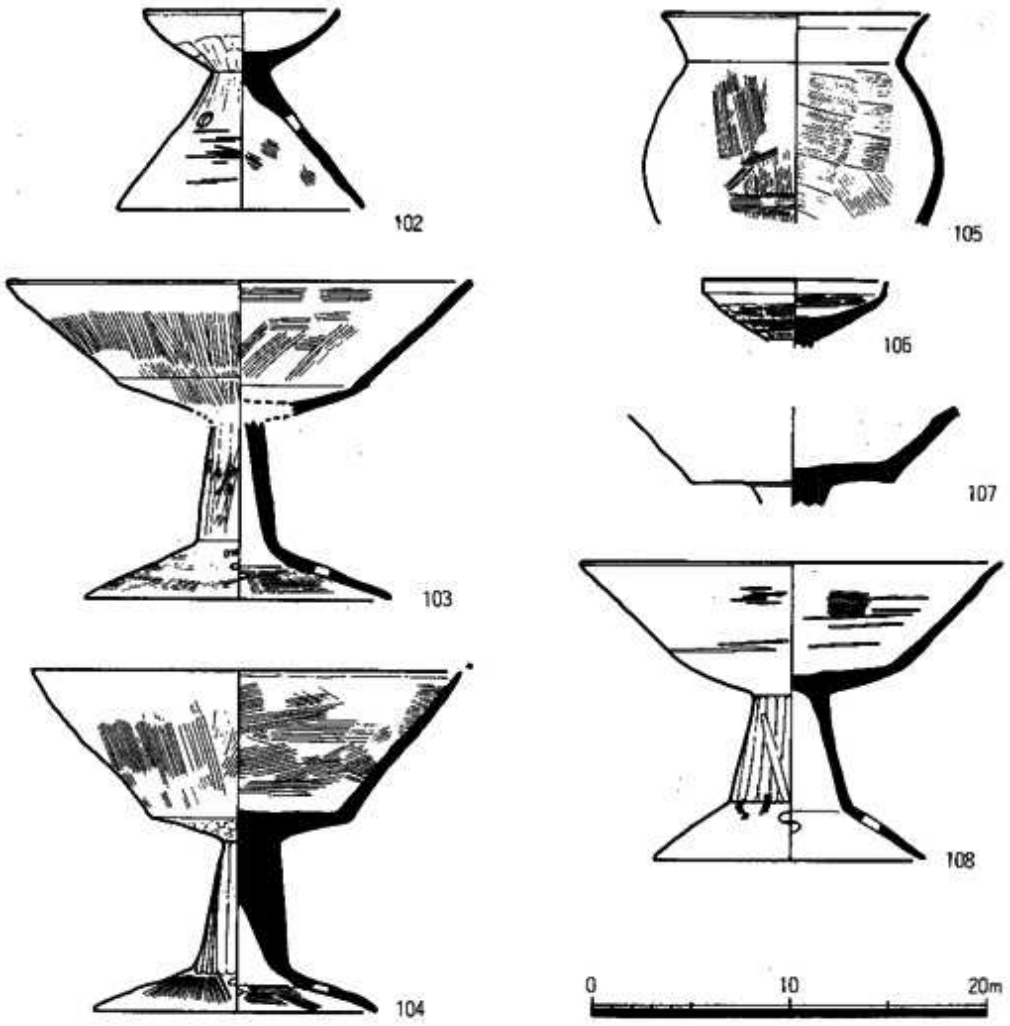


図38　出土遺物実測図8

Ⅳ 出土遺物観察表

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
1	鉢 SI1床面	口径 20.5	外反する口縁部のみ遺存。端部は上下に肥厚し、広い面をつくる。 端部側面に竹管押圧円形浮文(9個のみ遺存)を貼付し、内面口縁部近くに櫛描き波状文を施す。	外面 内面 }磨耗を受け不明	色調 淡赤褐色 胎土 微粒の長石を多く含む。 焼成 良好
2	鉢 SI1床面	口径 16.7	胴部より屈折して外傾する口縁部。端部はつまみ上げ、直立する平坦面をつくる。	外面 ヨコナデ。 内面 5条/4.5mmのハケのあとヨコナデ。胴部はヘラケズリと思われる。	色調 茶褐色 胎土 微粒～細粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好
3	甕 SI1床面	口径 14.8	「く」の字形に屈折して外反する口縁部。端部は上方へつまみ、丸みのある面となる。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部に5条/9.5mmのタタキを施す。接合部外面付近はヨコナデによってタタキが消えている。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリと思われる。	色調 灰褐色 胎土 粗粒の長石・石英と細粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好
4	小型鉢 SI1床面	口径 11.4	半球形の体部より屈曲し、内弯ぎみにのびる口縁部に至る。端部は尖りぎみに終わる。	外面 口縁部をヨコナデし、体部はヘラケズリのあと軽くナデ。 内面 口縁部を8条/8.0mmのハケのあとヨコナデし、体部はナデ。	色調 淡褐色 胎土 微粒の長石を含む。 焼成 良好
5	甕 SB1-P2	口径 14.9	「く」の字形に屈曲して外反する口縁部。端部は上方へつまむ。体部の器肉は極めて薄い。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部に6条/3.5mmのハケがみられる。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部にヘラケズリがみられる。	色調 淡灰褐色 胎土 長石・石英を多く含む。 焼成 良好
6	甕 SK1	口径 16.5	外反する口縁部のみ遺存。口縁端部は丸く終わる。	外面 内面 }ヨコナデ。	色調 茶褐色 胎土 細粒の長石、微粒の角閃石・雲母を含む。 焼成 良好
7	甕 SK1	底径 3.8	ドーナツ状の底部と思われる。	外面 4条/12.5mmのタタキ。底部側面には指頭圧痕がみられる。 内面 磨耗を受け不明。	色調 淡赤褐色 胎土 1.0mm程度の長石・石英を含む。 焼成 良好
8	甕 SK1	底径 4.8	ドーナツ状の底部である。	外面 4条/11.0mmのタタキ。 内面 ナデをおこなう。	色調 淡灰褐色 胎土 粗粒の石英を含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
9	甕 SK1	底径 3.1	中央部が凹む上げ底状の底部である。	外面 3条/9.0mmのタタキを施す。 内面 ヘラ原体による押圧がみられる。	色調 淡赤褐色 胎土 粗粒の角閃石・花崗岩を含む。 焼成 良好
10	甕 SK1		丸底の底部である。	外面 3条/5.5mmのタタキのあと5条/7.0mmのハケを施す。 内面 ヘラケズリと思われる。	色調 暗褐色 胎土 微粒の雲母を含む。 焼成 良好
11	高杯 SK1	杯径 11.7	太く短い柱状部から裾部は屈折し開く。	外面 内面 } 磨耗を受け不明	色調 褐色 胎土 微粒～粗粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好
12	高杯 SK1	裾径 14.0	太く短い柱状部から裾部は屈折し開く。	外面 ヘラミガキを施す。 内面 磨耗を受け不明。	色調 淡赤褐色 胎土 チャート・2.0~3.0mm程度のお英を含む。 焼成 良好
13	壺 SK2	口径 14.7	胴部より屈折し、丸く外反する口縁部のみ遺存。脚部は上方へ若干つまみ、直立する平坦面となる。	外面 内面 } ヨコナデ。	色調 淡褐色 胎土 3.0mm程度のお英、微粒の長石・角閃石を含む。 焼成 良好
14	甕 SK2	底径 4.2	ドーナツ状の底部である。	外面 磨耗を受け不明。 内面 ヘラ原体による押圧がみられる。	色調 暗赤褐色 胎土 2.0mm程度の石英を含む。 焼成 良好
15	製塩土器 SK4	裾径 5.2	製塩土器の脚台であろう。	外面 内面 } 磨耗を受け不明瞭であるが、指おさえによって脚台をつくり出している。	色調 赤褐色 胎土 石英・長石を多く含む。 焼成 良好
16	甕 SK5	口径 17.5	「く」の字形に屈折して外反する口縁部で、口縁端部は上方へわずかにつまむ。	外面 口縁部をヨコナデし、接合部に5条/6.5mmのタタキがみられる。 内面 口縁部に4条/5.0mmのハケのあとヨコナデ、胴部はヘラケズリと思われる。	色調 茶褐色 胎土 微粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
19	甕 SK6	底径 5.6	ドーナツ状の底部である。	外面 内面 } 磨耗を受け不明瞭であるが、内面にはヘラ原体の押圧がみられる。	色調 灰褐色 胎土 微粒～2.0mm程度の角閃石・雲母を含む。 焼成 良好
18	甕 SK8	口径 17.4	体部から丸みをもって屈曲し、外反する口縁部に至る。端部はつまみ上げ、直立する平坦面となる。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部は6条/14.0cmのタタキを施す。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はナデ。	色調 灰褐色 胎土 粗粒の石英を含む。 焼成 良好
19	甕 SK8	口径 15.4	「く」の字形に屈折して外反する口縁部。端部は尖りぎみに終わり、わずかに平坦になる。	外面 内面 } 磨耗を受け不明	色調 赤褐色 胎土 1.0～2.0mm程度の石英を多く含む。 焼成 良好
20	甕 SK8	口径 16.5	丸みを持って屈曲し、内弯ぎみに伸びる口縁部。端部は外傾する平坦面をつくる。	外面 ヨコナデ。 内面 磨耗を受け不明。	色調 淡白褐色 胎土 微粒の石英を多く含む。 焼成 良好
21	甕 SK8	底径 4.9	ドーナツ状の底部である。	外面 タタキを施す。 内面 炭化物の付着により不明。	色調 灰褐色 胎土 粗粒の石英・花崗岩を含む。 焼成 良好
22	甕 SK8	底径 4.8	ドーナツ状の底部である。	外面 内面 } 磨耗を受け不明。	色調 淡灰褐色 胎土 粗粒の長石を多く含む。 焼成 良好
23	杯 SK9	口径 12.0 器高 3.4	浅い半球形の体部から稜をもち、外反ぎみの口縁部に至る。端部は外へ丸く終わる。	外面 口縁部はヨコナデし体部は指圧ナデの後ナデ。 内面 ヘラミガキのあと放射状の暗文を施す。	色調 淡褐色 胎土 精良土、微粒の長石・雲母を含む。 焼成 堅緻
24	甕 SK10	口径 13.6	胴部より丸みをもって屈曲し、外反する口縁部に至る。端部は直立する平坦面となる。胴部の張りは強いと思われる。	外面 内面 } 磨耗を受け不明	色調 赤褐色 胎土 微粒の長石を多く含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
25	甕 SK10	口径 15.1	「く」の字形に丸みをもって屈曲し、外反する口縁部。端部はわずかに平坦になる。	外面 内面 }磨耗を受け不明	色調 茶褐色 胎土 微粒の長石、微粒～1.0㎜程度の角閃石を含む。 焼成 良好
26	甕 SK10	口径 15.6	「く」の字形に丸く屈曲し、外傾する口縁部。端部はわずかに平坦になる。	外面 内面 }磨耗を受け不明だが、外面にタタキの痕跡がみられる。	色調 茶褐色 胎土 1.0㎜程度の角閃石を含む。 焼成 良好
27	甕 SK10	口径 12.8	胴部からゆるやかに屈曲し、外傾する口縁部。端部は丸く終わる。胴部の張りは弱い。	外面 口縁部を5条/15.0㎜のタタキのあと横ナデ。胴部は5条/15.0㎜のタタキを施す。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラナデ。	色調 灰褐色 胎土 微粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好
28	甕 SK10	口径 10.9	下ぶくれの胴部から「く」の字形に屈折し、外反ぎみに延びる口縁部に至る。端部は細く、尖りぎみに終わる。	外面 胴部に4条/10.5㎜のタタキ。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラナデと思われる。	色調 灰茶褐色 胎土 微粒の長石・花崗岩・雲母を含む。 焼成 良好
29	小型甕 SK10	口径 7.8 底径 3.8 器高 7.8	深い楕形の胴部から屈折し、外傾する口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。底部は突出する平底で、中央がわずかに凹む。	外面 胴部の一部にタタキがみられる。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はナデと思われる。	色調 暗褐色 胎土 微粒の石英・花崗岩を含む。 焼成 良好
30	甕 SK10	底径 4.8	ドーナツ状の底部である。	外面 内面 }磨耗を受け不明	色調 灰褐色 胎土 1.0㎜程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
31	甕 SK10	底径 4.1	ドーナツ状の底部である。	外面 底部付近と胴部に部分的に3条/7.0㎜のタタキを施す。 内面 磨耗を受け不明。	色調 赤褐色 胎土 微粒～2.0㎜程度の長石・石英を含む。 焼成 良好
32	甕 SK10	底径 4.0	中央部が凹む上げ底状の底部である。	外面 内面 }ナデと思われる。	色調 淡赤褐色 胎土 1.5㎜程度の石英・花崗岩・長石を含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
33	壺？ SK10	胴径 8.7	偏平状に開く壺の胴片であろう。	外面 タタキのあとヘラケズリと思われる。 内面 磨耗を受け不明。	色調 赤褐色 胎土 微粒の長石を多く含む。 焼成 良好
34	鉢 SK10	口径 17.5	体部より屈折し、内弯ぎみにのびる口縁部で、端部は上方へつまむ。	外面 内面 磨耗を受け不明	色調 灰褐色 胎土 0.5㎜程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
35	小型鉢 SK10	口径 11.1	体部より屈曲し、内弯してのびる口縁部で、端部は尖りぎみに終わる。	外面 内面 磨耗を受け不明	色調 淡赤褐色 胎土 2.0㎜程度の石英を多く含む。 焼成 良好
36	高杯 SK10	裾径 12.1	短い柱状部から外反ぎみに大きく開く裾部である。	外面 柱状部にヘラケズリ。他は全体に磨耗を受け不明。 内面 磨耗を受け不明	色調 淡褐色 胎土 1.0㎜程度の角閃石を含む。 焼成 良好
37	高杯 SK10上面	口径 21.8	柱状部より内弯ぎみに開く杯底部から屈曲し、外反しながらのびる長い口縁部に続く。口縁端部は丸みのある平坦面となる。	外面 内面 口縁部内外面にヘラミガキが認められるが、他は不明。	色調 淡赤褐色 胎土 微粒の長石を多く含む。 焼成 良好
38	壺 SE1周部	最大径 17.7	ほぼ球形の体部である。最大径はやや上方に位置し、底部は尖り底である。	外面 接合部をヨコナデし、上部に12条/21.5㎜のタタキを施し底部から最大径部分までを8条/11.5㎜のハケ。 内面 ヘラケズリを施す。	色調 淡茶褐色 胎土 微粒～2.0㎜程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
39	壺 SE2下層	底径 4.7	ドーナツ状の底部である。	外面 3条/8.0㎜のタタキを施す。 内面 ナデと思われる。	色調 赤褐色 胎土 1.0㎜程度の角閃石・石英・チャートを含む。 焼成 良好
40	壺 SE2下層	底径 3.6	突出する平底で、中央部がわずかに凹む。	外面 5条/12.0㎜のタタキを施す。 内面 ヘラ原体による押圧がみられる。	色調 灰黒色 胎土 微粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
41	甕 SE2下層	口径 17.2	「く」の字形に鋭く屈折して外反する口縁部に至る。端部は上方へつまみ、端部側面は丸い。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部は9条/16.0mmのタタキのあと部分的に6条/10.0mmのハケを施す。 内面 口縁部をハケのあとヨコナデし、胴部はヘラケズリ。	色調 暗茶褐色 胎土 微粒の雲母、0.5mm程度の角閃石・長石を含む。 焼成 良好
42	甕 SE2下層	口径 15.8 最大径 19.7 器高 21.3	「く」の字形に鋭く屈折して外反する口縁部で、端部はつまみ上げ、外傾する平坦面となる。体部は中位に最大径があり、尖りぎみの丸底をもつ。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部の上方に10条/20.5mmのタタキのあと6条/8.5mmのハケ。下方は7条/13.5mmのハケがみられる。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部にヘラケズリを施す。	色調 暗茶褐色 胎土 微粒の雲母、微粒～1.0mm程度の角閃石を含む。 焼成 良好
43	大型甕 SE3	口径 26.7	「く」の字形に屈折して外反する口縁部で、端部はつまみ上げぎみに終わる。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部は12条/22.0mmのタタキのあと接合部付近にハケを施す。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリのあとナデと思われる。	色調 淡白褐色 胎土 くさり礫、微粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
44	甕 SE4下層	底径 4.8	ドーナツ状の底部であると思われる。	外面 5条/15.5mmのタタキ。 内面 ヘラ原体による押圧がみられる。	色調 赤褐色 胎土 微粒の雲母を多く含む。 焼成 良好
45	甕 SE4下層		尖りぎみの丸底である。	外面 タタキのあと8条/10.0mmのハケ。 内面 ヘラケズリを施す。	色調 淡褐色 胎土 2.0～4.0mm程度の石英を多く含む。 焼成 良好
46	甕 SE4下層	口径 16.0 最大径 21.2 器高 23.3	「く」の字形に鋭く屈折して外反する口縁部で、端部はつまみ上げ、外傾する平坦面となる。体部は倒卵形で、やや上位に最大径があり、底部にはわずかに平坦面を残す。	外面 口縁部の接合部をヨコナデし、胴部上半に14条/22.0mmのタタキを施し、続く7条/9.5mmのハケを施す。下部は7条/9.5mmのハケによりタタキは消えている。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリを施す。	色調 茶褐色 胎土 雲母・角閃石を多く含む。 焼成 良好
47	壺 SE5下層	口径 14.2 最大径 22.4 器高 25.5	体部から屈曲し水平に開いた後、外面に段を作り、外傾ぎみに立ち上がる複合口縁部。端部は外へつまむ。体部は下ぶくれの球形である。体部中位に焼成後の穿孔をもつ。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部は8条/8.5mmのハケを施す。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリする。底部付近に指圧痕がみられる。	色調 淡白灰色 胎土 石英・チャートを多く含む。 焼成 良好
48	壺 SE5上層	口径 18.6 最大径 28.5 器高 34.3	体部から屈曲し、外傾して長くのびる口縁部に至る。端部は外傾する平坦面となる。体部は中位に最大径をもち、球形にちかい。	外面 口縁部、ハケのあとヨコナデし、胴部は18条/21.5mmのハケを施す。 内面 口縁部、ハケのあとヨコナデし、胴部下方をヘラケズリ、上方に指圧痕が顕著である。	色調 淡茶褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角閃石、粗粒の石英を含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
49	壺 SE5上層	口径 18.0 最大径 27.5 器高 34.1	48と同様であるが、胴曲部内面には平坦面をつくる。	外面 口縁部の接合部付近をハケのあとヨコナデし、胴部の上方を11条/9.5mm、下方を12条/18.0mmにハケを施す。 内面 口縁部、ハケのあとヨコナデし、胴部の上方をヘラケズリ、下方に指圧痕が顕著である。	色調 淡茶褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角閃石、粗粒の石英を多く含む。 焼成 良好
50	壺 SE5上層	口径 15.0 最大径 19.7 器高 19.9	"く"の字形に屈折して外反する口縁部。端部は上方へつまみあげ、外傾する凹面となる。体部は中位に最大径をもち、球形を呈する。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部上方に12条/14.0mmのタタキがみられ、最大径部からやや上方を7条/7.0mmのハケ、それ以下にナデに近いハケを施す。 内面 口縁部をハケのあとヨコナデし、胴部内面をヘラケズリする。底部付近に指圧痕がみられる。	色調 淡茶褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角閃石・雲母を多く含み、微粒～2.0mm程度の石英・長石を含む。 焼成 良好
51	壺 SE5上層	口径 14.8 最大径 23.2 器高 24.9	丸みをもって屈曲し、内弯する口縁部。端部は丸く、肉に肥厚する。体部は中位に最大径をもち、卵球形を呈する。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部に15条/14.0mmのハケを施す。 内面 口縁部と接合部付近をヨコナデし、胴部にヘラケズリする。底部付近に指圧痕がみられる。	色調 淡茶褐色 胎土 石英・長石・チャートを含む。 焼成 良好
52	鉢 SE5上層	口径 26.4	丸く屈曲し、内弯ぎみにのびる口縁部。端部は外傾する凹面となり、内に若干肥厚する。	外面 内面 } 磨耗を受け不明	色調 淡褐色 胎土 微粒の長石、2.0mm程度の石英を含む。 焼成 良好
53	小型鉢 SE5上層	口径 14.4 器高 5.0	半球形の体部から、2段に屈曲する口縁部に至る。端部は薄くなり、尖りぎみに終わる。	外面 内面 } ヘラミガキを主体とするが、磨耗を受け不明瞭である。	色調 淡赤褐色 胎土 くさり礫、微粒の長石を多く含む。 焼成 良好
54	小型器台 SE5上層	口径 9.9	内弯ぎみに開く杯部から、丸みをもって立つ口縁部に至る。端部は外へつまむ。脚部は漏斗状に開くと思われる。	外面 脚部、杯部をヘラケズリしたあと全体にヘラミガキを施す。 内面 杯部、受部をヘラミガキし、脚部にヘラ原体による押圧がみられる。	色調 淡赤褐色 胎土 微粒の角閃石・雲母、微粒～1.0mm程度の長石を含む。 焼成 良好
55	壺 SD1	口径 13.8	張りの強い体部から屈曲し、外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。	外面 口縁部をヨコナデ。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はナデ。	色調 淡褐色 胎土 2.0～4.0mm程度の石英を含む。 焼成 良好
56	壺 SD1	口径 12.8	「く」の字形に屈折して内弯ぎみにのびる口縁部に至る。端部はわずかにつまみ上げぎみに終わる。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部は6条/13.5mmのタタキのあと部分的に4条/3.0mmのハケを施す。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部にヘラケズリを施す。	色調 茶褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角閃石と雲母を多く含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
57	甕 SD2	底径 4.5	ドーナツ状の底部である。	外面 4条/10.5mmのタタキ。 内面 ヘラ原体による押圧がみられる。	色調 淡白褐色 胎土 細粒の石英を含む。 焼成 良好
58	甕 SD4	口径 15.2	体部より屈曲する口縁部のみ遺存。端部は上方へつまみ上げ、端部側面には1条の凹線が巡る。	外面 内面 } ヨコナデ	色調 淡茶褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角閃石、長石を多く含む。 焼成 良好
59	甕 SD5	底径 4.6	ドーナツ状の底部であろう。	外面 4条/13.0mmのタタキ。 内面 不明。	色調 赤褐色 胎土 角閃石・長石・石英を含む。 焼成 良好
60	甕 SD5	底径 3.5	ドーナツ状の底部であろう。	外面 4条/11.0mmのタタキ。 内面 ヘラ原体による押圧がみられる。	色調 淡白褐色 胎土 微粒の角閃石を含む。 焼成 良好
61	壺 SD9上層	口径 13.5 最大径 15.6 器高 17.7	丸みをもって屈曲し、内寄ぎみに開いて長くのびる口縁部。端部近くで外反ぎみとなり、端部は外へつまむ。体部は中位に最大径をもつ扁平な球形である。 体部中位に焼成後の穿孔途中と思われる小孔がみられる。	外面 口縁部に10条/7.5mmのハケのあと端部近くと接合部にヨコナデ。胴部はヘラケズリのあとヘラミガキを施し、部分的にハケがみられる。 内面 口縁部をハケのあとヘラミガキすると思われるが磨耗を受け不明瞭である。接合部付近は指圧痕がみられ胴部はナデ。	色調 淡茶褐色 胎土 微粒の長石・くさり礫、1.0～2.0mm程度の石英・長石を含む。 焼成 良好
62	壺 SD9上層	口径 9.2 最大径 11.7 器高 14.1 底径 1.3	丸みをもって屈曲し、内寄ぎみに開くく口縁部。端部は尖りぎみに終わる。屈曲部内側は平坦になる。 体部は中位に最大径をもつ球形で、底部はわじかに平坦面がみられる。	外面 内面 全体に磨耗を受け不明。 口縁部にヘラミガキのあと暗文を施す。接合部近くに指圧痕が残り、胴部はヘラナデ。部分的にヘラ原体による押圧が残っている。	色調 淡茶褐色 胎土 微粒の長石・角閃石を含む。 焼成 良好
63	壺 SD9上層	底径 4.4	突出する平底で、中央部は若干凹む。上げ底状を呈する。	外面 内面 } 磨耗を受け不明	色調 赤褐色 胎土 1.0mm程度の石英を含む。 焼成 良好
64	壺 SD9上層		丸底の底部である。	外面 8条/5.0mmのハケを施す。 内面 ナデ。	色調 淡褐色 胎土 微粒の長石を含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
65	甕 SD9上層	口径 15.4	張りの弱い体部から屈曲してのびる短かい口縁部で、端部は丸く終わる。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部はハケを施す。 内面 ナデと思われる。	色調 淡茶褐色 胎土 微粒の長石を含む。 焼成 良好
66	甕 SD9上層	口径 15.0	体部から丸く屈曲し、外反する口縁部で、端部はわずかに上方へつまむ。	外面 胴部に4条/12.0cmのタタキを施す。 内面 磨耗を受け不明。	色調 赤褐色 胎土 花崗岩と粗粒の石英を含む。 焼成 良好
67	甕 SD9上層	口径 14.6	体部から屈曲して外反し、中位で屈折して、若干屈内寄ぎみとなる口縁部。端部は丸く終わる。	外面 内面 } 全体に磨耗を受け不明瞭であるが、内面胴部にヘラケズリがみられる。	色調 茶褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好。
68	甕 SD9上層	口径 14.7	「く」の字形に屈折し、外反する口縁部に至る。端部は外傾する平坦面となる。	外面 内面 } 全体に磨耗を受け不明瞭であるが、外面胴部にわずかにハケがみられる。	色調 淡茶褐色 胎土 0.5～2.0mm程度の石英・チャートを含む。 焼成 良好
69	甕 SD9上層	口径 15.5	「く」の字形に強く屈折し、外反する口縁部に至る。端部は上方へ尖りぎみに終わる。	外面 口縁部とハケのあとヨコナデ、胴部は9条/16.0mmのタタキのあと8条/8.0mmのハケを施す。 内面 胴部にヘラケズリ。	色調 茶褐色 胎土 微粒～2.0mm程度の角閃石を含む。 焼成 良好
70	甕 SD9上層	口径 15.2 最大径 16.5	「く」の字形に屈折し、若干内寄ぎみにのびる口縁部に至る。端部は外傾する平坦面となる。 体部の張りは弱い。	外面 胴部に10条/20.0mmのタタキのあと7条/12.5mmのハケを施す。 内面 胴部にヘラケズリを施す。	色調 茶褐色 胎土 微粒～1.5mm程度の角閃石・長石を含む。 焼成 良好
71	甕 SD9上層	口径 16.8	「く」の字形に鋭く屈折し、外反する口縁部に至る。端部はつまみ上げ、外傾する平坦面となる。 体部の器肉は極めて薄い。	外面 胴部に12条/21.5mmのタタキのあと6条/9.0mmのハケを施す。 内面 胴部をヘラケズリする。 全体に磨耗を受けている。	色調 淡茶褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
72	甕 SD9上層	口径 17.6	「く」の字形に屈折し、わずかに内寄ぎみにのびる口縁部に至る。端部はつまみ上げ、外傾する平坦面となる。 器肉は厚めである。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部に7条/8.5mmのタタキのあと6条/10.5mmのハケを施す。 内面 口縁部を6条/10.5mmのハケのあとヨコナデし、胴部にヘラケズリ。	色調 茶褐色 胎土 微粒～1.5mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
73	甕 SD9上層	口径 14.8	「く」の字形に屈折し、外反する口縁部に至る。端部はつまみ上げ、外傾する平坦面となる。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部にタタキがみられる。 内面 口縁部を4条/7.0mmのハケのあとヨコナデし、胴部にヘラケズリを施す。	色調 茶褐色 胎土 微粒の長石を含む。 焼成 良好
74	甕 SD9上層	口径 14.8	「く」の字形に屈曲し、外反する口縁部に至る。端部はつまみ上げ、直立する平坦面をつくる。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部に12条/25.0mmのタタキのあと5条/9.0mmのハケを縦く施す。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部にヘラケズリを施す。	色調 茶褐色 胎土 微粒～0.5mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
75	甕 SD9上層	口径 13.0	「く」の字形に屈折し、上位で内奇ぎみとなる口縁部でである。端部はつまみ上げ、直立する平坦面となる。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部にわずかにタタキが残る。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部にヘラケズリを施す。	色調 茶褐色 胎土 微粒の角閃石、微粒～1.0mm程度の長石を含む。 焼成 良好
76	甕 SD9上層	口径 16.6	75と同様であるが、端部のつまみ上げはさらに強くなる。	外面 口縁部をヨコナデする。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部にヘラケズリを施す。	色調 茶褐色 胎土 微粒～0.5mm程度の長石・角閃石を含む。 焼成 良好
77	甕 SD9上層	口径 13.8	「く」の字形に緩く屈折し、外反する口縁部となる。端部はつまみ上げ、外傾する平坦面となる。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部に6条/11.5mmのタタキを施す。口縁部下方にはタタキ原体による凹みが残る。 内面 口縁部を4条/9.0mmのハケのあとヨコナデし、胴部にヘラケズリを施す。	色調 茶褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角閃石を含む。 焼成 良好
78	甕 SD9上層	口径 15.0 最大径 18.5	丸みのある体部から「く」の字形に屈曲し、外反する口縁部に至る。端部はつまみ上げ、丸みのある平坦面となる。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部にタタキのあと5条/3.5mmのハケを施す。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部にヘラケズリを施す。	色調 茶褐色 胎土 微粒～1.5mm程度の角閃石を含む。 焼成 良好
79	甕 SD9上層	口径 16.8	「く」の字形に緩く屈折し、外反する口縁部に至る。端部は肯しくつまみ上げ、直立する内傾となる。体部の張りは強いようである。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部は10条/15.0mmのタタキのあと10条/15.0mmのハケを軽く施す。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部にヘラケズリを施す。	色調 淡茶褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
80	甕 SD9上層	口径 17.8	79と同様の形態である。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部に12条/18.0mmのタタキのあと5条/10.5mmのハケを軽く施す。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリのあと接合部近くに5条/10.5mmのハケを施す。	色調 茶褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
81	甕 SD9上層	最大径 19.4	球形に近い体部で、最大径はやや上方に位置すると考えられる。底部は丸底である。	外面 胴部上方を10条/18.0mmのタタキがみられ、底部から最大径部分にかけて7条/8.0mmのハケを施す。 内面 ヘラケズリである。	色調 茶褐色 胎土 微粒～1.5mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
82	甕 SD9上層	口径 15.5 最大径 20.3 器高 20.1	「く」の字形に屈折して外反ぎみにのびる口縁部で、端部はつまみ上げぎみに外傾する凹面となる。体部はやや上方最大径があり、倒卵形を呈し、尖りぎみの丸底をもつ。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部上方に11条/22.0mmのタタキがみられ、底部から最大径部分にかけて8条/10.0mmのハケを施す。 内面 口縁部をハケのあとヨコナデし、胴部にヘラケズリを施す。	色調 茶褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角閃石を含む。 焼成 良好
83	甕 SD9上層	口径 15.4 最大径 18.6 器高 18.2	「く」の字形に屈折して外反する口縁部で、端部はわずかにつまみ上げ、みに終わる。体部はやや上方に最大径があり、わずかに平坦な面を残す丸底をもつ。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部上方に13条/21.0mmのタタキがみられ、底部から最大径部分にかけて6条/7.5mmのハケを施す。 内面 口縁部を6条/7.5mmのハケのあとヨコナデし、胴部をヘラケズリする。	色調 淡茶褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
84	甕 SD9上層	口径 14.4 最大径 17.5 器高 17.4	「く」の字形に屈曲して直線的にのびる口縁部で、端部はつまみ上げぎみとなり外傾する平坦面をもつ。体部はやや上方に最大径があり、尖り底をもつ。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部全体を8条/15.5mmのタタキをあと7条/12.5mmのハケを施す。 内面 口縁部に8条/15.5mmのハケのあとヨコナデし、胴部をヘラケズリする。	色調 茶褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
85	甕 SD9上層	口径 14.4 最大径 18.3	「く」の字形に屈曲して外反する口縁部で、端部はつまみ上げ、端部側面は凹面となる。体部は張りが著しいが、最大径は上方にあると思われる。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部上方に9条/13.0mmのタタキがみられ、底部から最大径部分にかけて7条/7.0mmのハケを施す。 内面 口縁部に5条/6.0mmのハケのあとヨコナデし、胴部をヘラケズリする。	色調 淡茶褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
86	甕 SD9上層	口径 13.8 最大径 15.8 器高 14.8	「く」の字形に屈曲して外反する口縁部で、端部のつまみ上げは顕著である。また、下方へわずかに肥厚し、端部側面は凹面となる。体部は中位に最大径があり、球形に近く、尖りぎみの丸底をもつ。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部上方に10条/19.0mmのタタキがみられ、底部から最大径部分にかけて6条/9.0mmのハケを施す。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリする。	色調 淡茶褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
87	甕 SD9上層	口径 12.9 最大径 13.3 器高 13.5	「く」の字形に屈曲して外反ぎみにのびる口縁部で、端部は上方へ尖る。端部側面は垂立する平坦面となる。体部は86と同様であるが、口縁部に比べ、小型である。	外面 口縁部をヨコナデする。胴部上方は9条/14.0mmのタタキがみられ、底部から最大径部分にかけて7条/9.0mmのハケを施す。 内面 口縁部ヨコナデ、体部はヘラケズリ。	色調 灰褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
88	甕 SD9上層	口径 13.8 最大径 18.1 器高 19.1	丸く屈曲して外反した後垂立する口縁部で、上端部は丸く終わる。体部は上方に最大径のある卵球形でわずかに平坦面のみられる丸底をもつ。端部側面に7条/9.0mmの櫛描沈線を巡らす。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部上方に8条/13.0mmのハケを施す。底部から最大径部近くまでは6条/6.0mmのハケを施す。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリである。	色調 淡茶褐色 胎土 微粒の長石・角閃石を含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
89	甕 SD9上層	底径 3.7	ドーナツ状の底部である。	外面 4条/10.0mmのタタキを施す。 内面 ヘラナデである。	色調 淡褐色 胎土 微粒の長石・角閃石を多く含む。 焼成 良好
90	甕 SD9上層	底径 4.4	ドーナツ状の底部である。	外面 タタキを施す。 内面 ヘラナデである。	色調 淡灰褐色 胎土 粗粒の石英を含む。 焼成 良好
91	甕 SD9上層	底径 4.4	突出する平底である。	外面 4条/10.0mmのタタキを施す。 内面 ナデである。	色調 淡灰褐色 胎土 雲母、粗粒のチャート・石英を含む。 焼成 良好
92	甕 SD9上層	底径 3.8	おしつぶしたような丸底をもつ。	外面 6条/12.5mmのハケを施す。 内面 ヘラケズリである。	色調 赤褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角閃石を含む。 焼成 良好
93	甕 SD9上層		尖り底である。	外面 9条/17.5mmのタタキを施す。 内面 ヘラケズリである。	色調 茶褐色 胎土 微粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好
94	鉢 SD9上層	口径 36.0	体部から「く」の字形近くに屈折し、内弯ぎみにのびる口縁部に至る。端部は外傾する平坦面となる。	外面 磨耗を受け不明。 内面 口縁部はヨコナデすると思われる。胴部はヘラケズリである。	色調 淡褐色 胎土 微粒の長石・雲母、粗粒の石英・チャートを含む。 焼成 良好
95	鉢 SD9上層	口径 20.0 器高 6.9	尖がりぎみの底部から内弯しながら開き、口縁端部に至る。端部は外傾する凹面となる。	外面 ヘラケズリがみられる。 内面 8条/12.0mmのハケを施す。	色調 淡褐色 胎土 微粒の長石を含む。 焼成 良好
96	小型鉢 SD9上層	口径 13.4 器高 6.5	平底な底部から内弯ぎみに開き、口縁部との境に稜を作る。口縁部は外反しながら直立し、端部は丸く終わる。	外面 口縁部をヨコナデし、体部は粗雑なナデ。 内面 ヘラケズリのあと平滑にし、部分的に7条/7.0mmのハケを施す。	色調 淡白褐色 胎土 微粒の石英・長石を含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
97	小型鉢 SD9上層	口径 10.3	深い半球形の体部から くびれた後屈曲し、内弯ぎみにのびる口縁部に至る。端部は薄く、尖りぎみに終わる。	外面 体部にヘラケズリのあとがみられる。 内面 口縁部をヨコナデし、体部はヘラナデのあとナデ。	色調 淡赤褐色 胎土 チャート・雲母・くさり礫を含む。 焼成 良好
98	小型鉢 SD9上層	口径 10.7 底径 1.8 器高 6.6	深い半球形の体部から屈曲し、内弯してのびる口縁部に至る。端部は内に丸く終わる。底部はわずかに凹みを残す丸底である。	外面 体部にヘラケズリのあとがみられる。 内面 全体に磨耗を受けている。	色調 淡赤褐色 胎土 くさり礫を含む。 焼成 良好
99	小型鉢 SD9上層	口径 10.2 器高 7.2	98と同様の体部から、内に稜を作って屈曲し、外傾する口縁部に至る。端部は薄く尖りぎみに終わる。底部は丸底である。	外面 体部にヘラケズリのあとがみられる。 内面 全体に磨耗を受けている。	色調 赤褐色 胎土 くさり礫多く、微粒の石英をわずかに含む。 焼成 良好
100	小型器台 SD9上層	口径 9.1 裾径 9.6 器高 7.9	基部から外反ぎみに開き、屈曲して立ち上がる口縁部に至る。端部は丸く終わる。脚部は基部より直線的に拡がり、端部は丸く終わる。	外面 杯部、脚部に6条/6.5mmのハケ。 内面 脚部に6条/6.5mmのハケを施す。	色調 赤褐色 胎土 くさり礫、微粒の長石を含む。 焼成 良好
101	小型器台 SD9上層	口径 9.3 裾径 9.0 器高 10.0	100と同様の杯部をもつが、口縁部は上方へ尖りぎみに終わる。 脚部は若干内弯ぎみにのび、端部は外へ薄くなって終わる。	外面 脚部に8条/8.0mmのハケ。 内面 杯底部と脚部に8条/8.0mmのハケを施す。	色調 赤褐色 胎土 くさり礫と微粒の長石を含む。 焼成 良好
102	小型器台 SD9上層	口径 9.8 裾径 12.4 器高 10.2	浅い半球形の杯部で、端部は外傾する平坦面をもつ。脚部は基部より漏斗状に大きく開き、端部は下方に尖りぎみに終わる。 脚部3方に円孔を穿つ。	外面 ヘラケズリのあと脚部にヘラミガキがみられる。 内面 脚部に7条/10.0mmのハケのあとナデをおこなう。	色調 淡赤褐色 胎土 微粒の長石を含む。 焼成 良好 全体に磨耗を受けている。
103	高杯 SD9上層	口径 23.5 裾径 15.5 推定器高16.4	杯底部から一旦屈曲し、外傾して長くのびる口縁部に続く。端部は外傾する円面となる。底間きの柱状部から丸く屈曲し、大きく拡がる裾部に至る。端部は丸く終わる。 裾部4方に円孔を穿つ。	外面 杯部・受部に10条/17.0mmのハケを施し、柱状部はヘラケズリのあと部分的にハケ、裾部は9条/5.5mmのハケを施す。 内面 受部に10条/17.0mmのハケがみられ、裾部に9条/9.0mmのハケを施す。	色調 淡赤褐色 胎土 くさり礫を多く含む。 焼成 良好
104	高杯 SD9上層	口径 21.7 裾径 14.1 器高 17.4	平坦な杯底部から屈折し、外傾して長く立ち上がる口縁部に続く。端部は尖りぎみに終わる。中位まで中実の柱状部から屈曲し、内弯ぎみに開く裾部に至る。端部は内に丸く終わる。 裾部4方に円孔を穿つ。	外面 柱状部にヘラケズリがみられ、受部・脚部に9条/14.0mmのハケを施す。 内面 受部、裾部に9条/14.0mmのハケを施す。	色調 淡白褐色 胎土 微粒の長石を多く含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
105	壺 SD10	口径 13.4 最大径 15.2	「く」の字形に屈出して外反する口縁部で、上位ではわずかに外折する。端部は細く尖りぎみに終わる。体部は球形に近いと思われる。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部は6条/7.0cmのハケを施す。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラナデ。	色調 淡褐色 胎土 石英・チャートを含む。 焼成 良好
106	小型器台 SD10	口径 9.4	基部より直線的に開く杯底部から稜をもって屈折し、外反ぎひに直立する口縁部に至る。端部は外へつまんで終わる。	外面 内面 ヘラミガキを施す。	色調 乳褐色 胎土 微粒の雲母・くさり礫を含む。 焼成 良好
107	高杯 SD10		平坦な杯底部から鋭い稜をもって屈折し、直線的にのびる口縁部に至る。	外面 内面 全体に磨耗を受け不明。	色調 淡茶褐色 胎土 微砂～1.0mm程度の長石・角閃石を多く含む。 焼成 良好
108	高杯 SD10	口径 21.3 稜径 15.2 器高 13.8	杯底部から丸みをもって口縁部へ続く。端部は外へつまみぎみに丸く終わる。柱状部は中空は比較的太く、屈折して内弯ぎみにのびる高い裾部に至る。 裾部4方に円孔を穿つ。	外面 受部にヘラミガキ。柱状部にヘラケズリがみられる。 内面 受部にヘラミガキ。	色調 淡赤褐色 胎土 微粒～1.0mmの長石・石英・くさり礫を含む。 焼成 良好 全体に磨耗を受けている。

第6節　第6次調査

I　調査の概要

建設予定地内にA・B2ヶ所のトレンチを設定した。Aトレンチは5.5×5.5mで調査を開始したが、一部2×2mを拡張した。Bトレンチは3×3mで調査を開始し、最終的に西側へ1m拡張した。調査総面積は約46㎡である。

両トレンチともに上面から60～70cmまでの盛土・旧耕土・床土の部分を機械掘削し、以下約60cmを人力で発掘した。

II　層序

基本層序は第1層耕土、第2層床土、第3層褐色土、第4層暗黄褐色土である。第3層は須恵器・土師器・瓦器等の破片を多量に含む。第4層は布留式の古相の包含層である。

Bトレンチの北東隅を層位確認のため掘り下げたところ、OP+7.5m付近の砂層より庄内式

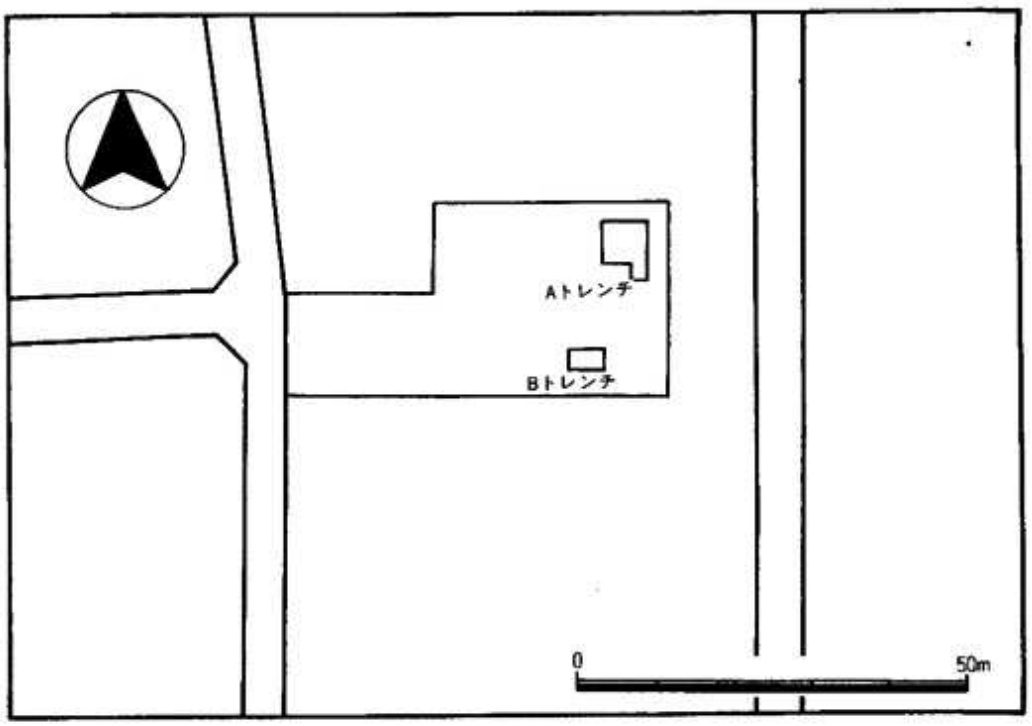


図39　調査地設定図

裏、OP+7.0m付近の砂層より布留式の新相の土器を検出した。このことから、古墳時代前期・中期において層序の逆転現象が生じたことが認められる。

Ⅲ　検出遺構

1）Aトレンチ

井戸・溝・柱穴の他、不整形の浅い落ち込みを検出した。これらの遺構は、すべて第4層(暗黄褐色土)を堀り込んで形成されている。しかし、遺構そのものが浅いことや、遺構集中部分における第4層上面のレベルが他と比べて全体に10～30cm低いことなどから、これらの遺構は後世に削平を受けたものとみられる。埋土は井戸を除いてそのほとんどが、第8層の褐色土である。

SE1

直径約80cmを測る素掘りの井戸である。井戸内埋土上層より若干の布留式の時期の土器を検出した。埋土を掘り下げたところで木製品(図40)・自然木を含む青灰色粘土層が確認された。この層はBトレンチ掘下部においてみられた層に対応するものと考えられる。なお、この井戸はSP5に切られる。

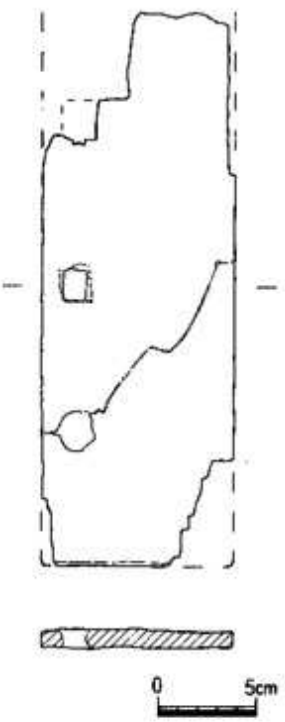


図40　SE1出土木製品

SD1

幅約40cm・深さ約10cmを測り、東から西に流れる溝である。埋土中より土師器・須恵器・瓦器の磨滅した小片が出土した。

柱穴群(SP1～SP14)

柱穴と考えられるものを多数検出したが、確実な建物を復元することはできなかった。SP2・SP3・SP5・SP8の埋土中には、磨滅した土師器の細片が含まれている。

土坑(SK1～SK4)

不整形なもので深さも一様でない。遺物はSK2からは須恵器杯蓋1点が出土した他は、いずれも磨滅した土師器・須恵器の小片である。なお、SK3の埋土下層には遺物を含まない。

2）Bトレンチ

トレンチ中央部で、第4層を掘り込んだ土坑を検出した。検出時においては一基の土坑と考えていたが、掘削の結果基底部で幅約35cmの南北に延びる畦状遺構によって、東西に分かれることが判明した。西側のＳＫ１は土器片を多量に含むが、東側のＳＫ２は土器片をほとんど含まない。埋土は両土坑とも、砂質土が混入する暗灰褐色土の上面に暗灰褐色粘質土が堆積している。なお、ＳＫ１とＳＫ２を区画する畦状遺構は、土坑掘削時の第4層削り出しによるものであり、盛土によるものではない。

また、ＳＫ１の北側の第4層中において、土師器片がみられたので精査を行なったが、遺構は存在しなかった。このことから、第4層は古墳時代前期の包含層であると考えられる。

なお、トレンチ北東隅を約１ｍ掘り下げたところ、川の痕跡と考えられる砂層および、その下のＯＰ十約6.9ｍで黄灰色粘土質土層、青灰色粘土層を確認したが、年代を決定する遺物は得られなかった。

ＳＫ１

上面は最大長約2.45ｍ・中央部の幅約１ｍ、底面は最大幅約2.2ｍ・中央部の幅約0.5ｍを測り、断面は舟底形を呈する。

出土した遺物は、須恵器・土師器のみである。主たる遺物は西から土師器片口鉢・同直口壺・同鉢・同把手付鉢・同二重口縁壺・同鉢、須恵器高杯、土師器高杯、須恵器高杯という順で、基本的には埋土の上層中に遺存していた。なお、土坑の東端において土器は皆無であった。須恵器高杯のように完全に破砕されていてすべてが揃わないものや、１個の破片のみのものがあ

反面、完存の土師器壺や、破砕されていても部分がすべて揃っているものがあるなど、出土状況は多様であるといえよう。

以上より、ＳＫ１は単なる廃棄物投棄用のものではなく、土坑墓とも考え難く、現段階においては性格不明の特殊遺構と考えている。ただ、須恵器の大部分が完全に破砕された高杯であることは、幾分祭祀に伴なう性格を示すものと言えるかもしれない。

ＳＫ２

全容が明らかではないが、判明している部分はＳＫ１より畦をはさんで東へ続き、そこに南側から浅い溝が流れ込んでいるという状態である。ほぼ水平な底面は南北長約0.8ｍを測り、断面は舟底形を呈する。底面の標高はＳＫ１とほぼ同じで、トレンチ南端の溝底部より0.2ｍ

ほど低い。

Ⅳ　出土遺物

1）Aトレンチ出土遺物（図40・42）

第3層出土遺物

須恵器には杯身(4)・杯蓋つまみ(7)があり、土師器には高杯(9)・土錘(10)・甕(17)・羽釜(18)等がある。他に土師器・須恵器の小片が出土した。

第8層上面出土遺物

この層中からは土師器・須恵器・瓦器・瓦等の小片が多数出土したが、その中で図化できたのは6個体である。須恵器は杯身(2・3)・杯蓋つまみ(5・6)・片口鉢(19)、土師器は高杯(8)である。

SK2出土遺物

(1)は須恵器杯蓋である。天井部外面にはヘラ切りの未調整痕が残る。なお、天井部内面に「--」文字形のヘラ描き記号文がある。

SE1上層出土遺物

(11～40)は土師器高杯であると考えられる。(15)は土師器甕、(16)は土師器鉢である。図40は青灰色粘土層より出土した板材である。現状の法量は長さ28.3cm・幅9.8cm・厚さ1.0㎜である。長辺の片側端より1.4cmのところに1.5×1.0cm程度の枘穴状のものが、6cm間隔で3ヶ所に認められる。柾目材である。

2）Bトレンチ出土遺物（図43～45）

SK1出土遺物

掘削時において上面より取り上げた土器も含めて、実測に堪え得るものは須恵器15個体、土師器14個体であった。うちわけは須恵器が蓋杯6・高杯(蓋を含む)7・壺1・甕1、土師器が壺3・高杯5・鉢4・把手1・椀1である。

土師器直口壺(2)が完存していた他は、すべて破片で遺存していた。また、同一個体の破片がほぼ集中していることや、須恵器でさえ完全に割れていることなどを考えると、破片で出土

した土器については土坑に入れられた際に意識的に割られたもの、もしくは後世に削平等を受けた際に破壊されたものと考えられよう。須恵器は、陶邑II型式第4段階～第5段階に比定できる。①

なお、遺構の項でも述べたように、土坑の掘り込まれている第4層が古墳時代前期の遺物包含層である点を勘案すると、土師器壺(3)は土坑が掘削された際に出土し、再び土坑内に投入されたものではないかと考えられる。

ＳＫ２出土遺物

羽釜(47)・甕等の破片が数点出土した程度である。ＳＫ１の示す年代と大きな隔たりは無いと思われる。

包含層出土遺物

第3層中の土師器・須恵器、第4層中およびトレンチ北東隅深掘部の砂層中より出土した土師器がある。

時期については、第3層中の須恵器には5世紀代のものから7世紀以降のものがあり、第4層中の二重口縁壺(35)・高杯(30)等は庄内式の時期のものである。また、トレンチ北東隅深掘部の砂層からは、上層より庄内式の甕が、下層より布留式の新相の甕・壺等が出土しており、砂層内において層位の逆転現象がおこったことを示している。

Ｖ まとめ

Ａトレンチの顕著な遺構としては、井戸・柱穴群があげられる。井戸は出土した土器により、布留式の新相に比定できる。その他の遺構については、年代決定の資料に乏しく、正確な時期、および性格は知り得なかった。しかし、このように多くの柱穴が存在することから、古墳時代以降に建物が存在したことが考えられる。

Ｂトレンチでは、多量の土師器・須恵器を伴なう土坑を検出した。なお、これらの土器は出土状況による一括資料と考えられる。また、この土坑は、高杯が破砕された状態でまとまっていたことなどから、特殊は性格をおびるものと判断される。

以上のことにより、今回の調査において東郷遺跡の性格が一端なりとも解明できたのではないかと考える。なお、特殊な土坑とそこに含まれていた6世紀後半の土師器は、同時期の数少ない古墳時代研究の一助になるものと思われる。

〔注　記〕

1　大阪府教育委員会『陶邑Ⅲ』1978年

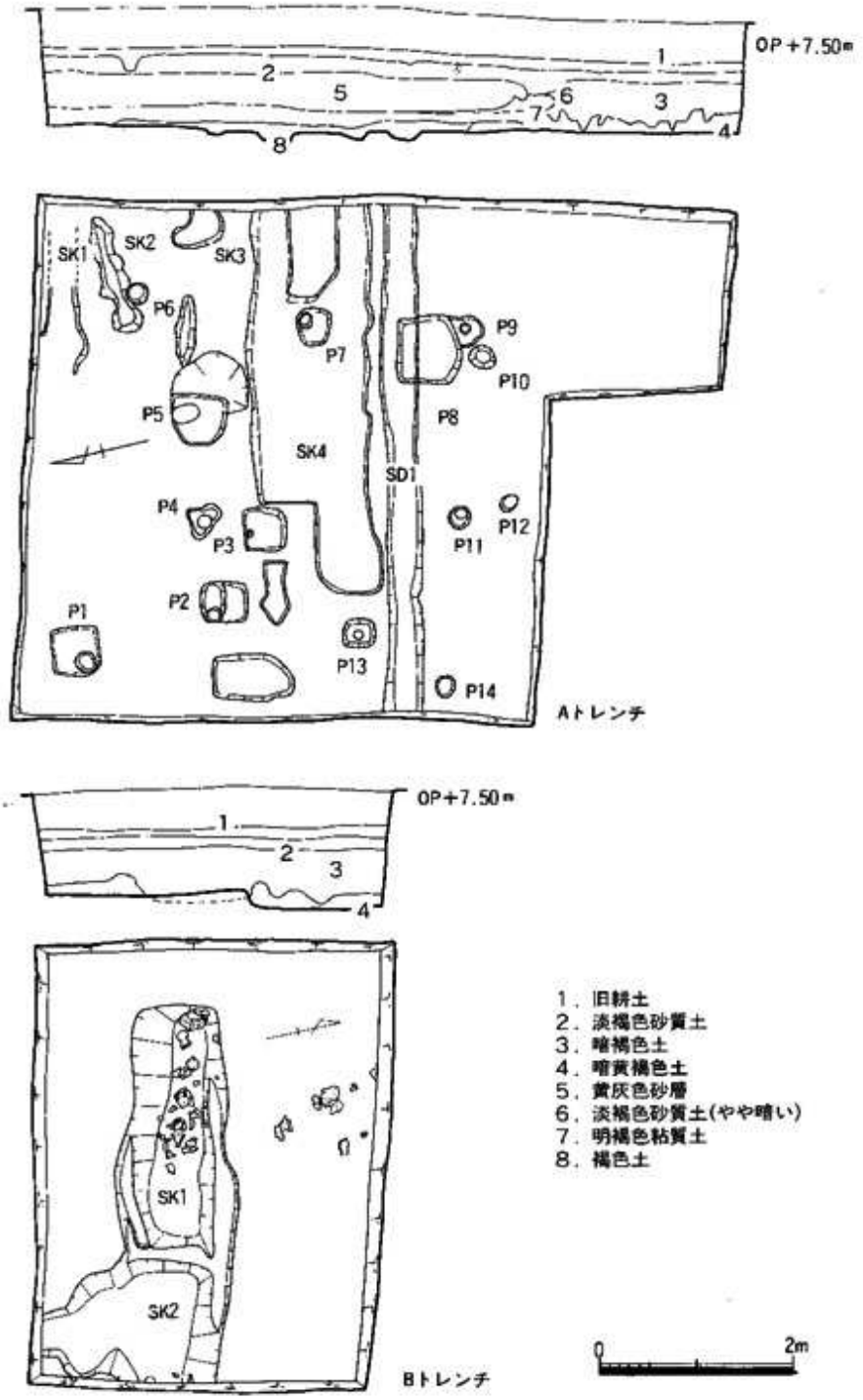

OP+7.50m
1
2
5
6
3
7
4
8
SK1
SK2
SK3
P6
P7
P9
P10
P5
P8
SK4
SD1
P4
P3
P12
P11
P2
P1
P13
P14
Aトレンチ
OP+7.50m
1
2
3
4
SK1
SK2
Bトレンチ
1．旧耕土
2．淡褐色砂質土
3．暗褐色土
4．暗黄褐色土
5．黄灰色砂層
6．淡褐色砂質土(やや暗い)
7．明褐色粘質土
8．褐色土
0
2m

図41　平断面図

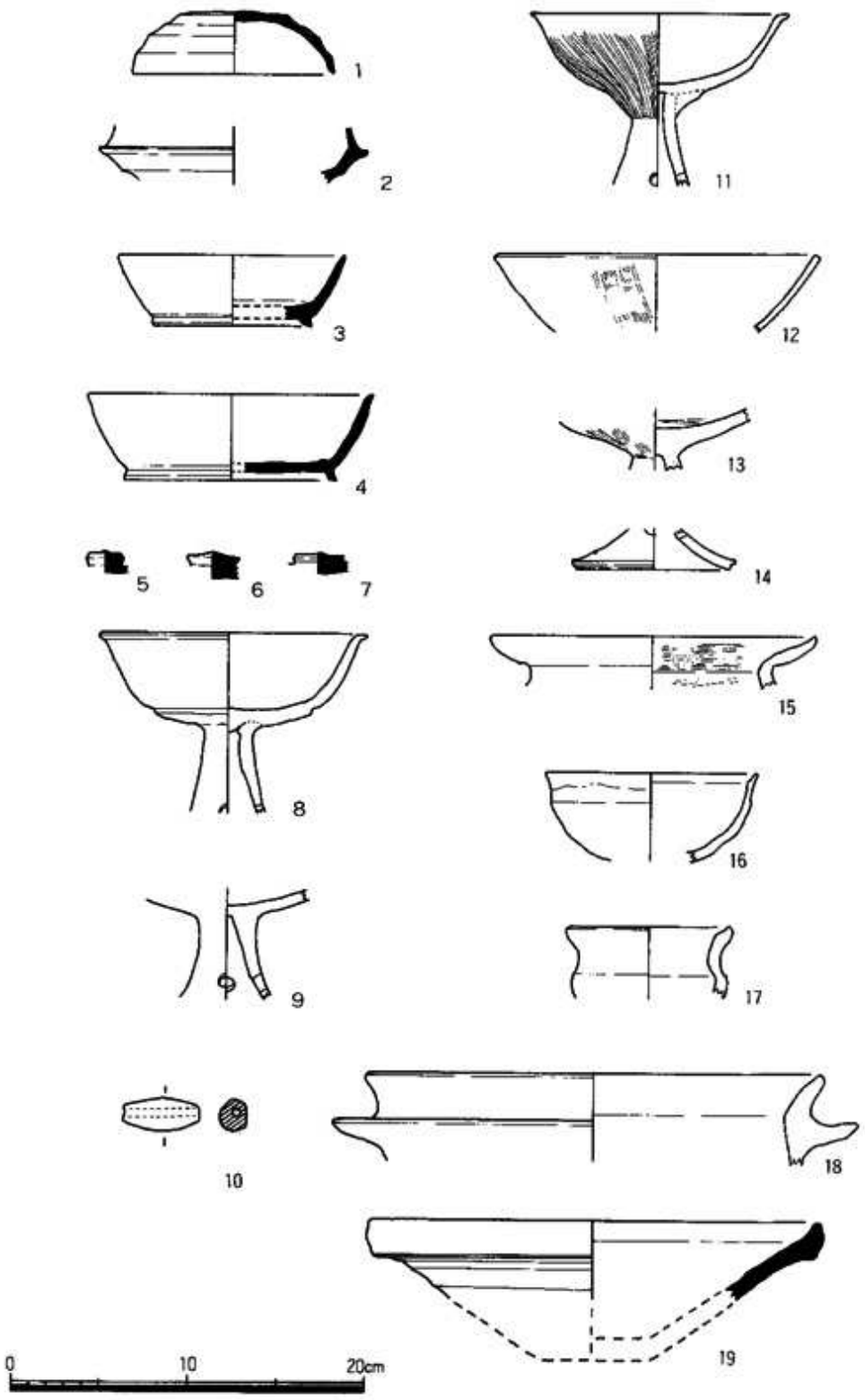


図42　Aトレンチ出土遺物実測図

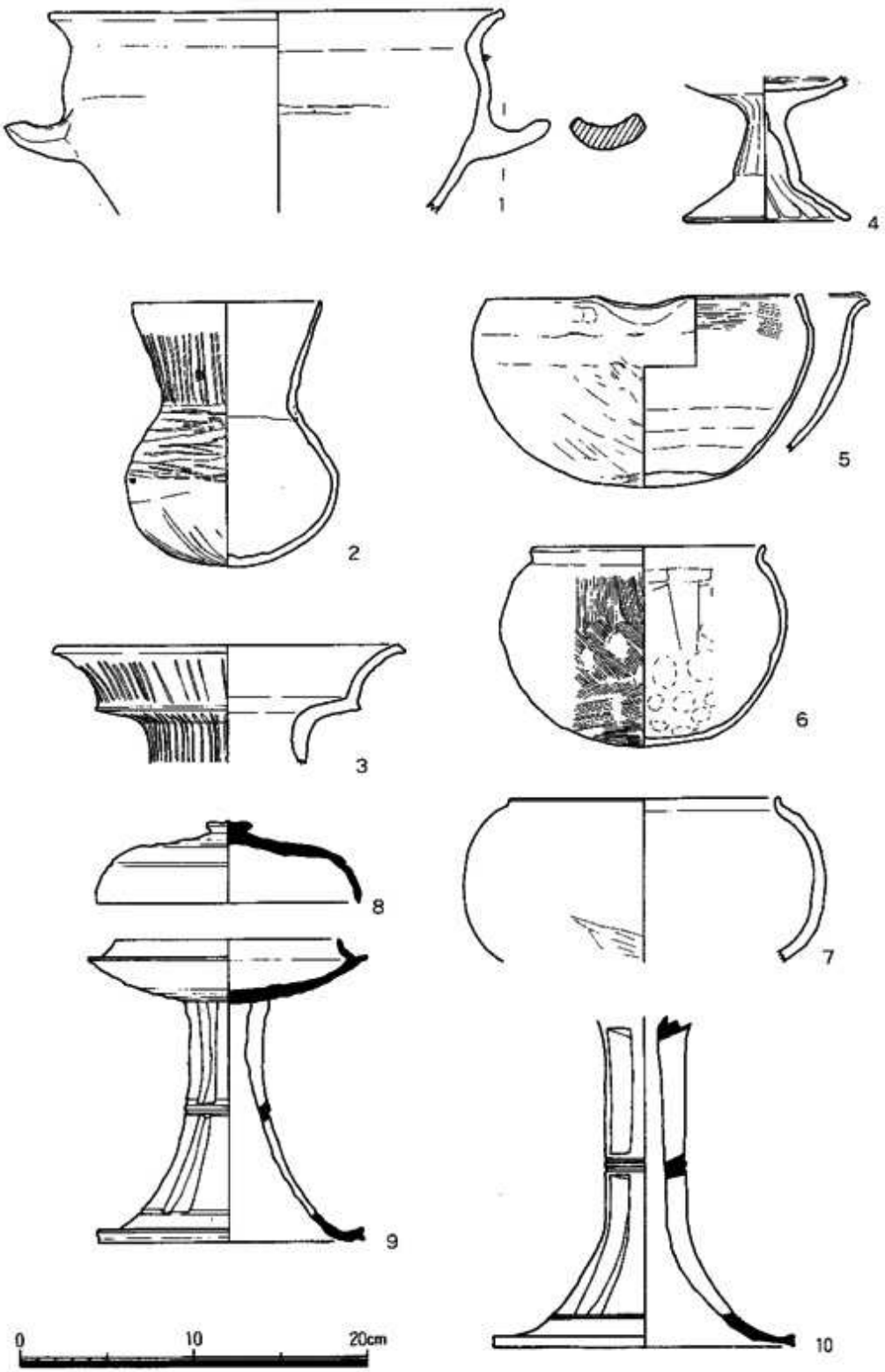


図43　Bトレンチ出土遺物実測図1

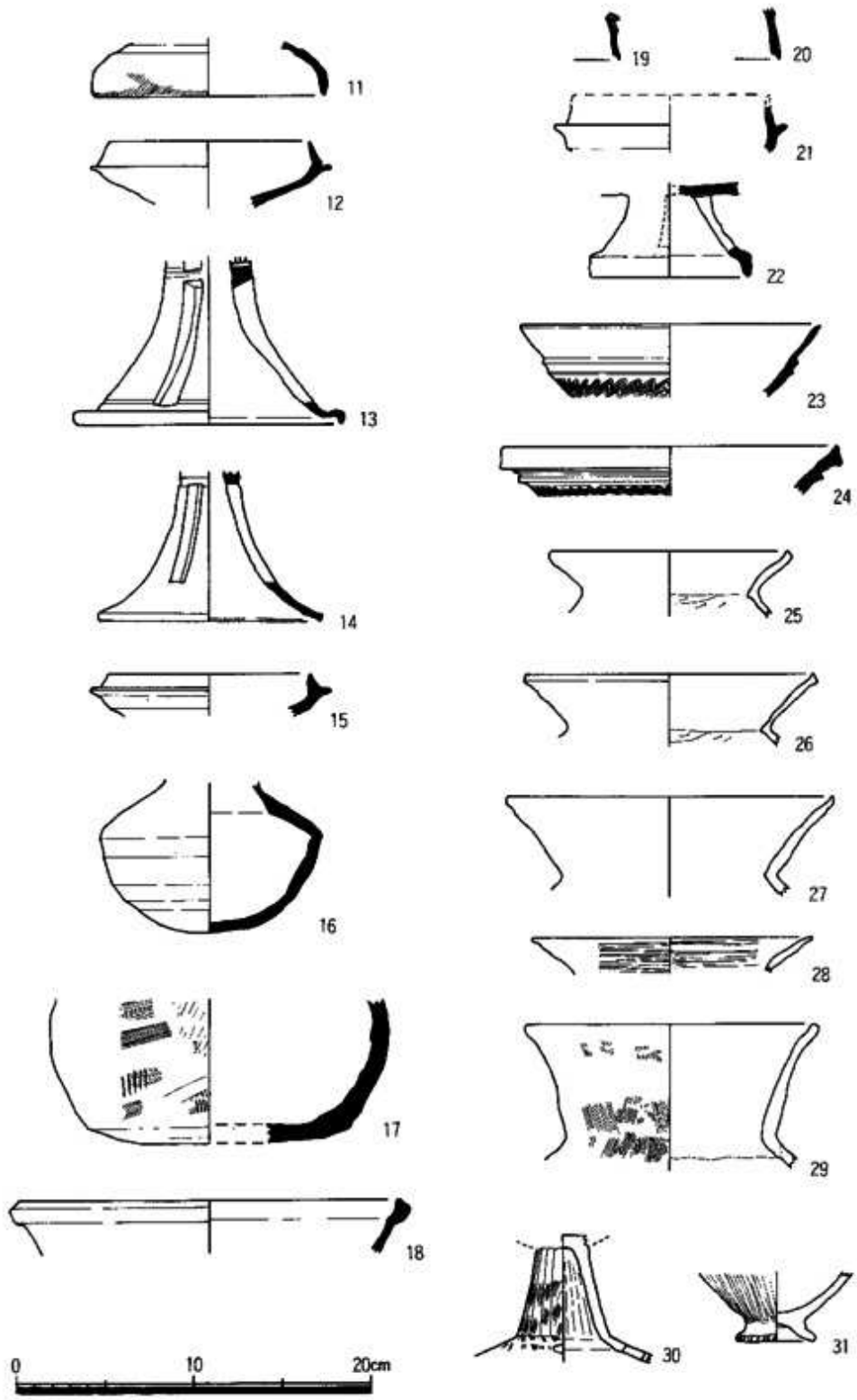


図44　Bトレンチ出土遺物実測図2

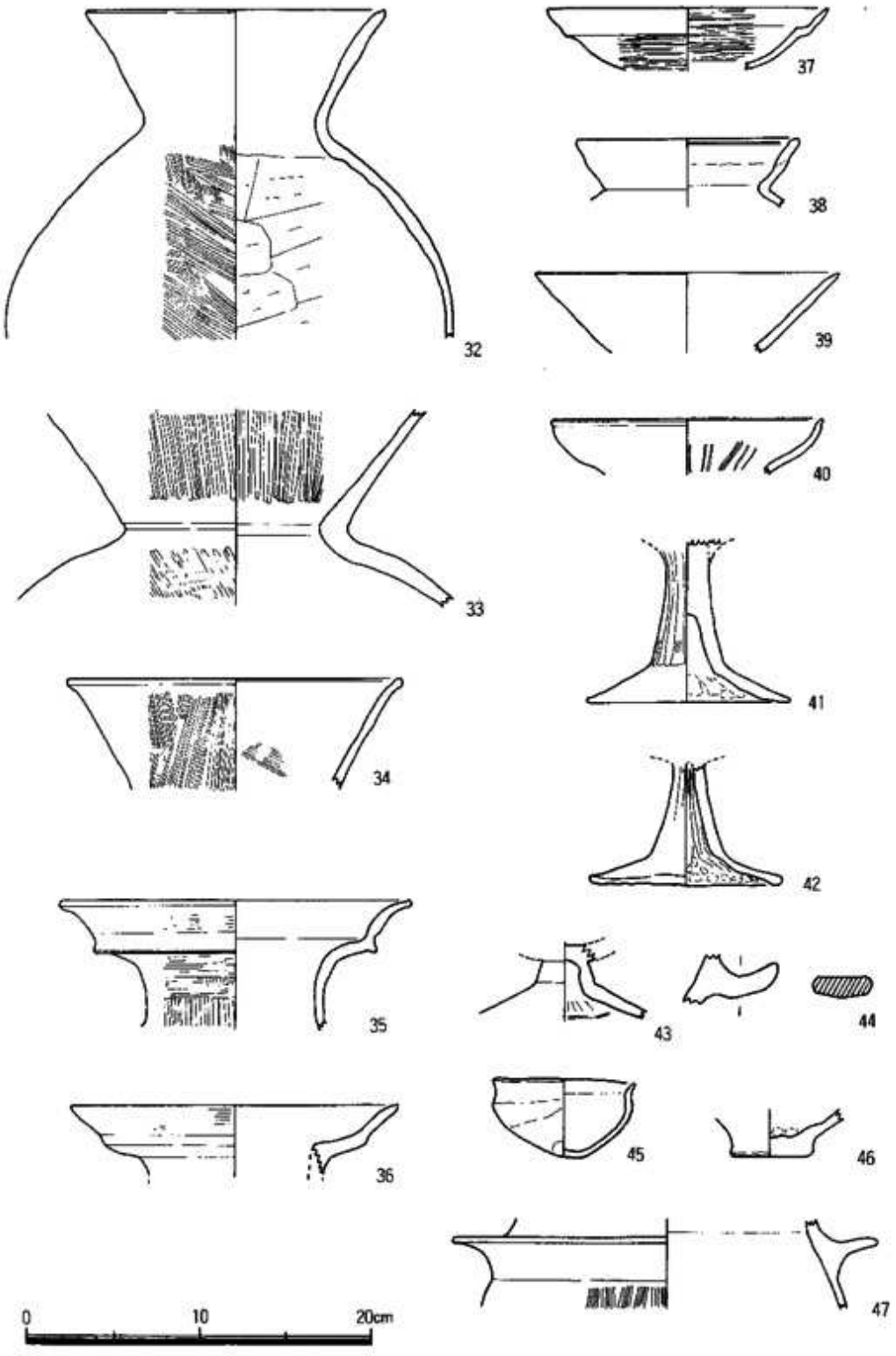


図45　Bトレンチ出土遺物実測図3

Ⅵ　遺物観察表

1）Aトレンチ

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
1	蓋杯(蓋) SK2	口径 11.3 器高 3.6	口縁部はやや外反して下る。 天井部は平らに近い。	外面　半径6cm以内は回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。 内面　中心付近は不整方向のナデ調整。他は回転ナデ調整。	色調　淡灰色 胎土　径2mm以下の砂粒を含む。 焼成　良好堅緻 残存　約½
2	蓋杯(身) 第8層上面	受部径 15.2	たちあがりは内傾してのびる。 受部は短かく、端部はやや鋭い。	外面　半径6.2cm以内は回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。 内面　回転ナデ調整。	色調　淡青灰色 胎土　径1mm以下の砂粒を少量含む。 焼成　良好堅緻 残存　受部約½
3	蓋杯(身) 第8層上面	口径 12.8 高内径 9.0 器高 4.1	口縁はやや外反しながら上外方にのびる。 体部はゆるやかに内弯して立ち上る。	外面　底部はヘラ切り未調整。 他は回転ナデ調整。 内面　回転ナデ調整。	色調　淡青灰色 胎土　精緻 焼成　良好堅緻 残存　約½
4	蓋杯(身) 第3層	口径 18.2 高内径 12.0 器高 4.9	体部はゆるやかに内弯して立ち上る。	外面　底部はヘラ切り未調整 他は回転ナデ調整。 内面　底部は弱いナデ調整 他は回転ナデ調整 高台はハリツケ	色調　灰青色 胎土　精緻、径1mm以下の砂粒を少量含む。 焼成　良好堅緻 残存　約½
5	蓋杯(蓋) 第8層上面	つまみ径 2.1 つまみ高 0.8	基部が太い扁平な擬宝珠様つまみ。	外面　回転ナデ 内面　不整方向のナデ	色調　灰色 胎土　精緻、径1mm以下の砂粒を含む。 焼成　良好 残存　つまみ完存
6	蓋杯(蓋)	つまみ径 2.8 つまみ高 0.8	扁平な擬宝珠様つまみ。	外面　回転ナデ 内面　不整方向のナデ	色調　淡灰色 胎土　精緻、径1mm以下の砂粒を含む。 焼成　良好 残存　つまみ完存
7	蓋杯(蓋)	つまみ径 2.8 つまみ高 0.6	扁平な擬宝珠つまみ。	外面　回転ナデ 内面　不整方向のナデ	色調　淡灰色 胎土　精緻、径1mm以下の砂粒を少量含む。 焼成　良好 残存　つまみ完存

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
8	高杯 第3層上面	口径 15.2	底部から口縁部にかけて段を有する。脚部は底部に貼りつけている。段より口縁部にかけ内弯し端部は、やや外弯	外面 内面 } 器表面磨滅のため不明	色調 淡赤褐色～白灰色 胎土 径5～1㎜程度の砂粒を含む。(剥離のため数多し) 焼成 良好 残存 杯部はぼ完存
9	高杯 第3層		口および杯部の一部を欠く。脚部の4方透しは外側より穿孔	外面 内面 } 磨耗が激しく不明脚部内面にしぼり痕がみられる。	色調 赤褐色 杯部内面は灰褐色 胎土 径2㎜以下の砂粒および金雲母を含む。 焼成 良好 残存 杯部上半完存
10	土錘 第3層	径 1.8 孔径 0.5 全長 4.4	外面の一部が扁平 孔は中心よりややずれる。		色調 淡褐色 胎土 径0.1㎜程度の細砂粒を含む。 焼成 良好 残存 完存
11	高杯 SE1上層	口径 14.7	杯底部は外弯した後、やや内弯して口縁部に至る。 口縁部は、外弯しながら端部に至り端部は鋭い。 脚部の透しは中心よりずれる。	外面 口縁部はヨコナデ 脚部は不整方向のナデ 体部に1cmあたり7条のハケ目をもつ。 内面 口縁部はヨコナデ 他は不整方向のナデ	色調 赤褐色 胎土 径1㎜未満の赤色粒・金雲母等を含む。 焼成 良好 残存 杯部½および脚部上半
12	高杯 SE1上層	口径 18.0	やや内弯気味に立ち上がり、口縁端部は平面で終わる。	外面 1cmあたり8条の擬方向ハケの後、ヨコナデ調整 内面 ヨコナデ調整	色調 淡赤褐色 胎土 径1㎜～0.1㎜の砂粒を多量に含む。 焼成 良好 残存 口縁部約½
13	高杯 SE1上層		杯底部はわずかに外上方に伸びてゆき、脚部は外側に拡がる。	外面 底部に1cmあたり6～7本のタテハケを施す。 内面 不整方向のナデ 脚部の内面もナデを施す。	色調 淡赤褐色 胎土 径2㎜～0.1㎜の砂粒を含む。 焼成 良好 残存 杯部約½
14	高杯 SE1上層	裾径 9.2	裾部がゆっくり外弯気味に伸びる。透しは外側より穿孔されている。	外面 内面 } 磨滅が激しく不明 端部はヘラのようなものでナデている。	色調 赤褐色 胎土 径1㎜以下の細粒を含む。 焼成 良好 残存 脚部約½
15	壺 SE1上層	口径 18.4	胴部より「く」の字形に内弯して口縁部に至る。端部は丸味をもって内弯する。	外面 6㎜あたり5本の横方向ハケを施す。 内面 口縁部は外面と同じ。胴部はヨコナデ	色調 淡赤褐色 胎土 径2㎜以下の白色砂粒を含む。 焼成 良好 残存 口縁部約½

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
16	椀 SE1上層	口径 12.0	体部は内弯しながら立ち上り、口縁部は外反気味に伸びる。頸部は鋭い。	外面 体部は不整方向のケズリを施し口縁部は強いナデ。 内面 口縁部は外面と同じ。体部はタテ方向のハケ。	色調 暗赤褐色(外面) 灰褐色 (内面) 胎土 径1㎜以下の砂粒を含む。 焼成 良好 残存 約¼
17	壺 第3層	口径 9.0	体部より外弯しつつ斜上方に伸びる。	外面 体部は不整方向のナデを施し他はヨコナデ 内面 体部はヘラ削りを施し、他はヨコナデ	色調 赤褐色 胎土 2㎜～0.1㎜以下の砂粒を含む。 焼成 良好 残存 約¼
18	羽釜 第3層	口径 25.6	口縁部は上外方に延びり鍔は口縁直下にありやや上方に伸びる。	外面 ヨコナデ 内面 口縁部はヨコナデ、その他はナデ	色調 赤褐色 胎土 2㎜～0.1㎜以下の石英・長石・金雲母を含む。 焼成 良好 残存 鍔以上約¼
19	鉢 第8層上面	口径 25.6	体部ははぼ上外方に伸び、口縁端部は肥厚している。	外面 回転ナデ 内面 口縁端部は強いナデを施し、他はナデ	色調 青灰色 胎土 約1㎜以下の砂粒を含む。 焼成 良好 残存 口縁部約¼

2）Bトレンチ

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
1	把手付鉢 SK1	口径 26.0	底部は欠損するが、球状の体部を有し、外反する口縁部につながる。口縁端部は丸くおさめ、把手は器高の約½の位置に対称に2個貼り付ける。	外面 口縁部はヨコナデを施し、体部はハケ調整の後ナデを施す。 内面 ヨコナデを施す。	色調 赤褐色 胎土 径1㎜以下の砂粒を少量含む。 焼成 良好 残存 約¼
2	直口壺 SK1	口径 10.6 最大径 12.2 器高 15.4	やや外反する口縁部を有し、口縁端部は鋭く、内弯気味に終る。体部はやや扁平な球状を呈し、底部は丸底である。	外面 口縁部から体部上半部にかけては横方向ハケの後ヨコナデおよび横方向のヘラミガキを施す。体部下半部より底部にかけてはヘラケズリを施す。体部には巻上げ痕を残す。 内面 接合痕が残る。	色調 赤黄褐色 胎土 径2㎜以下の砂粒を少量含む。 焼成 良好 残存 完存
3	複合口縁壺 SK1	口径 19.6	複合口縁の壺である。口縁部は上外方にのび口縁端部は面を有する。屈折部の稜は鋭く、体部へのつながりはゆるやかな曲線をえがく。	外面 ヨコナデの後横方向のヘラミガキを施す。 内面 ヨコナデを施す。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 良好 残存 約½

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
4	高杯 SK1	裾径 9.2	杯上部は欠損するが、基部はやや細く、ややふくらんで脚裾部にとり着き、脚端部は丸くおさめる。	外面 杯部から脚部にかけて指による成形痕が残る。 内面 杯部はヘラミガキを施し、脚裾部は強い指おさえを施す。	色調 赤褐色～淡橙色 胎土 径2㎜以下の砂粒を少量含む。 焼成 良好 残存 約½
5	片口鉢 SK1	口径 18.0 器高 10.7	半球形を呈する体部を持ち口縁はやや内弯する。口縁端部は面を持つ。底部はやや扁平で肉厚である。片口部は口縁をやや外側にひねり出す。	外面 口縁部はヨコナデを施し、指頭圧痕が残る。体部から底部にかけてヘラケズリを施す。 内面 板状工具によるナデの後ヨコナデを施す。	色調 赤橙色 胎土 径1㎜以下の砂粒を含むが精緻である。 焼成 良好 残存 約½
6	鉢 SK1	口径 13.3 器高 11.6	外反する口縁部からやや扁平な球状を呈する体部につながり底部は丸底である。口縁端部は丸くおさめる。	外面 口縁部強いヨコナデ、肩部ヨコナデ。体部は上方よりタテハケ、左上がりハケ、横方向ハケを施す。 内面 口縁部ヨコナデ。体部上位板状工具によるナデ、下位には指頭圧痕が残る。	色調 赤褐色 胎土 径1㎜以下の砂粒を含む。 焼成 良好 残存 完存
7	鉢 SK1	口径 15.4	ほぼ直立する口縁部で、端部は丸くおさめる。扁平な球状を呈する体部で底部は欠損する。	外面 口縁部は強いヨコナデを施し体部上半はナデを施し、下半部はヘラケズリを施す。 内面 口縁部は弱いヨコナデを施し体部はナデで仕上げる。	色調 暗赤褐色 胎土 径2㎜以下の砂粒を含む。 焼成 良好 残存 ½
8	高杯(蓋) SK1	口径 15.2 器高 4.9	口縁部はやや外方下に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや扁平で肩部に沈線を一条めぐらす。つまみは扁平で中央部は突出する。	外面 つまみは回転ナデを施し、天井部は回転ヘラケズリ、口縁部は回転ナデを施す。 内面 天井部は不整方向のナデを施すが、全体に回転ナデを施す。	色調 明灰色 胎土 径2㎜以下の白色砂粒を含む。 焼成 良好 残存 約½
9	有蓋高杯 SK1	口径 12.8 受部径 16.1 裾径 15.2 器高 17.6	杯部たちあがりは内傾し端部はやや鋭い。底部はやや深く半球である。脚部は杯部とほぼ直角を成して下外方にドり端部は直角に下り面を持つ。上段と下段の透しの間に2条の沈線をめぐらせ、下段の透しの下に一条の沈線をめぐらす。	外面 杯部は脚部ともに回転ナデを施す。 内面 杯部・脚部ともに回転ナデを施し、脚部上半にしぼり痕が残る。	色調 黒灰色 胎土 径2㎜以下の白色砂粒を含む。 焼成 良好 残存 約½
10	高杯 SK1	脚径 17.4	杯部は欠損するが、脚部は杯部からほぼ直角に下り、下部で外方に開く端部は直角に下り面を持つ。上段と下段の透しの間に2条の沈線をめぐらせ、下段の透しの下に2条の浅い沈線をめぐらす。	外面 回転ナデを施す。 内面 下半部は回転ヘラケズリを施し、上半部はしぼり痕を残す。	色調 暗灰色 胎土 径1㎜以下の白色砂粒を含む。 焼成 良好 残存 約½
11	高杯(蓋) SK1	口径 12.9	口縁部は直角に下り、端部は内弯して丸くおさめる。天井部はやや扁平である。	外面 口縁部から肩上部まで回転ナデを施し、成形後ハケ状のもので調整する。天井部はヘラケズリを施す。 内面 回転ナデを施す。	色調 暗青灰色 胎土 径2～3㎜の砂粒を含む。 焼成 良好 残存 約½

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
12	壺杯(身) SK1	口径 11.1 受部径 13.6	口縁部は内傾してたちあがり端部は鋭い。受部は短かく、底部はやや扁平である。	外面 口縁部から底部にかけて回転ナデを施し口縁端部ではみ出した粘土にヘラケズリを施す。 内面 回転ナデを施す。	色調 明灰色（外面） 暗灰色（内面） 胎土 径2㎜以下の白色砂粒を含む。 焼成 良好 残存 約¼
13	高杯 SK1	端部径 14.9	杯部および脚上半部を欠損するが、下外方に下り、端部で上方に折り曲げ直角に下る。端部はやや鋭い。上段と下段の透しの間に2条の浅い沈線がめぐり、下段の透しの下段部に浅い沈線をめぐらす。	外面 回転ナデを施す。 内面 下段の透しまで回転ナデを施し、下段透し上部以上にしぼり痕が残る。	色調 暗灰色 胎土 径1㎜以下の砂粒を含む。 焼成 良好 残存 約¼
14	高杯 SK1	端部径 12.4	杯部および脚上半部を欠損するが、脚部は下外方に下り端部は面を持つ。下段透しの上端部に1条の沈線をめぐらせる。	外面 回転ナデを施す。 内面 回転ナデを施す。下段透しの中央部以上にしぼり痕が残る。	色調 黒灰色 胎土 径2㎜以下の砂粒を含む。 焼成 良好 残存 約¼
15	壺杯(身) SK1上面	口径 11.3 受部径 13.6	口縁部は内傾してたちあがり、端部はやや鋭い。受部は短かく水平にのびる。	外面 回転ナデを施し、体部下半部はヘラケズリを施す。 内面 回転ナデを施す。	色調 淡灰色 胎土 径2㎜以下の砂粒を含む。 焼成 良好 残存 約¼
16	壺 第3層	最大径 12.4	口縁部は欠損するが、肩はやや丸く体部は半球状を呈する。底部は丸底である。	外面 上部から¼まで回転ナデを施し、底部にかけて回転ヘラケズリを施す。 内面 回転ナデを施す。	色調 灰色 胎土 径2㎜～0.5㎜の長石粒を含む。 焼成 良好 残存 約¼
17	壺 SK1上面	最大径 18.1	体部上半以上を欠損するが、扁平な半球状を呈する。底部は平底であり全体に肉厚である。	外面 体部は成形後平行タタキを施し、その後横方向のハケ調整と部分的にヘラケズリを施す。底部はヘラ切り未調整である。 内面 回転ナデを施す。	色調 明灰色 胎土 径2㎜～1㎜の砂粒を多量に含む。 焼成 不良 残存 約¼
18	甕 SK1上面	口径 21.6	口縁部の上部のみが残存し、外方へ屈曲し、口縁端部で肥厚している。端部は丸くおさめる。	外面 内面 } 回転ナデを施す。	色調 淡青灰色 胎土 径1㎜以下の砂粒を含む。 焼成 良好 残存 口縁部 約¼
19	壺杯(蓋) SK1上面		口縁部は外反して下り、端部は内傾する段を成す。稜はやや丸い。体部は欠損する。	外面 内面 } 回転ナデを施し、端部近くで強いヨコナデを施す。	色調 暗灰色 胎土 微砂粒を含む。 焼成 良好 残存 口縁部 約¼

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
20	蓋杯(蓋) SK1上面		口縁部は下外方に下り、端部は内傾する面を有する。後は短かく鋭い。体部は欠損する。	外面 内面 回転ナデを施す。	色調　淡青灰色 胎土　径1㎜以下の砂粒を含む。 焼成　良好 残存　口縁部　約¼
21	蓋杯(身) SK1上面	受部径　13.1	口縁部はやや内傾して立ち上がり、受部はほぼ水平にのびる。口縁部および体部は欠損する。	外面 内面 回転ナデを施す。	色調　青灰色 胎土　精良 焼成　良好 残存　受部　約¼
22	高杯 SK1上面	裾　径　8.7	杯部立ち上がり以上を欠損するが底は平らである。脚部は下外方に下り、端部で垂直に下り丸くおさめる。	外面　杯部は回転ヘラケズリを施し脚部は回転ナデ。端部でヨコナデを施す。 内面　杯部は不整方向のナデを施し脚部は、杯部との接合に粘土を貼り付け、上方にナデる。脚部全体にヨコナデを施す。	色調　暗灰色 胎土　径2㎜以下の砂粒を含む。 焼成　良好 残存　約¼
23	無蓋高杯 SK1上面	口　径　16.8	口縁部は上外方にのび、体部中央に断面三角形のケズリ出し凸線を2条めぐらし、その直下に波状文を施す。	外面　回転ナデを施す。下部凸線の下に1条10本の波状文をめぐらす。 内面　回転ナデを施す。	色調　暗灰色 胎土　径0.5㎜以下の砂粒を含む。 焼成　良好 残存　口縁部　約¼
24	壺 SK1上面	口　径　18.8	口縁部のみ残存し端部から垂直に下り内寄しつつ下る。断面三角形の凸線を1条めぐらし、その直下に波状文を施す。	外面　回転ナデを施し、凸線はケズリ出しである。 内面　軸付着のため不明	色調　暗灰色 胎土　径1㎜の砂粒を含む。 焼成　良好 残存　口縁部　¼
25	甕 深掘部砂層	口　径　13.2	口縁部は「く」の字形に屈曲し、斜上方へのびる。口縁端部は丸くつまみ上げる。	外面　口縁部はヨコナデ。体部に縦方向のハケを施す。 内面　口縁部はヨコナデ。体部はヘラケズリを施す。	色調　黄灰褐色 胎土　径2㎜以下の角閃石・金雲母等の砂粒を含む。 焼成　良好 残存　口縁部約¼
26	甕 深掘部砂層	口　径　16.2	口縁部は「く」の字形に屈曲し、斜上方へのびる。口縁端部は外傾する面を作り、つまみ上げる。	外面　口縁部はヨコナデ。体部に斜方向のハケを施す。 内面　口縁部は横方向のハケの後、ヨコナデを施す。体部はヘラケズリを施す。	色調　暗黄灰褐色 胎土　径2㎜以下の角閃石・金雲母等の砂粒を含む。 焼成　良好 残存　口縁部約¼
27	甕 深掘部砂層	口　径　18.3	口縁部は「く」の字形に屈曲し、斜上方へのびる。口縁端部はややつまみあげ気味である。	外面　ヨコナデを施す。 内面　口縁部はヨコナデを施す。	色調　淡灰褐色～淡赤橙色。 胎土　径2㎜以下の金雲母他の砂粒を含む。 焼成　良好 残存　口縁部約¼

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
28	鉢 第4層	口径 15.8	口縁部はやや外反しながら斜上方へのびる。口縁端部はやや鋭い。	外面 内面 横方向の丁寧なヘラミガキを施す。	色調 明褐色 胎土 砂粒をほとんど含まない精良なもの。 焼成 良好 残存 口縁部約¼
29	壺 第4層	口径 16.2	口縁部はやや外反しながら斜上方へのびる。	外面 口縁部は縦方向のハケ調整の後ヨコナデを施す。 体部は縦方向のハケ調整。 内面 口縁部はヨコナデを施す。	色調 淡黄褐色～淡赤橙色 胎土 径2㎜以下の砂粒を含む。 焼成 良好 残存 口縁部約¼
30	高杯 第4層		杯部および脚端部は欠損するが下外方にのびる柱部と大きく外傾する脚部を有する。	外面 柱部はヘラケズリ後右下りのハケ調整を施す。脚部はハケ調整を施す。 内面 柱部はしぼり痕を残し、脚部はケズリを施す。	色調 淡赤橙色 胎土 径0.5㎜以下の砂粒雲母を含む。 焼成 良好 残存 約¾
31	台付鉢 第4層	脚径 4.2	脚内部は「ハ」の字形にやや外反気味に開く。 端部には面がみられる。	外面 体部は縦方向のヘラミガキを施す。 内面 体部はナデ調整。	色調 暗橙色～淡褐色 胎土 径2㎜以下の石英・金雲母等の砂粒を含む。 焼成 良好 残存 脚台部完存
32	壺 第4層	口径 17.3	肩部はやや内弯する。 頸部は基部より外反し、やや内弯したのち外反して端部へと続く。 端部は丸く、つまみ上げ気味にやや内傾する。	外面 胴部は1㎝あたり約16条のハケを縦方向に施した後、1㎝あたり約6条のハケを斜方向に施す。頸部は横方向に細かいハケを、基部はヨコナデを施す。 内面 頸部は横方向の細かいハケ調整を、体部はヘラ削りを施す。	色調 暗褐色 胎土 5㎜以下の砂粒を含む。角閃石を含む。 焼成 良好 残存 約¾
33	壺 第4層		肩部はやや内弯する。 頸部は、ほぼ直線的に斜外方に立ち上がる。	外面 胴部は斜方向の、頸部は縦方向のヘラ磨きを施す。頸部基部は強いヨコナデを施す。 内面 頸部は横方向に削り気味の強いナデを施した後、縦方向のヘラ磨きを施す。	色調 明黄褐色 胎土 0.5～2㎜の砂粒を含む。雲母を含む。 焼成 良好 残存 頸部完存
34	壺 第4層	口径 19.4	頸部はやや外反気味に立ち上がり、外傾する端部へと続く。端部は丸い。端部内面には1条の浅い沈線がめぐる。	外面 内面 縦方向のハケ調整を施す。端部はヨコナデを施す。 ハケは1㎝あたり8～9条である。	色調 暗褐色 胎土 2㎜以下の角閃石・金雲母を多く含む。 焼成 良好 残存 口縁部¼
35	複合口縁壺 第4層	口径 20.3	外反する1段目の口縁部に、同じく外反する2段目の口縁部がつながる。口縁端部は丸く、器壁は薄い。端部内面はややつまみ上げ気味である。	外面 頸部の下部は縦方向のヘラ磨きを、上部及び2段目の口縁部は横方向のヘラ磨きを施す。口縁端部及び屈折部はヨコナデを施す。 内面 器表が摩滅しているので調整不明である。	色調 明赤褐色 胎土 1㎜前後の砂粒を若干含む。 焼成 良好 残存 頸部¾

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
36	複合口縁壺 SK1上面	口径 19.0	直線的にのびる1段目に、同じく直線的に斜外方にのびる2段目の口縁部がつながる。 端部はやや尖り気味である。	外面 横方向のハケ調整を施す。 内面 器表が磨滅しているため不明である。	色調 明黄褐色 胎土 1㎜前後のチャート・石英等を若干含む。 焼成 良好 残存 頸部約¼
37	鉢 第4層	口径 16.3	体部は内弯してのび、外反し弱い稜へと続いた後、内弯気味に端部へのびる。端部は鋭い。 内面の屈折部は面をなし、稜は明確である。	外面 全面にヨコナデを施した後、屈折部より下部は横方向の細かいヘラ磨きを施す。 内面 ヨコナデの後、全面にヨコ方向に細い丁寧なヘラ磨きを施す。	色調 赤褐色 胎土 1㎜前後の長石・雲母を含む。 焼成 良好 残存 口縁部¼
38	壺 SK1上面	口径 13.0	頸部はやや外反気味にのび、少し内弯した後さらに外反して端部へと続く。端部内面は面をなし肥厚する。 屈曲部内面は丸い。	外面 頸部はヨコナデを施す。 内面 ヨコナデを施す。	色調 淡赤褐色～明黄褐色 胎土 2㎜以下の雲母・砂粒を含む。 焼成 良好 残存 口縁部¼
39	高杯 SK1上面	口径 17.6	ほぼ直線的に斜外方へのびる。端部は尖り気味であり、内面は沈線状にやや凹む。	外面 内面 } 横方向のハケ調整を施す。	色調 赤褐色 胎土 1㎜前後の長石・雲母・石英等を含む。 焼成 良好、端部外面に黒斑を有する。 残存 口縁部約¼
40	高杯 SK1下層	口径 15.8	口縁部は内弯して立ち上がり、端部は斜上方に伸び、鋭い。 口縁部に黒斑がみられる。	外面 ヨコナデを施す。 内面 ヨコナデの後ヘラ磨きを施す。	色調 赤褐色 胎土 径1㎜以下の砂粒を微量含む。 焼成 良好 残存 口縁部約¼
41	高杯 第3層	脚径 11.8	中実の柱状部から拡がる裾部。 裾部に黒斑がみられる。	外面 1cmあたり10条のハケ目を施す。 内面 裾部に指頭圧痕が残る。	色調 赤橙色～黒色(黒斑) 胎土 径0.5㎜以下の砂粒を少量含む。 焼成 良好 残存 柱状部完存
42	高杯 SK1上面	裾径 11.2	柱状部はやや内弯しながらゆるやかに開き、脚部は「ハ」の字形に大きく開く。	外面 内面 } 裾部は指おさえを施す。 柱状部はしぼり痕がある。	色調 赤黄褐色 胎土 砂粒をほとんど含まない。 焼成 良好 残存 柱状部完存。
43	高杯 第4層		柱状部は短く、脚部は「ハ」の字形に大きく開く。	外面 横方向のヘラミガキを施す。 内面 裾部はハケ調整の後ナデを施す。	色調 淡赤橙色 胎土 径1㎜以下の長石・金雲母を含む。 焼成 良好 残存 脚部約¾

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
44	把手 SK1上面		内弯しながら斜め外方にのびるが把手以外は欠損する。	外面　全体に指で成形する。	色調　赤褐色 胎土　径1㎜以下の砂粒を含む。 焼成　良好 残存　完存
45	小型鉢 SK1上面	口径　8.0 器高　4.6	外反する口縁部から内弯する体部につながり底部は丸底である。口縁端部は丸くおさめる。	外面　口縁部はヨコナデを施し、体部は粗くナデを施す。また粘土巻き上げによる接合痕が残る。 内面　口縁部は横ヨコナデを施し、体部は不整方向のケズリを施す。	色調　赤褐色 胎土　燐雲母を含む。 焼成　良好 残存　完存
46	甕 第3層	底径　3.9	平底の底部から、上外方に大きく開く体部につながるが、体部の大半を欠損する。	外面　未調整 内面　指頭圧痕がみられる。	色調　暗褐色～黒色 胎土　角閃石・金雲母を含む。 焼成　良好 残存　底部完存
47	羽釜 SK2	胴径　24.6	口縁部、体部を欠損するが全体に内弯し、胴は大きく外反して端部は丸くおさめる。。	外面　口縁部から胴にかけてヨコナデを施し、体部は斜方向ハケ調整を施す。 内面　横ナデを施す。	色調　赤褐色 胎土　径2㎜以下の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。 焼成　良好 残存　約½

第7節　第8次調査

I　調査の概要

調査地は八尾市光町2丁目に所在し、第5次調査地と道路を隔てた東側に位置する。調査地を2ヶ所に区分し、西側を第1調査区(17.5×25m)、東側を第2調査区(8×16m)と付称し、順次調査を実施した。調査面積は565.5㎡、調査期間は昭和56年10月5日から12月4日までである。

調査方法は、現地表(ＯＰ＋9.00m)から盛土・休耕土・床土までを機械掘削とし、以下は人力による掘削作業としたが、まず調査区の周囲に幅約30cmのトレンチを設定し、遺構面の確認に従って掘削作業を進めていった。

II　層序

盛土1mを除去すると、第1層旧耕土・床土、第2層淡灰色粘土、第3層灰褐微砂混じり粘土、第4層淡灰褐色シルト、第5層灰褐色シルト粘土の基本層である。

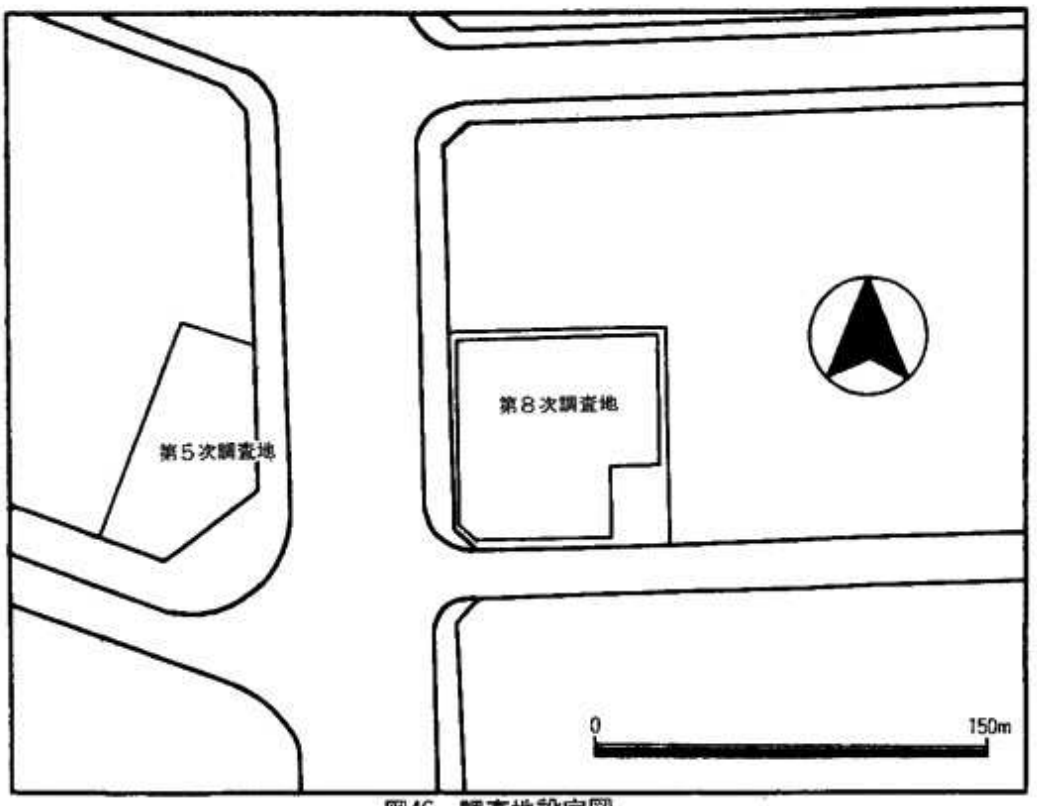


図46　調査地設定図

このうち第２層は、中世以降に削平をうけた水田址のため、調査は断面観察のみにとどめた。第３層は遺物包含層で、その下の第５層上面が古墳時代前期(庄内式の時期～布留式の時期)の生活面である。

Ⅲ　遺構・遺物

１）竪穴式住居

ＳＩ１

第１・第２調査区間で検出した竪穴式住居で、ＳＩ２を切る関係にあたる。平面は方形を呈し、東西辺5.6m・南北辺5.8mを測る。主軸方向はN－39°－Eを指す。竪穴の肩から床面までの深さは約10cmを測り、床面は平坦である。周溝は幅25～40cmを測り、断面はＵ字形を呈する。

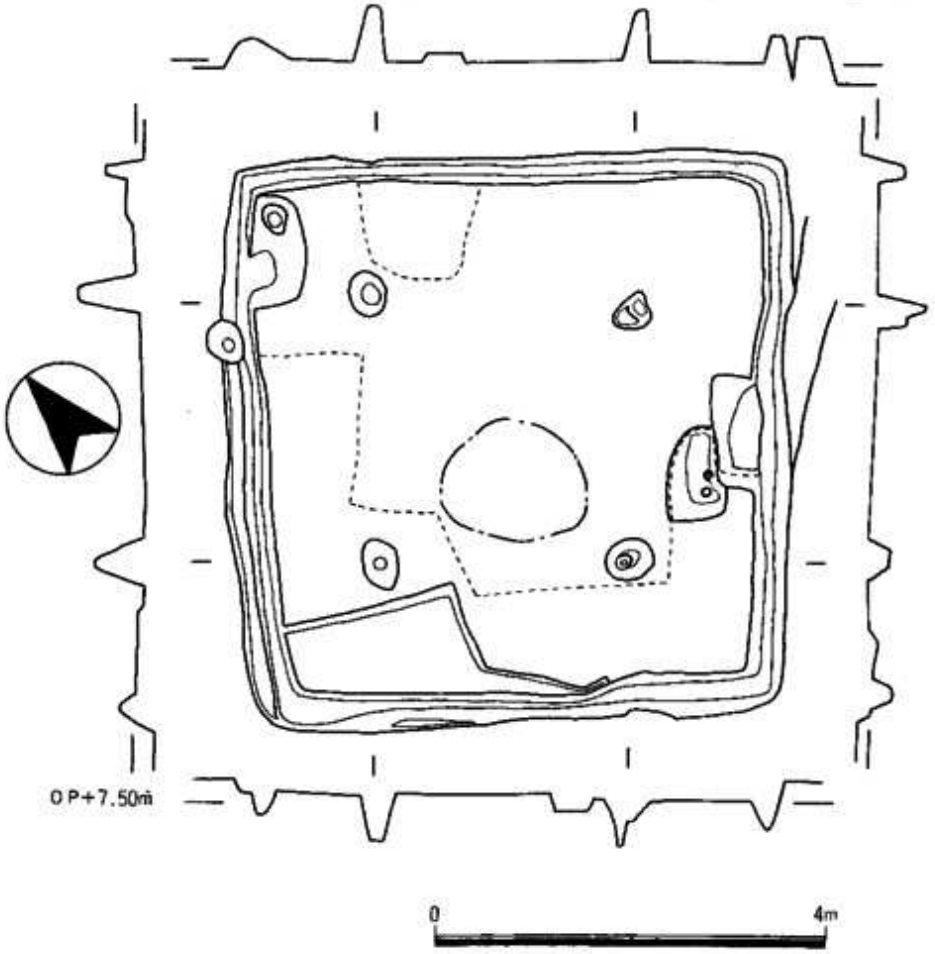


図47　SI1平断面図

この周溝には、北隅と南東辺中央部の2ヶ所に、約110×55cmの長方形の拡がりがある。

柱穴は4個を検出し、東西・南北ともに2.6mの等間隔である。柱穴は径30～50cm・深さ40～50cmを測り、平面は円形および楕円形を呈する。床面の3分の2と柱穴の底部には、小石(小砂礫)をほぼ平坦に敷きつめている。炉址はほぼ中央で確認した。長径1.9m・短径1.2m・深さ約5cmを測り、平面は楕円形、断面は皿状である。

住居内の埋土は上方から暗茶灰褐色粘土と暗灰茶色砂混じり粘土の2層に分かれ、床面の小砂礫は厚さ約2cmを測る灰褐色礫砂である。周溝・柱穴の埋土は住居内の第2層と同層である。

また、住居内東側では長径1m・短径50cm・深さ20cmを測る楕円形の落ち込みを検出した。埋土は暗灰茶色砂混じり粘土1層である。

遺物は庄内式甕3点を図示したが、そのうち(1)は住居の床面から完形品に近い状態で出土し、(2・3)は遺構内に堆積する暗灰茶色砂まじり粘土から出土した。また、住居内東側の落ち込みから小型器台(4)や小型丸底鉢(5)が出土しているが、住居内出土のものとの時期差は認められない。

SI2

南側をSI1に切られている。東西辺5.5m前後・南北辺4.7mを測り、長方形を呈する。周溝は幅15～30cm・深さ10～25cmの断面U字形を呈する。

柱穴・炉址は確認できなかった。また、竪穴の肩と床面が同レベルであることから、上面はSI1やSB9の構築時に削平されたものと考えられる。

同溝の埋土は暗茶灰色シルト粘土1層で、ここから庄内式甕(6)の小片が出土した。

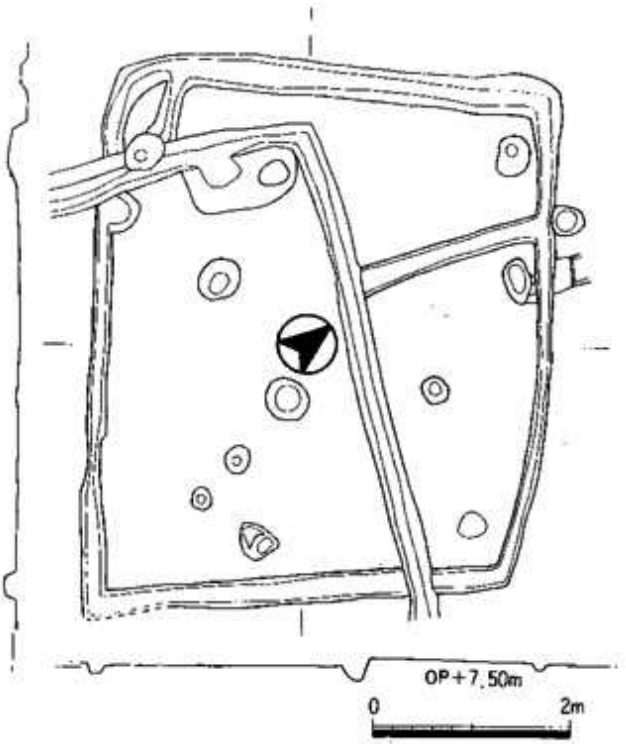


図48 SI2平断面図

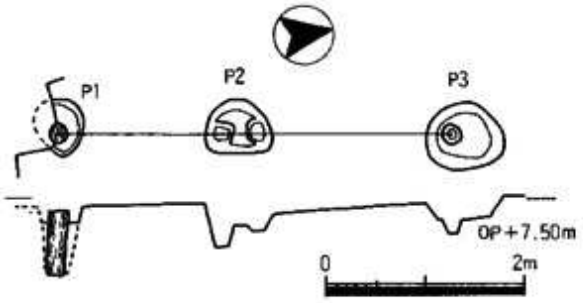


図49　SB1平断面図

2）掘立柱建物

SB1

第1調査区の南西隅付近で検出した。桁行は2間(4m)で、柱間は2mの等間隔である。梁行は調査区外のため不明である。主軸方向はN－9°－Eを指す。

柱穴の掘形は径50～70cmの楕円形で、深さ30～40cmのU字形の断面を呈する。P1には径20cm・長さ50cmを測る柱根が遺存しており、P2・P3にも径20cm程度の柱の痕跡が認められた。柱穴内の埋土は暗茶灰色シルト粘土で、柱の痕跡内には暗茶褐色砂枯土が堆積する。

遺物はP3の埋土内より庄内式甕(9)等の細片が出土したのみである。

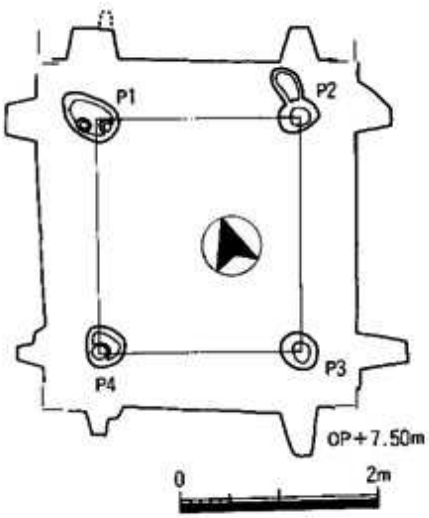


図50　SB2平断面図

SB2

第1調査区の西側中央付近で検出した。中央部をSD5が切っている。桁行1間(2.4m)×梁行1間(2.1m)を測る。主軸方向はN－18°－Eを指し、復元床面積は5.04㎡である。

柱穴の掘形は径30～50cmの円形および楕円形で、深さは20～30cmを測る。P1・P4には径10～20cmを測る柱の痕跡が認められた。

SB1の南側と北側には、建物を囲むようにして、落ち込みと浅い溝SD6があるため、竪穴式住居の残存ではないかと考えられる。

遺物は柱穴の埋土内から庄内式甕の細片が出土した。

SB3

第1調査区中央部付近で検出した。桁行1間(2m)×梁行1間(1.8m)を測る。主軸方向はN－18°－Eを指し、復元床面積は3.6㎡である。

柱穴の掘形は径40～50cmの円形で、内部には径10～20cmの柱の痕跡がある。このうちＰ３・Ｐ４からは柱根が検出された。Ｐ４の柱根は径12cm・長さ80cmを測り、先端には加工痕が明瞭に遺存する。柱穴の埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

また、建物の南側では径１ｍ・深さ20cmを測り、楕円形を呈する焼土坑を検出した。この土坑の埋土も暗茶灰色シルト粘土であることから、建物に付随するものと考えられる。

柱穴の埋土内や焼土坑内より、壺・庄内式甕等の細片がわずかに出土した程度である。

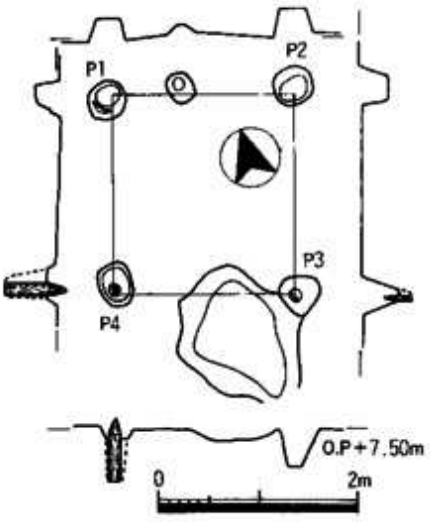


図51　SB3平断面図

ＳＢ４

第１調査区の中央部で検出した。ＳＢ３と重複している。１間×１間の規模を持ち、柱間は2.5ｍの等間隔を測る。主軸方向はＮ—17°—Ｅを指し、建物の復元床面積は6.25㎡である。

柱穴の掘形は径20～30cm・深さ30cmを測り、平面は円形を呈する。Ｐ１・Ｐ２には径10cm程度の柱の痕跡が残存しており、Ｐ３には径５cm・長さ20cmの柱根が、Ｐ４には径30cm・長さ40cmの柱根がそれぞれ遺存していた。柱穴の埋土は暗茶灰色シルト粘土１層である。

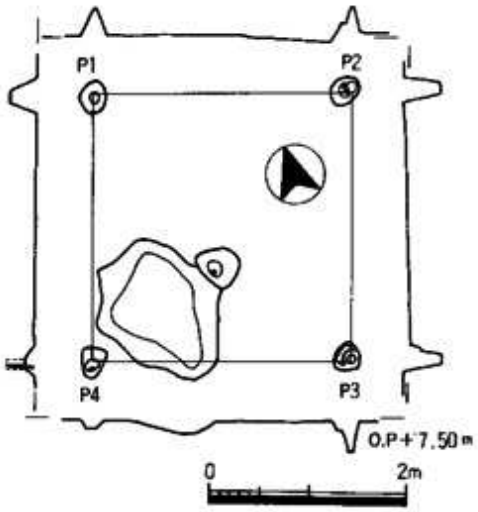


図52　SB4平断面図

ＳＢ５

第１調査区のＳＢ３の北側で検出した。桁行３間(3.7ｍ)×梁行１間(1.25ｍ)の規模を持ち、南北に長い建物で、主軸方向はＮ—22°—Ｅを指す。柱間は桁行の南側から1.15ｍ・1.25ｍ・1.30ｍを測る。復元床面積は4.63㎡である。

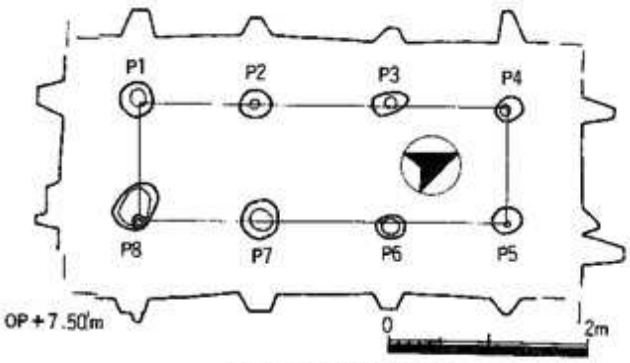


図53　SB5平断面図

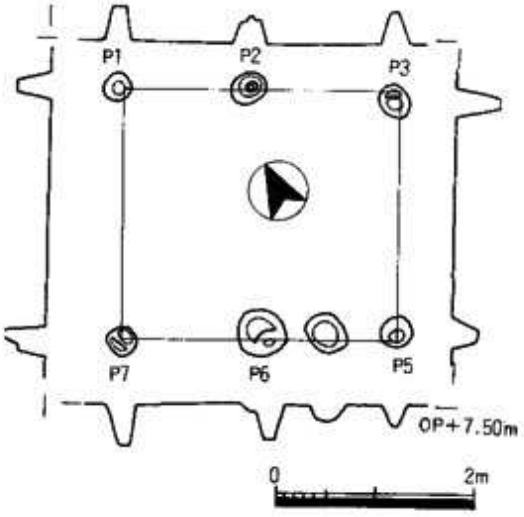


図54　SB6平断面図

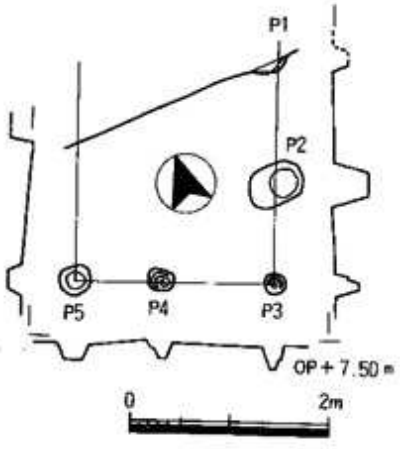


図55　SB7平断面図

柱穴の掘形は径25～50cmの円形を呈し、深さは30～50cmを測る。掘形内には径15cm程度の柱の痕跡が残存していたものもある。柱穴内には、暗茶灰色シルト粘土が堆積している。

柱穴の埋土内からは、土師器片が若干出土した程度である。

SB6

第1調査区のSB5の北東部に接した状態で検出した。桁行2間(2.75m)×梁行1間(2.5m)を測り、主軸方向はN－29°－Eを指す。

柱間は南側桁行の西から1.5m・1.25m、北側桁行は西から1.25m・1.5mを測る。建物の復元床面積は6.88㎡である。

柱穴の掘形は径30～50cmの円形および楕円形で、深さ20～40cmを測る。柱穴内には、径15cmの円形の柱の痕跡が残存していたものもある。柱穴の埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

SB7

第1調査区の北隅で検出したが、北側は調査区外へ至る。検出した範囲内では、桁行2間(2.2m)×梁行2間の建物規模である。主軸

方向はN－21°－Eを指す。

柱穴の掘形は径20～40cmの円形を呈し、深さは20～30cmを測る。内部には径10cmを測る円形の柱の痕跡が検出されたものもある。柱穴の埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

P2の埋土内から、甕(11)がほぼ完形に近い形で出土した。

SB8

第1調査区の南東で検出した。桁行2間(3.2m)×梁行1間(2.75m)を測り、主軸方向はN－8°－Eを指す。柱間は東側の桁行北から1.9m・1.3m、西側の桁行はそれぞれ1.6mを測る。復元床面積は8.8㎡である。

柱穴の掘形は径20～80cmの円形および楕円形で、深さ20～50cmを測る。柱穴の埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

SB9

第2調査区SI1の北東部に隣接し、SI2を切っている建物である。桁行3間(4.0m)×梁行1間(3.1m)を測り、主軸方向はN－2°－Wを指す。建物の復元床面積は12.4㎡である。

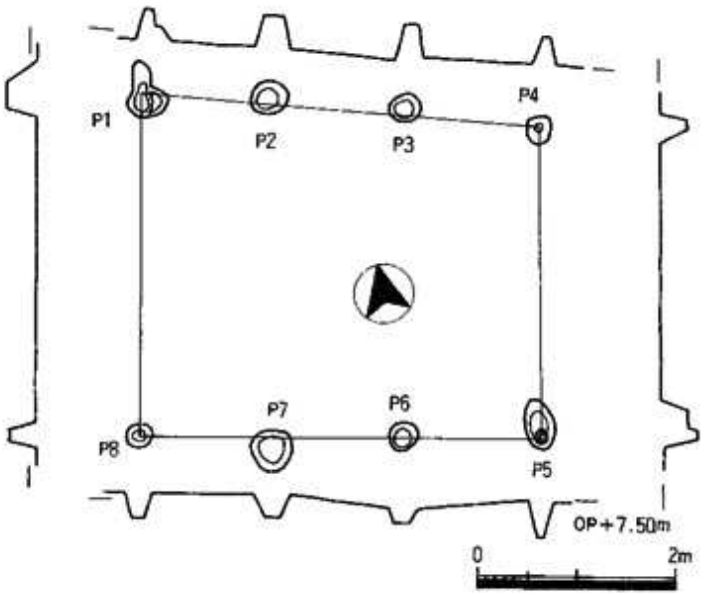


図56　SB9平断面図

柱穴の掘形は径20～50cmの円形および楕円形で、深さは20～30cmを測る。柱穴の内部には柱の痕跡が残存していたものもある。柱穴の埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

柱穴の埋土内より、庄内式甕等の小片が、若干出土した。

ＳＢ10

第２調査区の北隅で検出した。桁行２間（3.5m）×梁行１間（2.2m）の建物で、主軸方向はＮ－12°－Ｅを指す。柱間は東側の桁行南から1.9m・1.6m、西側のものは1.8mを測るが、北側は調査区外へ至るため不明である。

柱穴の掘形は径20～60cmの円形を呈し、深さ20～40cmを測る。柱穴内部には径20cmの円形の柱の痕跡が残存していたものもある。柱穴の埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

３）土坑

ＳＫ１

第１調査区北西隅で検出した。最大幅2.5m・最小幅２m・深さ15cmを測る不定形の土坑である。内部には暗茶灰色シルト粘土が堆積する。

ＳＫ２

第１調査区西壁で検出した。東側はＳＫ３に切られ、西側は調査区外へ至る。検出部で長辺4m・短辺２mの三角形を呈する。周囲には幅30～50cm・深さ10cmを測る溝が廻る。

ＳＫ２の埋土は第１層暗茶灰色砂粘土、第２層暗茶灰シルトと淡灰褐色シルトの混合層である。

この遺構は、方形の竪穴式住居とも推測されるが、柱穴・炉址が確認できなかったことや、底部が平坦でなかったことから、ここでは一応土坑として取り扱った。

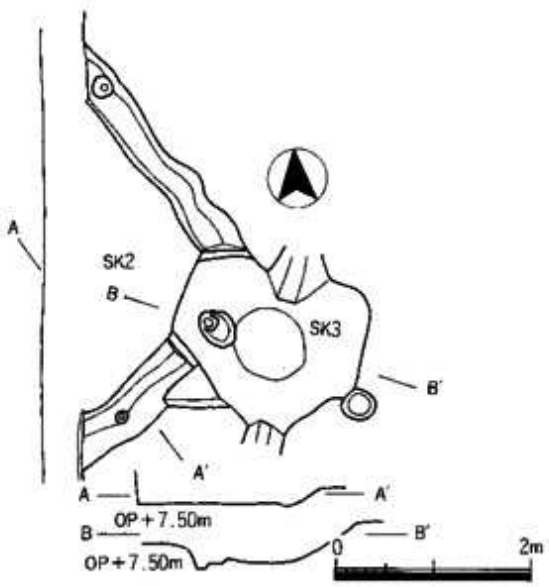


図57　SK2・SK3平断面図

遺物は埋土内より、壺、庄内式甕、V様式タイプの甕、高杯、小型丸底壺等をわずかに出土したが、いずれも細片であった。

SK3

第1調査区の西側で検出した。SK2とSD4を切断している。長径2m・短径1.3m・深さ50cmを測り、平面はほぼ楕円形、断面はすり鉢形を呈する。西肩から径30～40cm・深さ20cmの平面円形を呈するピットを検出した。その内部には径15cm程度の柱の痕跡が認められた。SK3の埋土は上方から暗茶褐色砂粘土、暗灰褐色シルト粘土に二分される。

遺物は上層で甕(13～15)、高杯(17・18)等の破片が出土した。

SK4

第1調査区の南西隅で検出した。東側はSD2で切られ、西側は調査区外に至る。検出部の最大幅1.7m・最小幅0.4m・深さ20cmを測る。内部には暗茶灰色シルト粘土、黄灰褐色シルト粘土の2層が堆積する。

壺(19)、庄内式甕(20)等が出土した。

SK5

第1調査区の南側中央で検出した。長径4.9m・短径60～90cm・深さ20cmを測り、長楕円形を呈する溝状の土坑である。底部には径20～40cm・深さ30cmを測る円形のピット2個が検出された。南側のピットからは柱の痕跡が認められた。SK5の埋土は暗茶灰色シルト粘土1層である。

SK6

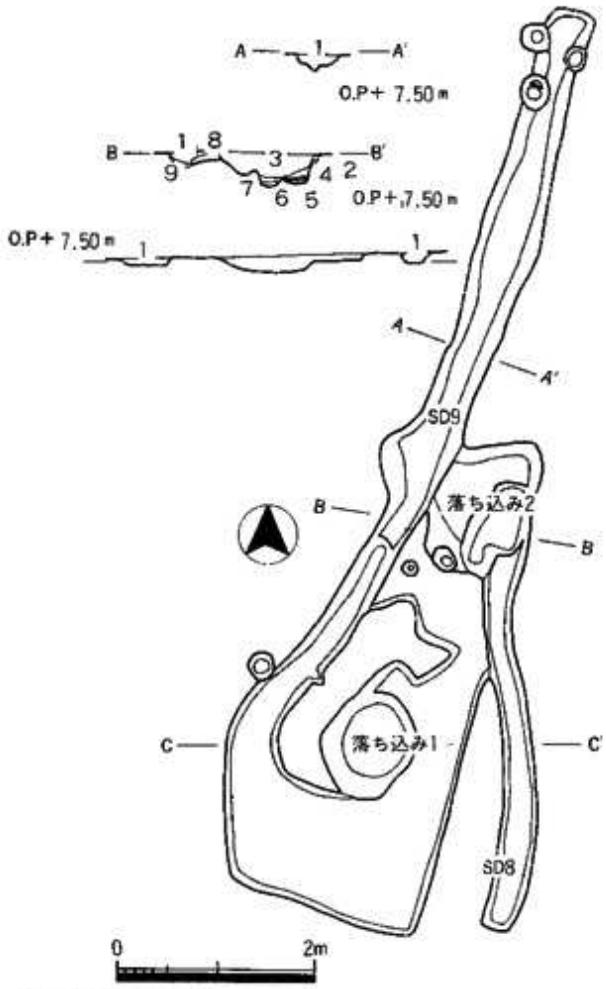
第1調査区の南東で検出した。中央部は幅60cmを測り、溝状を呈し、7条の突起を持つ。底部からは径20～50cm・深さ20～40cmの円形を呈するピット6個が検出された。このうちの2個には、柱の痕跡がみられる。SK6の埋土は暗茶灰色砂粘土である。

埋土内より、壺やV様式タイプの甕等の細片が少量出土した。

SK7

第1調査区北壁の西側で検出した。検出部の最大幅2.6m・深さ10cmを測る。形状から竪穴

式住居の一部と推定されたため、調査区を北側へ拡張した結果、底部から径約1mと0.6mの2ヶ所の落ち込みを検出したが、周溝が認められなかったので、ここでは土坑として取り上げた。



1．暗灰茶色シルト粘土
2．淡灰褐色シルト
3．暗灰茶色シルト粘土(焼土・炭を含む)
4．暗灰茶色粗砂混じり粘土
5．灰色礫砂土
6．暗灰色粘土
7．暗灰色シルト粘土
8．灰褐色細砂粘土
9．灰褐色シルト粘土

図58　SK10平断面図

土坑の埋土は茶灰褐色シルト粘土で、高杯や庄内式甕の細片が若干出土した程度である。

SK8

第1調査区西壁の南側で検出した。周囲をSD2が廻る。径90cm、深さ30cmを測る。埋土は上方から茶灰褐色粘土、灰褐色粘土に二分される。

SK9

第1調査区で検出し、北側をSD5に切られている。最大幅1.5m・深さ20cmを測る不定形の土坑である。底部には径20cm・深さ15cmを測り、内部に柱の痕跡を残すピットを伴なっている。埋土は暗茶灰色砂粘土である。

遺物は小型鉢(21)の他、V様式タイプの甕や庄内式甕、小型丸底壺等の細片が出土している。

SK10

第1調査区S11の西側で検出した。長辺約5m・短辺約2mを測り、ほぼ方形を呈する。南北方向に延びる2条の溝SD8・SD9や、径1m・深さ20cmを測り、西側に高みを持つ落ち込

み1を伴なっている。また、遺構内北側でも長径1m・短径50cm・深さ40cmを測る楕円形の落ち込み2を検出した。

落ち込み2の底部にはSI1と同様に礫砂が敷きつめられていることから、SI1に関連する遺構である可能性が強い。

SK10の埋土は暗灰茶褐色シルト粘土の1層であるが、落ち込み2には上方から暗灰色シルト粘土、黒灰褐色砂まじり粘土、灰色礫砂混じり粘質土の3層が堆積しており、上方の2層には焼土や炭を含んでいる。

遺物は小型鉢(22)が小片で、小型丸底壺(23)が完形品で出土した。

SK11

第1調査区の南、SB2の東側で検出した。最大幅90cm・最小幅40cm・深さ10cmを測り不定形を呈する。南東の一部が突出し、その底部から径10cm・深さ20cmのピットを検出した。埋土は暗茶灰色砂粘土である。

SK12

第1調査区の北壁に沿って検出した。検出部で幅90cm・長さ1.5m程度の規模を測り、溝状を呈する。埋土は暗茶灰色砂粘土1層であった。

遺物は土器のごく細片を出土した程度であり、時期や器種は不明である。

SK13

第2調査区の東壁近くで検出した。東部は調査区外に至る。検出部での長辺4m・短辺1.5m・深さ20cmを測り、平面は方形に近い。埋土は暗茶灰色砂粘土1層である。底部からは、ピットが検出された。

遺物は壺・庄内式甕等の細片が若干出土した。

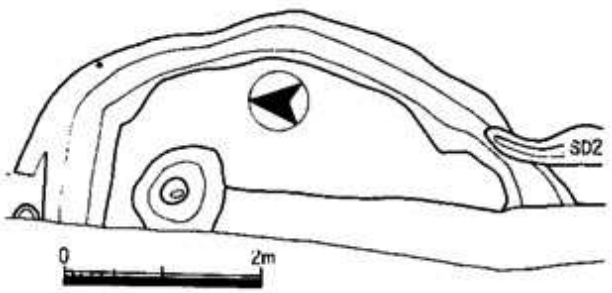


図59　SD1平面図

4）溝

SD1

第1調査区の西壁近くで検出した。幅約50cm・深さ20cmを測る。西側は

調査区外へ至るが、検出部で半円形に廻る溝である。南側はＳＤ２に切られ、北側はＳＤ５を切っている。埋土は暗茶灰色砂粘土である。

土器の細片を出土したのみで、時期等は不明である。

ＳＤ２

第１調査区の南西で検出した。ＳＤ１を切り、南に延びる構である。幅約50cm・深さ20cmを測る。埋土は暗茶灰色粘土である。

ＳＤ３

第１調査区の東側で検出した。ＳＩ１の南肩に切られ、南に延びている。幅40cm・深さ15cmを測る。埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

ＳＤ４

第１調査区の西側で検出した。幅20～40cm・深さ10～20cmを測る。中央部のＳＤ５西側から派生し、ＳＫ３に切られた後、ゆるやかなカーブで北東へ流れる溝である。埋土は暗茶灰色砂粘土である。

遺物は庄内式甕を含む土器の細片が出土した。

ＳＤ５

第１調査区を東西に横断する溝である。幅0.6～1.1m・深さ20～30cmを測る。西端ではSD1に切られている。埋土は上方から暗茶灰色砂礫土、暗灰色粘土に二分できる。

Ｖ様式タイプの甕(24・25)等が出土した。

ＳＤ６

第１調査区の南西、ＳＢ２の南側で検出した。幅20～30cm・深さ５cmを測る溝である。埋土は暗茶灰色シルト粘土１層である。

ＳＤ７

第１調査区の中央部、ＳＢ３の西側で検出した。幅30cm・深さ10cmを測り、南北に延びる溝である。埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

SD8

SK10の北東部から南へ延びる溝である。幅30cm・深さ10cmを測る。埋土は暗灰茶褐色粘砂土1層である。

SD9

SD8同様、SK10に付属する溝である。幅30cm・深さ10cmを測り、北方へ延びる。埋土は暗灰茶褐色粘土の1層である。

SD10

第1調査区の南東、SK6の北部を東西に延びる溝である。幅30cm・深さ15cmを測る。埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

SD11

第1調査区の北壁近くで検出した。幅10～20cm・深さ10cmを測り、北西方向に延びる溝である。埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

SD12

第2調査地、SI1の周溝の北辺より北東方向に延びる溝である。SI1の外部排水溝と考えられる。埋土は暗茶灰色粘土である。

SD13

第2調査区の北側で検出した。幅15～20cm・深さ5～10cmを測り、北西流した後SD14と交差し、角度を変えて北方へ延びる。埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

SD14

第2調査区の北側で検出した。幅20～30cm・深さ10cmを測り、SI2の外部排水溝と推定される。北東流し、SD13と交差した後、東西へ曲がる。暗茶灰色シルト粘土が堆積する。

SD15

第2調査区の中央で検出し、SD16に切られる溝である。幅50cm・深さ20～30cmを測り、南

北方向に延びる。埋土は暗灰茶色砂粘土である。

壺・庄内式甕等の細片をわずかに出土した程度である。

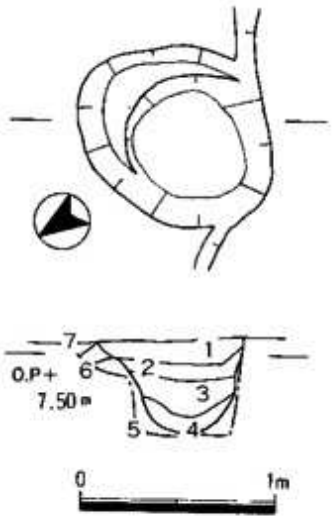
ＳＤ16

ＳＤ15を切り、北東に延びる溝である。幅50cm・深さ30cmを測る。内部埋土はＳＤ15同様である。

5）ピット

当調査地では掘立柱建物10棟を検出したが、他にも内部に柱の痕跡を有し、柱穴と考えられるものを多数検出した。しかし、ほとんどのピットについて、規則性は確認できなかった。ピットの規模には、径10～20cmの小型で浅いものと、径30cm以上の大型のものがあり、前者が多くを占める。

ここでは、規則性の認められたもの、遺物が出土したものについて取り上げる。



1．灰褐色シルト粘土
2．灰色微砂じり粘土
3．淡灰色シルト粘土
4．暗灰色シルト粘土
5．淡灰色シルト
6．灰色シルト
7．淡灰褐色シルト

図60　SP1平断面図

ＳＰ１

第１調査区北西隅近く、ＳＫ１に隣接するピットである。径１ｍ前後・深さ50cmを測り、平面は円形を呈し、断面は一部に段をもつ。内部埋土はほぼ４層に分かれ、水平に堆積する。

壺２個体（７・８）が出土した。

ＳＰ２

第１調査区の北壁中央部、ＳＢ７の付近で検出した。最大径60cm・最小径50cm・深さ35cmを測る楕円形のピットである。内部埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

埋土内から、完形の鉢（10）が出土した。

ＳＰ３

第２調査区南東部で検出した。径80cm・深さ32cmを測る平面円形のピットである。

壺の底部と思われる(12)が出土した。

SP4・SP5・SP6・SP7

第1調査区の北西側で検出したピット列である。主軸方向はN—16—Eを指し、南から1.5m・1.6m・1.8mの間隔で並ぶ。これは柵の柱穴ではないかと考えられる。

掘形内より庄内式甕を含む土師器の細片がわずかに出土した。

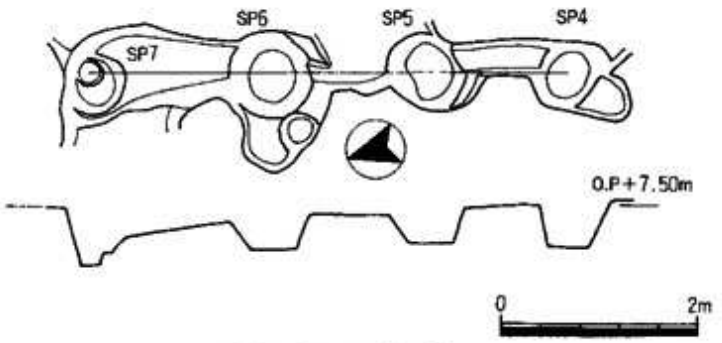


図61　柵列平断面図

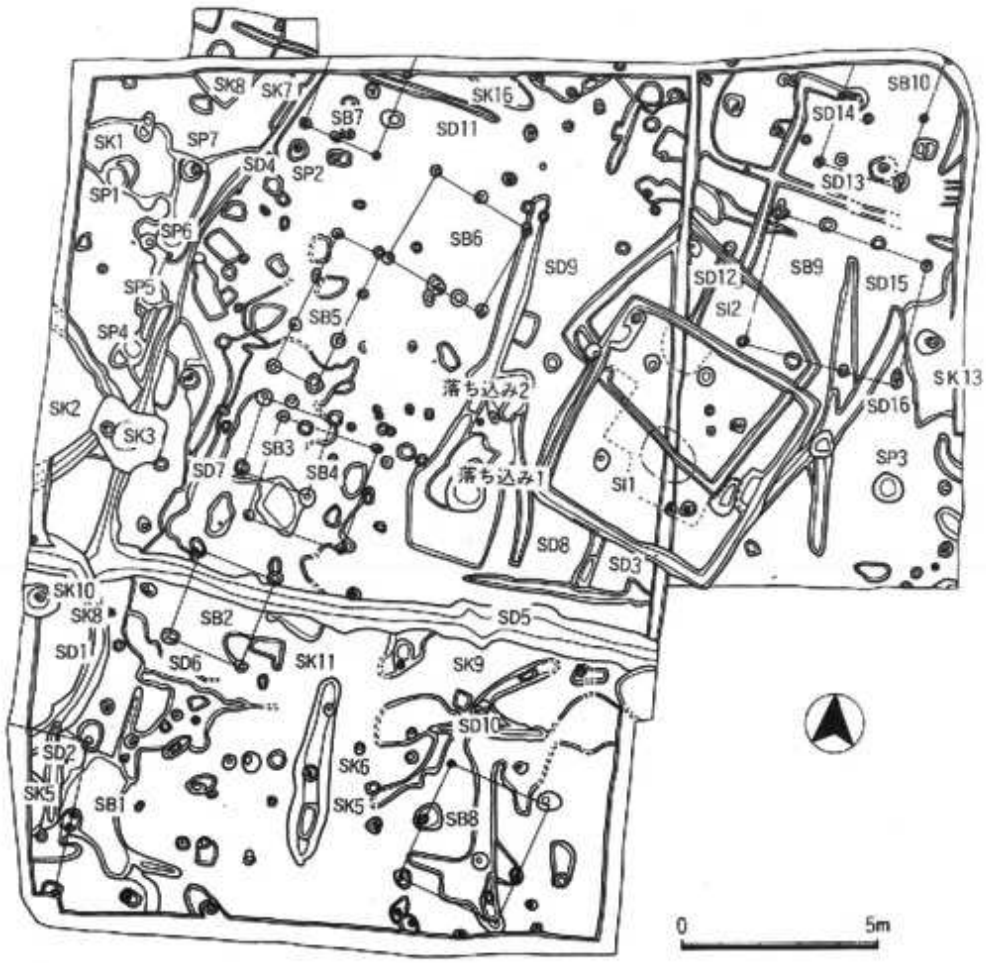

SK8
SK7
SK16
SB7
SD11
SB10
SD14
SK1
SP7
SD4
SP2
SD13
SP1
SP6
SB6
SD9
SD12
SB9
SD15
SP5
SI2
SB5
SP4
落ち込み2
SK13
SK2
SK3
SD16
SB3
SB4
SP3
SD7
落ち込み1
SI1
SD8
SD3
SK10
SK8
SB2
SD5
SD1
SD6
SK11
SK9
SD10
SD2
SK6
SK5
SK5
SB1
SB8
0
5m

図62　平面図

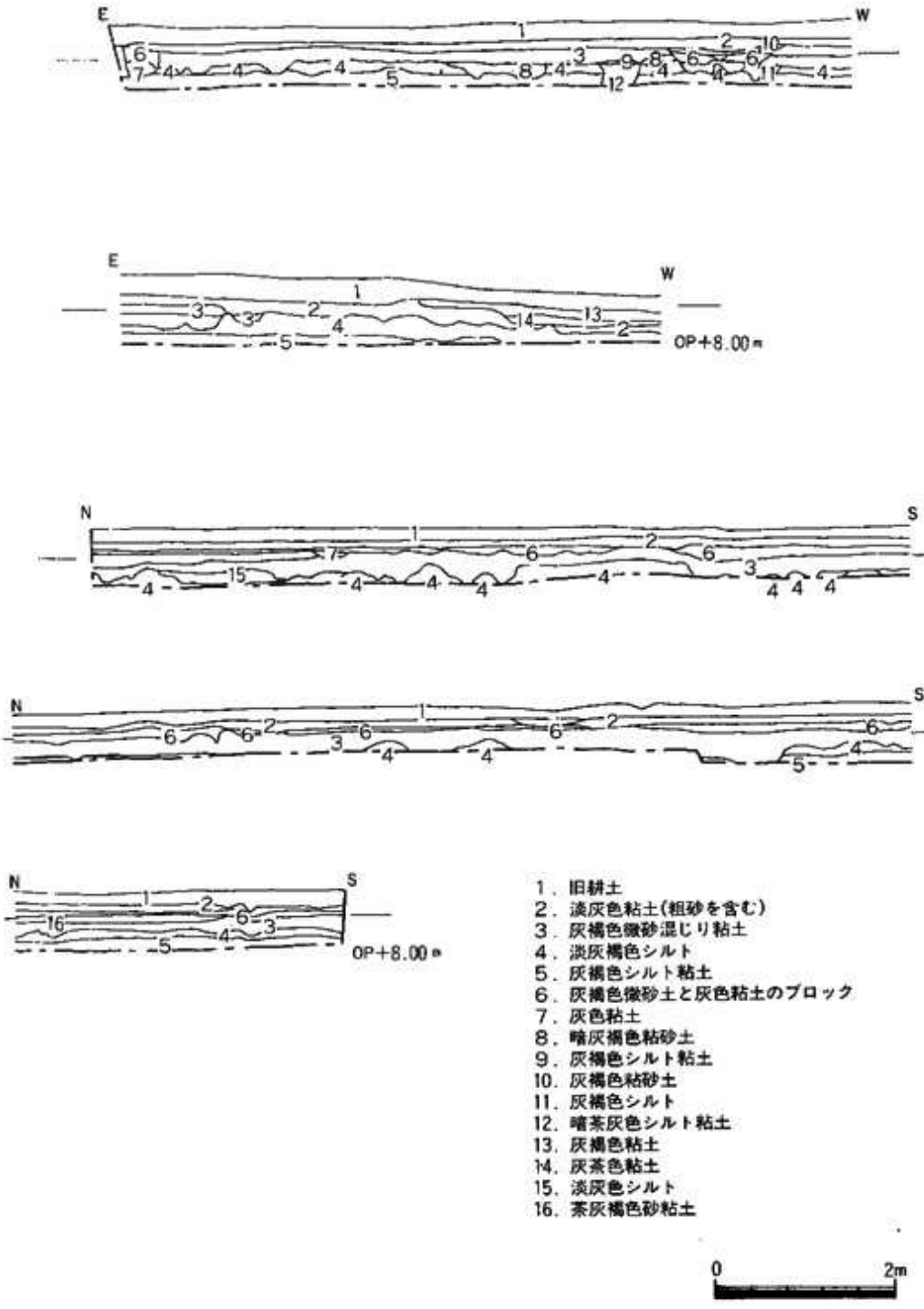

E
W
OP+8.00m
N
S
OP+8.00m
1．旧耕土
2．淡灰色粘土(粗砂を含む)
3．灰褐色微砂混じり粘土
4．淡灰褐色シルト
5．灰褐色シルト粘土
6．灰褐色微砂土と灰色粘土のブロック
7．灰色粘土
8．暗灰褐色粘砂土
9．灰褐色シルト粘土
10．灰褐色粘砂土
11．灰褐色シルト
12．暗茶灰色シルト粘土
13．灰褐色粘土
14．灰茶色粘土
15．淡灰色シルト
16．茶灰褐色砂粘土
0
2m

図63　断面図

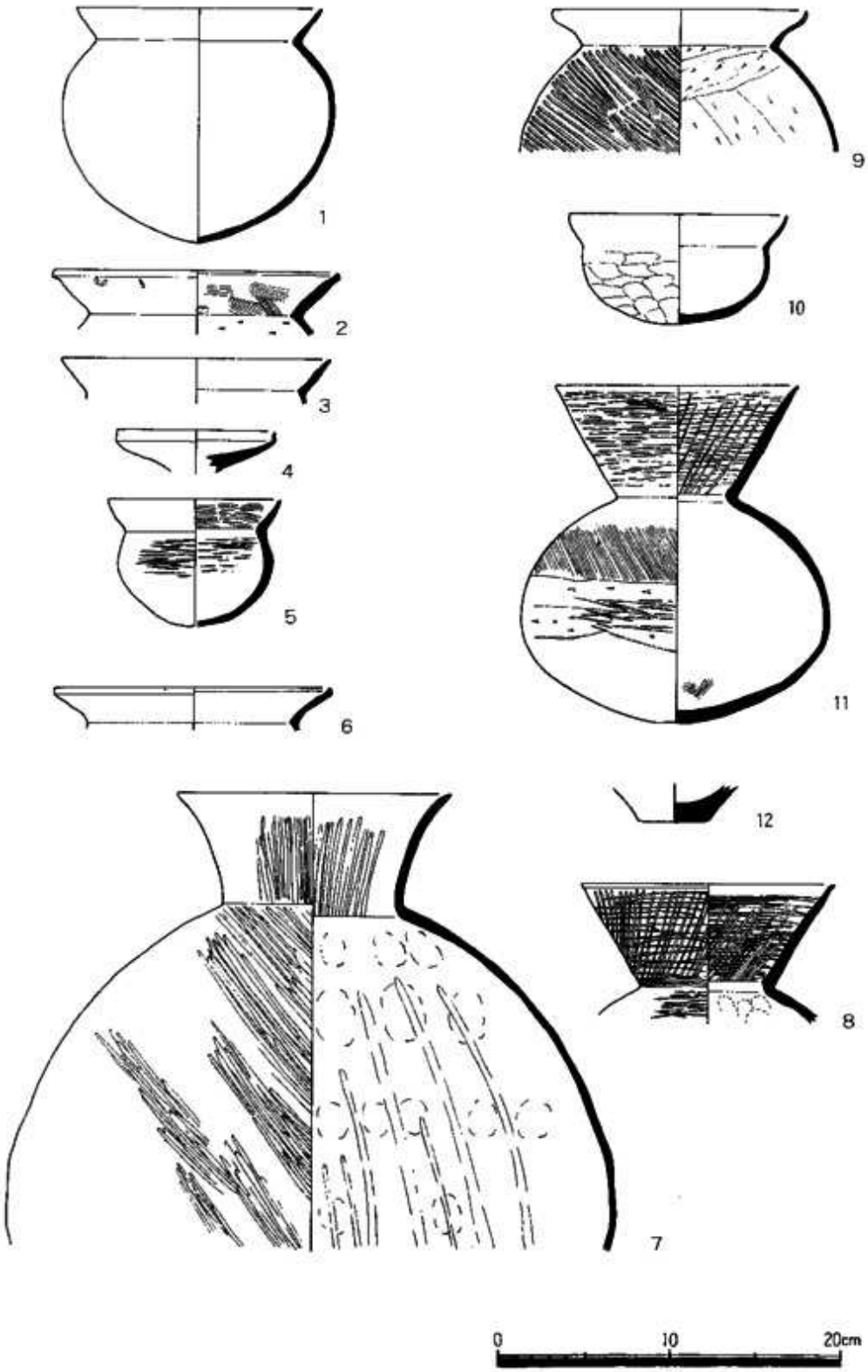


図64　出土遺物実測図1

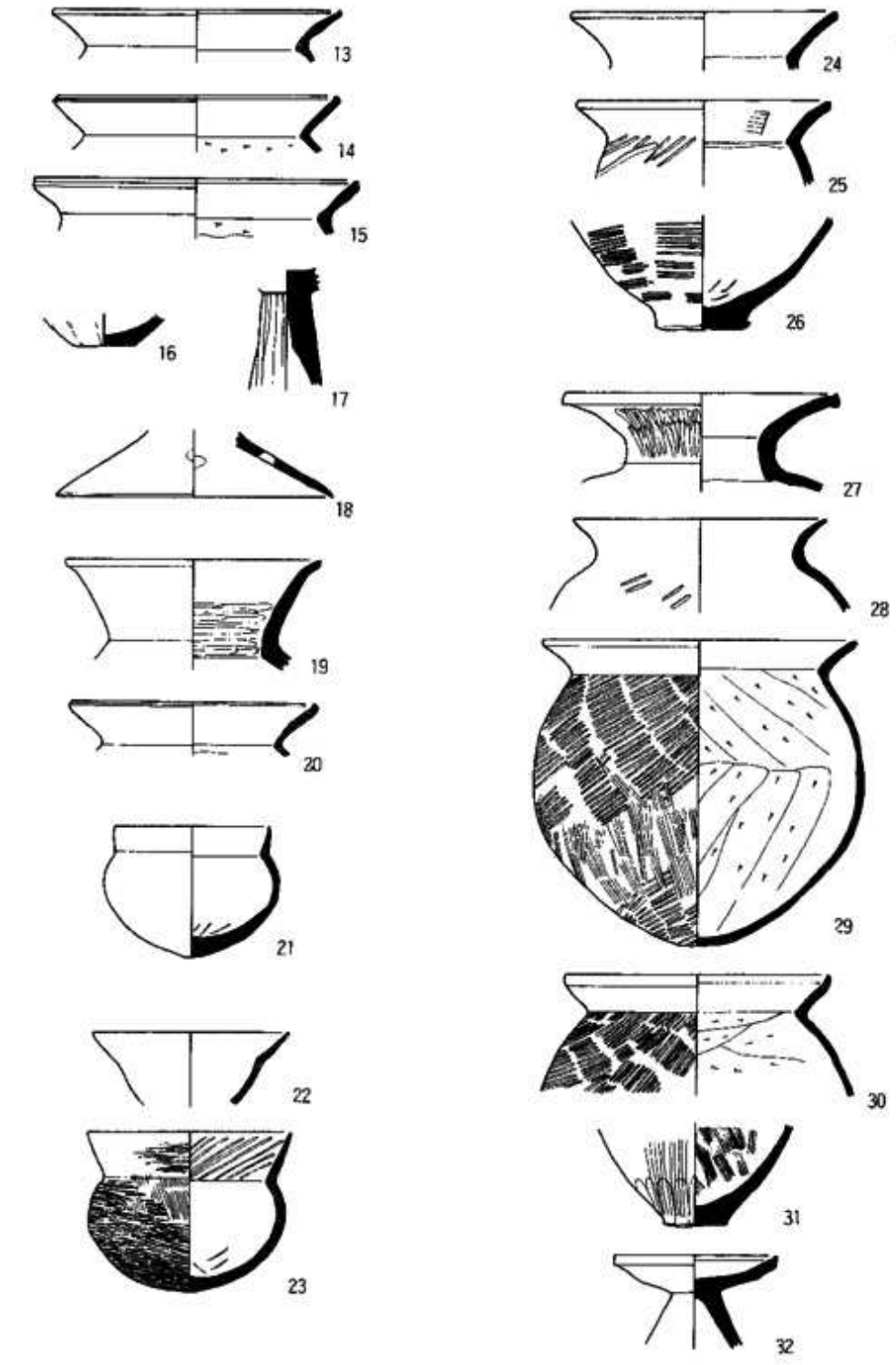


図65　出土遺物実測図2

Ⅳ　出土遺物観察表

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
1	甕 SD1床面	口径 14.3 最大径 15.8 器高 13.8	「く」の字形に屈折し、直線的にのびる口縁部に至る。端部は細く尖りぎみに終わる。体部は肩の張る扁平な卵球形を呈し、尖り底をもつ。	外面 内面 全体に磨耗を受け不明	色調　淡白褐色 胎土　長石・雲母・くさり礫を含む。 焼成　良好
2	甕 SI1	口径 16.5	「く」の字形に屈折し、外反する口縁部に至る。端部上方へわずかにつまみ、外傾する平坦面をつくる。	外面　口縁部をヨコナデ。 内面　口縁部は7条/9.5mmのハケのあとヨコナデし、胴部にヘラケズリを施す。	色調　淡褐色 胎土　微粒の角閃石を多く含む。 焼成　良好
3	甕 SI1	口径 15.6	「く」の字形に屈折し、直線的にのびる口縁部のみ遺存。端部は先細となり、外へ尖りぎみに終わる。	外面 内面 全体に磨耗を受け不明	色調　灰褐色 胎土　微粒の角閃石・長石を含む。 焼成　良好
4	小型器台 SI1	口径 9.2	浅い皿形の杯部のみ遺存。口縁部は外反ぎみに直立し、端部は尖って終わる。	外面 内面 全体に磨耗を受け不明	色調　赤褐色 胎土　石英・長石・くさり礫を含む。 焼成　良好
5	小型丸底壺 SI1	口径 10.0 最大径 9.0 器高 7.4	体部より丸く屈曲し、内湾ぎみにのびる口縁部に至る。端部は丸く終わる。	外面　口縁部、体部ともにヘラミガキを施す。 内面　口縁部に6条/9.5mmのハケのあと粗くヨコナデし、体部内面はヘラミガキを施す。	色調　淡赤褐色 胎土　微粒の長石を含む。 焼成　良好
6	甕 SI2	口径 17.1	「く」の字形に屈折し、外反する口縁部のみ遺存。端部は上方につまみ、外傾する平坦面をつくる。	外面 内面 全体に磨耗を受け不明	色調　淡白褐色 胎土　微粒の角閃石を含む。
7	壺 SP1	口径 15.9 最大径 35.5	体部より屈曲し、直立した後外反して長くのびる口縁部に至る。端部は尖りぎみに終わる。体部は大きく拡がり、下ぶくれの器体になると思われる。	外面　口縁部・胴部ともヘラミガキする。 内面　口縁部にヘラミガキし、胴部はヘラナデする。	色調　淡褐色 胎土　微粒の長石を含む。 焼成　良好
8	壺 SP1	口径 14.8	体部より「く」の字形近くに屈曲し、直線的に長くのびる口縁部に至る。端部は外へ丸くつまみぎみに終わる。	外面　口縁部をヘラミガキのあと暗文状のヘラミガキを施し、胴部にもヘラミガキをおこなう。 内面　口縁部をヘラミガキのあと暗文状のヘラミガキ。胴部には指圧痕がみられる。	色調　淡褐色 胎土　微粒の長石を含む。 焼成　良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
9	壺 SB1 P3	口径 14.8	「く」の字形に屈折し、外反した後内当ぎみにのびる口縁部に至る。口縁端部は薄くなり、上方へ尖りぎみに終わる。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部に11条/18.0㎝のタタキのあとハケ。タタキは左上がりである。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリである。	色調 淡褐色 胎土 微粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好
10	小型鉢 SP2	径 12.7 器高 6.4	半球形の体部から屈曲し、内当ぎみにのびる口縁部に至る。端部は上方へ尖りぎみに終わる。	外面 口縁部をヨコナデし、体部はヘラケズリし、そのあとナデと思われる。 内面 口縁部をヨコナデし、体部にナデをおこなう。	色調 淡褐色 胎土 微粒の長石を含む。 焼成 良好
11	壺 SB7−P2	口径 14.2 最大径 17.9 器高 19.8	「く」の字形に丸く屈曲し、直線的にのびる口縁部に至る。端部は細くなり、尖って終わる。体部は最大径が下位にあり、丸底をもつ。	外面 口縁部をヘラミガキし、胴部はヘラケズリのあと7条/9.0㎝のハケのちヘラミガキをおこなう。 内面 口縁部をヘラミガキし、そのあと暗文状のヘラミガキをする。胴部下半をハケのあとナデ。	色調 淡赤褐色 胎土 チャート、微粒の長石を含む。 焼成 良好
12	底 SP3	底径 4.2	突出する平底の底部である。	外面 内面 全体に磨耗を受け不明。	色調 淡茶褐色 胎土 微粒～3.0㎜程度の石英を多く含む。 焼成 良好
13	壺 SK3	口径 15.8	「く」の字形に屈曲し、外反する口縁部のみ遺存。端部は上方へつまみ、外傾する平坦面をつくる。	外面 内面 全体に磨耗を受け不明。	色調 淡橙白色 胎土 微粒の長石・角閃石・くさり礫を含む。 焼成 良好
14	壺 SK3	口径 15.3	「く」の字形に屈曲し、外反ぎみにのびる口縁部のみ遺存。端部はつまみ上げ、外傾する平坦面となり、1条の凹線が巡る。	外面 口縁部をヨコナデする。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリである。	色調 淡茶褐色 胎土 微粒の角閃石を含む。 焼成 良好
15	壺 SK3	口径 17.8	「く」の字形に屈曲し、直線的にのびる口縁部のみ遺存。端部は立立する平面となり、1条の凹線が巡る。器肉はかなり厚めである。	外面 口縁部をヨコナデする。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリである。	色調 淡茶褐色 胎土 微粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好
16	壺 SK3	底径 3.3	中央がわずかに凹む上げ底状の底部である。	外面 磨耗を受け不明。 内面 ヘラナデと思われる。	色調 淡褐色 胎土 長石・石英を含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
17	高杯 SK3		平坦な杯底部を残す柱状部のみ遺存。	外面 柱状部にヘラケズリがみられる。 内面 ナデをおこなう。	色調 淡褐色 胎土 長石・石英・くさり礫を含む。 焼成 良好
18	高杯 SK3	脚 径 15.2	直線的にのびる裾部のみ遺存。	外面 内面 } 全体に磨耗を受け不明。	色調 淡赤褐色 胎土 長石・くさり礫・雲母を含む。 焼成 良好
19	壺 SK4	口 径 14.0	体部より屈曲し、外反してのびる口縁部に至る。端部はわずかな平坦面をつくって終わる。	外面 磨耗を受け不明。 内面 口縁部下位をヘラミガキする。	色調 赤褐色 胎土 微粒～2.0㎜程度の石英・長石を多く含む。 焼成 良好
20	甕 SK4	口 径 13.4	「く」の字形に屈曲し、外反ぎみにのびる口縁部である。端部は上方へ丸くつまみ外傾する平坦面となり、1条の凹線が巡る。	外面 口縁部をヨコナデする。 内面 口縁部をヨコナでし、胴部はヘラケズリする。	色調 淡茶褐色 胎土 微粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好
21	小型鉢 SK9	口 径 8.4 最大径 9.4 器 高 7.3	体部から屈曲し、内弯ぎみに立つ口縁部に至る。端部は細く尖って終わる。体部は上位に最大径があり、わずかに平坦面を残す丸底をもつ。	外面 磨耗を受け不明。 内面 底部近くにヘラ原体による押圧がみられる。	色調 淡赤褐色 胎土 微粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好
22	小型鉢 SK10	口 径 10.7	半球形の体部から屈曲し、内弯ぎみにのびる口縁部。端部は細くなり、尖りぎみに終わる。	外面 内面 } 全体に磨耗を受け不明。	色調 淡赤褐色 胎土 チャート・石英を含む。 焼成 良好
23	小型丸底壺 SK10	口 径 11.2 最大径 10.9 器 高 8.9	偏球形の体部から「く」の字形近くに屈曲し、やや内弯ぎみにのびる口縁部に至る。端部は尖りぎみに終わる。	外面 口縁部をヘラミガキし、胴部は9条/8.5㎜のハケのあとヘラミガキを施す。 内面 口縁部をヨコナデのあと暗文状のヘラミガキ。底部はヘラナデのあとナデ。	色調 赤褐色 胎土 微粒の長石を含む。 焼成 良好
24	甕 SD5	口 径 14.5	体部から屈曲し、外反する口縁部のみ遺存。端部は丸みのある面をなす。	外面 内面 } ヨコナデと思われる。	色調 淡赤褐色 胎土 チャート・石英を含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
25	甕 SD5	口径 13.9	「く」の字形に屈曲し、24と同様の口縁部にとなる。 器肉は厚めである。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部に3条/12.0mmのタタキを施す。 内面 口縁部ヘラナデのあと軽くヨコナデし、胴部はヘラナデする。	色調 淡褐白色 胎土 チャート・石英を含む。 焼成 良好
26	甕 SD5	底径 5.2	突出する平底で、中央部がわずかに凹む。	外面 3条/12.0mmのタタキ 内面 ヘラ原体による押圧がみられる。	色調 淡褐白色 胎土 チャート・石英を含む。 焼成 良好
27	甕 包含層	口径 15.0	体部から屈曲して一旦直立した後、外反する口縁部に至る。端部はわずかにつまみ上げ、外傾する平坦面をつくる。器肉は厚い。	外面 口縁部にヘラミガキを施す。 内面 全体に磨耗を受け不明。	色調 淡赤褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
28	甕 包含層	口径 14.0	体部より丸く屈曲し、外反ぎみにのびる口縁部に至る。端部は細く、尖りぎみに終わる。	外面 胴部にタタキがみられる。 内面 磨耗を受け不明。	色調 淡赤褐色 胎土 長石・石英を含む。 焼成 良好
29	甕 包含層	口径 17.2 最大径 器高 17.1	「く」の字形に屈曲し、わずかに外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。体部は最大径が中位にあり、わずかに平坦面を残す丸底をもつ。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部に7条/20.0mmのタタキのあと5条/9.5mmのハケを軽く施す。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリである。	色調 茶褐色 胎土 微粒～0.5mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
30	甕 包含層	口径 14.8	「く」の字形に屈曲し、内弯ぎみにのびる口縁部に至る。端部は上方へ尖りぎみに終わる。	外面 胴部に7条/13.0mmのタタキを施す。 内面 胴部はヘラケズリである。	色調 淡茶褐色 胎土 花崗岩と微粒～1.0mm程度の角閃石を含む。 焼成 良好
31	鉢 包含層	底径 3.5	突出する平底をもつ。	外面 ヘラケズリのあとヘラミガキと思われる。 内面 5条/5.0mmのハケを施す。	色調 淡褐色 胎土 微粒の長石を含む。 焼成 良好
32	小型器台	口径 8.9	浅い皿形の杯部から、わずかにつまみ上げる端部に至る。裾部は漏斗状に開くと思われる。器肉は厚い。	外面 内面 磨耗を受け不明。	色調 赤褐色 胎土 微粒の長石・くさり礫を含む。 焼成 良好

第8節　第9次調査

I　調査の概要

調査地は八尾市光町1丁目に所在し、第8次調査地の北方約30mに位置する。当初、調査地内に9×16mの範囲に調査区を設定したが、SE1・SE2の規模を確認する目的で、東側に2×2m、北東隅に1×2mを拡張した。調査面積は約210㎡、調査期間は昭和56年12月4日から12月23日までである。

調査方法は現地表(OP＋8.9m)から盛土、旧耕土、床土までを機械掘削し、以下は人力による掘削作業とした。第8次調査と同じく、調査区周囲に幅約30cmの溝を掘り、遺構面の確認の後に調査を開始した。また調査終了後、遺構面以下を確認するため、機械掘削による試掘調査を行なった。

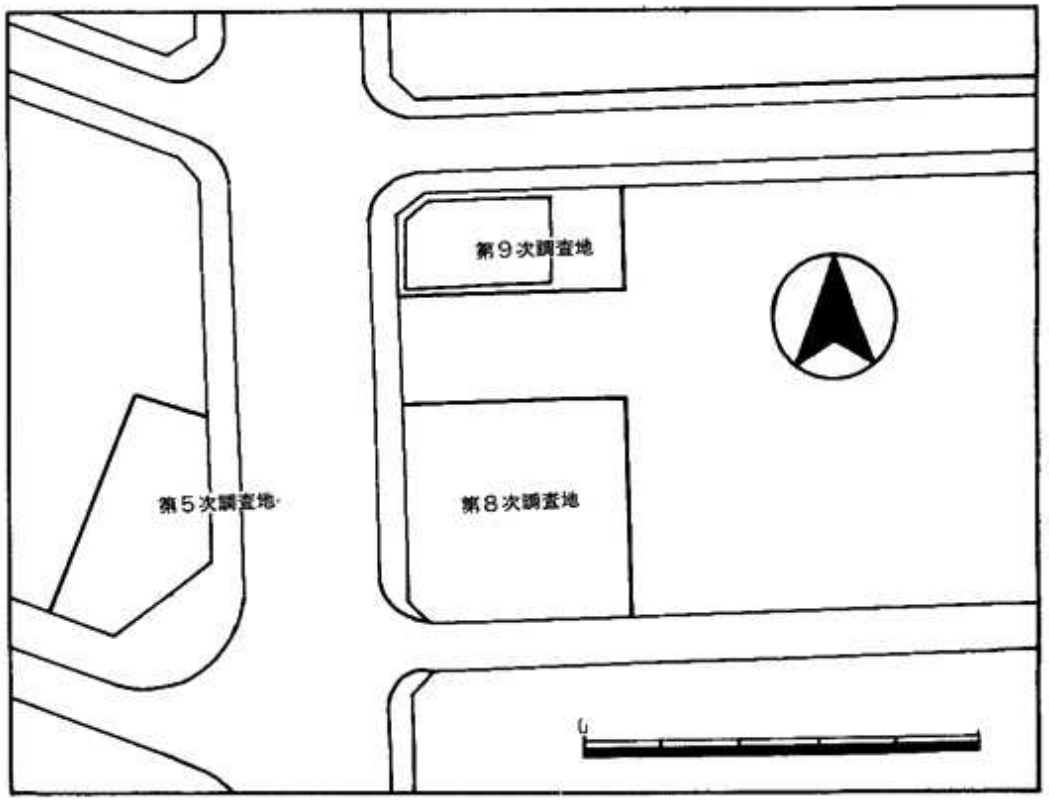


図66　調査地設定図

II 層序

盛土1mを除去すると、第1層旧耕土、第2層床土、第3層淡灰色粘土、第4層灰茶色砂粘土、第5層灰色シルト粘土、第6層暗灰茶色シルト粘土、第7層淡灰褐色シルト、第8層暗灰色シルト混じり粘土、第9層灰青色シルト、第10層灰色微砂土、第11層灰黄色粗砂土と灰色粗砂土の混合層、第12層暗灰黒色シルト、第13層暗灰色シルト粘土、第14層灰色シルト、第15層灰色粗砂、第16層暗灰色粘土の基本層序である。

このうち第3層は中世以降に削平された水田址で、断面観察のみにとどめた。第6層は遺物包含層、第7層が古墳時代前期の生活面である。

III 遺構・遺物

1）土坑

SK1

調査区の西側で検出した。最大幅2m・深さ40cmを測る不定形の土坑である。東側はSD6に切られ、西側は中世溝2に切られている。埋土は暗茶灰褐色粘土である。

遺物は壺(1)の他、庄内式甕等の細片が出土した程度である。

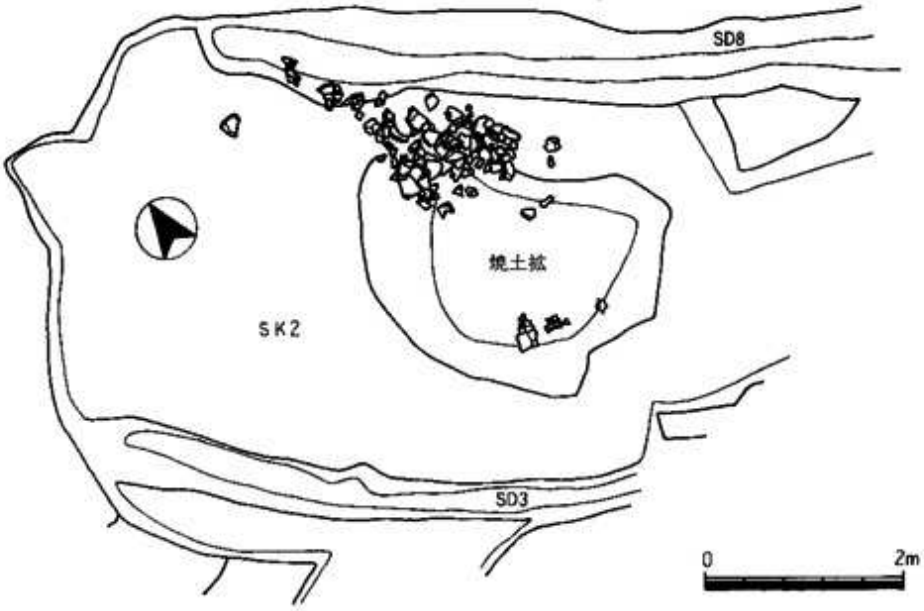


図67　SK2平面図

ＳＫ２

ＳＫ１の東側で検出した。最大幅約５ｍ・最小幅約2.5ｍ・深さ30cmを測り、不定形を呈する大型の土坑である。ＳＤ３・ＳＤ８に切られており、底部中央では径約1.5ｍ・深さ10cmの焼土坑を検出した。ＳＫ２の埋土は暗茶灰褐色砂粘土、焼土坑には黒灰色砂粘土と暗灰茶色シルトの２層が堆積し、上層には炭化物を含む。

焼土坑の上面からは、壺(２・３)、甕(４～６)、鉢(７)、底部有孔土器(８・９)、小型鉢(10)、小型壺(11)の10点が出土した。甕にはＶ様式タイプのもの(４)と庄内式のもの(６)がある。小型壺(11)は複合口縁部をもつもので、恩智遺跡①や大園遺跡②で、近似するものが出土している。

ＳＫ３

ＳＫ２の東側で検出した。検出部の径は３ｍ前後・深さ15cmを測り楕円形を呈するものと思われるが、南側は近世の井戸構築の際に削られている。また、東側はＳＤ９と、西側はＳＤ８と切り合う関係にある。内部にはＳＫ２の埋土と同じ層の暗茶灰褐色砂粘土が堆積する。

遺物は壺(12)、甕(14～16)等合わせて５点が出土した。甕は庄内式のものであるが、遺物間には時期差が認められる。

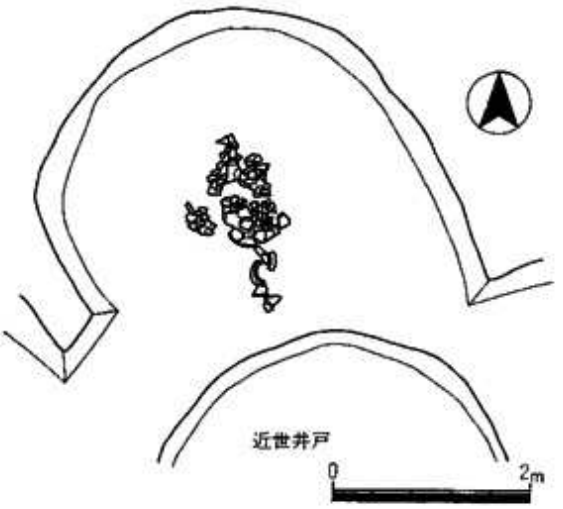


図68　SK3平面図

ＳＫ４

ＳＫ３のさらに南、調査区南側の中央部で検出した。最大幅1.7ｍ・最小幅1.2ｍの不定形を呈し、深さは約10cmを測る。北側にはＳＤ３が掘り込まれており、西側ではＳＫ10を切っている。また、ここからＳＤ７が西方向へ延びている。内部埋土は暗茶灰色シルト粘土１層である。

遺構内からは、庄内式甕(17)の他、土師器のごく細片をわずかに出土した程度である。

ＳＫ5

ＳＫ３の北東部に隣接する土坑である。長径1.4 m・短径1.2 mの楕円形を呈し、深さは20cmを測る。埋土は暗灰茶色砂混じり粘土１層で、遺物は出土しなかった。

ＳＫ６

調査区の南西隅で検出した。北側はＳＤ４に切られる。現存部は径約１mの半円形を呈し、深さ８cmの浅い土坑である。埋土は暗茶灰色シルト粘土１層である。

甕(18)等が若干出土したが、小片のために遺物からみた時期は不明である。

ＳＫ７

調査区の南東で検出した。径1.5 m前後・深さ25cmを測り、平面はほぼ円形、断面は逆台形を呈する。埋土は暗茶灰色砂混じり粘土１層である。

遺物は甕(19)の他、小片がわずかに出土した。

ＳＫ８

ＳＫ７の西側で検出した。長径1.2 m・短径0.8m・深さ30cmを測り、平面はほぼ楕円形、断面は逆台形を呈する。埋土はＳＫ７同様暗茶灰色砂混じり粘土１層である。出土遺物はなかった。

ＳＫ９

ＳＫ８のさらに西側で検出した。長径90cm・短径70cmのほぼ楕円形であるが、東側の一部は溝状にわずかに延びる。埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

ＳＫ10

北側をＳＫ４に切られた土坑である。現存部で１辺60cm前後の方形を呈し、深さ10cmで断面は逆台形を呈する。埋土は暗灰褐色シルト粘土１層である。

ＳＫ11

調査区北側で検出した。北側は近世井戸に切られ、調査区外に至る。検出部径1.5 mの楕円形、深さ20cmで断面は逆台形を呈する。埋土は暗茶灰色砂混じり粘土１層である。

SK12

調査区の東側近くで検出した。長径90cm・短径40cmの長楕円形を呈し、深さ6cmで断面は逆台形を呈する。埋土は暗灰青褐色砂混じり粘土1層である。

SK13

調査区の北西隅で検出した。西側はSD6と切り合う。最大幅1.4m・最小幅0.4m・深さ10cmを測り、平面は不定形、断面は逆台形を呈する。埋土は暗茶灰色砂粘土である。

SK14

調査区の南西側で検出した土坑で、SD4に切られている。現存部は一辺約50cmの方形で、深さ15cmの逆台形の断面を呈する。埋土は暗灰褐色シルト粘土1層である。

2）井戸

SE1

調査区北東隅で検出した井戸である。北東側は調査区外へ至ったため、拡張して規模を確認した。長径2m・短径1.6m・深さ1.1mを測る素掘りの井戸である。平面は楕円形、断面はU字形を呈する。

内部埋土は上方から暗茶灰褐色粘砂土、暗灰褐色粘土、青灰青色粘泥土、青灰色シルト粘土の4層が堆積する。

井戸の底部に接する状態で完形の壺(20)が出土した他、中位に堆積する暗灰褐色粘土から、多数の遺物が集積して出土した。中層から出土したものには、壺(21・33～41)・小型甕(22)・甕(23～32)・底部有孔土器(42)・鉢(43)・小型鉢(44～46)・高杯(48～51)等がある。

甕については、V様式タイプのものが多く、タタキは太筋で平底を持つ。他の器種の底部も平底のものが多く、凹み底や尖り底のものはわずかである。

これらのことから遺物全体の時期は、ほぼ庄内式の古相に比定できるものと思われる。

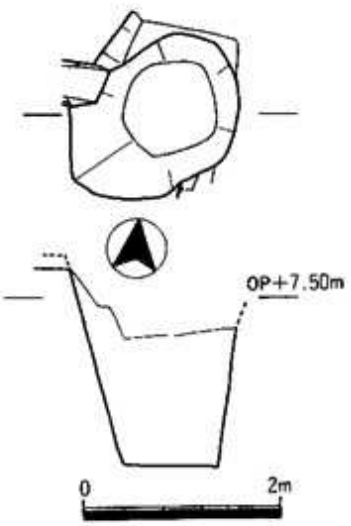


図69　SE1実測図

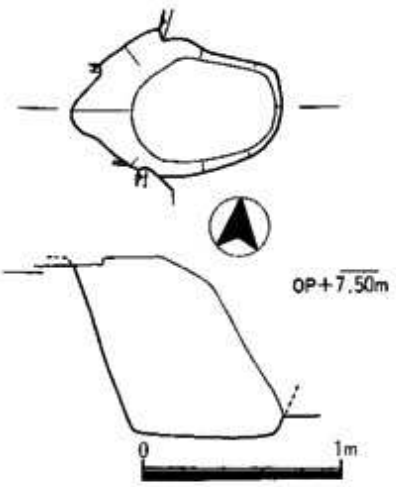


図70　SE2'平断面図

ＳＥ２

調査区の東壁で検出したため、ＳＥ１と同様に拡張したが、東側は肩から底部近くまで斜めに撹乱をうけていた。長径約2.1ｍ・短径1.3ｍ・深さ90cmを測り、底部はほぼ水平である。

埋土は上方から灰青褐色粗砂土、暗灰青褐色粘土、灰青色粘土、暗灰色粘土の4層が堆積する。

遺物はすべて、遺構中位に堆積する暗灰青褐色粘土からの出土である。器種には壺(52・63・64)、甕(53～61・65～69)、小型甕(62)、高杯(73～76)等がある。

遺物のうち甕にはＶ様式タイプのもの(55・67・68)の他、Ｖ様式と庄内式両型式の要素をもつ甕が多くを占めている。また、底部については、平底を残すものがほとんどである。遺物全体を通じ、ＳＥ１と同様に庄内式の古相に比定できるものと考えられる。

3）溝

ＳＤ１

調査区西側で検出したが、中央を中世溝１に分断されている。幅50cm・深さ15cmを測るもので、北西方向に延びる。内部には暗茶灰色砂粘土が堆積している。

壺(77)の小片等がわずかに出土した程度である。

ＳＤ２

ＳＤ１の西側に隣接し、ほぼ平行する溝である。南側ではＳＤ５に切られ、ＳＤ７と合流する。北側でＳＫ１を切りＳＤ６と合流するが、この溝も中世溝１に切られている。幅約25cm・深さ15cmを測る。埋土はＳＤ１同様暗茶灰色砂粘土の１層である。

ＳＤ３

調査区南側中央から北西隅に延びる。南側ではＳＫ４を、北側ではＳＫ２を切っているが、ＳＤ１・ＳＤ２同様中世溝１に切られている。幅約25cm・深さ15cmを測る。内部埋土はＳＤ１・ＳＤ２と同層である。

ＳＤ４

調査区南西隅で検出した。ＳＤ２の西側を平行して流れる溝である。ＳＫ６・ＳＫ14を切り、中世溝２に切られている。幅30～50cm・深さ20cmを測る。埋土は暗茶灰色砂粘土１層である。

ＳＤ５

調査区の南壁ぎわで検出した。北側でＳＤ２を切っている。Ｌ字形に曲がる溝で、幅20～60cm・深さ10～20cmを測る。埋土は暗灰茶色シルト粘土である。

ＳＤ６

調査区西側で検出した南北方向の溝である。ＳＫ１を切り、ＳＫ13と切り合う。南側ではＳＤ２と合流している。幅40～80cm・深さ30cmを測る。埋土は暗茶灰褐色砂粘土である。

ＳＤ７

調査区南側で検出した東西方向の溝である。東側ではＳＫ４・ＳＫ10と切り合い、西側でＳＤ２と合流する。幅20～30cm・深さ15cmを測る。埋土はＳＤ２と同層である。

ＳＤ８

調査区中央で検出した。ＳＫ２の北東側を切っている。幅30～50cm・深さ15cmを測る。埋土はＳＤ１～ＳＤ３と同層であり、ＳＤ１～ＳＤ４に平行して北西方向に延びることから、これらの溝は同一の目的で構築されたものと推定される。

ＳＤ９

ＳＫ３の東側で検出した溝である。幅60～100cm・深さ15cmを測り、Ｌ字形を呈する。埋土は暗茶灰褐色砂粘土である。

中世の溝

調査区中央を東西に延びる溝１と西壁に沿って南北に延びる溝２を検出した。これらの溝は灰色粘土層をベースにしており、中世の条里制の区画にも一致し、水田耕作に伴なうものと考えられる。

〔注　記〕

1　瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡Ⅲ』1981年

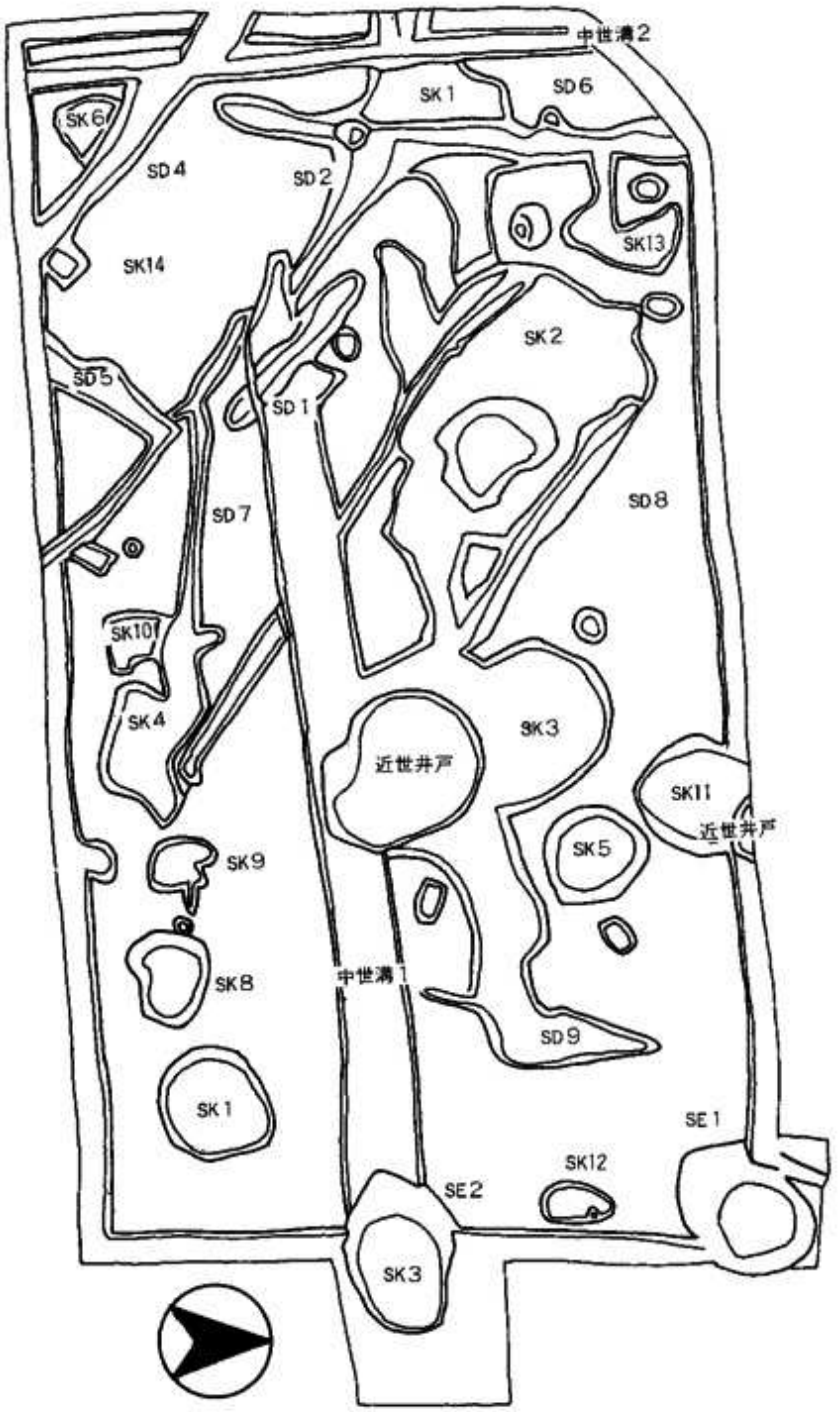
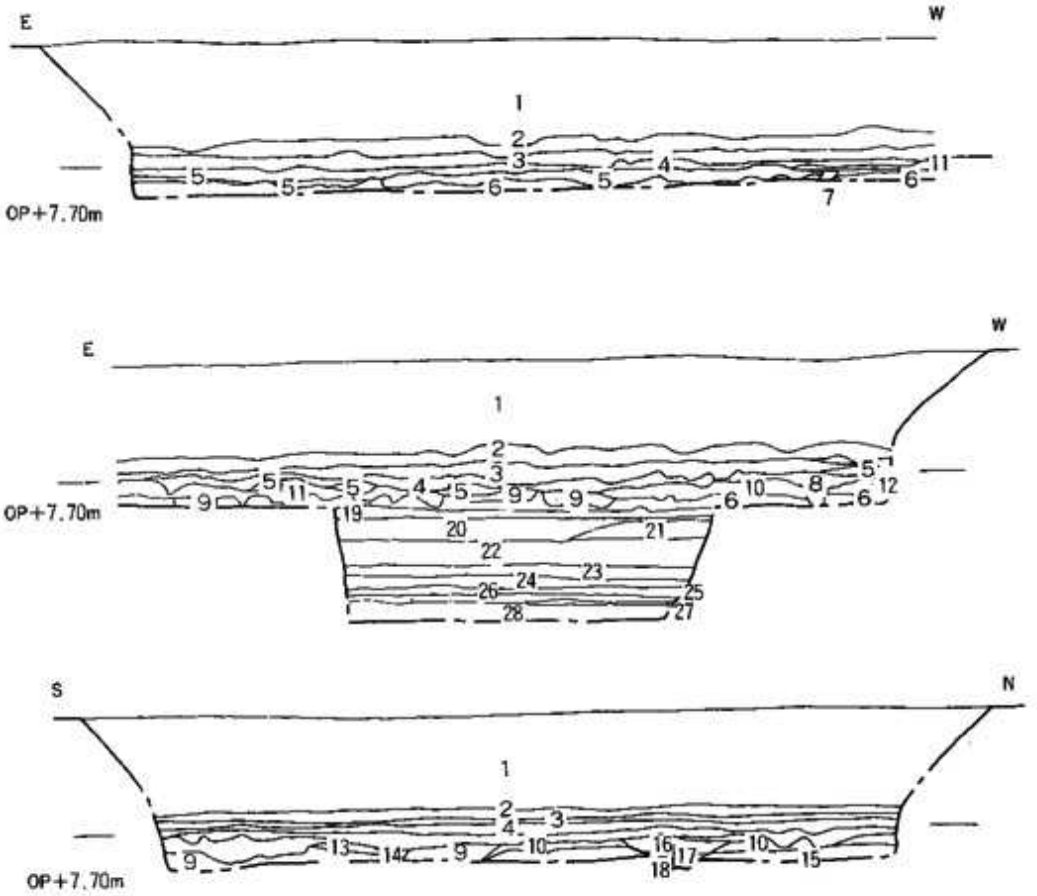

中世溝2
SK1
SD6
SK6
SD4
SD2
SK13
SK14
SK2
SD5
SD1
SD8
SD7
SK10
SK4
近世井戸
SK3
SK11
近世井戸
SK5
SK9
SK8
中世溝1
SD9
SK1
SE1
SK12
SE2
SK3
0
5m

図71　平面図



1．盛土
2．旧耕土
3．床土
4．淡灰色粘土
5．灰色シルト粘土
6．淡灰色シルト粘土
7．暗灰褐色シルト
8．灰褐色シルト粘土
9．暗灰褐色細砂粘土
10．暗灰茶色シルト粘土
11．灰茶色砂粘土
12．茶灰色細砂粘土
13．淡灰茶色シルト粘土
14．淡灰茶色細砂混じり粘土
15．灰褐色シルト粘土
16．暗灰茶色細砂混じり粘土
17．灰茶色砂混じり粘土
18．灰茶色砂粘土
19．暗灰色シルト混じり粘土
20．灰青色シルト混じり粘土
21．灰青色シルト
22．灰色微砂土
23．灰黄色粗砂土と灰色粗砂土の混合層
24．暗灰黒色シルト
25．暗灰色シルト粘土
26．灰色シルト
27．灰色粗砂土
28．暗灰色粘土

0　2m

図72　断面図

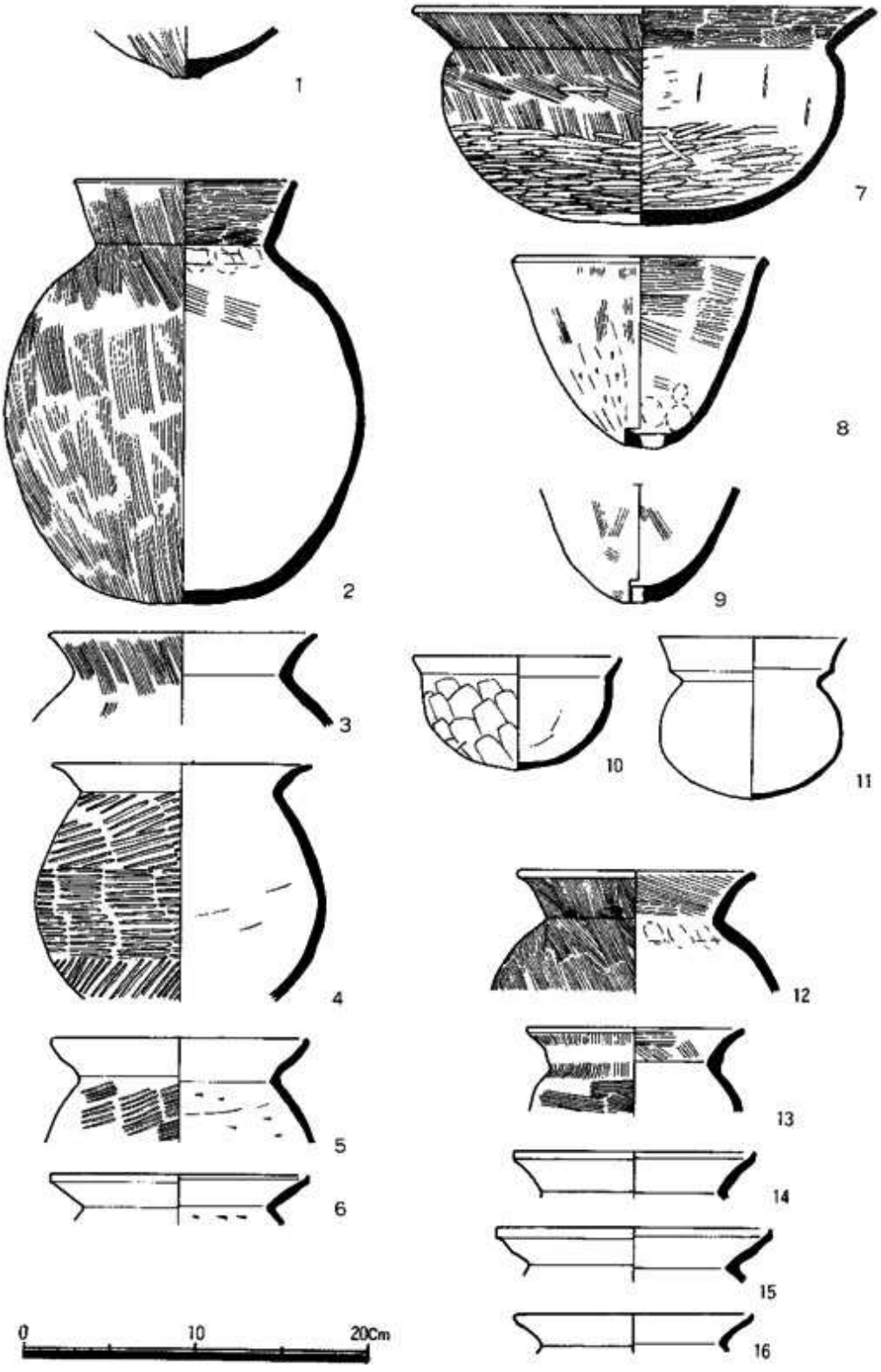


図73　出土遺物実測図1

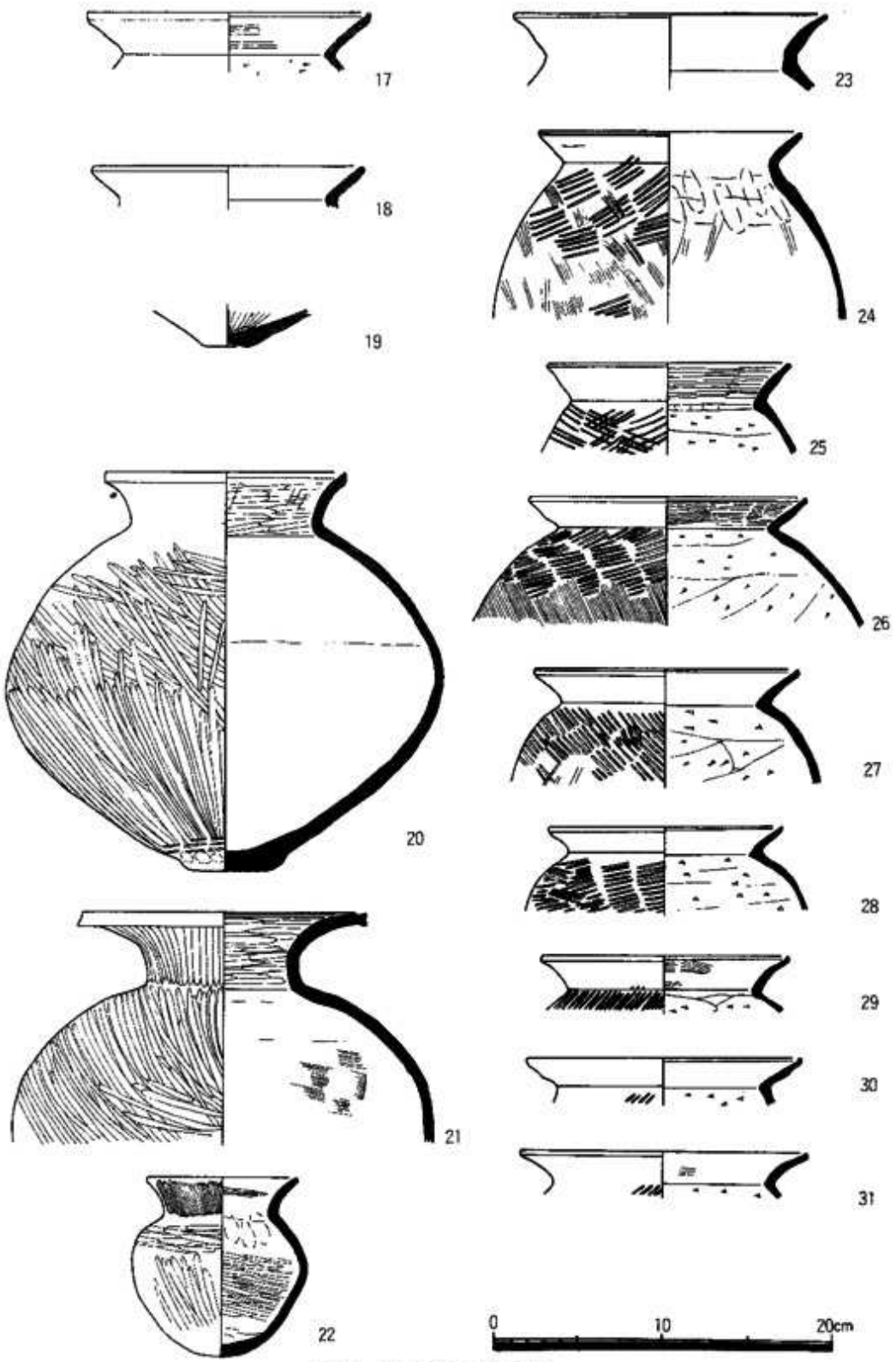


図74　出土遺物実測図2

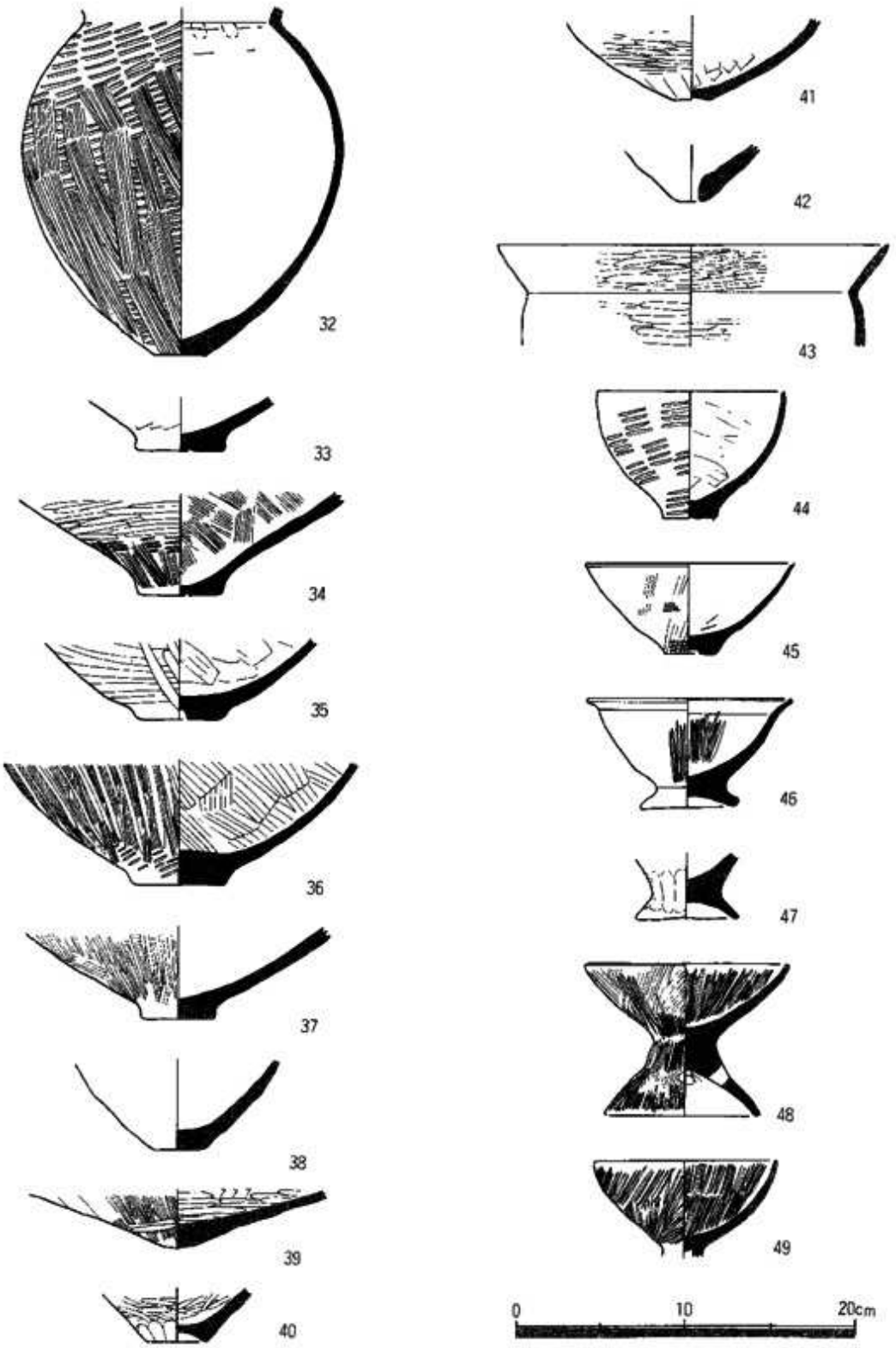


図75　出土遺物実測図3

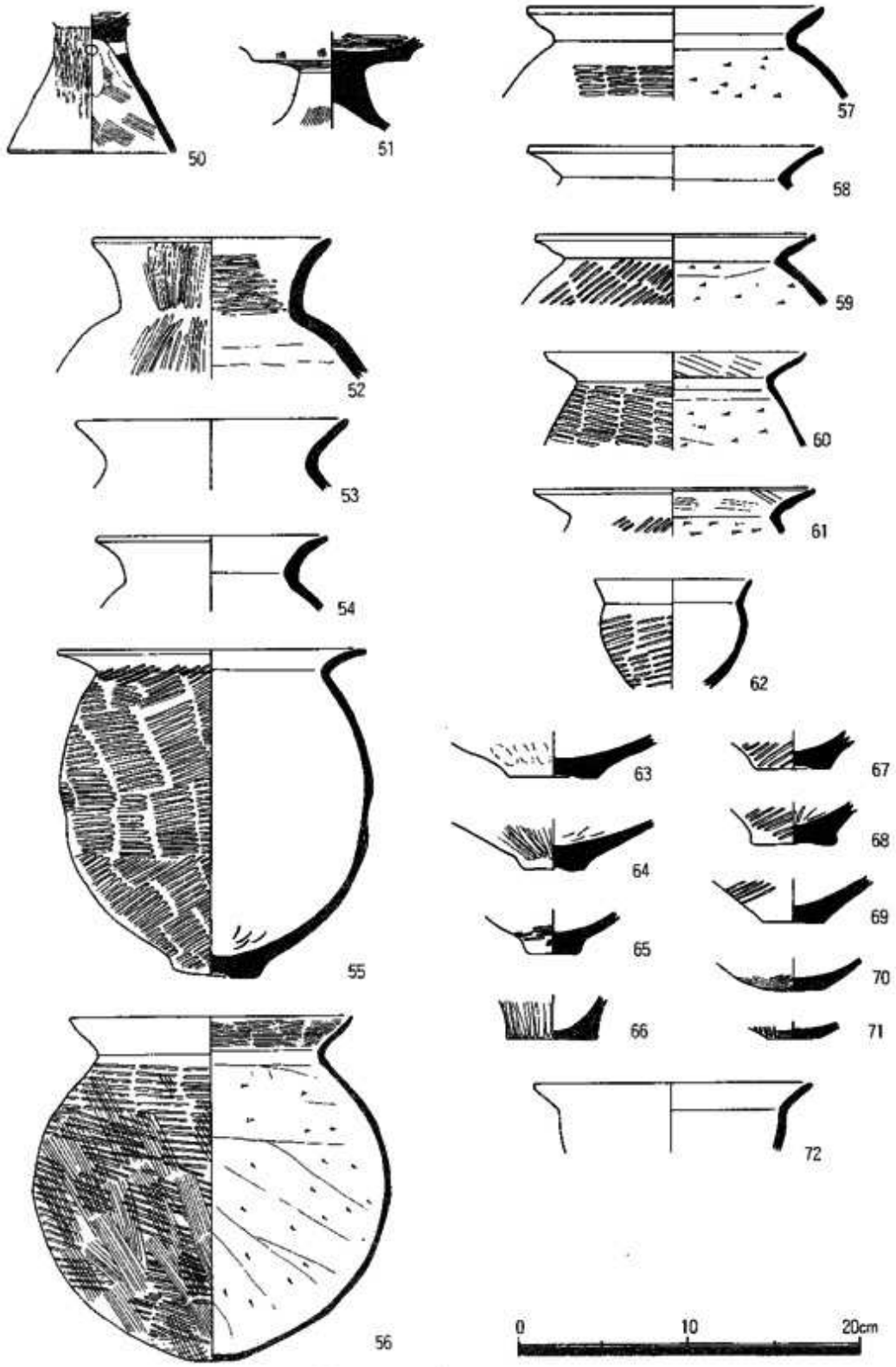


図76　出土遺物実測図4

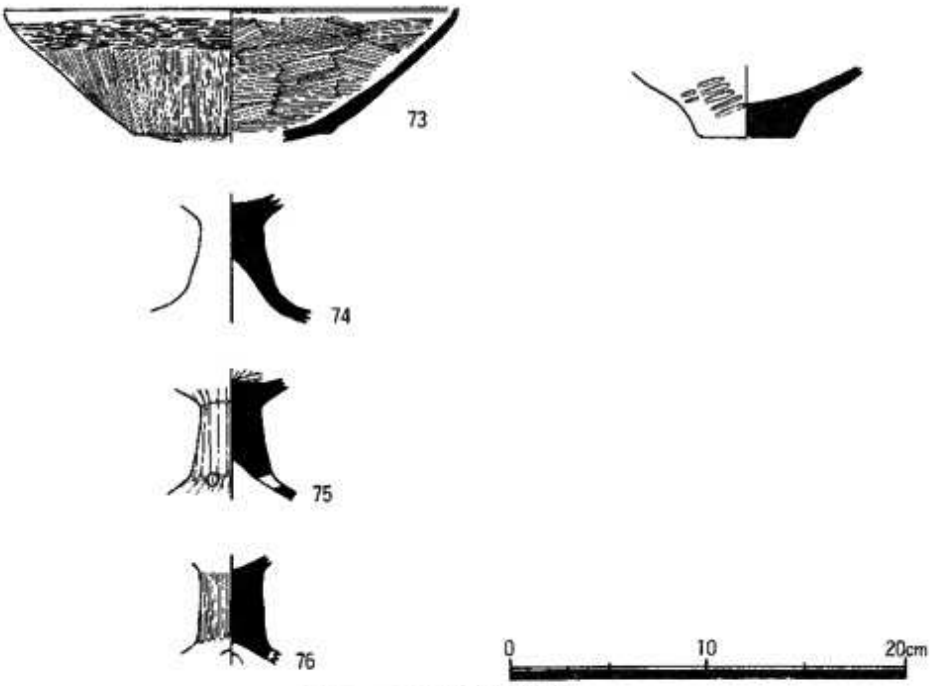


図77　出土遺物実測図5

Ⅳ　出土遺物観察表

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
1	壺 SK1	底径 1.6	突出する小さな平底で、中央がわずかに凹む。	外面　ヘラミガキを施す。 内面　磨耗を受け不明。	色調　淡褐灰色 胎土　0.5～3.0mm程度の石英を多く含む。 焼成　良好
2	壺 SK2	口径 12.5 最大径 20.8 器高 24.7	体部より屈曲し、外傾する口縁部に至る。端部は外傾する平坦面となる。体部は中位に最大径がある卵球形で、丸みのある平底をもつ。	外面　全体に9条/14.0mmのハケを施す。 内面　口縁部に9条/14.0mmのハケ。胴部はハケのあとナデ。	色調　淡赤褐色 胎土　微粒～2.0mm程度の石英・長石を含む。 焼成　良好
3	壺 SK2	口径 15.2	「く」の字形近くに屈曲し、外傾した後上位で外反する口縁部である。端部は細くなり、尖りぎみに終わる。	外面　口縁部を7条/13.0mmのハケのあとヨコナデする。 内面　口縁部をヨコナデし、胴部にナデをおこなう。	色調　淡白赤色 胎土　微粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成　良好
4	壺 SK2	口径 15.0 最大径 16.8	「く」の字形に屈曲し、外反する口縁部に至る。端部は細くなり、丸く終わる。 体部は中位に最大径があり、球形に近い形状と思われる。	外面　口縁部をヨコナデし、胴部に7条/21.0mmのタタキを上・中・下の3段に分割して施す。 内面　口縁部をヨコナデし、胴部にナデをおこなう。	色調　淡赤褐色 胎土　微粒の長石・角閃石を多く含む。 焼成　良好
5	壺 SK2	口径 14.7	「く」の字形近くに屈曲し、内寄ぎみにのびる口縁部に至る。端部は丸く終わる。	外面　口縁部をヨコナデし、胴部は6条/15.5mmのタタキを施す。 内面　口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリである。	色調　淡褐色 胎土　微粒の角閃石を多く含む。 焼成　良好
6	壺 SK2	口径 14.9	「く」の字形に屈折し、直線的にのびる口縁部に至る。端部はつまみ上げ、直立する平坦面をつくる。	外面　口縁部をヨコナデする。 内面　口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリを施す。	色調　茶褐色 胎土　微粒の角閃石を多く含む。 焼成　良好
7	鉢 SK2	口径 26.3 器高 12.6	半球形の体部から屈曲し、外反してのびる口縁部に至る。端部は外傾する平坦面をつくる。	外面　全面を7条/10.5mmのハケのあと口縁部を軽くヨコナデ、胴部下半を中心にヘラミガキを施す。 内面　口縁部を7条/10.5mmのハケのあと胴部をヘラナデする。下半にヘラミガキがみられる。	色調　淡赤褐色 胎土　長石・石英・チャートを含む。 焼成　良好
8	底部穿孔土器 SK2	口径 14.2 器高 11.2 孔径 1.3	尖りぎみの丸底から内寄ぎみに開き、口縁部に至る深い直口の鉢である。口縁部は短くわずかに外反し、端部は外傾する平坦面となる。	外面　口縁部をヨコナデする。体部は下部をヘラケズリし、上部にハケのあとナデ。 内面　下部をユビナデ、上部は7条/14.0mmのハケ。	色調　淡赤褐色 胎土　チャート・長石・石英を含む。 焼成　良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
9	底部有孔土器 SK2	孔径 0.8	8と同様の鉢の底部であろう。	外面 4条/6.5mmのハケのあとナデ。 内面 底部付近をナデ。 上方に5条/6.0mmのハケを施す。	色調 褐灰色 胎土 微粒の角閃石・長石・石英・チャートを含む。 焼成 良好
10	小型鉢 SK2	口径 12.0 器高 6.5	半球形の体部から屈曲し、内弯ぎみに立つ短かい口縁部に至る。端部は丸く尖りぎみに終わる。	外面 口縁部をヨコナデし、体部にヘラケズリがみられる。 内面 口縁部をヨコナデし、体部にヘラ原体による押圧が残る。	色調 淡褐色 胎土 微粒の長石・くさり礫を含む。 焼成 良好
11	小型鉢 SK2	口径 11.7 最大径 10.5 器高 9.3	「く」の字形に屈曲した後屈曲し、上方へ外反ぎみに立つ口縁部に至る。端部は尖りぎみに終わる。 体部は鞠球形を呈する。 器肉は極めて薄い。	外面 口縁部をヨコナデする。 他は磨耗が著しく不明である。	色調 赤褐色 胎土 1.0～4.0mm程度の花崗岩を多く含む。 焼成 良好
12	甕？ SK3	口径 13.4	「く」の字形近くに屈曲し、外反する口縁部に至る。端部は丸くつまんで終わる。	外面 口縁部に6条/8.0mmのハケのあとヨコナデし、胴部は6条/8.0mmのハケを施す。 内面 口縁部を6条/8.0mmのハケのあとヨコナデし、胴部はヘラナデをおこなう。	色調 淡赤褐色 胎土 長石・チャート・石英を含む。 焼成 良好
13	甕？ SK3	口径 12.4	「く」の字形近くに屈曲し、外反ぎみにのびる口縁部に至る。端部はわずかに平坦となる。	外面 口縁部を6条/8.5mmのハケのあとヨコナデし、胴部に6条/8.5mmのハケを施す。 内面 口縁部をハケのあとヨコナデし、胴部はヘラナデを施す。	色調 茶褐色 胎土 微粒のチャート・長石を含む。 焼成 良好
14	甕 SK3	口径 13.8	外反する口縁部のみ遺存。端部は鋭くつまみ上げ、直立する平坦面となる。	外面 口縁部をヨコナデする。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリする。	色調 淡茶褐色 胎土 微粒～1mm程度の角閃石を含む。 焼成 良好
15	甕 SK3	口径 15.9	「く」の字形に鋭く屈折し、外反ぎみにのびる口縁部に至る。端部は強くつまみ上げ、直立する凹面となる。	外面 口縁部をヨコナデする。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリする。	色調 茶褐色 胎土 微粒の角閃石を含む。 焼成 良好
16	甕 SK3	口径 13.7	外反した後上位で内弯ぎみとなる口縁部のみ遺存。端部は上方へ丸くつまみ上げぎみに終わる。	外面 内面 ヨコナデと思われる。	色調 茶褐色 胎土 微粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
17	甕 SK4	口径 16.5	「く」の字形に屈曲し、直線的にのびる口縁部のみ遺存。端部は上方へつまみ、直立する凹面となる。	外面 口縁部をヨコナデする。 内面 口縁部のハケのあとヨコナデし胴部はヘラケズリである。	色調 淡茶褐色 胎土 微粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好
18	甕 SK6	口径 15.8	体部より外折ぎみに屈折する口縁部のみ遺存。端部は外傾する面となる。	外面 口縁部をヨコナデする。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリである。	色調 茶褐色 胎土 微粒の角閃石を含む。 焼成 良好
19	壺 SK7	底径 2.4	中央がわずかに凹む上げ底状の底部である。 底面に木葉痕がみられる。	外面 ヘラミガキあるいはナデと思われる。 内面 ヘラ原体による押圧がみられる。	色調 赤褐色 胎土 微粒の長石・くさり礫を含む。 焼成 良好
20	壺 SE1F層	口径 14.1 最大径 25.8 底径 5.7 器高 23.6	体部より外傾した後、外反ぎみとなる口縁部に至る。端部は上方へわずかにつまみ、外傾する平坦面となる。体部は中位に最大径がある扁平な球形で、突出する平底を有する。	外面 口縁部をヨコナデし、底部近くにタタキのあと全体にヘラミガキを施す。 内面 口縁部はヘラナデのあとヘラミガキし、端部近くをヨコナデする。胴部は丁寧なヘラナデと思われる。	色調 淡赤褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好 外面に煤が付着する。
21	壺 SE1上層	口径 16.7	体部より丸く屈曲し、外反する口縁部に至る。端部は上下にわずかに肥厚し、直立する凹面となる。体部は球形に近いと考えられる。	外面 全面にヘラミガキを施す。 内面 口縁部をヘラミガキし、胴部はハケを施す。	色調 淡黄白色 胎土 チャート・石英を多く含む。 焼成 良好
22	小型壺 SE1上層	口径 8.7 最大径 10.3 底径 2.4 器高 10.6	体部より丸く屈曲し、外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。体部はやや上位に最大径があり、肩の張る球形で、わずかに平坦面を残す底部を有する。	外面 口縁部はハケのあとヘラミガキ、胴部は部分的にヘラミガキが残る。 内面 口縁部、胴部ともヘラミガキを施す。	色調 淡褐灰色 胎土 微粒の角閃石・長石・石英を含む。 焼成 良好
23	甕？ SE1上層	口径 18.4	丸く屈曲して外反ぎみにのびる口縁部のみ遺存。端部は細くなり、尖りぎみに終わる。	外面 内面 } 口縁部をヨコナデする。	色調 赤褐色 胎土 微粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好
24	甕 SE1上層	口径 15.3	「く」の字形に丸く屈曲し、直線的にのびる口縁部に至る。端部は丸く終わる。体部は下位に最大径があると思われた。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部は5条/14.0mmのタタキのあと、4条/6.0mmのハケを施す。 内面 口縁部をヨコナデし、くびれ部近くにユビナデのあと全体にヘラナデを施す。	色調 淡褐灰色 胎土 チャート・石英・長石を含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
25	甕 SE1上層	口 径 14.0	「く」の字形近くに屈曲し、外反する口縁部に至る。端部は細くなって終わる。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部に4条/11.0mmのタタキを右上がりのあと左上がりに施す。 内面 口縁部を4条/11.0mmのハケのあとヨコナデし、胴部はヘラケズリである。	色調 淡灰褐色 胎土 微粒の長石を含む。 焼成 良好
26	甕 SE1上層	口 径 16.2	「く」の字形に屈曲し、わずかに内弯してのびる口縁部に至る。端部は上方へつまみ、外傾する平坦面となる。体部は上位で強く張ると思われる。	外面 口縁部はヨコナデし、胴部に6条/14.5mmのタタキのあと10条/15.5mmのハケを施す。 内面 口縁部はヨコナデし、胴部はヘラケズリである。	色調 茶褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角閃石を含む。 焼成 良好
27	甕 SE1上層	口 径 15.5	「く」の字形に屈曲し、外反ぎみにのびる口縁部に至る。端部はつまみ上げ、外傾する凹面となる。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部に5条/14.5mmの右上りのタタキのあと、わずかに4条/4.5mmのハケがみられる。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリである。	色調 淡灰褐色 胎土 微粒の長石を含む。 焼成 良好
28	甕 SE1上層	口 径 13.6	「く」の字形に屈曲して外反し、上位で内弯ぎみとなる口縁部となる。端部は上方へ丸くつまむ。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部に6条/13.5mmの右上りのタタキのあと、わずかに5条/4.5mmのハケがみられる。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリである。	色調 淡褐色 胎土 微粒の角閃石を含む。 焼成 良好
29	甕 SE1上層	口 径 14.5	「く」の字形に屈折し、外反する口縁部に至る。端部は上方へつまみ、外傾する平坦面となる。	外面 胴部に6条/13.5mmのタタキを施す。 内面 口縁部はハケのあとヨコナデし、胴部をヘラケズリする。	色調 赤褐色 胎土 石英・長石・雲母を含む。 焼成 良好
30	甕 SE1上層	口 径 16.0	「く」の字形に鋭く屈折し、直線的にのびる口縁部のみ遺存。端部はつまみ上げる。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部に4条/6.5mmのタタキ。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリである。	色調 淡褐色 胎土 石英を多く含む。 焼成 良好
31	甕 SE1上層	口 径 16.8	「く」の字形に鋭く屈折し、外反する口縁部のみ遺存。端部はつまみぎみとなり、外傾する平坦面となる。	外面 胴部はタタキを施す。 内面 磨耗を受け不明。	色調 淡褐色 胎土 角閃石・石英・くさり礫を含む。 焼成 良好
32	甕 SE1上層	最大径 18.8 底 径 3.2	上位に最大径をもつ倒卵型を呈する体部で、口縁部を欠損する。底部はわずかに平坦面を残す。	外面 6条/19.5mmのタタキのあと底部を中心に放射状に10条/10.0mmのハケを施す。 内面 ヘラナデを施す。	色調 淡褐灰色 胎土 石英を含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
33	壺 SE11層	底径 5.4	突出する平底で、中央部がわずかに凹む。	外面 ヘラ原体による押圧がみられ、そのあと全体にヘラミガキすると思われる。 内面 ヘラナデを施す。	色調 淡褐色 胎土 石英・チャートを含む。 焼成 良好
34	壺 SE11層	底径 5.0	突出する平底で、中央部がわずかに凹む。	外面 4条/11.0mmのクタキのあと部分的に8条/11.5mmのハケを施し、全体にヘラミガキを施す。 内面 8条/11.5mmのハケを施す。	色調 淡褐灰色 胎土 角閃石・雲母を含む。 焼成 良好
35	壺 SE11層	底径 5.4	ドーナツ状の底部である。	外面 ヘラミガキを施す。 内面 ヘラナデを施す。	色調 淡褐色 胎土 チャート・長石・石英を含む。 焼成 良好
36	壺 SE11層	底径 5.0	突出する平底をもつ。	外面 5条/15.5mmのクタキのあと8条/6.0mmのハケを施し、そのあとヘラミガキする。 内面 ヘラナデを施す。	色調 暗茶褐色 胎土 長石・石英を含む。 焼成 良好 外面に煤付着が著しい。
37	壺 SE1上層	底径 4.4	突出する平底で、木葉痕がみられる。	外面 7条/13.0mmのハケのあとヘラミガキを施す。 内面 底部近くにヘラ原体による押圧が残る。	色調 淡白褐色 胎土 0.5~1.5mm程度のチャートを多く含む。 焼成 良好
38	壺 SE1上層	底径 3.6	平底の底部である。	外面 内面 全体に磨耗を受け不明。	色調 赤褐色 胎土 角閃石・石英・長石・くさり礫を含む。 焼成 良好
39	壺 SE1上層		尖り底の底部である。	外面 9条/10.0mmのハケのあと、底部近くをヘラ原体によって押圧する。 内面 ヘラナデのあとヘラミガキを施す。	色調 淡茶褐色 胎土 チャート・石英を含む。 焼成 良好 外面に煤が付着する。
40	壺 SE1上層	底径 3.5	中央が凹む上げ底状の底部である。	外面 ヘラケズリのあとヘラミガキを施す。 内面 ヘラミガキを施す。	色調 淡褐色 胎土 石英を多く含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
41	壺 SE1上層	底径 2.0	中央が凹む、小さな上げ底状の底部である。	外面 底部近くはヘラケズリし、胴部にヘラミガキがみられる。 内面 ヘラナデのあとヘラミガキと思われる。	色調 淡褐色 胎土 微粒の角閃石、雲母・石英を含む。 焼成 良好
42	底部穿孔土器 SE1上層	孔径 1.4	尖りぎみの底部で、中央に孔をもつ。	外面 内面 } 全体に磨耗を受け不明。	色調 赤褐色 胎土 石英・チャートを含む。 焼成 良好
43	鉢 SE1上層	口径 23.0	体部より屈曲し、直線的にのびる口縁部に至る。端部は細く尖る。	外面 口縁部・体部をヘラミガキする。 内面 口縁部をヘラミガキする。	色調 淡褐色 胎土 チャート・石英を含む。 焼成 良好
44	小型鉢 SE1上層	口径 11.8 底径 3.2 器高 7.5	内弯ぎみに口縁部まで続く直口の鉢。端部は丸く終わる。底部は突出する平底で、中央が若干凹んでいる。	外面 4条/15.0mmのタタキを施す。 内面 底部にヘラ原体による押圧がみられ、全体にヘラナデ。	色調 淡褐灰色 胎土 角閃石・石英・長石を含む。 焼成 良好
45	小型鉢 SE1上層	口径 12.2 底径 3.0 器高 5.4	楕形を呈する直口の鉢で、端部は細くなり、外側へ尖りぎみに終わる。底部はドーナツ状である。	外面 口縁部をヨコナデし、体部にタタキのあと6条/12.0mmのハケを施す。 内面 口縁部をヨコナデする。体部は底部近くにヘラ原体による押圧がみられ、全体にヘラナデ。	色調 淡褐色 胎土 微粒の角閃石を含む。 焼成 良好
46	小型鉢 SE1上層	口径 11.8 底径 5.8 器高 6.5	楕形を呈する体部からわずかに屈曲し、短かい口縁部に至る。端部は外傾する面となる。 底部は高台状である。	外面 口縁部をヨコナデし、体部はヘラミガキ。底部はナデ。 内面 口縁部をヨコナデし、体部はヘラミガキ。底部はナデ。	色調 淡茶褐色 胎土 チャート・角閃石・石英を含む。 焼成 良好
47	壺？ SE1上層	底径 6.0	壺の脚台であろう。	外面 指圧痕がみられる。 内面 胴部にナデと思われる。	色調 赤褐色 胎土 石英・チャートを含む。 焼成 良好
48	小型高杯 SE1上層	口径 11.6 脚径 8.9 器高 9.0	半球形の杯部で、端部は内に若干肥厚し、外傾する面をつくる。脚部は内弯ぎみに開き、端部は丸く終わる。脚部上位4方に円孔を穿つ。	外面 杯部、脚部ともに7条/11.0mmのハケのあとヘラミガキ。 内面 杯部にヘラミガキ、脚部にヘラナデのあとナデ。	色調 淡灰褐色 胎土 微粒の角閃石・雲母を含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
49	小型高杯 SE1上層	口径 10.6	深い半球形の杯部のみ遺存。端部は丸く終わる。	外面 内面 ヘラミガキ	色調 淡赤褐色 胎土 微粒の長石・石英を含む。 焼成 良好
50	高杯 SE1上層	脚径 10.0	丈高の脚部で、端部は平坦面となる。上位4方に円孔を穿つ。	外面 ヘラミガキする。 内面 7条/10.0cmのハケのあと軽くナデ。	色調 淡灰褐色 胎土 微粒の角閃石を含む。 焼成 良好
51	高杯 SE1上層		平坦な杯底部から屈折し、外反する口縁部をわずかに残す。脚は大きく開くものと思われる。	外面 杯部にヘラミガキ。口縁部に5条/4.5cmのハケがみられる。柱状部はヘラケズリのあとわずかにハケがみられる。 内面 杯部をヘラミガキし、脚部はヘラ原体による押圧が残る。	色調 淡褐色 胎土 微粒の角閃石を含む。 焼成 良好
52	壺 SE2上層	口径 13.7	体部より屈曲し、直立した後外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。	外面 全体にヘラミガキする。 内面 口縁部をヘラミガキし、胴部はヘラナデする。	色調 淡褐色 胎土 長石・チャート・石英を含む。 焼成 良好
53	壺 SE2上層	口径 15.6	「く」の字形に丸く屈曲する口縁部で、端部は丸く終わる。	外面 内面 口縁部をヨコナデする。	色調 淡褐色 胎土 微粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好
54	壺 SE2上層	口径 13.3	丸く屈曲し、外反する口縁部で、端部は細く尖りぎみに終わる。	外面 口縁部をヨコナデする。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラナデする。	色調 淡赤褐色 胎土 角閃石・チャート・花崗岩を含む。 焼成 良好
55	壺 SE2上層	口径 17.8 最大径 18.2 底径 5.1 器高 20.0	「く」の字形近くに屈曲し、平たく外反する口縁部に至る。端部は丸い。体部は中位に最大径があり、卵球形を呈し、ドーナツ状の底部を有する。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部に4条/18.5cmのタタキを施す。 内面 口縁部をヘラナデのあとヨコナデ。胴部、ヘラナデを施す。底部近くにヘラ原体による押圧がみられる。	色調 淡赤褐色 胎土 1.0～2.0mm程度の石英を含む。 焼成 良好
56	壺 SE21層	口径 16.4 最大径 20.9 底径 2.5 器高 20.3	「く」の字形近くに屈曲し、内弯ぎみにのびる口縁部に至る。端部は細くなり、尖りぎみに終わる。体部は球形を呈し、底部はわずかな平坦面を残す。	外面 口縁部をヨコナデする。胴部は6条/15.0cmの左上がりのタタキのあと6条/15.0cmのハケを散状に軽く施す。 内面 口縁部を8条/13.5cmのハケのあとヨコナデ。くびれ部をヨコナデし、胴部にヘラケズリを施す。	色調 灰褐色 胎土 微粒の雲母・角閃石を多く含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
57	甕 SE2上層	口径 17.2	「く」の字形に丸く屈曲し、内弯ぎみにのびる口縁部に至る。端部は細くなり、上方へ尖りぎみに終わる。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部は5条/13.5mmのタタキを施す。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリする。	色調 淡赤褐色 胎土 微粒の長石を多く含む。 焼成 良好
58	甕 SE2上層	口径 17.0	「く」の字形に屈曲し、外反する口縁部である。端部は外傾する平坦面となる。	外面 内面 } 口縁部をヨコナデする。	色調 淡褐色 胎土 微粒の長石を多く含む。 焼成 良好
59	甕 SE2上層	口径 16.2	「く」の字形に鋭く屈折し、直線的にのびる口縁部に至る。端部は上方へつまみ、外傾する平坦面となる。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部に6条/15.5mmのタタキを施す。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部をヘラケズリする。	色調 茶褐色 胎土 微粒の角閃石・雲母を多く含む。 焼成 良好
60	甕 SE2上層	口径 15.2	「く」の字形に丸く屈曲し、内弯ぎみにのびる口縁部である。端部は細くなり、上方へ尖りぎみに終わる。器肉は極めて薄い。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部に9条/30.0mmのタタキを施す。 内面 口縁部を4条/9.5mmのハケのあとヨコナデする。くびれ部はヨコナデする。胴部はヘラケズリである。	色調 灰褐色 胎土 微粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好
61	甕 SE2上層	口径 16.3	体部より鋭く屈折し、外反する口縁部になる。端部はつまみ上げる。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部は3条/6.0mmのタタキを施す。 内面 口縁部を3条/8.0mmのハケのあとヨコナデ。胴部はヘラケズリする。	色調 淡褐色 胎土 石英を多く含む。 焼成 良好
62	小型甕 SE2上層	口径 9.1	深い椀形の体部から「く」の字形に屈曲し、直線的にのびる口縁部に至る。端部は丸く終わる。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部は5条/14.0mmのタタキを施す。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はナデである。	色調 淡褐灰色 胎土 角閃石・長石を含む。 焼成 良好
63	壺 SE2上層	底径 5.2	ドーナツ状の底部である。	外面 タタキのあとナデ。 内面 磨耗を受け不明。	色調 淡灰褐色 胎土 1.0mm程度の石英を多く含む。 焼成 良好
64	壺 SE2上層	底径 3.5	突出する平底で、中央がわずかに凹む。	外面 ヘラミガキを施す。 内面 磨耗を受け不明。	色調 褐色 胎土 角閃石・長石・雲母を含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
65	甕 SE2上層	底径 3.4	突出した平底である。	外面 タタキを施す。 内面 ナデと思われる。	色調 褐色 胎土 石英・チャート・角閃石・雲母を含む。 焼成 良好
66	甕 SE2上層	底径 5.5	平底の底部である。	外面 ヘラミガキを施す。 内面 4条/4.5mmのハケのあとナデ。	色調 褐色 胎土 角閃石・雲母・石英を含む。 焼成 良好
67	甕 SE2上層	底径 4.2	ドーナツ状の底部である。	外面 4条/14.0mmのタタキを施す。 内面 ヘラナデと思われる。	色調 外面 淡褐色 内面 灰褐色 胎土 雲母・石英、長石を含む。 焼成 良好
68	甕 SE2上層	底径 5.1	ドーナツ状の底部である。	外面 タタキを施す。 内面 ヘラ原体による押圧がみられる。	色調 淡褐色 胎土 角閃石を含む。 焼成 良好
69	甕 SE2上層	底径 3.5	平底の底部と思われる。	外面 5条/10.5mmのタタキを施す。 内面 ヘラナデと思われる。	色調 茶褐色 胎土 雲母・角閃石・花崗岩を含む。 焼成 良好
70	甕？ SE2上層	底径 3.5	平底の底部である。	外面 底部を5条/15.0mmのタタキである。 内面 ヘラケズリと思われる。	色調 淡赤褐色 胎土 石英・長石・チャート・くさり礫を含む。 焼成 良好
71	甕？ SE2上層	底径 3.0	平底の底部である。	外面 底部を5条/15.0mmのタタキである。 内面 ヘラケズリと思われる。	色調 赤褐色 胎土 石英・長石・チャート・くさり礫を含む。 焼成 良好
72	鉢？ SE2上層	口径 15.1	体部より屈曲し、外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。	外面 内面 } 口縁部をヨコナデする。	色調 暗灰色 胎土 石英・長石を含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
73	高杯 SE2上層	口径 22.9	杯底部より屈曲し、外面に稜をつくり、内湾ぎみに長くのびる口縁部に至る。裾部は細くなり、尖りぎみに終わる。	外面 内面 ヘラミガキを施す。	色調 淡赤褐色 胎土 チャート・石英を含む。 焼成 良好
74	高杯 SE2上層		中空でやや外開きの柱状部である。	外面 内面 全体に磨耗を受け不明。	色調 淡赤褐色 胎土 角閃石を多く含む。 焼成 良好
75	高杯 SE2上層		中実でやや外開きの柱状部である。屈曲部3方に円孔を穿つ。	外面 柱状部をヘラケズリ。杯部、脚部にヘラミガキがみられる。 内面 杯底にヘラミガキがみられる。	色調 淡赤褐色 胎土 チャート・長石・石英を含む。 焼成 良好
76	高杯 SE2上層		中実で筒状の柱状部である。	外面 柱状部にヘラミガキを施す。	色調 淡褐色 胎土 微粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好
77	壺 SD1	底径 5.2	突出した平底で中央は若干凹む。	外面 わずかにタタキがみられる。 内面 磨耗を受け不明。	色調 淡白褐色 胎土 石英・長石・くさり礫を含む。 焼成 良好

第９節　第10次調査

Ⅰ　調査の概要

調査地は八尾市光町２丁目に所在し、第８次調査地の南方約10ｍに位置する。調査地内に23ｍ×27ｍの調査区を設定した。調査期間は昭和57年２月１日から３月12日まで、調査面積は621㎡である。

調査方法は、現地表（ＯＰ＋8.8ｍ）から盛土、旧耕土、床土までを機械掘削し、以下は人力によって掘削作業を実施した。しかし、調査区南側で古墳時代前期の遺構を検出した他は、ほとんどが弥生式土器を含む自然河川であったため、平面的には南側の一部を調査するにとどまった。なお、最終的に自然河川の流路等を確認する目的で、南北方向に３本、東西方向に１本のトレンチを設定し調査するに至った。

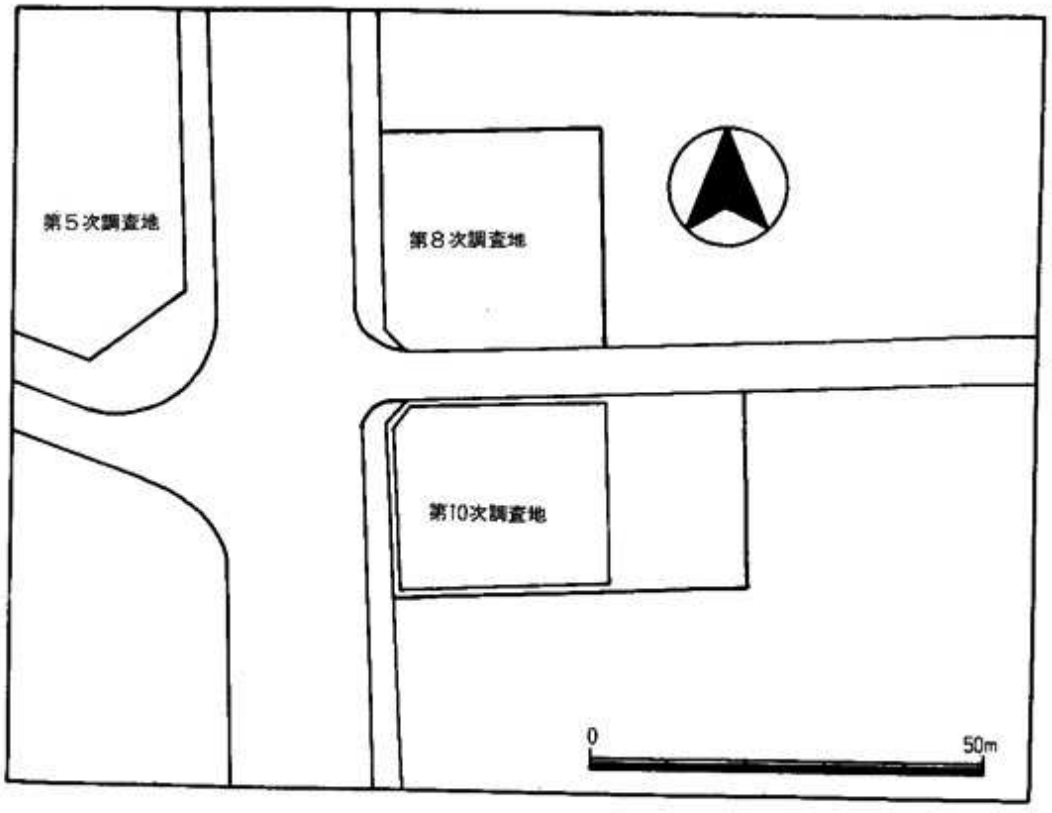


図78　調査地設定図

II　層序

盛土90cmを除去すると第1層II耕土、第2層床土、第3層灰色粘土、第4層暗灰褐色シルト粘土、第5層淡灰青色シルト、第6層灰色粘土が調査区南側での基本層序である。このうち第3層が中世の水田址、第5層上面が古墳時代前期の生活面である。

一方、北側の自然河川は上層では植物遺体を多く含み、漸移的な堆積を示すため古墳時代前期には河川としての機能を停止し、沼沢地状になったものと考えられる。また、第3調査地・第4調査地でも同様の堆積状況を認めていることから、沼沢地の南への拡がりが明らかになったわけである。その後さらに堆積が進み、中世には他の調査地同様、水田として土地利用がなされていた。また、第5調査地で北側の肩部のみを認めたSD10は、この自然河川の北岸であると推定される。

III　自然河川および出土遺物

調査区の南側を除き、ほぼ全体にわたって自然河川が認められた。南岸は調査区の南側で確認したが、北岸は調査区外に至る。検出幅約18m・最深1.8mを測る。流路は北西方向である。南岸はOP＋7.6m前後を測り、なだらかに傾斜して1mほど落ち込む。その後約10mはほぼ平坦で、河川中央部へ角度を持って再び落ち込む。最深部のレベルはOP＋5.75mを測る。

内部には第1層暗茶灰色砂粘土、第2層暗灰色粘土、第3層灰褐色粘土、第4層灰色粘土、第5層暗灰色粘土、第6層淡灰色粘土、第7層灰色粘土がほぼ水平に堆積し、以下には灰黒色粘土、淡灰色砂まじり粘土、暗灰黒色粘土、灰白色細砂土、暗灰褐色粘土等が入り組み、複雑な堆積状況を示している。このうち第4層・第5層・第7層には何層もの植物遺体が含まれている。

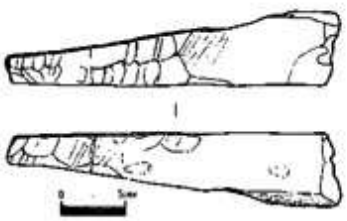


図79　自然河川出土木製品

・下位に堆積する灰白色細砂土から、畿内第III様式の甕(1)と木製品(図79)が出土した他、第7層灰色粘土からは畿内第IV様式末～V様式初頭の壺(2)が出土した。また、第2層暗灰色粘土層からはV様式タイプの甕(3)、庄内式甕(4・6)や小型鉢(7)、小型丸底壺(5・7・8)等が出土した。

木製品は長さ約26cm・最大幅5.6cm・最小幅2.0cm、厚さ1cmを測る用途不明の板材である。両面を粗く加工し、幅が広くなる方へ行くほど薄くなっている。

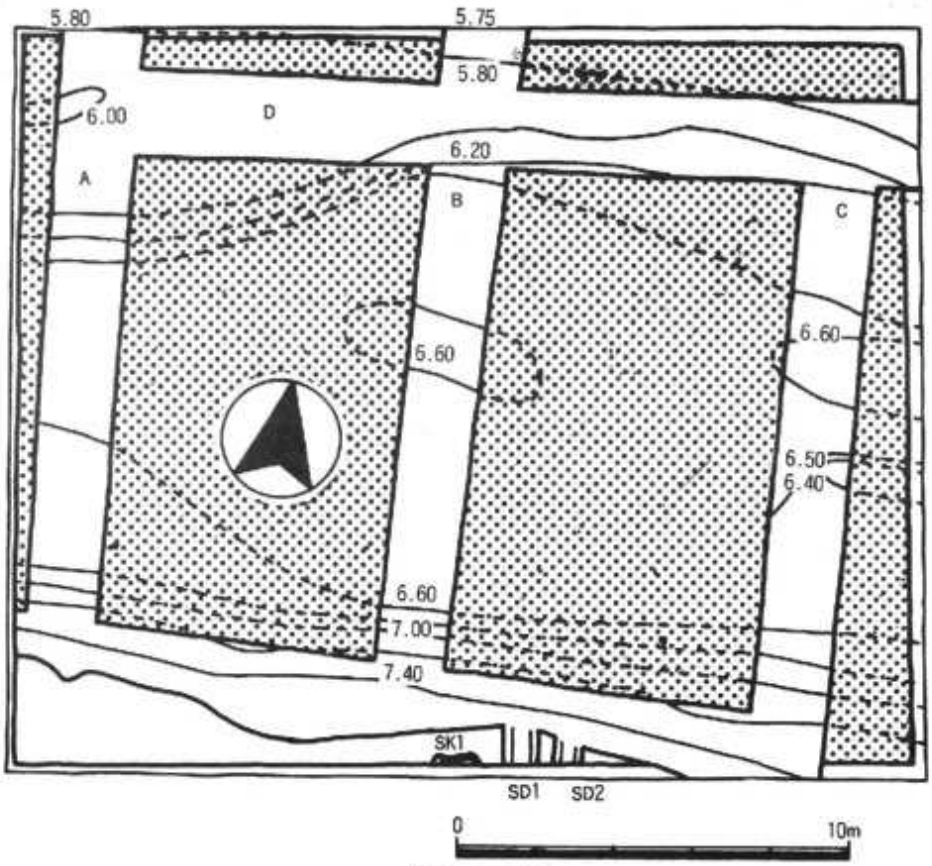


図80　平面図

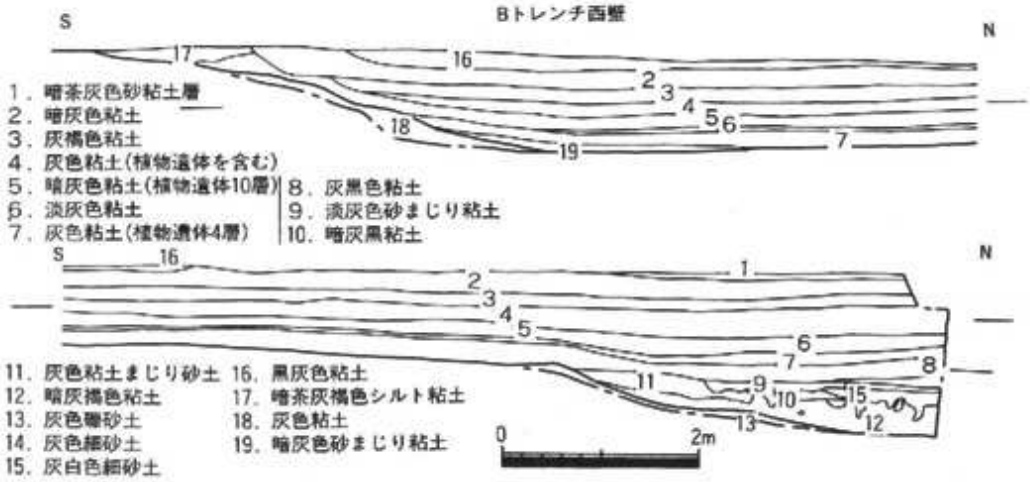


図81　自然河川断面図

Ⅳ　古墳時代の前期の遺構・遺物

ＳＫ１

調査区の南壁ぎわで検出した。検出部の長径1.3ｍ・短径0.6ｍ・深さ10cmを測り、楕円形に近い形状を呈する。埋土は暗茶灰色シルトである。

埋土内より、庄内式甕の細片をわずかに出土した程度である。

ＳＤ１

ＳＫ１の東側で検出した。幅１ｍ・深さ30cmを測る溝で、沼沢地に流れ込んでいる。内部には上方から暗灰褐色シルト粘土、暗灰色粘土の２層が堆積する。

ＳＤ２

ＳＤ１の東側に位置する。幅90cm・深さ20cmを測る。ＳＤ１同様に沼沢地に流れ込む。

Ⅴ　中世の遺構・遺物

第３層の水田面に掘り込まれた５条の溝を検出した。すべて南北に延びるもので、幅20～100cm・深さ５cmを測る。内部には灰色粘土が堆積する。これらは水田耕作に伴なうものと考えられる。

これらの溝の内部から、瓦器・羽釜等の遺物が細片でわずかに出土した。

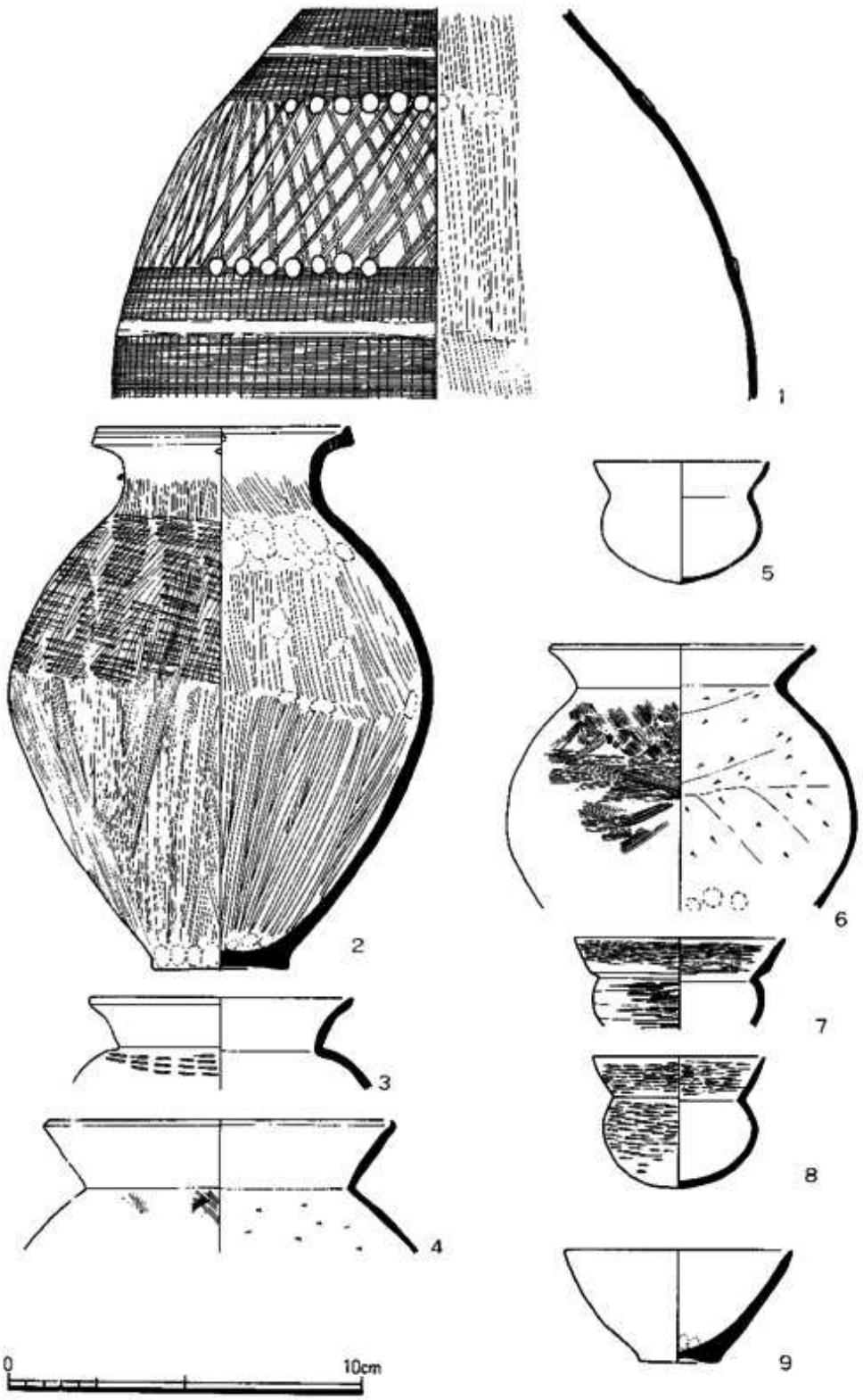


図82　出土遺物実測図

VI　出土遺物観察表

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺 自然河川下層	最大径 36.5	胴部のみの破片。なだらかに下がる肩部を有する。最大径はかなり下位にある。 密な簾状文を数帯施し、中位には半截竹管と考えられる工具で羽状子文を施す。また、簾状文・斜格子文間には円形浮文を貼りつける。	外面　簾状文間に光沢を持つヘラミガキ。 内面　粗い縦方向のハケを施す。	色調　暗茶褐色 胎土　角閃石・雲母等の細粒を含む。 焼成　良好
2	壺 自然河川下層	口　径 14.2 最大径 23.9 底　径 7.5 器　高 30.9	丈高の器体から直立ぎみの短い頸部に続き、外上方へ丸く屈曲する口縁部に至る。口縁端部は内傾する面をつくり、つまみ上げる。 口縁端面には、3～4条の退化凹線がみられる。口縁部4ヵ所に小孔(径約0.5cm)を穿つ。	外面　口縁部ヨコナデ。体部上半左上がり横タタキの後粗い縦方向のハケ。体部下半は縦方向の細かいハケ。 内面　口縁部ヨコナデ。体部粗い縦方向のハケ。接合部には指頭圧痕がみられる。	色調　灰褐色 胎土　石英・雲母を多く含む。 焼成　やや軟質 外面には煤が多量に付着する。
3	壺 自然河川上層	口　径 14.9	肩の張る体部から屈曲し、外反する口縁部に至る。端部は尖りぎみとなり、直立する面をつくる。	外面　口縁部をヨコナデし、胴部は4条/11.5cmのタタキを施す。 内面　口縁部をヨコナデし、胴部はヘラナデである。	色調　淡茶褐色 胎土　雲母・長石・花崗岩を含む。 焼成　良好
4	壺 自然河川上層	口　径 19.5	「く」の字形に屈曲し、直線的にのびる口縁部に至る。端部は上方へつまみぎみに丸く終わる。大きさに比し、器肉は薄めである。	外面　口縁部をヨコナデし、胴部は左上がりで4条/5.5cmのタタキを施す。 内面　磨耗を受け不明。	色調　淡褐色 胎土　角閃石・長石・石英を含む。 焼成　良好
5	小型丸底壺 自然河川上層	口　径 9.9 最大径 9.1 器　高 6.8	扁球形の体部から「く」の字形近くに屈曲し、内弯ぎみにのびる口縁部に至る。端部は丸く終わる。底部は尖りぎみの丸底である。	外面　体部はヘラケズリのあとヘラミガキと思われる。 内面　磨耗を受け不明。	色調　淡赤褐色 胎土　くさり礫・長石・石英を含む。 焼成　良好
6	壺 自然河川上層	口　径 14.7 最大径 19.8	「く」の字形に丸く屈曲し、外反ぎみにのびる口縁部に至る。端部はつまみ上げ、外傾する平坦面をつくる。体部は最大径が中位にあり、球形を呈すると思われる。	外面　口縁部をヨコナデし、胴部は横位のハケと思われる。 内面　口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリである。下位には指頭圧痕がみられる。	色調　淡褐色 胎土　微粒～0.5mm程度の角閃石を多く含む。 焼成　良好
7	小型丸底壺 自然河川上層	口　径 11.7 最大径 9.8	体部から屈曲し、内弯ぎみにのびる口縁部に至る。端部は細く、尖りぎみに終わる。体部は扁平な球形であろう。	外面　口縁部、体部ともにヘラミガキする。 内面　口縁部をヘラミガキし、体部はナデと思われる。	色調　淡褐灰色。 胎土　チャート・石英・長石を含む。 焼成　良好
8	小型丸底壺 自然河川上層	口　径 9.9 最大径 8.8 器　高 7.5	「く」の字形に屈曲し、内弯ぎみにのびる口縁部に至る。端部は細く、尖りぎみに終わる。体部は扁平な球形を呈する。	外面　口縁部をヘラミガキのあと暗文状ヘラミガキを施す。 内面　口縁部をヘラミガキし、体部はヘラケズリのあとヘラミガキを施す。	色調　淡褐色 胎土　くさり礫を含む。 焼成　良好
9	小型鉢 自然河川上層	口　径 12.8 底　径 4.5 器　高 6.5	底部から内弯ぎみにのびる直口の鉢。端部は若干尖りぎみに終わる。底部はわずかに突出し、中央が凹むあげ底状である。	外面　口縁部をヨコナデし、体部はナデと思われる。 内面　口縁部をヨコナデし、体部はナデと思われる。底部に指頭圧痕がみられる。	色調　淡褐色 胎土　雲母・チャート・石英・長石を含む。

第10節　まとめ

Ⅰ　検出遺構について

昭和56年度における東郷遺跡の発掘調査は9件を数え、調査面積は延べ約1700㎡を計る。これらの調査地点は、東郷遺跡推定範囲の中央部と東部に概ね大別される。中央部は第3調査地・第4調査地・第5調査地・第8調査地・第9調査地・第10調査地の6ヶ所、東部は第2調査地・第6調査地・第7調査地の3ヶ所である。

調査では、弥生時代中期から中世に至る遺構や遺物を検出したが、調査地によってそのあり方に相違が認められた。特に中央部の調査地では、古墳時代前期の集落に伴なう遺構や遺物が多く検出され、東部の調査地では古墳時代後期の集落に伴なうものが多く検出された。各調査地で得られた結果は断片的ではあるが、当遺跡の性格を知る上で重要な資料を与えてくれた。しかし、今後に多くの課題を残している。

ここでは遺跡の性格について、各時代ごとに若干の考察を加えながら述べてみたい。

1）弥生時代

弥生時代の遺構は検出していないが、第10調査地の自然河川から、畿内第Ⅲ様式の壺やⅣ様式末～Ⅴ様式初頭の壺が出土した。

この自然河川は南東から北西への流れを持つもので、内部から出土する遺物に磨滅痕が認められないことから、近隣に弥生時代中期以降の集落が存在した可能性が考えられる。

2）古墳時代前期

古墳時代前期になると、第10調査地で検出した自然河川はその本来の機能を停止し、沼沢地状になったと考えられる。また、第3調査地・第4調査地で検出した沼沢地、および第5調査地で部分的に検出したＳＤ10は、この沼沢地と同一のものと考えられ、北西方向への拡がりを持っていたと推定される。これらの沼沢地内からは、Ⅴ様式タイプの甕・庄内式甕・布留式甕・小型丸底壺等が出土した。

この時期の遺構としては、沼沢地の北側にあたる第4調査地・第5調査地・第8調査地・第9調査地で、竪穴式住居3棟・掘立柱建物2棟・井戸9基・土坑・柵列・溝・ピット等を検出した。

第8調査地で検出した竪穴式住居は、床面に砂礫が敷きつめられており、検出例の少ないも

のである。この竪穴式住居を中心として、それを取り囲むような状態で掘立柱建物が位置している。さらに建物群の周囲では、第5調査地ＳＥ１・ＳＥ２・ＳＥ３・ＳＥ５、第９調査地ＳＥ１・ＳＥ２の６基の井戸を検出した。

これらのことから、古墳時代前期における集落は、共同体を支配する首長層が第８調査地の竪穴式住居を居所とし、それを囲むように掘立柱建物、さらにその外側に井戸を伴なう居住地を構成していたものと考えられる。

これらの集落に伴なう遺構からは、在地産以外に吉備系・山陰系・北陸系の搬入品が含まれており、他地方との交流があったものと推定される。

また、当遺跡の南部に隣接する成法寺遺跡は、当遺跡と同一の沖積地上に立地しており、昭和56年度に実施した電々公社社屋増築工事に伴なう②発掘調査で、古墳時代前期の方形周溝墓４基を検出している。このことから、この時期北部の東郷遺跡を居住地域、南部の成法寺遺跡を墓域とする大規模な集落構成をもっていた可能性が考えられる。

３）古墳時代中期

今年度の調査ではこの時期の遺構や遺物は検出されていないが、第１調査地では包含層に古墳時代中期の遺物がわずかに含まれることが確認されている。このことから、古墳時代中期の遺構の存在を遺跡範囲の北方ないしは北東地域に推定してもよかろう。

４）古墳時代後期

古墳時代後期では、当遺跡推定範囲の東部にあたる第１調査地・第２調査地・第６調査地・第７調査地で、土坑・溝・ピット等を検出し、内部からは多数の遺物が出土した。

また、前述の成法寺遺跡の調査では、同時期の掘立柱建物等を検出していることから、当遺跡の集落規模の拡大、あるいは成法寺遺跡が分村的な性格の集落である可能性が考えられる。

５）平安時代

当遺跡の東部にあたる第１調査地では、根石を据えた柱穴群と井戸枠内に曲物を設置した井戸等を検出している。この時期も古墳時代中期同様、遺跡範囲の北東方向に拡がることが推定されよう。

6）鎌倉時代

この時期の遺構としては、第3調査地・第4調査地で水田畦畔や足跡状の窪みを伴なう水田面を検出し、第5調査地・第8調査地・第9調査地・第10調査地では、古墳時代前期の遺構を削平して東西方向や南北方向に延びる小溝を検出した。また、畦畔や幾筋もの小溝は東西・南北方向に平行してみられることから、条里制の区割に関連するものとも考えられる。

一方、東部にあたる第1調査地・第2調査地・第6調査地・第7調査地では、厚さ30～60cmの固く締まった状態で各時代の遺物を含む土層を検出しており、埋め立てによる整地層ではないかと考えられ、鎌倉時代に条里制の地区割等に関連する大規模な土地整備がなされたのではないかと推測される。

II　出土遺物について

1）井戸内出土遺物について

各調査地で検出した古墳時代前期の井戸は、あわせて10基である。

井戸より出土する遺物については、出土のしかたに種々の状態がある。本調査においては、底部に接するような状態や、上層に集積する状態で出土したものがある(表2参照)。

井戸底に接するような状態で遺物を検出したものとして、第5調査地ＳＥ2・ＳＥ4・ＳＥ5、第9調査地ＳＥ1がある。これらの井戸からは完形品の壺または甕が各1点ずつ出土しており、壺2点のうち1点には胴部中位に穿孔があり、甕には煤の付着が著しい。

上層に遺物が集積していたものには、第5調査地ＳＥ5、第9調査地ＳＥ1・ＳＥ2がある。このうち、第5調査地ＳＥ5の遺物は完形品あるいはそれに近いもの6点を含んでいる。

井戸より出土する遺物の性格については、

表2　井戸内遺物出土状況一覧表

調査区	井戸名称	出土状況		
		下層	上層	その他
4	ＳＥ1			
	ＳＥ2	井戸内に散乱		
	ＳＥ3		散乱	
5	ＳＥ1			肩部より
	ＳＥ2	完形単独		
	ＳＥ3			
	ＳＥ4	完形単独		
	ＳＥ5	完形単独	完形複数	
9	ＳＥ1	完形単独	集積	
	ＳＥ2		集積	

単に他から流入や転落したものの他、廃棄されたものや意味をもって埋置されたものなどがあると考えられる。今回の調査では、遺物の出土状態からあきらかに『井戸祭祀』の可能性を持つものを数ヶ所で確認している。

近接する遺跡の類例についてみると、八尾南遺跡[4]では検出した27基の井戸のうち、7基について祭祀の可能性が考えられている。遺物は底部から出土したもの4例、上層から出土したもの3例で、後者については報文中に井戸廃絶時の祭祀と考えられる記述がある。馬場川遺跡[5]では2基の井戸が検出され、いずれも井戸廃絶時などに2回(1号井戸は上面で2回、2号井戸は底部と上面の2回)にわたって祭祀を行なっていたと記載されている。大和川・今池遺跡[6]では第6－2地区ＳＥ1より、高杯や甕等を人為的に埋設したと考えられる状態で検出したと報告されている。これらは報文中に祭祀・供献等の記載が行なわれているものの一部で、類例は増加するものと思われる。

当遺跡では、井戸底から遺物が出土した第5調査地ＳＥ2・ＳＥ4・ＳＥ5・第9調査地ＳＥ1の4例と上層から出土した第5調査地ＳＥ5の1例について祭祀が検証された。井戸底で検出した遺物については、日常使用のものや穿孔をもつものがあり器種は一定していないが、完形品が単独で出土するのが特徴である。上層で検出したものとしては、第5調査地ＳＥ5の資料のみであるが、ここでは複数の完形品が含まれている。

2）各遺構より出土する遺物について

検出した遺構のうち、出土状況等から第9調査地ＳＥ1・ＳＥ2および第5調査地ＳＥ5・ＳＤ9で比較的一括性の高い遺物が検出された。ここでは具体的に各遺構から出土した遺物、とくに甕を中心とした資料の様相について、照合して概述する。

第9調査地ＳＥ1

甕9点のうち、口縁部は「く」の字形に屈曲し、端部につまみ上げをみないものとつまみ上げるものがあるが、後者がほとんどを占める。胴部にはヘラケズリを行なうが、(24・32)はヘラナデを施す。(32)は胴部外面にタタキの後下半にハケを施し、底部はわずかに平坦面をもっていることから、Ⅴ様式甕と庄内式甕の中間形態であるといえよう。タタキは全体的に太筋のものを使用する。

壺については、底部の破片が出土している。このうち突出する平面をもつものは9点あり、尖り底や中央がわずかに凹むものなどが少数出土した。鉢については、3点のうち2点が突出

する平底をもつ。

これらの土器群は各器種を通じ、底部は突出した平底やわずかな平坦面をもつもので、タタキは太筋である。

第9調査地ＳＥ2

合わせて25点が出土した。甕についてみると、口縁部の形態は「く」の字形に屈曲し、端部をわずかにつまみ上げるものが多い。底部については、壺や甕の破片が含まれているが、わずかに突出した平底から押さえたような平底のものが含まれる。タタキは総じて太筋である。形態・技法からみてこれらの土器群は、前述のＳＥ1と同時期のものと考えられる。

第9調査地ＳＥ1・ＳＥ2の遺物の類例として、中用遺跡⑦出土のものがある。

第5調査地ＳＤ9上層

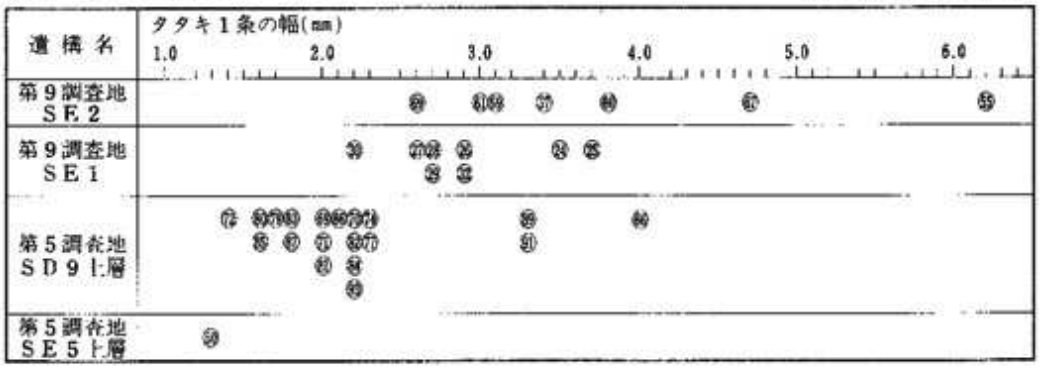
甕28点が出土した。完形あるいは完形に近いものが7点あり、そのうちの6点が庄内式甕である。庄内式甕は全般的に最大径が中位よりやや上位にあり、底部は尖りぎみの丸底をもつものが多い。タタキは前述のＳＥ1・ＳＥ2出土のものに比較すると細筋で、器肉も薄く、比較的新しい要素をもつものが多い。

第5調査地ＳＥ5上層

完形あるいは完形に近い土器が6点出土した。甕は庄内式のものと布留式のものが共伴し、小型精製器種のうち小型器台・小型鉢が出土している。これらの土器群については、庄内式と布留式の接点の時期のものと考えられる。

この時期の類例資料として、美園遺跡⑧・馬場川遺跡⑨などがあげられる。

表3　タタキの幅について　　（番号は実測図番号）



次にV様式甕と庄内式甕の特徴であるタタキについて、上記の編年資料を通じて幅の太細を明確にする。

各資料の計測値は表3のとおりである。資料が少なくて不充分であるが、庄内式古相と考えられていたタタキの幅の太細がより具体的に知り得るものと理解できよう。

以上の事項を前提として各資料をみていくと、古いものから順に第9調査地ＳＥ1・ＳＥ2次に第5調査地ＳＤ9上層、最後に第5調査地ＳＥ5上層資料に組み立てられるものと考えられる。

今回の報告は、昭和56年度に実施した発掘調査の概要であり、調査地も当遺跡の一部分にすぎないため、今後の調査結果や近隣の諸遺跡との関連性等を求める必要性がある。また、出土した遺物の考察についてもまだまだ不充分であり、これからの課題としたい。

〔注　記〕

1　昭和56年度発掘調査現在整理中

2　昭和56年度発掘調査現在整理中

3　八尾市教育委員会「八尾南遺跡・東郷遺跡発掘調査概要」『八尾市文化財発掘調査報告6』1981年

4　八尾南遺跡調査会『八尾南遺跡』1981年

5　東大阪遺跡保護調査会『馬場川遺跡発掘調査報告』1977年

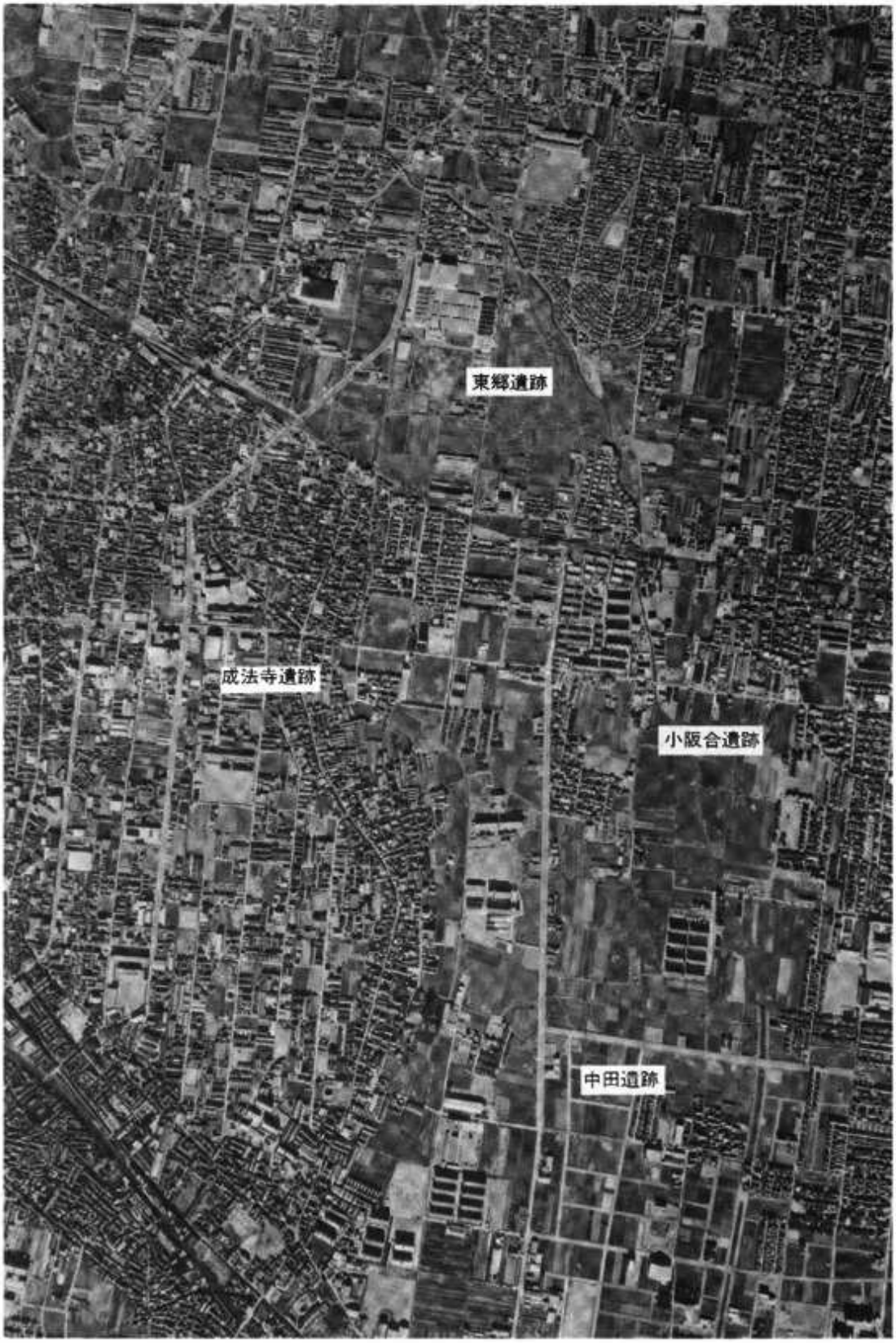
6　大和川・今池遺跡調査会『大和川・今池遺跡発掘調査資料その5第6区』1980年

7　八尾市教育委員会「八尾市中出遺跡刑部地区出土の土器」『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会（第5回）資料』（財）大阪文化財センター1980年

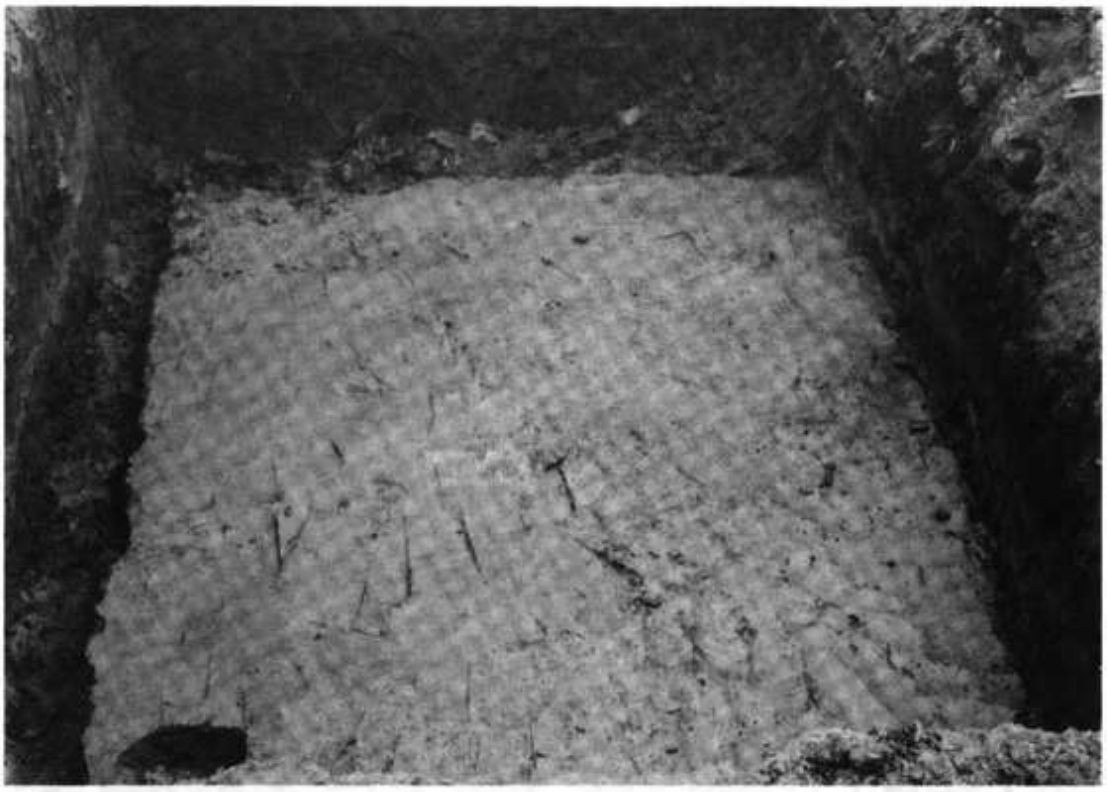
8　本誌所収第5章

9　東大阪市教育委員会『馬場川遺跡発掘調査概要Ⅳ』1976年

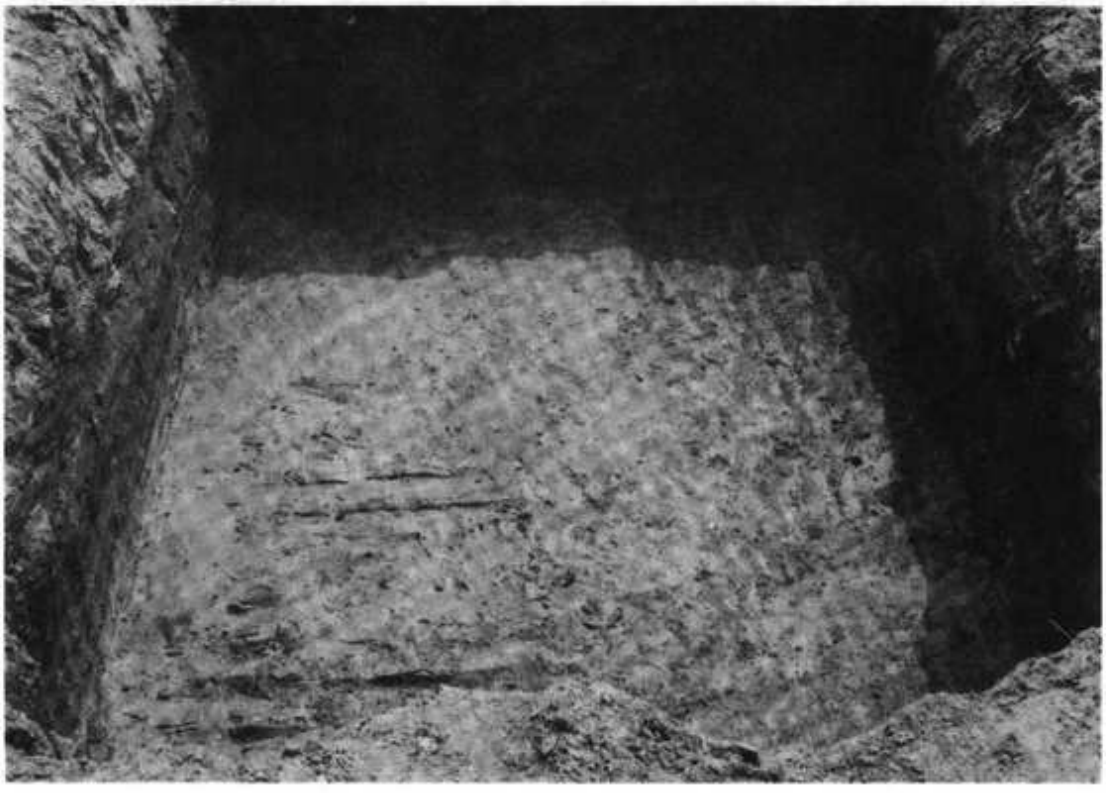
図版1



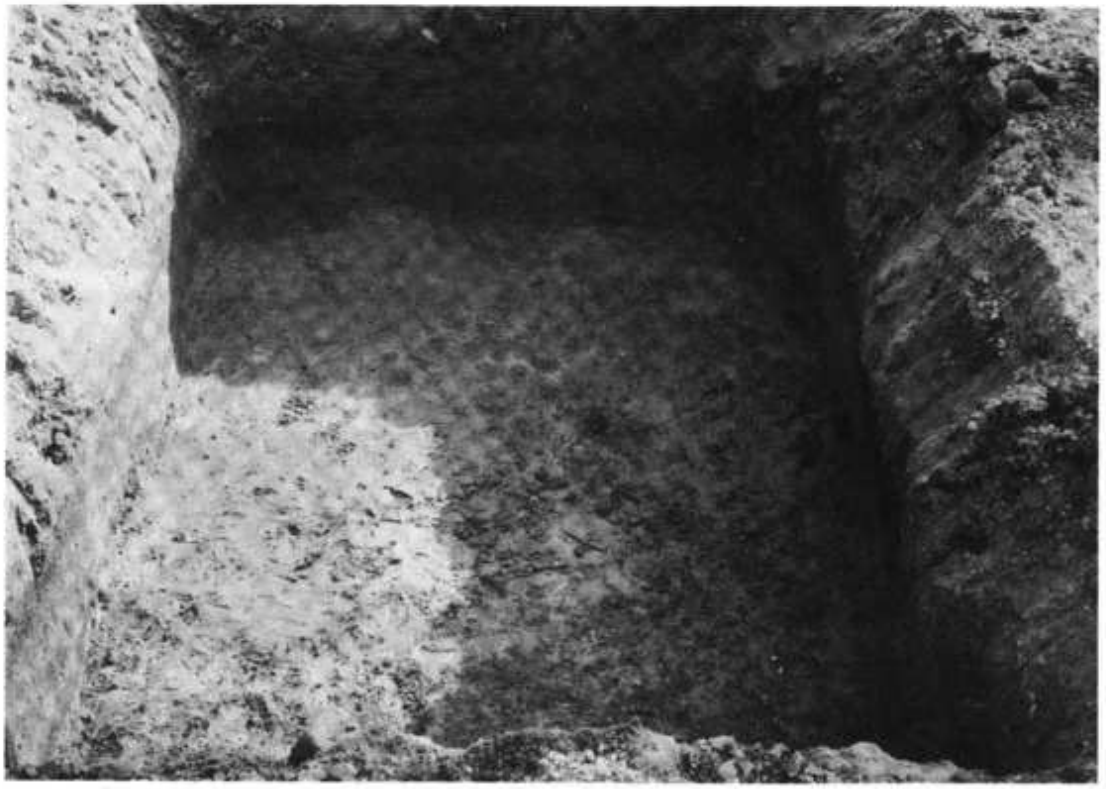
東郷遺跡周辺航空写真 ($\frac{1}{15,000}$)



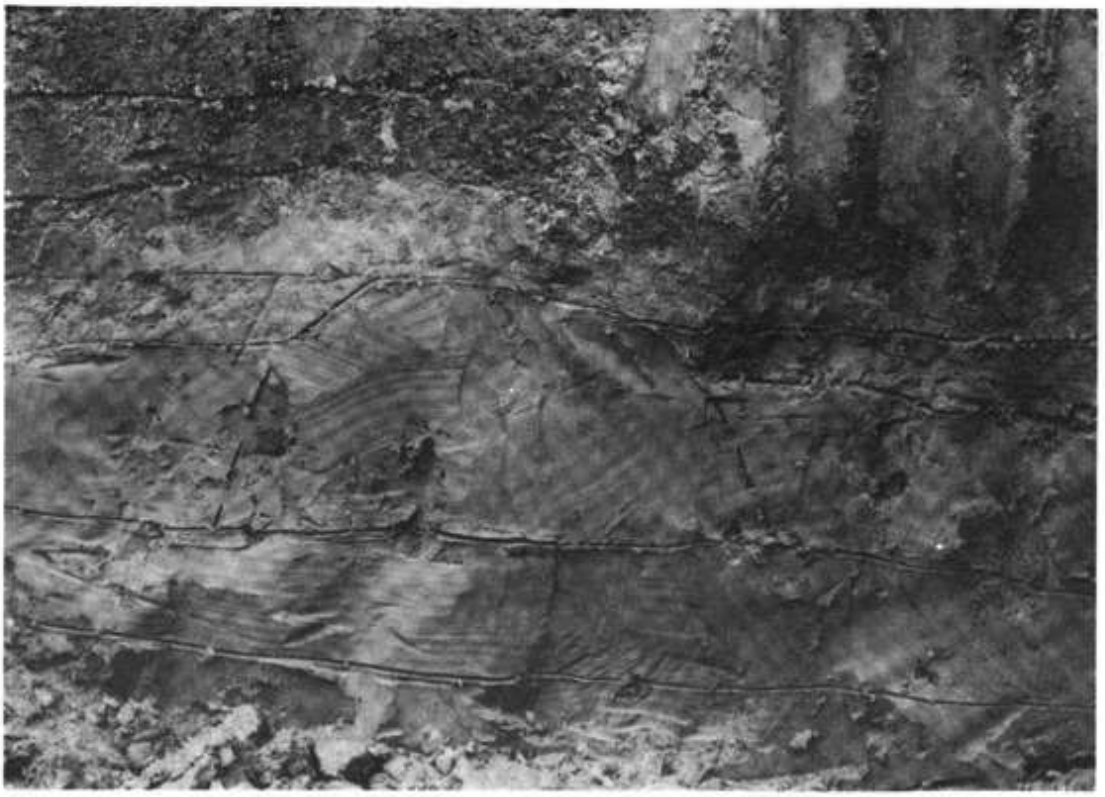
第1トレンチ　沼沢地検出状況（西より）



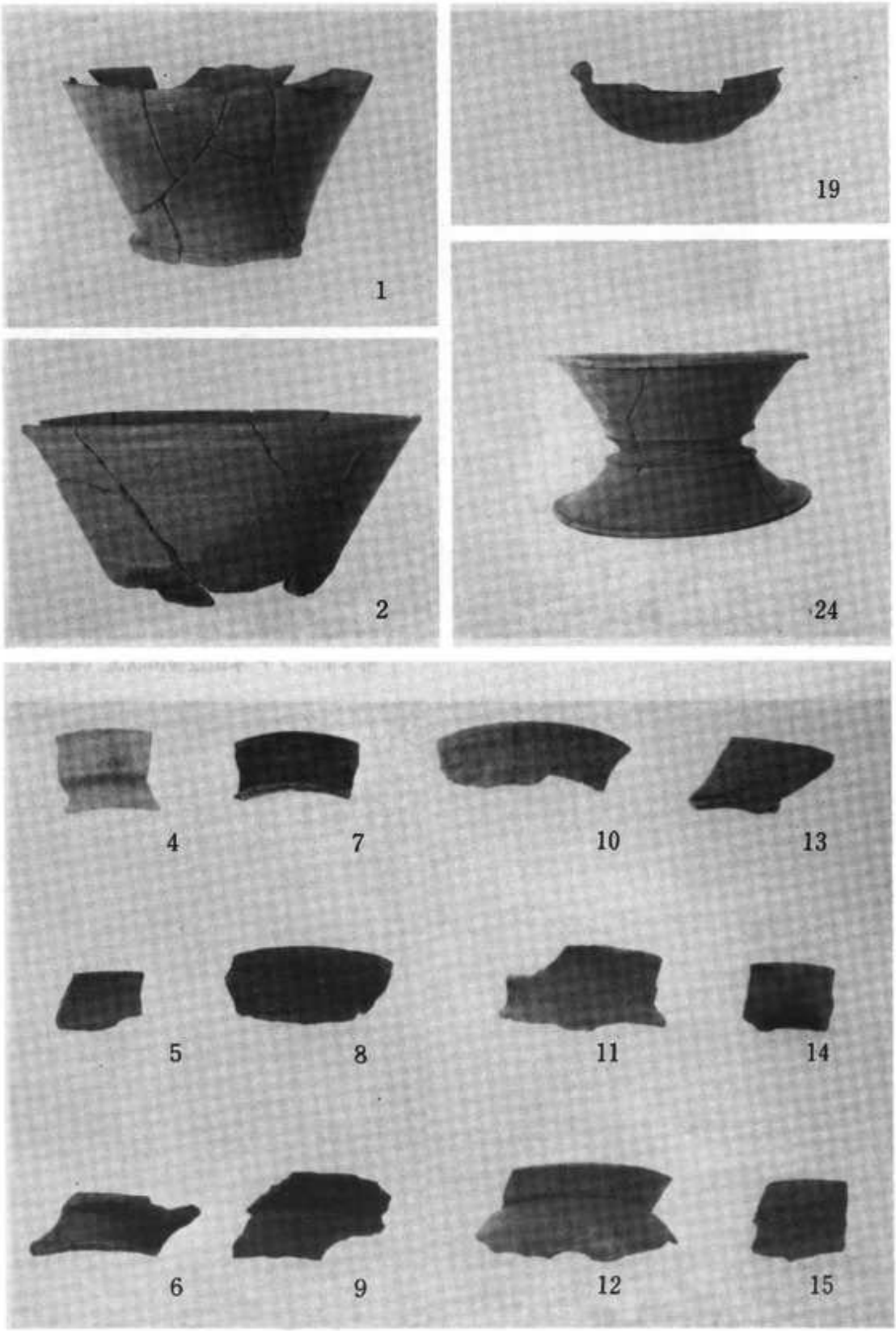
第2トレンチ　水田址検出状況（北より）



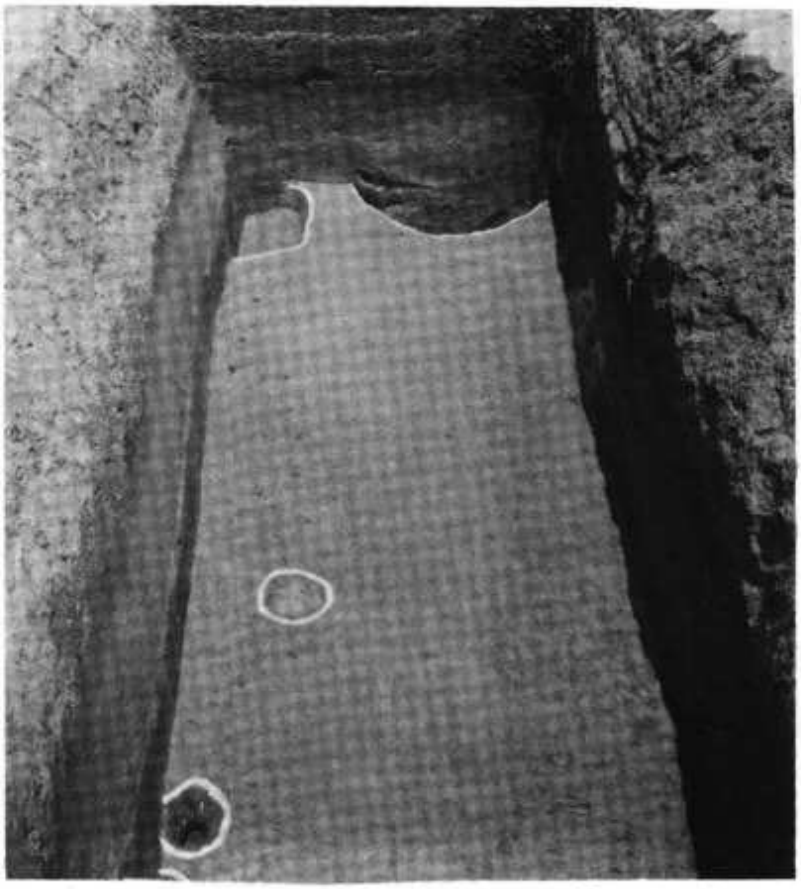
第3トレンチ 水田址検出状況（北より）



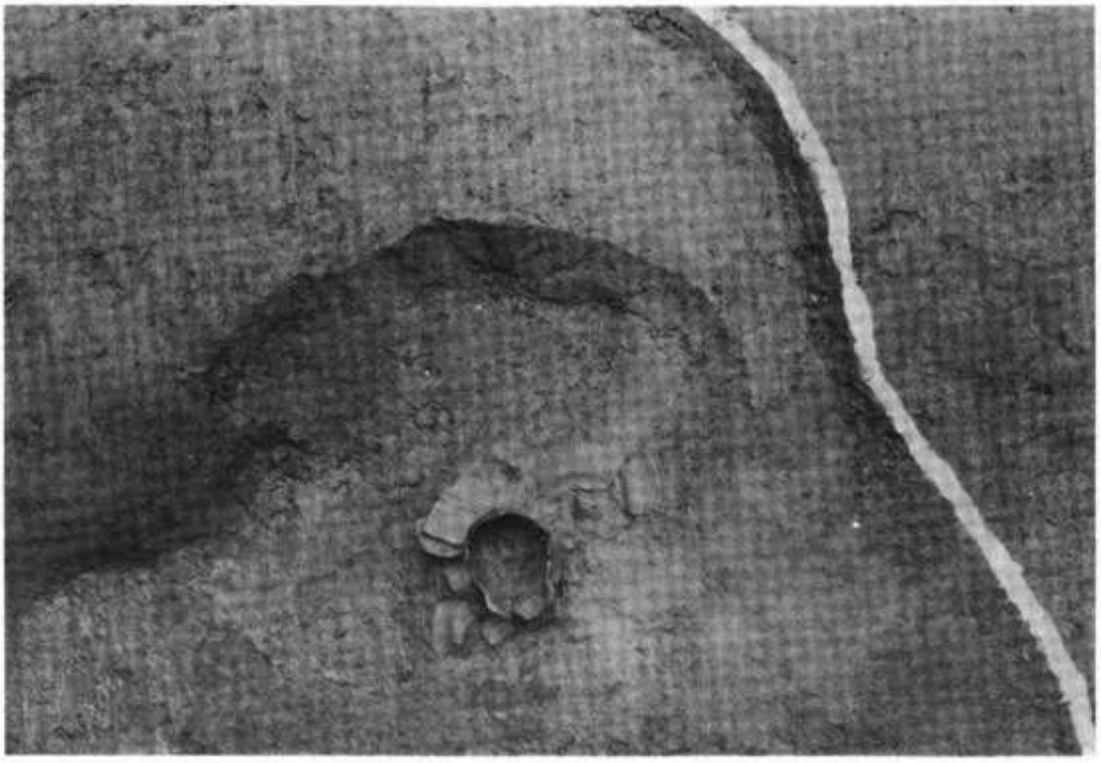
同上 水田畦畔断面（東壁）



沼沢地出土遺物

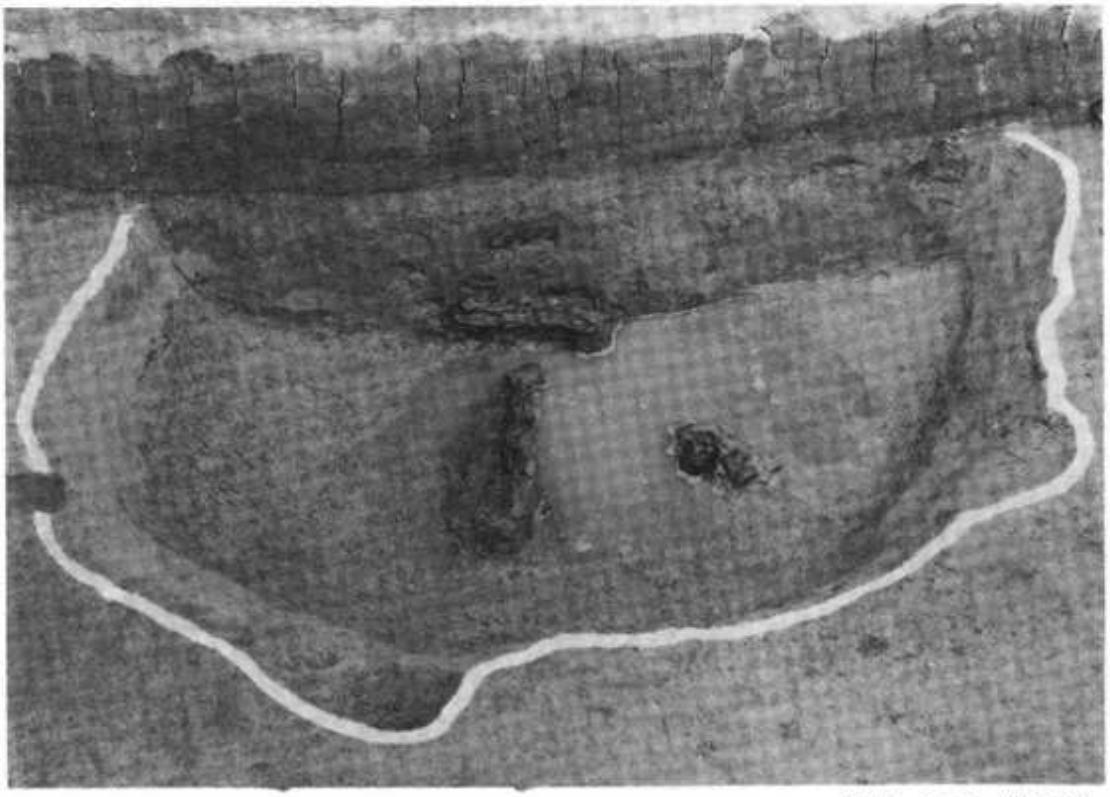


第1調査区　第3遺構面検出状況（南より）

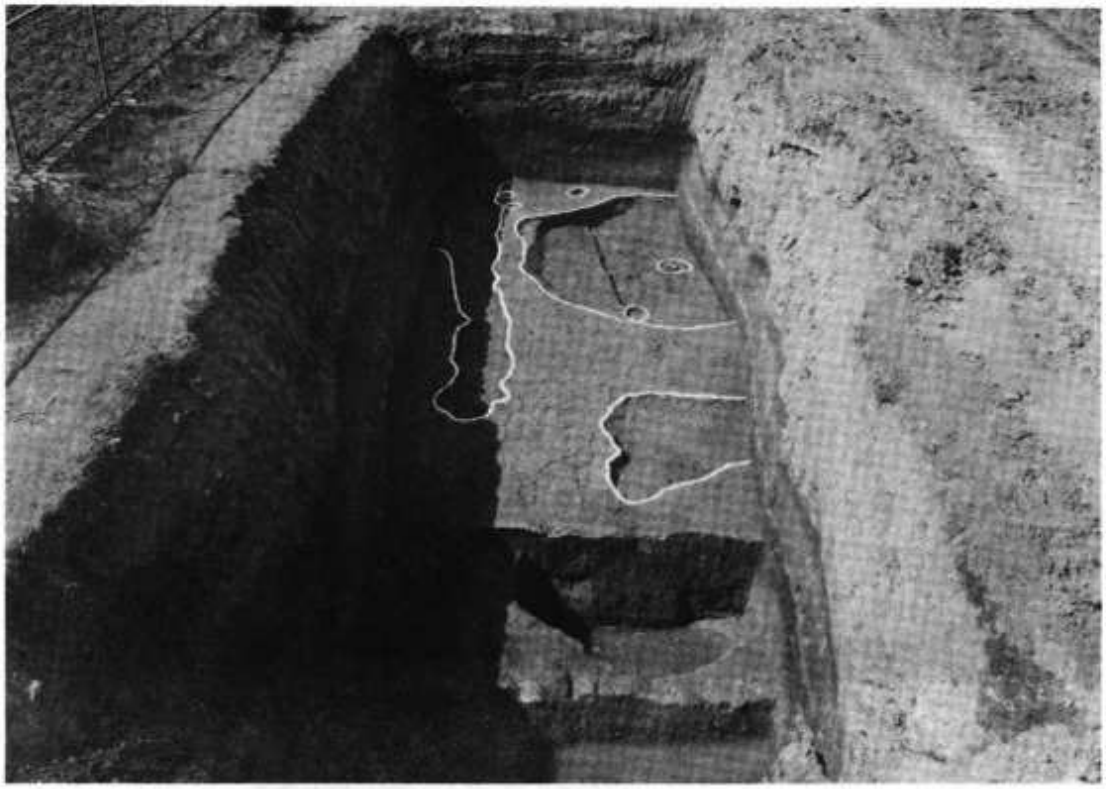


同上　SE2（北より）

第2調査区　第3遺構面検出状況（南より）

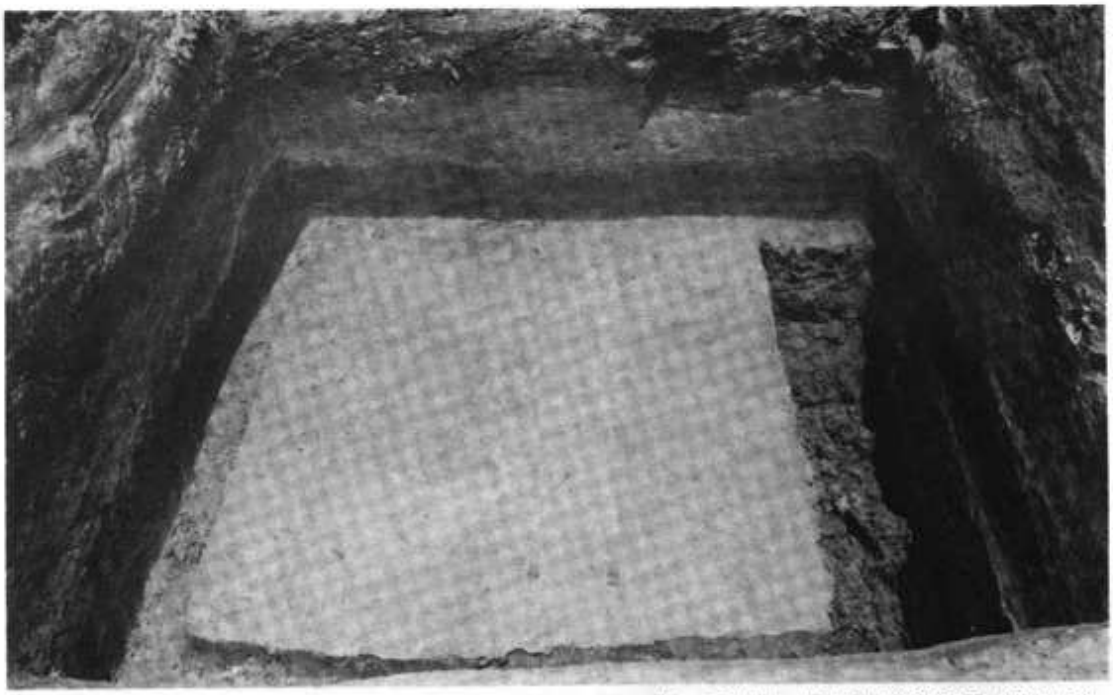


同上　SE3（西より）

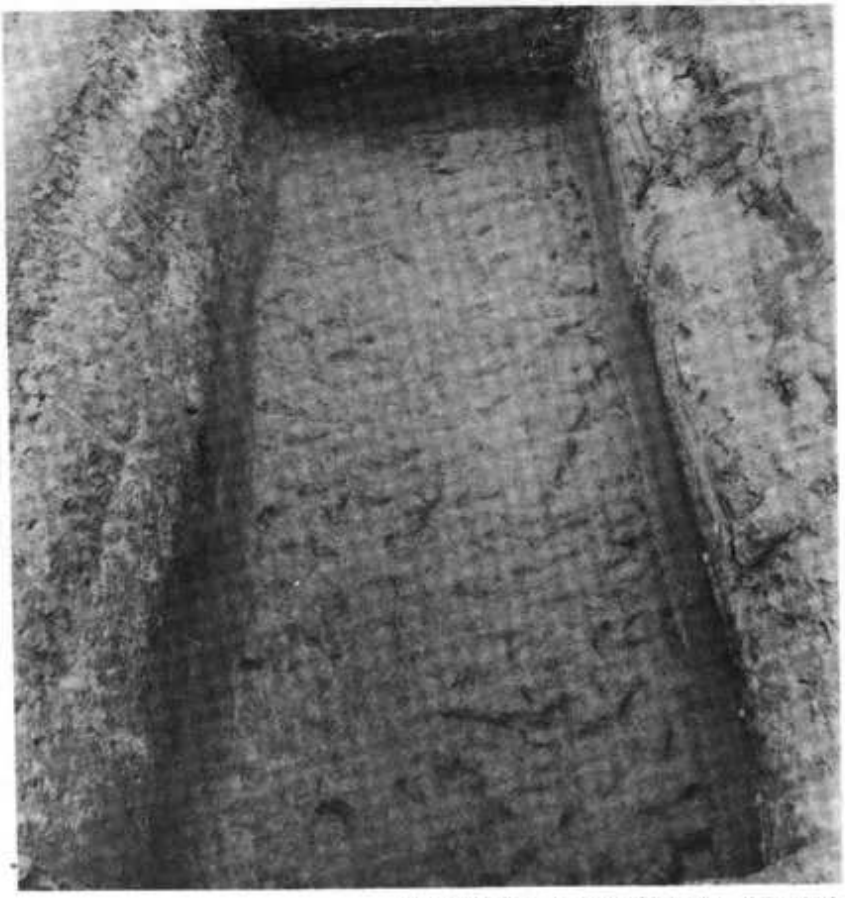


第2調査区　第2遺構面検出状況（南より）

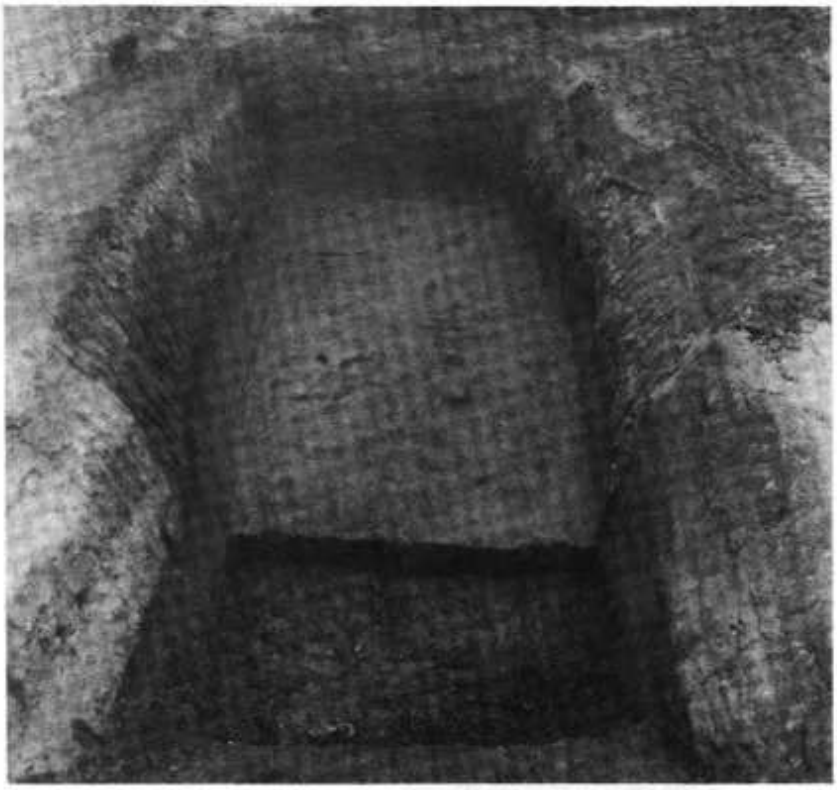
同上　SE3上層（南より）



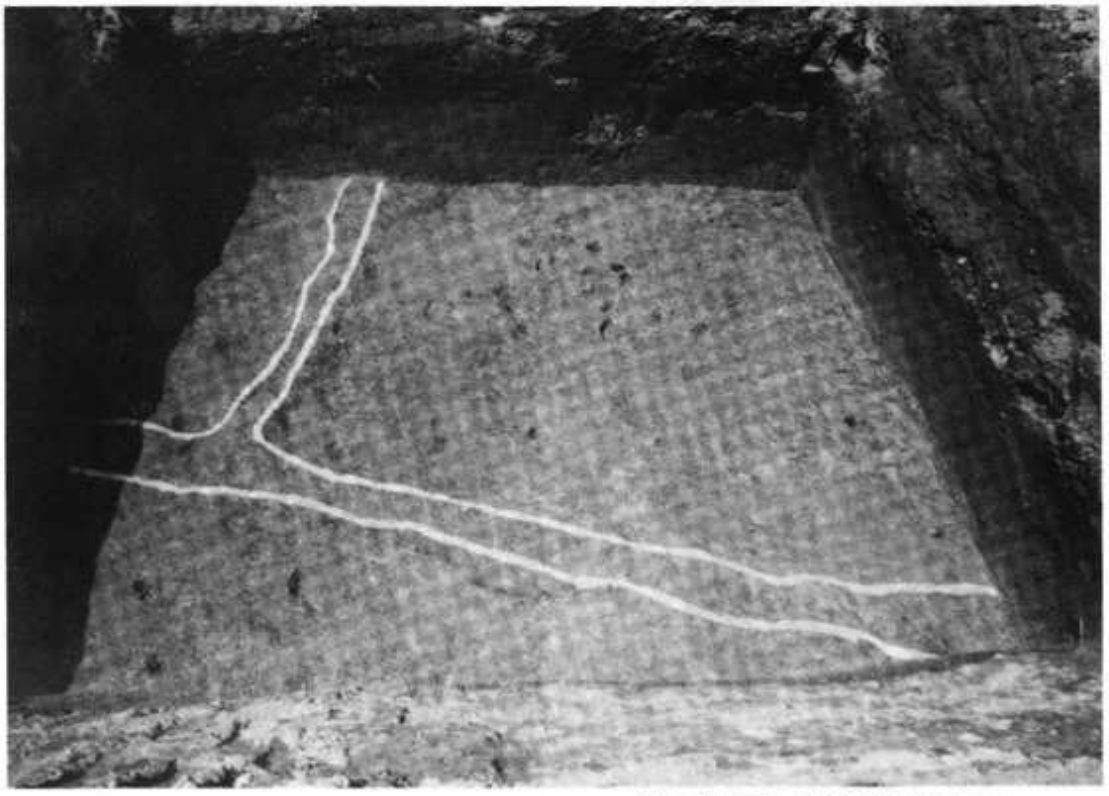
第3調査区　沼沢地検出状況（南より）



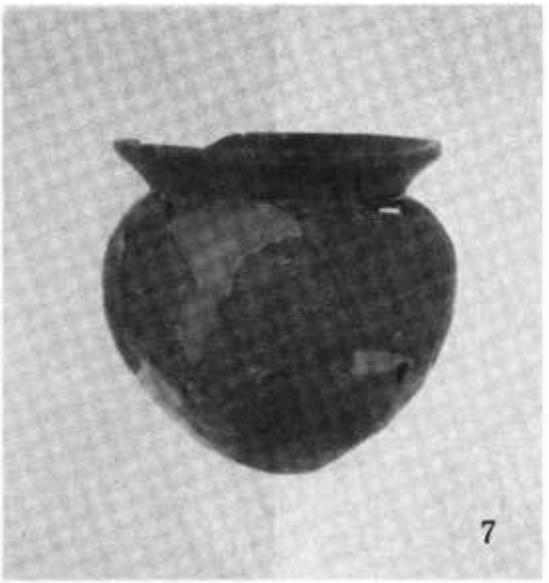
第1調査区　水田址検出状況（南より）

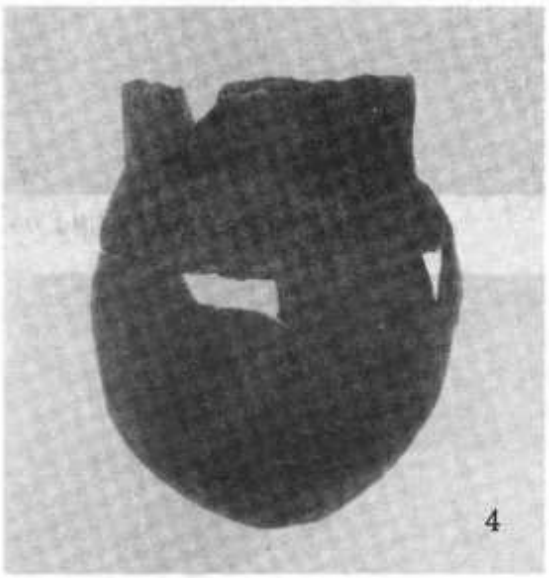


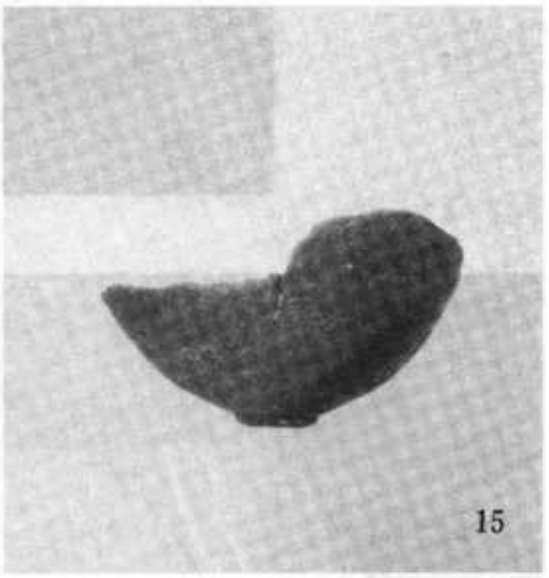
第2調査区　水田址検出状況（南より）

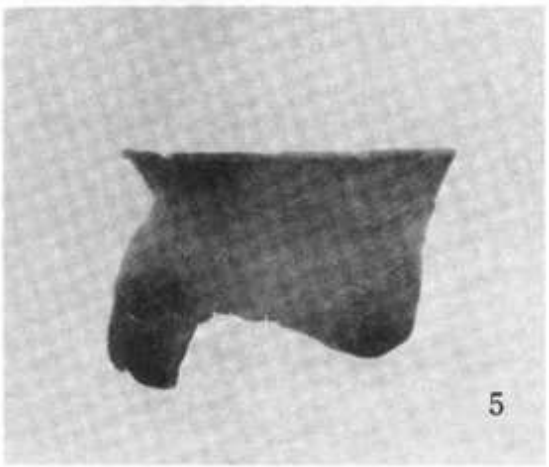


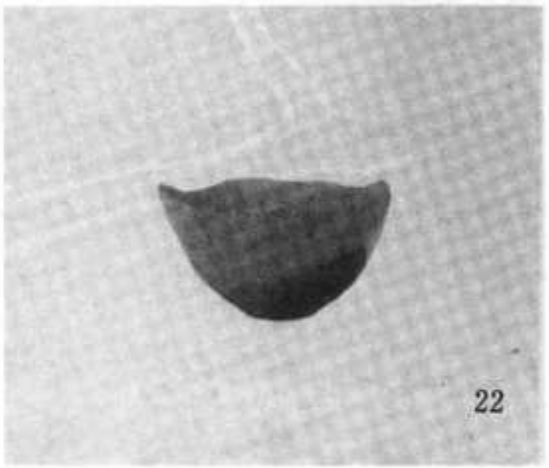
第3調査区　水田址検出状況（南より）



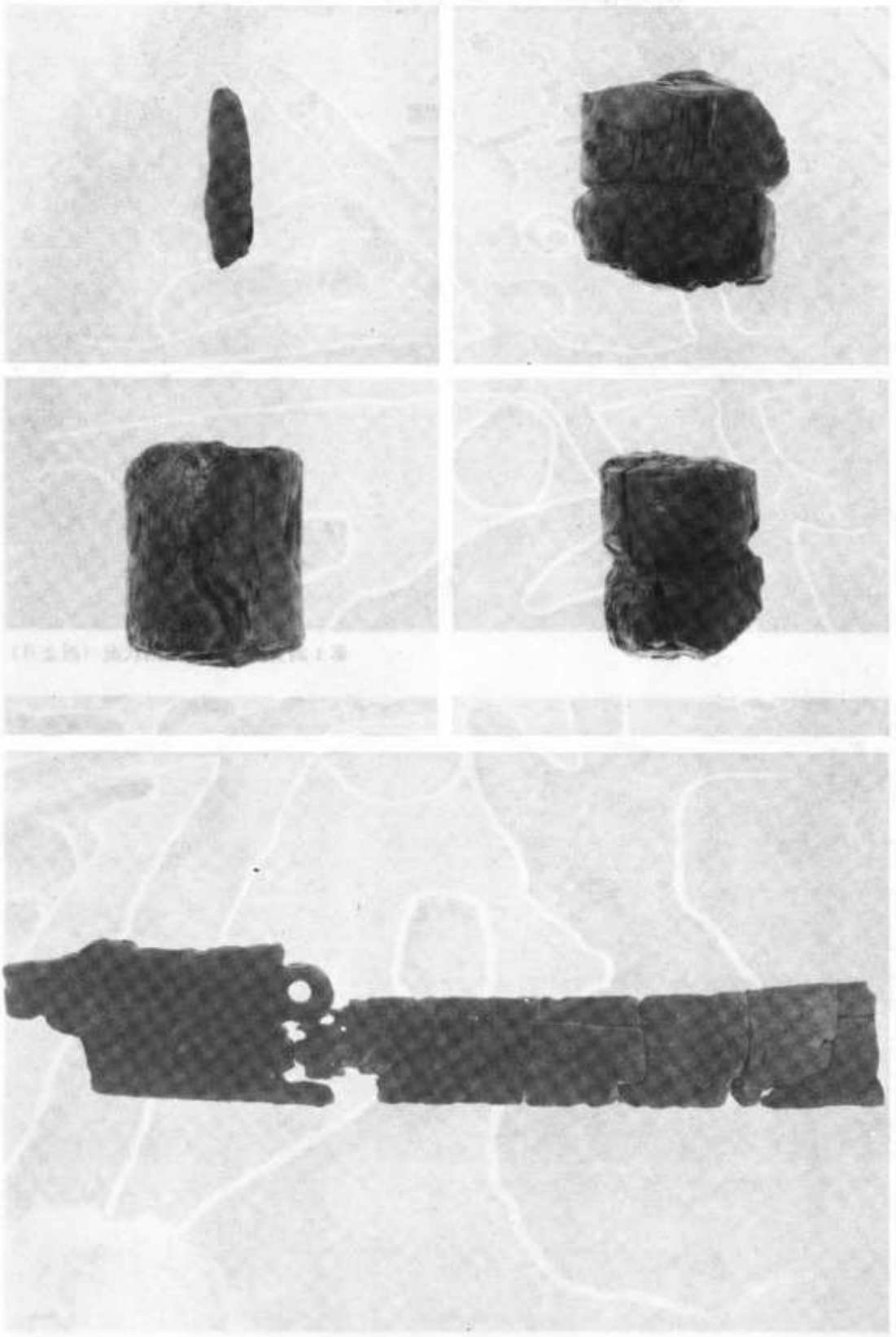




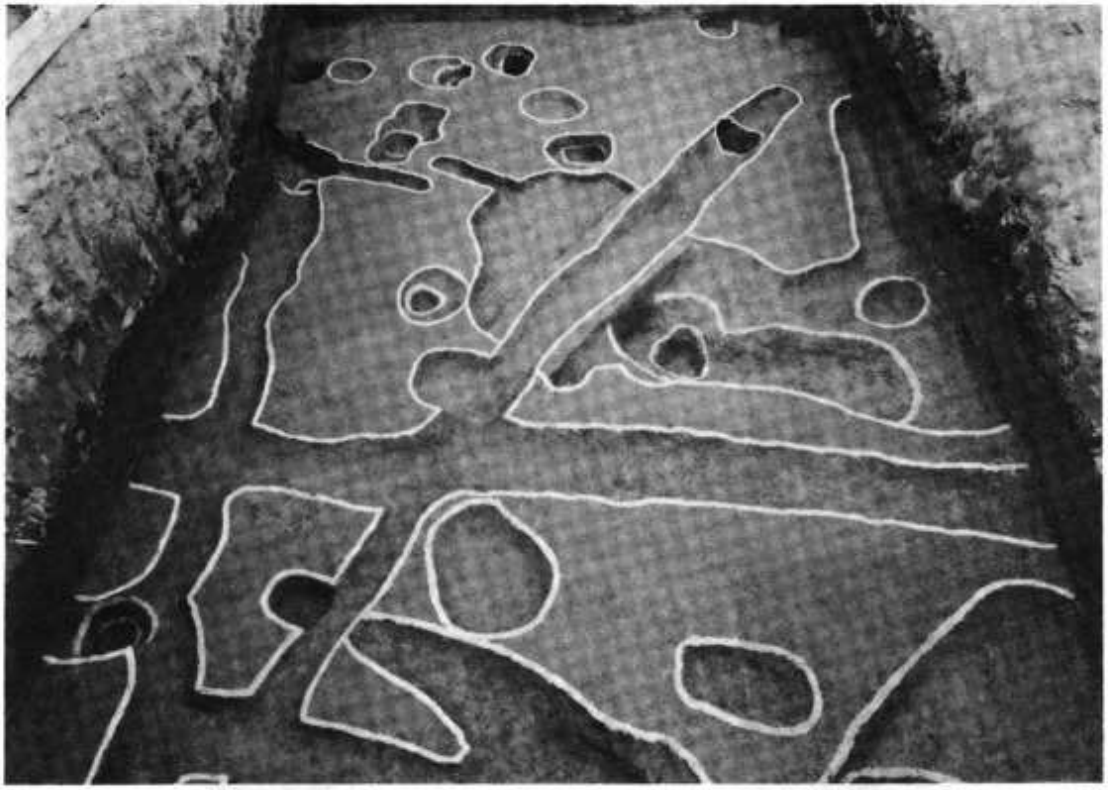




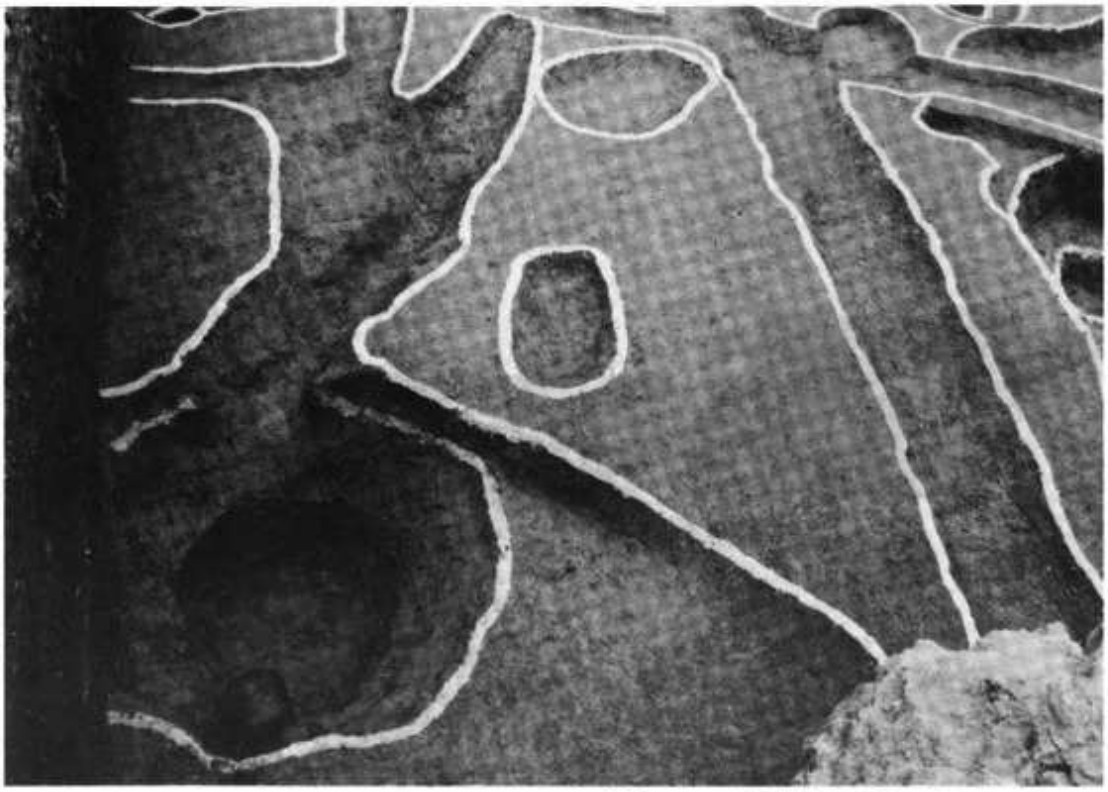
ＳＥ２出土遺物(3～5・7)　ＳＥ３出土遺物(15・22)



ＳＥ３出土砥石(左上)・木製品(1～4)

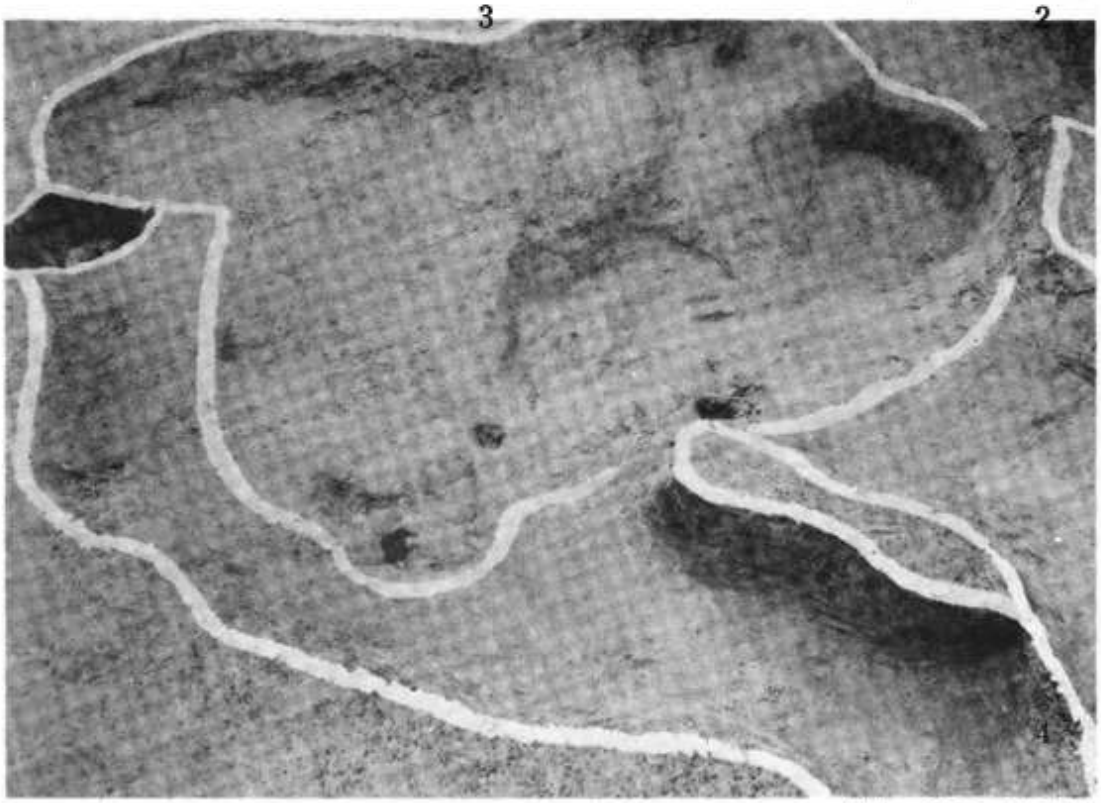


第1調査区　遺構検出状況（西より）

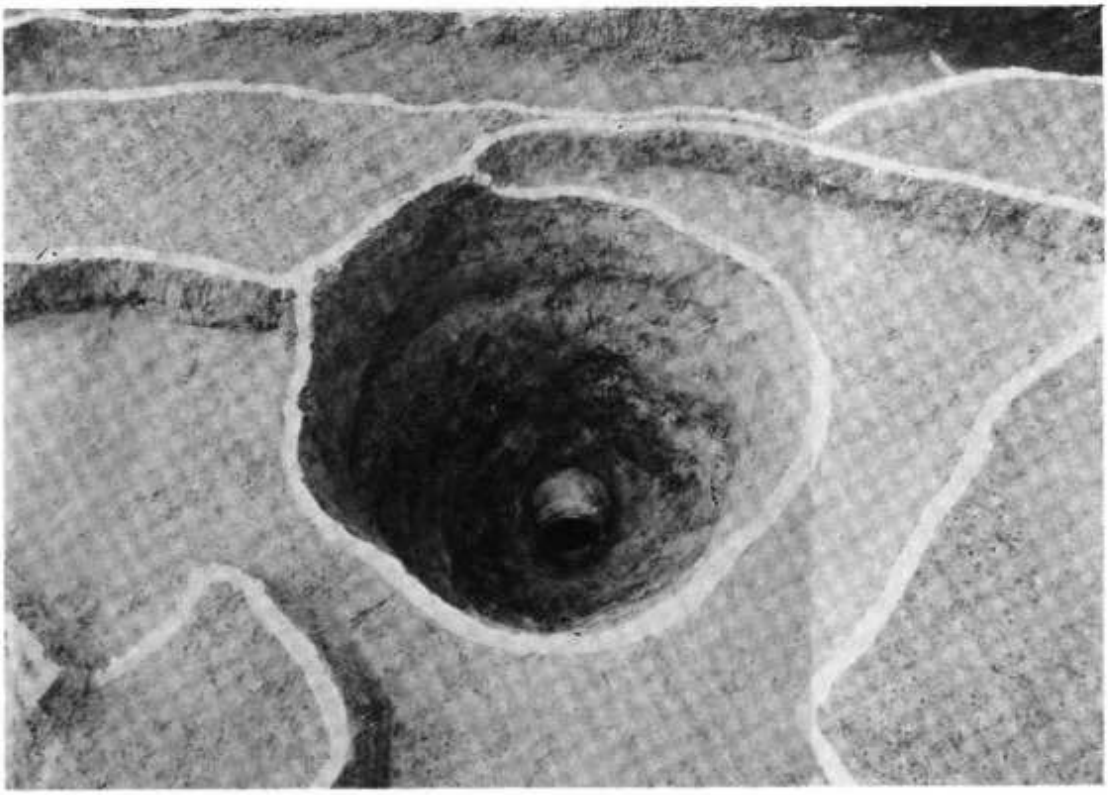


同上　ＳＥ1遺物出土状況・完掘（南より）

第2調査区　遺構検出状況（西より）

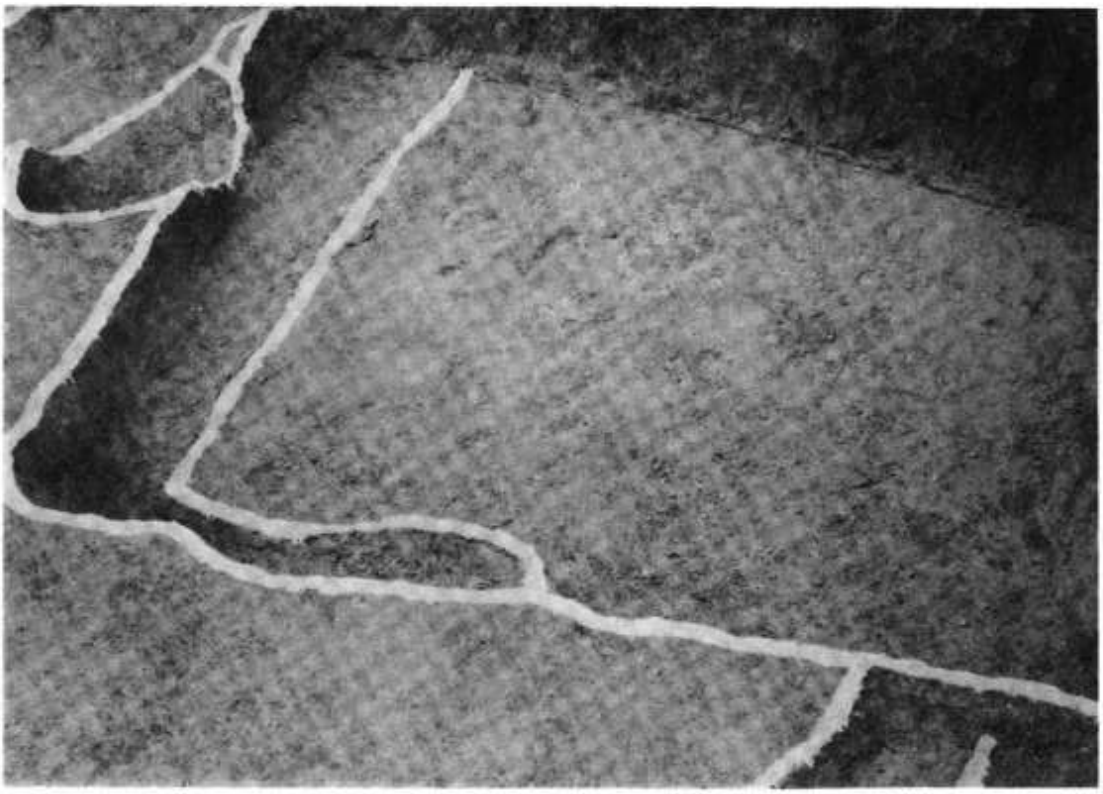


同上　SK5（南より）

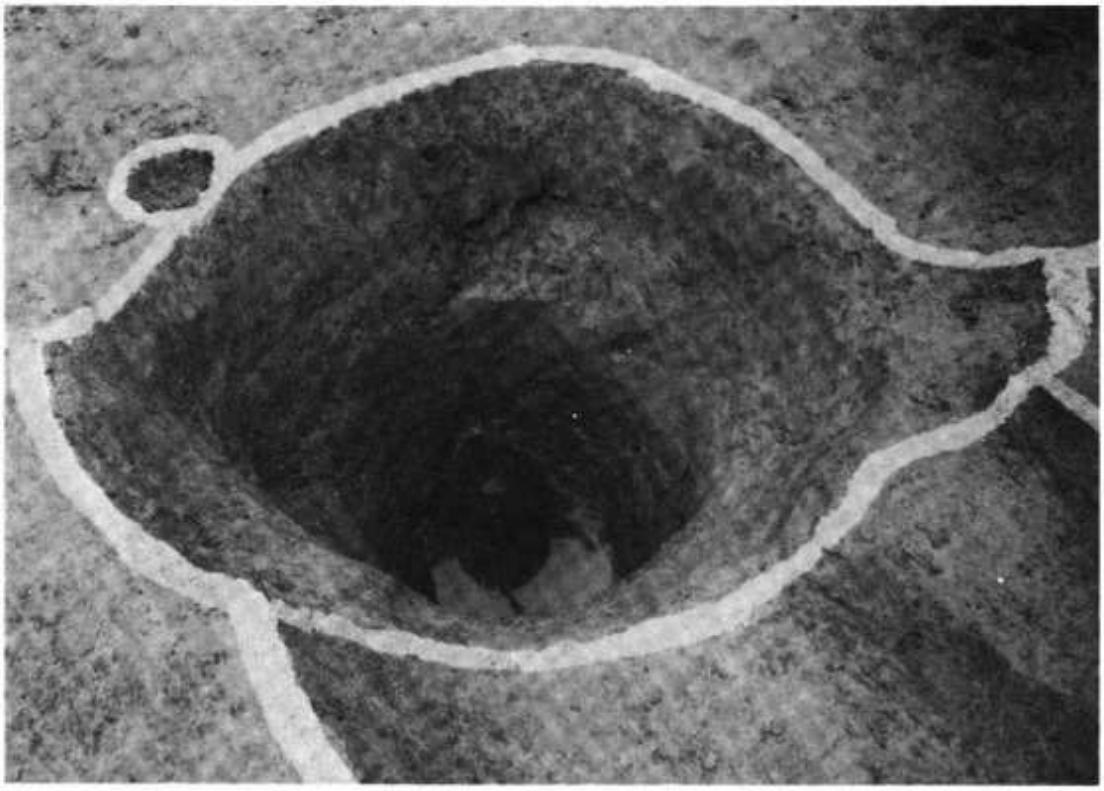


第2調査区　ＳＥ２（南より）

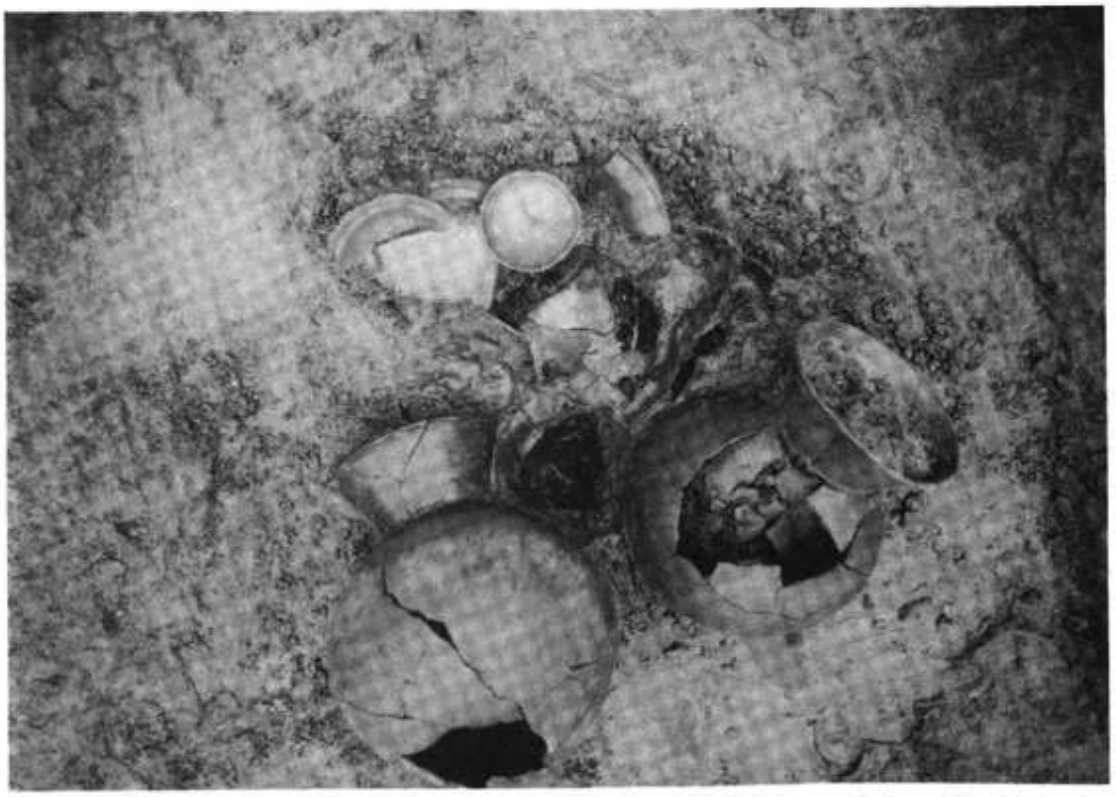
第3調査区　遺構検出状況（南より）



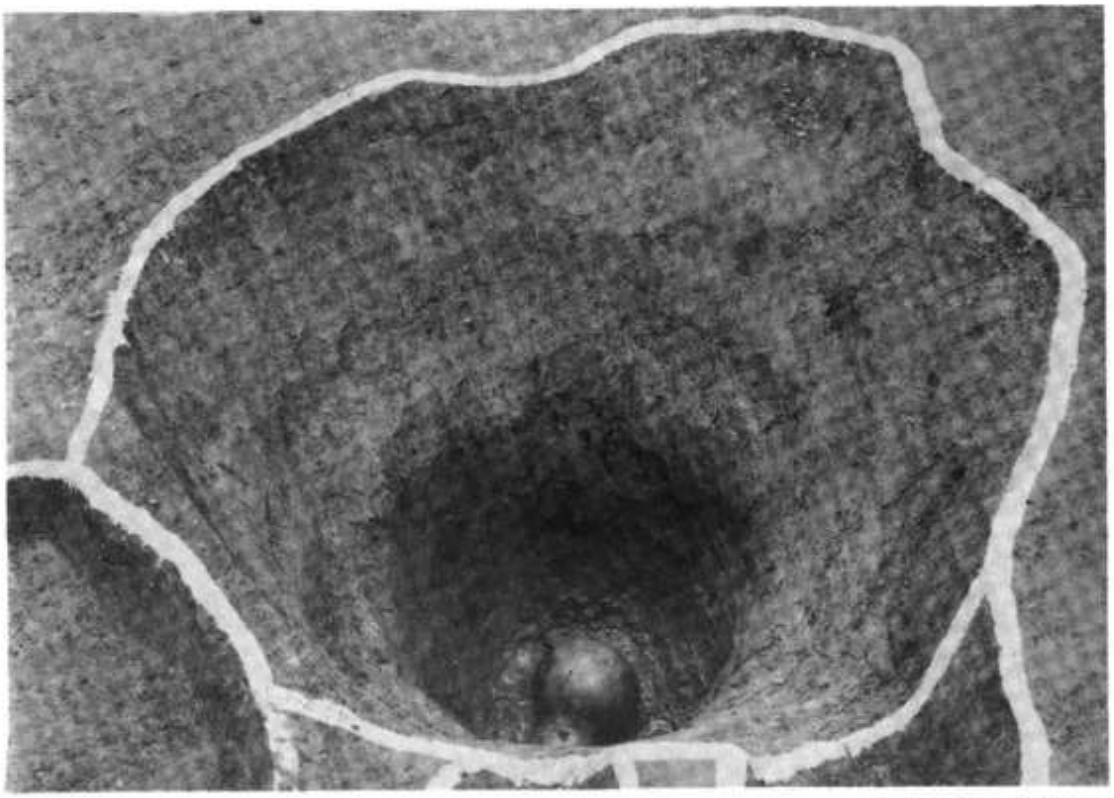
第3調査区　ＳＩ１（南より）



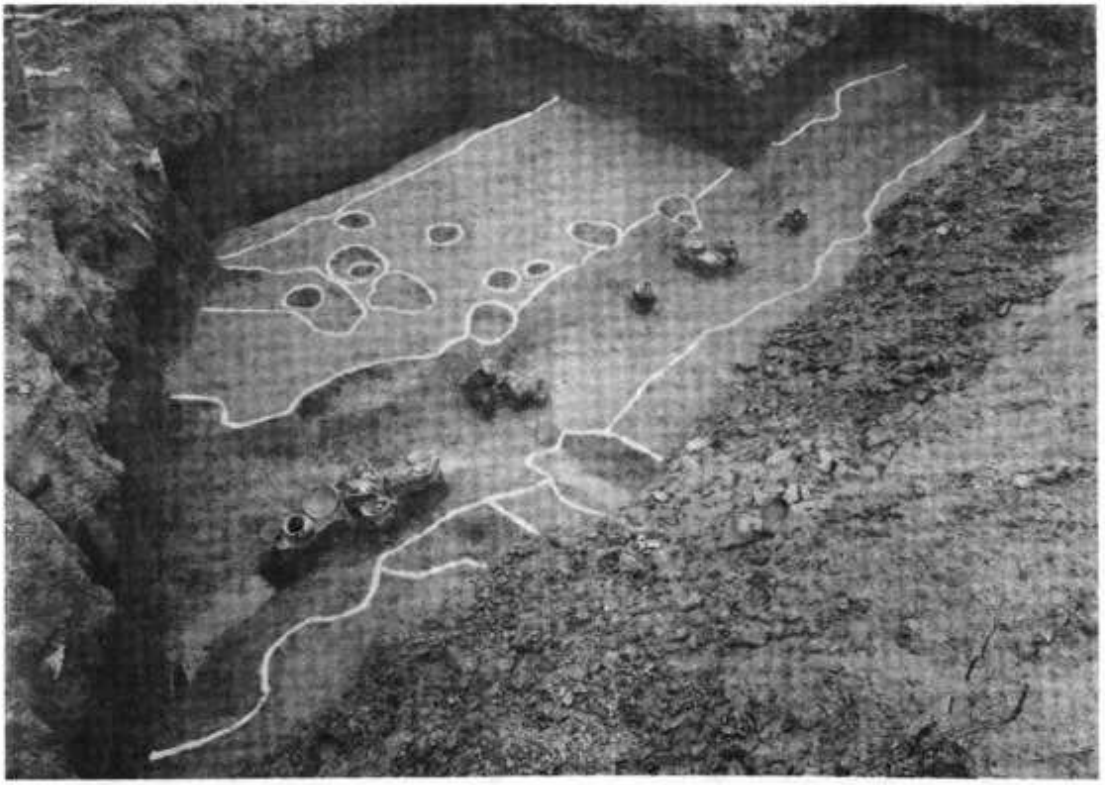
同上　ＳＥ３（南より）



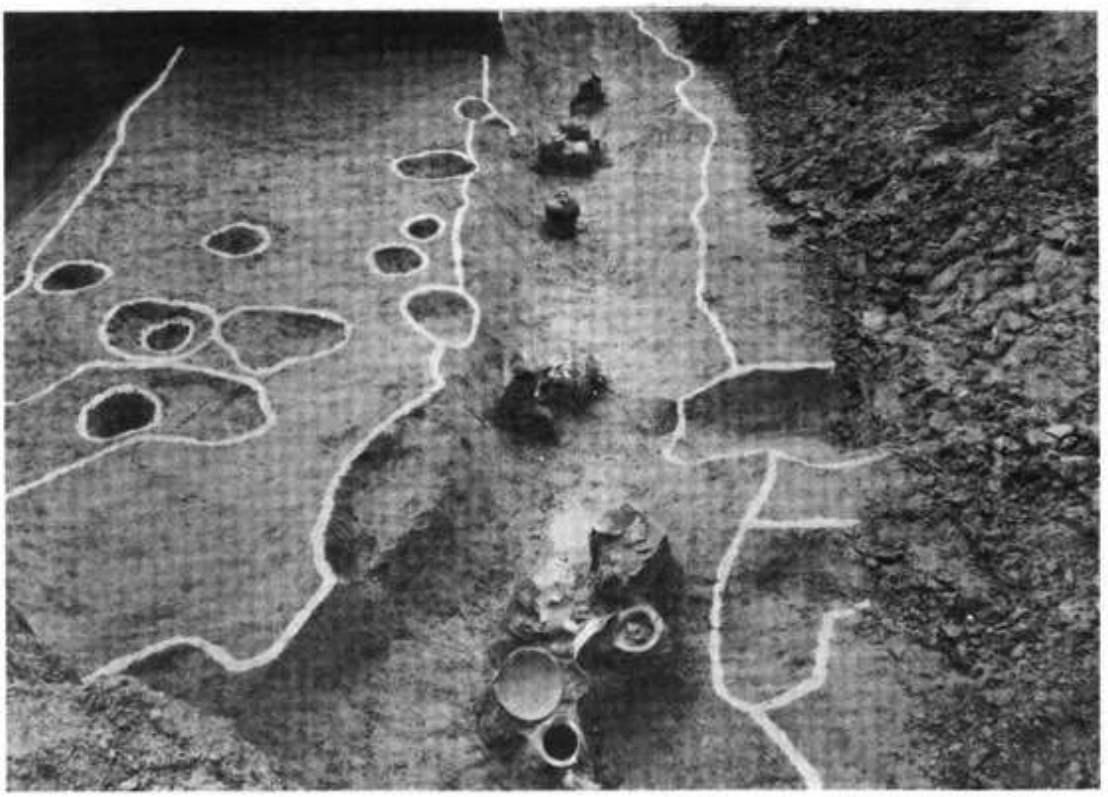
第3調査区　ＳＥ４上層遺物出土状況（東より）



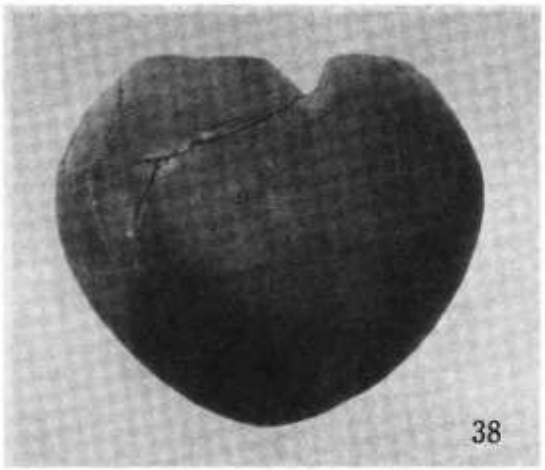
同上　完掘（西より）



第4調査区　遺構検出状況（北東より）



同上　ＳＤ９遺物出土状況（東より）

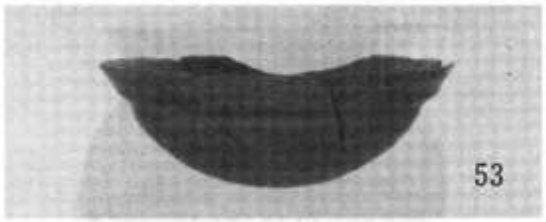


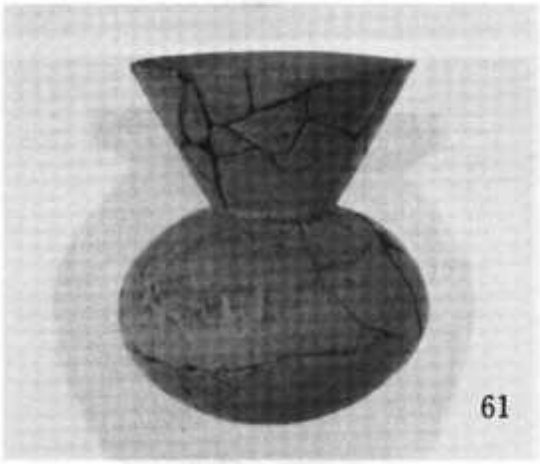
SE 1 (38)・SE 2 (42)・SE 4 (46)・SE 5 (47～49) 出土遺物

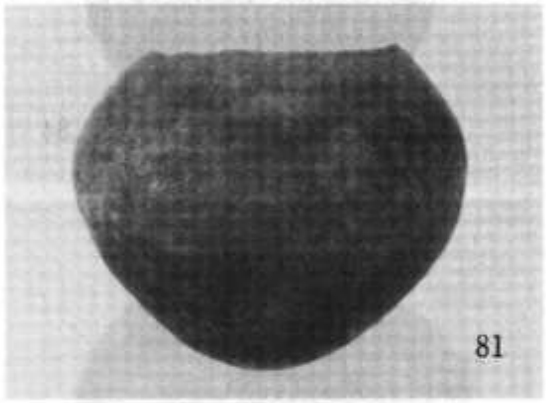
50

51

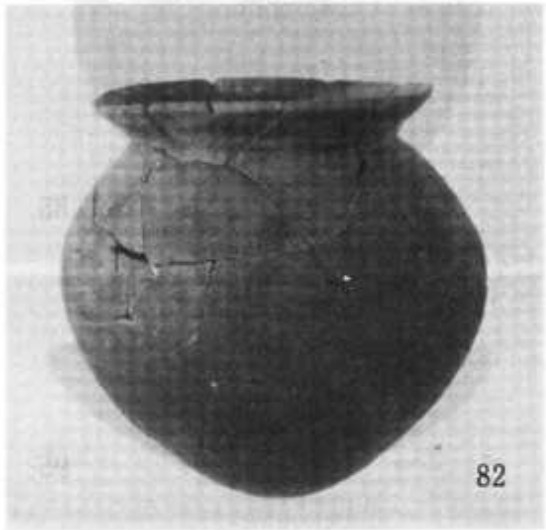
54


53


61

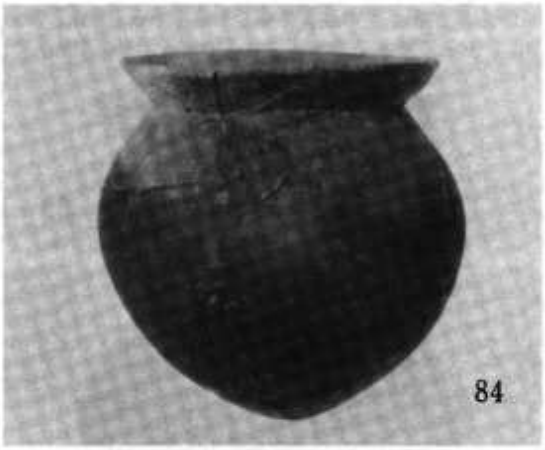

81

62

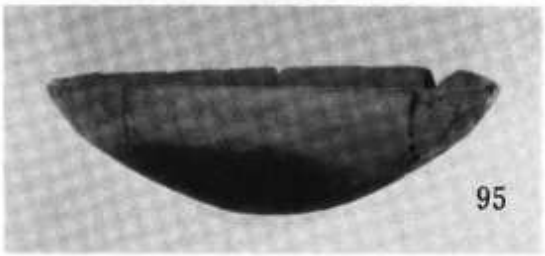

82

SE 5 (50・51・53・54)・SD 9(61・62・81・82) 出土遺物

83


84

85


95

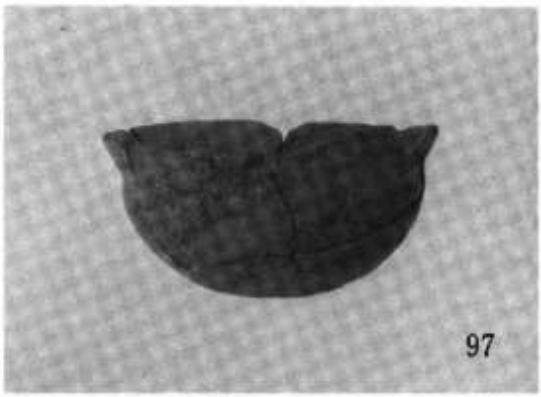
86

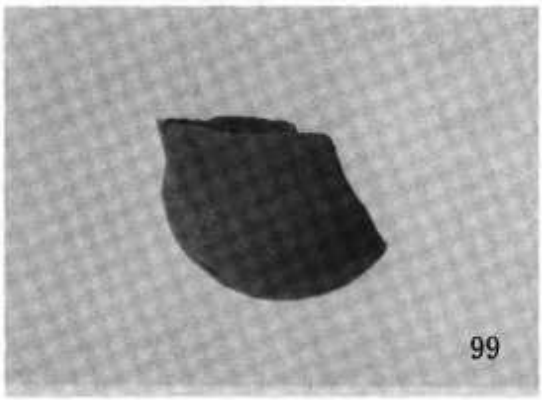
87

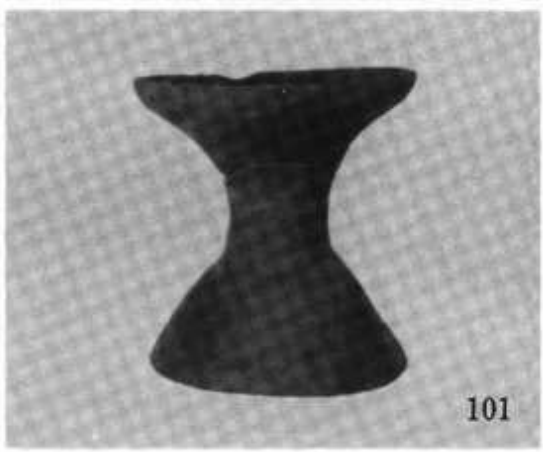
88

96

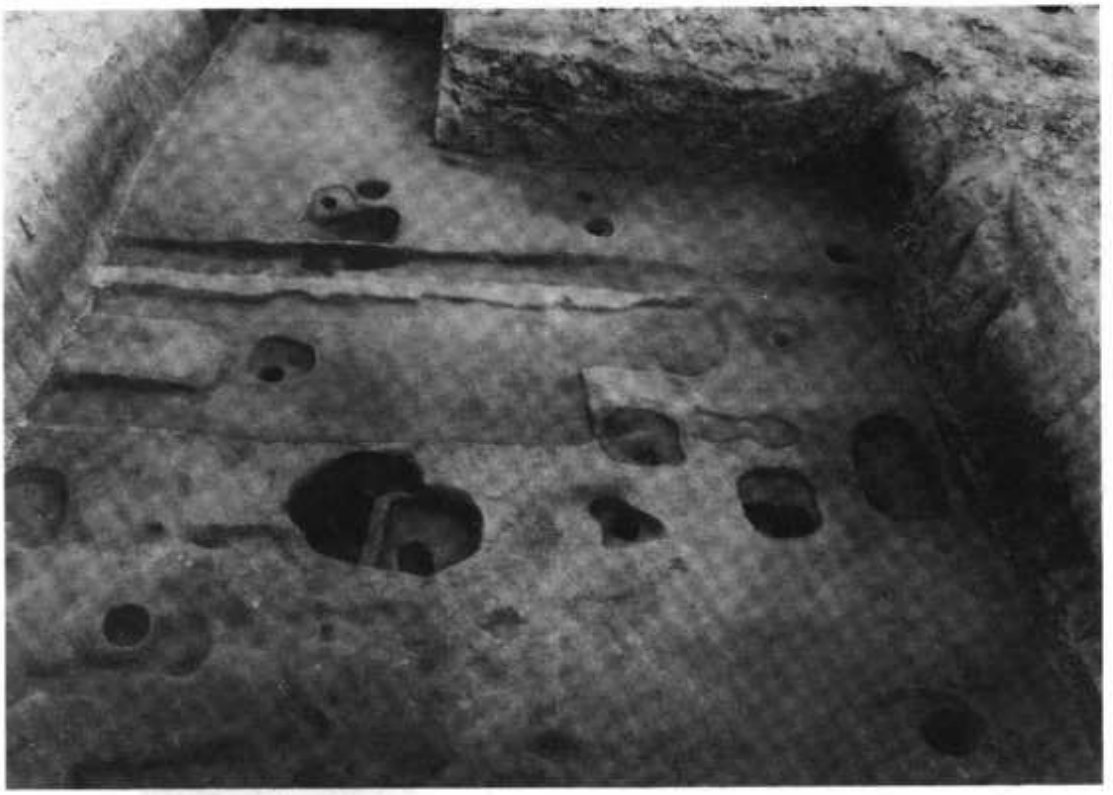
SD 9 出土遺物



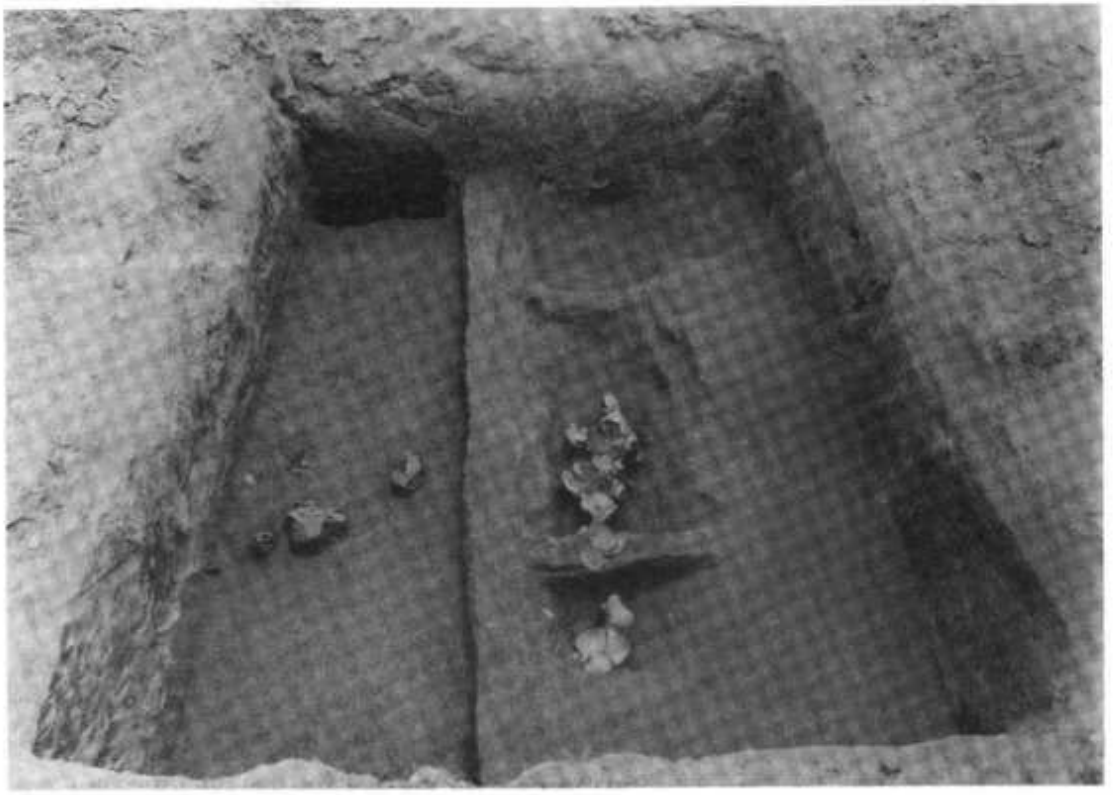




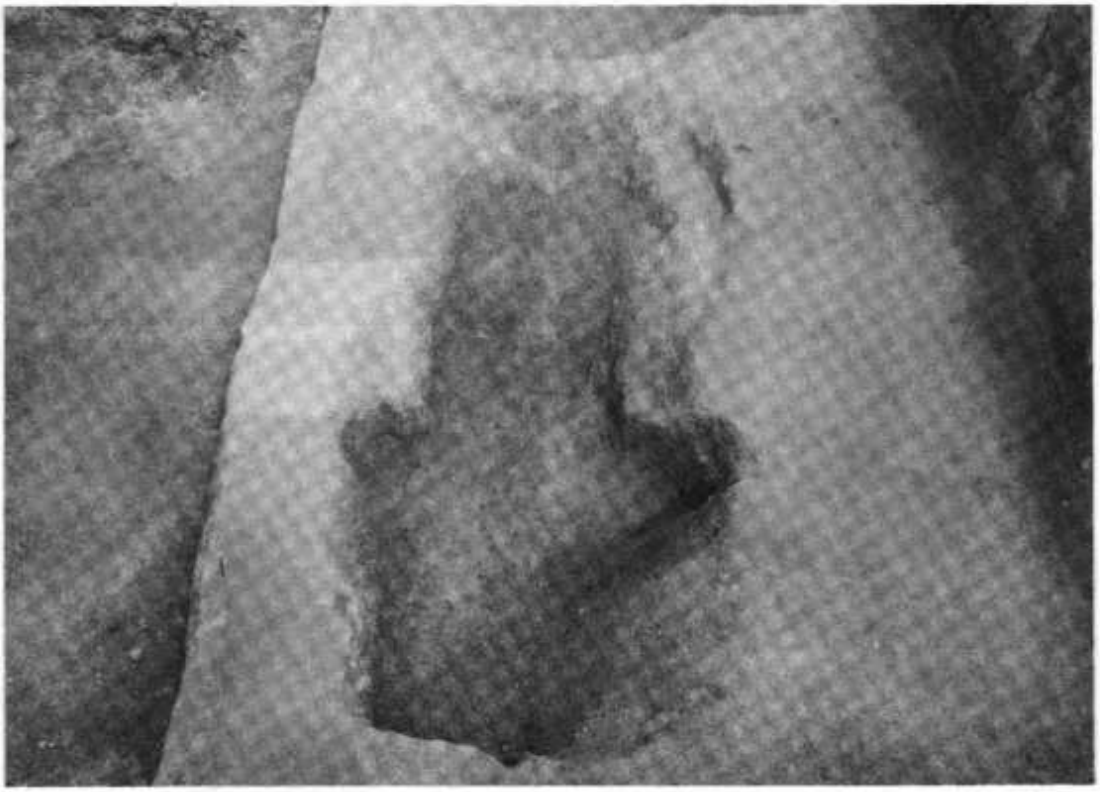
SD 9(97・99～101・104)・SD10(108)・SK10(37)出土遺物



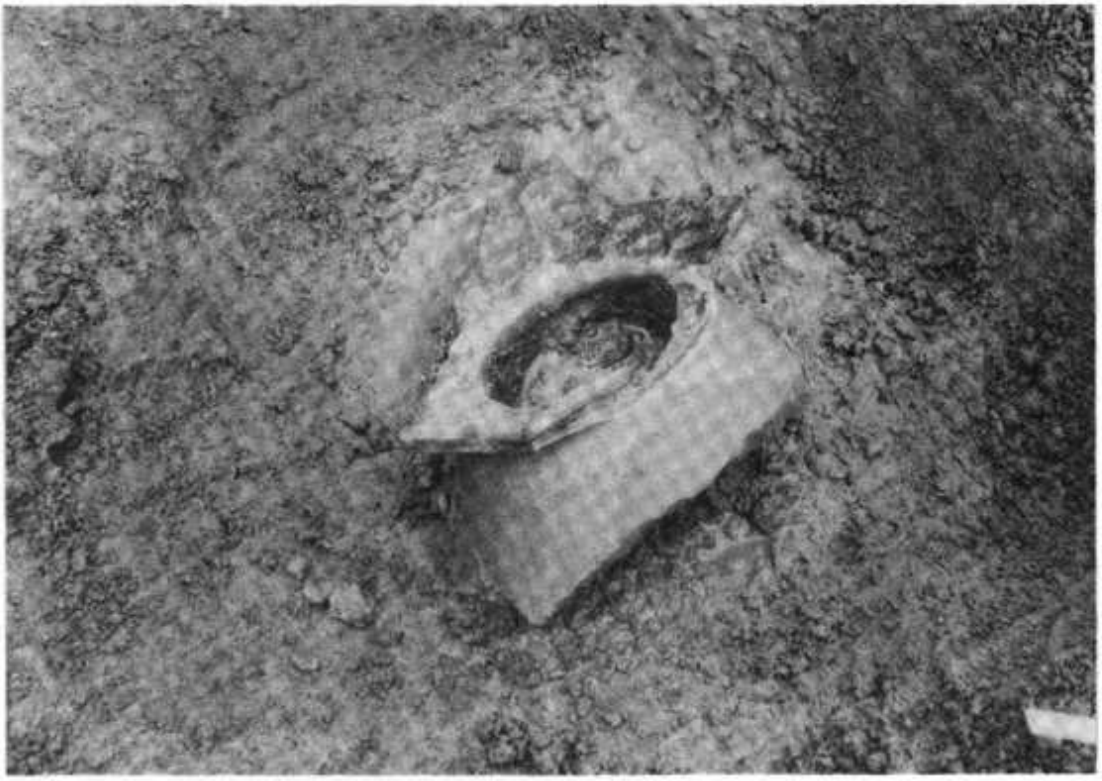
Aトレンチ（北より）



Bトレンチ（西より）



Bトレンチ SK1完掘（西より）



Bトレンチ　包含層遺物出土状況